

京都府遺跡調査報告書

第 2 冊

篠 窯 跡 群 I

1984

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し、間もなく3年が過ぎようとしています。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切に考える考え方の普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、この報告の篠窯跡群も亀岡・老ノ坂バイパス建設工事に伴う事前調査であります。調査によって発見された遺跡の多くは調査終了後破壊され、消滅する運命にあります。発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅してはいませんがありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この『京都府遺跡調査報告書』は、遺跡の重要性を理解していただくために、またたとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用を図るために刊行するものであります。この報告書のほかに、調査結果を掲載した『京都府埋蔵文化財情報』・『京都府遺跡調査概報』とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、亀岡市教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに炎暑の下、極寒の中、熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって、これら多くの関係者に厚く御礼申しあげます。

昭和59年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本書は、昭和51年より京都府教育委員会・財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した篠窯跡群の発掘調査に関する報告書である。
2. 今回収録したものは西長尾窯跡群・石原畑窯跡群の2遺跡である。発掘調査の実施期間は、西長尾窯跡群が昭和56年6月4日から昭和57年1月末日の8か月間、石原畑窯跡群は昭和57年6月10日より同年12月1日までの6か月間を要した。
3. 本書の執筆は、調査関係者が執筆分担し、末尾に明示した。

目 次

はじめに	1
第1章 歴史的環境とこれまでの調査	
第1節 歴史的環境	3
第2節 これまでの調査	5
第2章 西長尾窯跡	
第1節 調査の経過	10
第2節 地 区 割	12
第3節 地形と層位	12
第4節 各窯跡の概要	16
1. 西長尾1号窯	
2. 西長尾3号窯	
3. 西長尾4号窯	
4. その他の遺構	
5. 西長尾5号窯	
6. 西長尾6号窯	
第5節 出土遺物	40
1. 西長尾1号窯出土遺物	
2. 西長尾3号窯出土遺物	
3. 西長尾5号窯出土遺物	
4. 回転糸切り技法について	
第6節 小 結	63
1. 西長尾1号窯出土遺物について	
2. 西長尾3号窯出土遺物について	
3. 西長尾5号窯出土遺物について	
4. 西長尾5・6号窯の窯体構造について	
5. 西長尾5号窯の構造と燃焼時における考察	
第3章 石原畑窯跡	
第1節 調査の経過	76
第2節 地形と層位	77

第3節 検出遺構	81
1. 石原畑1号窯	
2. 石原畑1号窯関連遺構	
3. 石原畑2号窯	
4. 石原畑2号窯関連遺構	
5. 石原畑3号窯	
6. その他の遺構	
第4節 出土遺物	94
1. 石原畑3号窯窯体内出土遺物	
2. 石原畑3号窯灰原内出土遺物	
3. 石原畑1号窯窯体内出土遺物	
4. 石原畑2号窯窯体内出土遺物	
5. 石原畑2号窯焚口部灰原内出土遺物	
6. 石原畑窯跡 SK 03 出土遺物	
7. 石原畑窯跡 SK 01 出土遺物	
8. 石原畑窯跡 SK 04 出土遺物	
9. 石原畑窯跡 SD 05 出土遺物	
10. 石原畑窯跡 A○区上層灰原出土遺物	
第5節 小 結	120
1. 石原畑3号窯出土遺物について	
2. 石原畑1・2号窯出土遺物について	
第4章 総 括	124
第1節 篠窯跡群出土須恵器について	124
第2節 篠窯跡群の窯体構造について	128
第3節 篠窯跡群について	131

插图目次

第 1 章

- 第 1 图 龟岡盆地主要遺跡分布图····· 4
第 2 图 篠窯跡群調査地区全体图····· 7

第 2 章

- 第 3 图 西長尾窯跡地形图·····13
第 4 图 西長尾窯跡遺構配置图·····14
第 5 图 西長尾窯跡土層图·····15
第 6 图 西長尾 1・4 号窯遺構图·····17
第 7 图 西長尾 1 号窯窯体图·····18
第 8 图 西長尾 3 号窯遺構图·····21
第 9 图 西長尾 3 号窯窯体图·····22
第 10 图 西長尾 4 号窯窯体图·····24
第 11 图 西長尾 SK 06 遺構图·····25
第 12 图 西長尾 SX 04・SX 05 遺構图·····26
第 13 图 西長尾 5・6 号窯遺構图·····28
第 14 图 西長尾 5・6 号窯窯体图·····29
第 15 图 西長尾 5 号窯窯体图(1)·····31
第 16 图 西長尾 5 号窯窯体图(2)支柱配置状态·····33
第 17 图 西長尾 5 号窯窯体图(3)狭穴状态·····34
第 18 图 西長尾 6 号窯窯体图·····37
第 19 图 西長尾 SK 06・1 号窯焚口部出土遺物·····42
第 20 图 西長尾 1 号窯灰原内出土遺物(1)·····43
第 21 图 西長尾 1 号窯灰原内出土遺物(2)·····44
第 22 图 西長尾 1 号窯灰原内出土遺物(3)·····45
第 23 图 西長尾 SX 04・SX 05 直上灰原内出土遺物·····46
第 24 图 西長尾 3 号窯窯体および灰原上層出土遺物·····52
第 25 图 西長尾 3 号窯灰原下層出土遺物·····53
第 26 图 西長尾 5 号窯窯体内出土遺物·····54
第 27 图 西長尾 5 号窯北灰原内出土遺物·····56

第 28 図	西長尾 3 号窯出土遺物回転糸切り拓本	58
第 29 図	西長尾 5 号窯出土遺物回転糸切り拓本	59
第 30 図	西長尾 5 号窯燃烧時想定図	70
第 31 図	焼成時における粘土中に含まれる鉍物の熱変化	74

第 3 章

第 32 図	石原畑窯跡地形図	78
第 33 図	石原畑窯跡遺構配置図	79
第 34 図	石原畑窯跡土層断面図	80
第 35 図	石原畑 1 号窯遺構図	82
第 36 図	石原畑 1 号窯窯体図	83
第 37 図	石原畑 2 号窯遺構図	87
第 38 図	石原畑 2 号窯窯体図	89
第 39 図	石原畑 3 号窯窯体内遺物出土状態	91
第 40 図	石原畑 3 号窯遺構図	92
第 41 図	石原畑 3 号窯窯体図	93
第 42 図	石原畑窯跡 SX 02・SX 06 遺構図	95
第 43 図	石原畑 3 号窯窯体内出土遺物	96
第 44 図	石原畑 3 号窯灰原内出土遺物(1)	98
第 45 図	石原畑 3 号窯灰原内出土遺物(2)	99
第 46 図	石原畑 1・2 号窯窯体内出土遺物	102
第 47 図	石原畑 2 号窯焚口部灰原内出土遺物(1)	103
第 48 図	石原畑 2 号窯焚口部灰原内出土遺物(2)	104
第 49 図	石原畑窯跡 SK 03 出土遺物(1)	108
第 50 図	石原畑窯跡 SK 03 出土遺物(2)	109
第 51 図	石原畑窯跡 SK 01・SK 04 出土遺物	112
第 52 図	石原畑窯跡 SD 05 出土遺物	114
第 53 図	石原畑窯跡 Ao 区上層灰原内出土遺物(1)	117
第 54 図	石原畑窯跡 Ao 区上層灰原内出土遺物(2)	118
第 55 図	石原畑窯跡 Ao 区上層灰原内出土遺物(3)	119

第 4 章

第 56 図	篠窯跡群出土杯 A・杯 B の形態変遷図	125
第 57 図	篠窯跡群出土鉢の形態変遷図	127

付 表 目 次

第 2 章

付 表 1	西長尾窯跡窯体規模一覧表	19
付 表 2	西長尾 1 号窯土器集計表	41
付 表 3	西長尾 1・4 号窯出土須恵器法量比較表	48
付 表 4	西長尾 3 号窯灰原内土器集計表	51
付 表 5	西長尾 5 号窯, 前山 2・3 号窯, 黒岩 1 号窯土器集計表	55
付 表 6	西長尾 3・5 号窯, 前山 2・3 号窯, 黒岩 1 号窯出土杯 A・ 椀 B 法量比較表	64
付 表 7	前山 2・3 号窯, 黒岩 1 号窯および CM 14 区作業場跡, 西 長尾 5 号窯出土土器集計表	66

第 3 章

付 表 8	石原畑 3 号窯出土遺物集計表	97
付 表 9	石原畑 3 号窯出土遺物法量比較表	100
付 表 10	石原畑 2 号窯焚口部南灰原内出土遺物集計表	105
付 表 11	石原畑 2 号窯焚口部南灰原内出土遺物法量比較表	106
付 表 12	石原畑窯跡 SK 03 出土遺物集計表	107
付 表 13	石原畑窯跡 SK 03 出土遺物法量比較表	110
付 表 14	石原畑窯跡 A _o 区上層灰原内出土遺物集計表	116

第 4 章

付 表 15	篠窯跡群各窯体規模一覧表	129
付 表 16	篠地域自生植物灰の分析値表	130
付 表 17	西長尾窯跡出土遺物観察表	135
付 表 18	石原畑窯跡出土遺物観察表	146

図 版 目 次

西 長 尾 窯 跡

- 図版第 1 (1)西長尾窯跡全景(北西から) (2)同上(北から)
- 図版第 2 (1)西長尾 1・4 号窯調査前全景(北西から)
(2)西長尾 3 号窯調査前全景(南西から)
- 図版第 3 (1)西長尾 1・4 号窯完掘状態(西から) (2)同上(西から)
- 図版第 4 (1)西長尾 1・4 号窯窯体内掘削状態(西から)
(2)西長尾 1・4 号窯完掘状態(西から)
- 図版第 5 (1)西長尾 1・4 号窯灰原南壁土層(北から)
(2)西長尾 1・4 号窯灰原北壁土層(南から)
- 図版第 6 (1)西長尾 3 号窯上面検出状態(西から)
(2)西長尾 3 号窯掘削状態(西から)
- 図版第 7 (1)西長尾 3 号窯完掘状態(西から)
(2)西長尾 3 号窯窯体完掘状態(西から)
- 図版第 8 (1)西長尾 3 号窯窯体内土器堆積状態(南から)
(2)西長尾 3 号窯窯体内土層堆積状態(西から)
(3)西長尾 3 号窯灰原南北畦畔土層(西から)
(4)西長尾 3 号窯灰原東西畦畔土層(南から)
- 図版第 9 (1)西長尾 5・6 号窯完掘状態(西から) (2)同上(東から)
- 図版第 10 (1)西長尾 5 号窯上面検出状態(西から)
(2)西長尾 5 号窯窯体内掘削状態(西から)
- 図版第 11 (1)西長尾 5 号窯完掘状態(西から) (2)同上(西から)
- 図版第 12 (1)西長尾 5 号窯細部(東から) (2)同上(東から)
- 図版第 13 (1)西長尾 5 号窯支柱及び第 2 次床面(西から) (2)同上(西から)
- 図版第 14 (1)西長尾 5 号窯煙道部上面土器遺存状態(東から)
(2)西長尾 5 号窯煙道部(東から)
- 図版第 15 (1)西長尾 5 号窯窯体細部(西から) (2)同上(西から)
(3)同右(西から) (4)同上
- 図版第 16 (1)西長尾 6 号窯全景(西から) (2)同上(東から)
- 図版第 17 (1)西長尾 6 号窯南焚口部遺存状態(北から)

- (2)西長尾 6 号窯南焚口部土器遺存状態 (南から)
- 図版第18 (1)西長尾 6 号窯煙道部 (東から)
(2)西長尾 6 号窯支柱遺存状態 (西から)
- 図版第19 西長尾 1 号窯出土遺物
- 図版第20 西長尾 1 号窯出土遺物
- 図版第21 西長尾 1 号窯・SK 06 出土遺物
- 図版第22 西長尾 1 号窯出土遺物
- 図版第23 西長尾 1 号窯出土遺物
- 図版第24 西長尾 3 号窯灰原上層出土遺物
- 図版第25 西長尾 3 号窯灰原下層出土遺物
- 図版第26 西長尾 3 号窯出土遺物
- 図版第27 西長尾 5 号窯出土遺物
- 図版第28 西長尾 5 号窯出土遺物
- 図版第29 回転糸切り(1)
- 図版第30 回転糸切り(2)
- 図版第31 回転糸切り(3)
- 図版第32 回転糸切り(4)
- 図版第33 回転糸切り(5)

石原畑窯跡

- 図版第34 (1)石原畑窯跡全景 (北西から) (2)石原畑窯跡調査前全景 (北西から)
- 図版第35 (1)石原畑 1・2・3 号窯完掘状態 (西から)
(2)石原畑 1・2 号窯完掘状態 (西から)
- 図版第36 (1)石原畑 1・2 号窯遺構検出状態 (西から)
(2)石原畑 1・2 号窯遺構検出状態 (西から)
- 図版第37 (1)石原畑 1 号窯遺物出土状態 (西から)
(2)石原畑 1 号窯完掘状態 (西から)
- 図版第38 (1)石原畑 2 号窯掘削状態 (西から)
(2)石原畑 2 号窯・SK 04・SD 05 完掘状態 (西から)
- 図版第39 (1)石原畑 2 号窯完掘状態 (西から)
(2)石原畑 2 号窯焚口部及び SK 07 (西から)
- 図版第40 (1)SX 02 (北から) (2)同上 (東から)
- 図版第41 (1)石原畑 2 号窯焚口下・SK 03 土層断面 (西から)

- (2) SK 03 土層断面 (南から)
- 図版第42 (1)石原畑 2 号窯下・SK 10 土層断面 (西から)
 (2) SK 09 土層断面 (北西から)
- 図版第43 (1)石原畑 1・2 号窯灰原 (南から)
 (2)石原畑 1・2 号窯上層灰原遺物遺存状態 (南から)
- 図版第44 (1)石原畑 3 号窯窯体内遺物出土状態 (西から)
 (2)石原畑 3 号窯完掘状態 (西から)
- 図版第45 (1)石原畑 3 号窯窯体内遺物出土状態細部 (西から) (2)同上
 (3)石原畑 3 号窯窯体内遺物出土状態 (南から) (4)同上
- 図版第46 石原畑 3 号窯窯体及び灰原出土遺物
- 図版第47 石原畑 3 号窯灰原出土遺物
- 図版第48 石原畑 2 号窯焚口南側灰原出土遺物(1)
- 図版第49 石原畑 2 号窯焚口南側灰原出土遺物(2)
- 図版第50 SK 03 出土遺物(1)
- 図版第51 SK 03 出土遺物(2)
- 図版第52 SK 03 出土遺物(3)
- 図版第53 SK 01 出土遺物
- 図版第54 SK 04 出土遺物
- 図版第55 A○区上層灰原出土遺物(1)
- 図版第56 A○区上層灰原出土遺物(2)
- 図版第57 A○区上層灰原出土遺物(3)

はじめに

亀岡市篠町一帯の丘陵地には、古くから須恵器および瓦を焼成した窯跡の存在が知られていた。この篠町一帯の丘陵地を東西に通過する国道9号バイパスの建設計画に伴い、京都府教育委員会では昭和48年度に、路線予定地を中心に分布調査を実施した。その結果、これまでに確認されていた窯跡のほかに、各所で灰原や須恵器片の散乱している状況が判明した。窯跡の分布する範囲は、東は篠町字王子小字石原畑から、西は篠町字森小字前山に至る東西約2.4kmに及び、数十基から百基に及ぶ一大窯跡群であることがわかった。

京都府教育委員会では、国道9号バイパス路線予定地全域にわたって、試掘調査を行い、確認された窯跡の発掘調査を実施することとし、昭和51年度から直接現地作業に着手した。昭和51年度から昭和53年度までは、建設省の依頼により京都府教育委員会が主体となって発掘調査を実施し、昭和54年度および昭和55年度は、日本道路公団の依頼により京都府教育委員会が主体となって実施した。昭和56年度に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足したので、昭和56年度から昭和58年度までは、日本道路公団の依頼により当調査研究センターが主体となり実施した。

京都府教育委員会および当調査研究センターが、昭和51年度以降に実施した篠窯跡群の発掘調査により確認した窯跡は、次のとおりである。

番号	名称	所在地	概要	調査年度
1	前山1号窯跡	篠町大字森小字前山	半地下式窖窯	51
2	黒岩1号窯跡	〃 〃 篠 〃 黒岩	小型三角窯	52
3	小柳1号窯跡	〃 〃 篠 〃 小柳	半地下式窖窯	54
4	小柳3号窯跡	〃 〃 篠 〃 小柳	平窯か	54
5	小柳4号窯跡	〃 〃 篠 〃 小柳	小型三角窯	55
6	芦原1号窯跡	〃 〃 篠 〃 芦原	半地下式窖窯	55
7	前山2号窯跡	〃 〃 森 〃 前山	小型三角窯	55
8	前山3号窯跡	〃 〃 森 〃 前山	小型三角窯	55
9	西長尾1号窯跡	〃 〃 王子 〃 西長尾	半地下式窖窯	56
10	西長尾3号窯跡	〃 〃 王子 〃 西長尾	半地下式窖窯	56
11	西長尾4号窯跡	〃 〃 王子 〃 西長尾	半地下式窖窯	56
12	西長尾5号窯跡	〃 〃 王子 〃 西長尾	ロストル式樽円窯	56
13	西長尾6号窯跡	〃 〃 王子 〃 西長尾	ロストル式小型三角窯	56
14	西長尾奥第1群1号窯跡	〃 〃 王子 〃 西長尾	半地下式窖窯か	57
15	石原畑1号窯跡	〃 〃 王子 〃 石原畑	半地下式窖窯	57
16	石原畑2号窯跡	〃 〃 王子 〃 石原畑	半地下式窖窯	57
17	石原畑3号窯跡	〃 〃 王子 〃 石原畑	半地下式窖窯	57

これまで実施してきた上記の窯跡の発掘調査では、多量の須恵器が出土しており、昭和51年度から昭和55年度まで、京都府教育委員会が主体となって実施した分も含めて、当調査研究センターが引き継いで整理を行っている。

この報告書に収めた報文は、昭和56年度に実施した西長尾窯跡群に関するものと、昭和57年度に実施した石原畑窯跡群に関するものである。両窯跡群の発掘調査にあたり、亀岡市教育委員会、亀岡市、口丹波史談会、篠町自治会、平安博物館、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、京都大学埋蔵文化財研究センター、奈良国立文化財研究所、京都府教育委員会等の諸機関から多大のご指導、御協力を賜った。さらに、市川米太、岡内三真、田辺昭三、寺島孝一、中村 浩、檜崎彰一、広岡公夫の諸氏には、直接現地で指導いただいた。そのほか、佐原 真、西 弘海、巽淳一郎、宇野隆夫、五十川伸矢、百瀬正恒、永田信一、平良泰久、奥村清一郎、杉本 宏の諸氏には専門的な指導・助言ならびに援助を得た。上記関係機関、関係諸氏に対し銘記して感謝の意を表したい。

この報告書は、原口正三・堤圭三郎の指導のもとに、直接調査を担当した主任調査員水谷寿克、調査員 石井清司・久保田健士・引原茂治のほか、調査に参加した立花正寛・波多野 徹・小島敏明・松元達也が、それぞれ分担執筆し、水谷寿克・石井清司が全体の構成についてまとめた。また、この報告書の編集・校正は、劉和子の協力を得て、課長補佐 杉原和雄、調査員 石井清司・引原茂治・田中 彰・土橋 誠が行った。

(水谷 寿克)

第1章 歴史的環境とこれまでの調査

第1節 歴史的環境

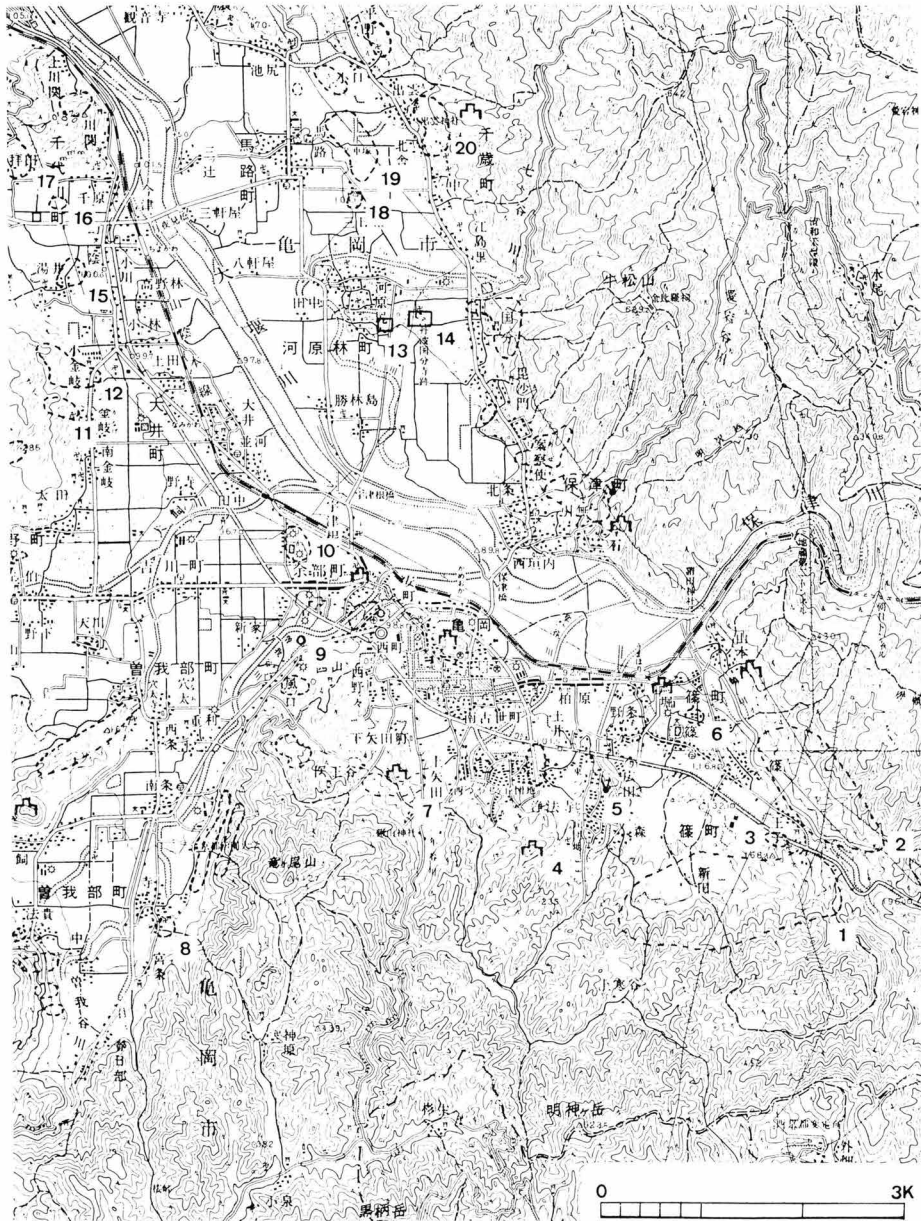
亀岡盆地は、標高100m前後の断層盆地である。盆地中央には、大悲山・三国岳等の山々にその源を発する大堰川(保津川―桂川―淀川)が南流し平野部を分断している。亀岡盆地は、河川を媒介として、山城国の影響を強く受け、その性格も時代に応じて顕著な変化を呈している地域である。

亀岡盆地の歴史を概観すると、縄文時代の遺跡は数少なく、わずかに、馬路三日市の微高地にある三日市遺跡、南条遺跡が知られているにすぎない。

弥生時代には、亀岡盆地の各所にその遺跡が見られるようになる。主な遺跡としては、余部遺跡、三日市遺跡、河原尻遺跡、車塚遺跡、安察使遺跡、浄法寺遺跡、千代川遺跡などがある。これら多くの遺跡は弥生時代後期に属し、石庖丁、石剣、石槍、土器片が出土した余部遺跡が弥生時代前期から中期におよぶ遺跡として知られている。このことから亀岡盆地では、弥生時代後期における集落の発展が著しかったことがうかがえる。また、千代川遺跡^(注1)では、最近、発掘調査が行われているが、弥生時代後期から古墳時代後期におよぶ住居跡や遺物が確認されている。これらのものは、この時代の人々の生活を理解する上で貴重な資料となるものである。

古墳時代においては、南丹地域最大で全長80mを測り、周濠、造出しなどを有する前方後円墳である千歳車塚古墳をはじめとして多くの古墳および古墳群が出現する。亀岡盆地内で最も古いものとしては、篠町王子の三ツ塚古墳^(注2)がある。これは、大形円墳である2号墳を中心に東西に3基の古墳が並んでいた。副葬品としては、画文帯神獸鏡一面、直刀5～6口、勾玉、管玉などがある。現在、これらの古墳は、国道9号線の下になり、見ることができなくなっている。また、古墳時代中期になると、平坦な場所に古墳の築造が行われるようになる。前方後円墳は、前述の千歳車塚古墳をはじめとして、篠町野条古墳、石棚を持つ拝田16号墳などがある。古墳時代後期では、亀岡盆地のほぼ全域にわたって、古墳群が構成されている。100基を越える小金岐古墳群、北ノ庄古墳群、野条古墳群、南条古墳群、浄法寺古墳群など数多くの古墳群が亀岡盆地を見下ろしている。また、拝田16号墳、小金岐76号墳、同77号墳、稗田野町鹿谷古墳は石棚を、拝田9号墳は石障を内部構造に取り入れており、特異なものとして取り上げておきたい。このように、亀岡盆地の古墳は、丹波国における亀岡がその中心的役割を持っていたということを物語っている。

古墳時代の終末期に入って、亀岡盆地では新しい時代の動向がうかがわれる。篠町周辺



第1図 亀岡盆地主要遺跡分布図

- 1・2. 篠窠跡群 3. ミツ塚古墳群 4. 浄法寺城跡 5. 村上神社窠跡群 6. 観音芝遺跡 7. 医王谷遺跡 8. 与能廃寺 9. 狐塚古墳 10. 余部遺跡 11. 北金岐古墳群 12. 小金岐古墳群 13. 御上人林遺跡 14. 丹波国分寺跡 15. 湯井遺跡 16. 桑寺廃寺 17. 拝田古墳群 18. 三日月古墳群 19. 車塚古墳 20. 出雲古墳群

の丘陵に須恵器を主体とする生産活動が始まり、これが平安時代末期まで続くのである。これが亀岡市篠窯跡群である。その最盛期には、平安京を中心とした中央の需要に応えるための直接的な関連をもった生産を行っていた。また、同地では、須恵器、緑釉陶器のほかに、大堰川の支流である鶉川北岸の山麓では瓦窯も営まれていた。ここでは平安時代後期の瓦が生産され、藤原道長建立の法成寺をはじめ、六勝寺などに供給されていたようである。このように、古墳時代後期から平安時代末期までの亀岡盆地は京都(中央)に対する直接的生産地としての役割が強かったと考えられる。

奈良時代の遺跡としては、千歳町丹波国分寺をはじめ、丹波国分尼寺と推定されている河原林町御上人林廃寺、白鳳期から平安時代後期の瓦が出土している篠町観音芝廃寺、曾我部町寺村の与能廃寺、千代川桑寺廃寺などがある。ほかに、亀岡盆地中央付近の田園地帯には、条里制にちなんだ小字名も残っており、農耕を生活主体とする集落を検討する上で重要である。

(松元 達也)

第2節 これまでの調査

篠窯跡群の発掘調査は、昭和29年の王子所在篠町A号窯跡の実施に始まる。^(注3)

篠町A号窯跡は大堰川北側丘陵、丘陵裾部に立地する窯跡である。出土遺物は須恵器のほか瓦が出土しており、須恵器と瓦の瓦陶兼用窯である。特に瓦は六勝寺などで使用されている。

篠窯跡群の本格的な調査は京都府教育委員会による沓掛から園部まで延長32 kmの国道9号バイパスの予定路線内の分布調査に始まり、その後「篠古窯跡研究会」(代表永田信一氏)による分布調査もなされている。これらの分布調査の結果、篠町南丘陵部には、平安時代を中心とした窯跡が100基以上確認され、一大須恵器窯跡群であることが明らかになった。

9号バイパス関連遺跡の発掘調査は、試掘調査と併行して昭和51年度より始まり、窯体構造が明らかになったものとして、昭和51年前山1号窯^(注4)、昭和52年黒岩1号窯^(注5)、昭和54年小柳1号窯^(注6)、昭和55年前山2・3号窯^(注7)、小柳4号窯^(注8)、芦原1号窯^(注9)がある。また、窯体構造は明らかではないが、灰原あるいは焼土が確認されたものとして小柳2・3号窯、芦原2号窯、鍋倉窯跡がある。

これまで窯体構造が明らかになったものとして、先述の7基があり、そのうち、半地下式窖窯としては、前山1号窯、小柳1号窯、芦原1号窯の3基があり、平窯あるいは特殊窯として前山2・3号窯、黒岩1号窯、小柳4号窯の4基がある。

篠窯跡群の特殊窯として緑釉陶器を含む前山2・3号窯、黒岩1号窯がある。前山2・3号窯、黒岩1号窯は、小柳1号窯と同様に三角形の頂部を煙道部として底辺の2か所に

焚口部を設けた「三角窯」である。これまで「三角窯」が緑釉陶器生産のための二次焼成窯と考えられていたが、小柳1号窯、あるいは昭和56年度調査した西長尾5・6号窯でも緑釉陶器を含まず「三角窯」の再検討が必要となった。

以下、昭和51年度より昭和55年度までに発掘された7基の窯跡について調査年度順に簡単に述べることにする。

昭和51・52年度には、前山1号窯、黒岩1号窯が調査された。前山1号窯は、亀岡市篠町大字森小字前山に所在し、南北に延びる丘陵の西側斜面を利用して造られた半地下式無段窖窯である。窯体のベースとなっている土質は、黄褐色軟質砂層である。遺存状態は、煙道部および焚口部が削平を受けており、天井部は崩落していた。窯体構造は残存長約6.6m、最大幅約1.3mを測り、焼成部床面の傾斜角は、焼成部との傾斜変換点から1.6mまでが12°であり、それより上では30°となる二段傾斜を有する。窯体の主軸方位はN86°42'Eである。

黒岩1号窯は、亀岡市篠町大字篠小字黒岩に所在し、東西に横たわる丘陵の北斜面において北に延びた小支丘の頂部に造られた三角状平窯である。遺存状態は、側壁上部および天井部が崩落している。窯体構造は、斜面の上方を頂点とし、下方を底辺とする三角形を呈し、頂部に煙道部を、底辺の両端には焚口が造られている。窯体は一辺約2.3mを測り、床面傾斜角は10°である。底辺の二等分点と頂点を主軸とするとその方位はN42°Wを測り、ほぼ正三角形となる。床面にはピットが全部で18個作られており、その形状は円形、楕円形、台形等さまざまで、大きさは直径約8~20cm、深さは約2~4cmである。ピットの配列に規則性はない。このピットは、窯体内から多量に出土した楕円形状の焼台を置いたものと推定できる。両焚口部には、石または転用されたと思われる分焰棒を窯壁の末端に柱状に立ててある。天井部は崩落していたが、おそらくスサ入りの粘土でドーム状に覆われていたと考えられる。

昭和54年度には、小柳1号窯が調査された。小柳1号窯は、亀岡市篠町大字篠小字小柳に所在し、黒岩1号窯の立地する鞍部から谷川をはさんで北東に張り出す小支丘の西側斜面に位置する半地下式無段窖窯である。遺存状態は焚口部と燃焼部の一部は削平され、煙道部は自然崩壊し、天井部も崩落していた。窯体構造は、残存長約7m、最大幅約1.2mを測り、焼成部床面の傾斜角は46°である。窯体の主軸方位はN80°Eを測る。床面は黄褐色軟砂質土層に「U」字状の溝を掘り込んだ状態で、そのまま使用している。床面の傾斜は急であるが、それに見合った焼台も発見されている。

昭和55年度には、前山2・3号窯、小柳4号窯、芦原1号窯が調査された。前山2号窯は、前山1号窯の南約14mの緩傾斜面に位置する三角状平窯である。遺存状態は側壁上部

および天井部が崩落している。窯体構造は底辺約1.8m・側辺約2.0mの二等辺三角形であり、床面傾斜角は 8° 、窯体主軸方位は $N105^{\circ}E$ を測る。前山2号窯は黒岩1号窯と同様、頂部に煙道部を、底辺の両端に焚口部をもつ三角形の平窯である。床面には円形または楕円形の直径約10cm、深さ約2~3cmの浅い凹状の窪みが16か所設けられており、これらは焼台を置いたピットと推定できる。両焚口部には自然石が窯壁の末端に柱状に立てられている。

前山3号窯は、前山2号窯の南5.5mに位置し、2号窯よりひとまわり大きい三角状平窯である。遺存状態は側壁上部および天井部が崩落している。窯体構造は底辺約2.5m、側辺約2.8mの二等辺三角形であり、床面傾斜角は 10° 、窯体主軸方位は $N135^{\circ}E$ を測る。床面には直径約10~15cm、深さ約2~5cmの円形あるいは楕円形の窪みが19か所設けられており、構造はほぼ2号窯と同様である。

小柳4号窯は、小柳1号窯より南約5.5mに位置する三角状平窯である。底辺部側壁はすべて崩壊し、天井部も崩落していた。窯体構造は、一辺約2mのほぼ正三角形であり、床面傾斜角は 10° 、窯体主軸方位は $N83^{\circ}E$ を測る。床面はほぼ平坦に還元炎焼成されており、今までの三角窯のような焼台を据えた痕跡は確認できなかった。

芦原1号窯は、亀岡市篠町大字篠小字芦原に所在し、北東に延びる丘陵の東側斜面に位置する半地下式無段窖窯である。遺存状態は悪く、煙道部および天井部が崩落していた。窯体規模は残存長約6.6m・最大幅約1.5mを測り、焼成部床面傾斜角は燃焼部との傾斜変換点から約2.4mまでが 38° であり、それより上では 50° となる二段傾斜を有する。窯体主軸方位は、 $N110^{\circ}W$ を測る。床面は黄褐色砂質土層を「U」字状に掘り下げており、粘土を貼りつけた痕跡はない。天井部および側壁はスサ入り粘土を使用したものと考えられる。

(小島 敏明)

第2章 西長尾窯跡

第1節 調査の経過

西長尾窯跡群の発掘調査は、昭和52年度国道9号バイパス予定路線内における分布および試掘調査の結果、西長尾F地区の丘陵西側斜面裾部に窯体の一部と3か所の灰原を検出したため、4基の窯を想定し、実施された。

昭和55年度は窯が立地する斜面裾部に約100m²の平坦面があり、平坦部の試掘調査に際し、多数の須恵器片を採集したため、この平坦面が窯操業時の作業場跡であるのか、あるいは窯の灰原が水田化された際に削平されたものであるのかを明確にするため発掘調査を行った。調査の結果、作業場跡と思われる遺構は検出されず、水田化される際に削平を受け、窯の遺物が散布したことが明らかになった。

昭和57年度は52年度の試掘調査結果を踏まえ、4基の窯を想定し、4月初旬より発掘調査の準備を行った。現地調査は6月4日に着手し、9月末日終了の予定であったが、調査が進むにつれて後述するように4基の窯のほか新たに2基の窯を検出し、最終的には埋め戻し作業も含め、57年1月末日の8か月余りを要した。

現地調査はまず推定3号窯の立地する26～30・J～N区の丘陵斜面に、3mの小地区の地区割に沿い、1×2mのグリッドを15か所設定し、層位・窯体の主軸方位・灰原の範囲を確認したのち、全面調査にきりかえた。その結果、3号窯は斜面に構築された半地下式窖窯であること、煙道部では現地表下10cmで窯体焼土を確認したが、焚口部では現地表下2.5mを測り、予想以上に深いことが明らかになった。また、灰原は焚口部より東西約9m・南北約10mの範囲で広がる。

3号窯の窯体および灰原の掘削と併行して、推定1号窯が立地する17～23・I～L区に3号窯同様、3mの小地区に沿い、1×2mのグリッドを15か所設定し、層位・窯体の主軸方位を確認したのち、全面調査を行った。その結果、1・4号窯の前庭部は削平を受け、1号窯の南約1.5mに隣接して4号窯が構築された半地下式窖窯であることが明らかになった。1・4号窯灰原は丘陵西側斜面より17～22・M・N区の湿地帯まで広がり、1号窯灰原は現地表下より約2.5mの深さで検出され、灰原掘削に際しては湧水が著しく難渋を極めた。1・3・4号窯の窯体構造・灰原の範囲が明らかになり、55年度に調査された23～26・R～Z区平坦面で確認された灰原内出土遺物が、1・3・4号窯の遺物とは時期を異にする窯(2号窯)があると考え、22～24・N～O区に7×6mのトレンチを設定し、窯体の追求に務めた。掘削の結果、22・23M区で直径約2mの円形焼土があり、焼土直上に拳

大の粘土塊が散在し、窯体の一部と考えた。2号窯窯体は削平を受け、窯体構造は明らかでないが、平窯と思われる。灰原はトレンチ西壁よりN区に広がる。2号窯灰原を除去した際、トレンチ西壁に接して、新たに焼土帯を検出したので、急拠、調査地を西側N・O区に拡張し、窯体の確認につとめた。その結果、2基の窯(5・6号窯)を検出した。

5号窯は平面砲弾形を呈し、ロストル(火格子)型式による二重床面という特異な窯体構造であり、6号窯は平面三角形を呈するいわゆる「三角窯」と考えられる。

5号窯の構造は篠窯跡群の調査では初見であり、窯体構造および今後の調査方法を検討するため、檜崎彰一・田辺昭三・中村 浩・寺島孝一の各氏に専門的な指導・助言を仰ぐことにした。

その指摘された見解は概ね次のとおりである。

1. 5号窯はこれまで類例をみないロストル(火格子)型式の須恵器窯である。
2. 円柱上面に敷かれた拳大の粘土塊が本来の床面であることは、粘土塊上面に土器が密着していることと、側壁からそのまま続く粘土塊があることより明らかである。
3. 拳大の粘土塊に苧(スサ)が認められ、床面を拳大の粘土塊で敷き、表面積を広くすることは窯体内の保温を考慮したものである。
4. 焼成方法は、燃烧部の火が円柱間の隙間を這ったのち、粘土塊で敷かれた床面の隙間を縫い、焼成部全面に火が効率よく回ったのち煙道部へ続く。
5. 燃烧部・焼成部・煙道部の各境には、両側壁を内側にしぼり込み、区画が明瞭である。
6. 5号窯出土遺物は15cm未満の小型品が主体をしめ、小型品を効率よく生産する窯である。また出土遺物より10世紀後半～11世紀前半と考えられ、須恵器から陶器に移行する時期に相当し、今後、分業形態を考える上にも重要な遺構である。
7. 以上の点より保存措置を講ずる必要がある。

以上の指摘を踏まえ、当調査研究センターは12月24日、新聞発表・現地説明会を行い、5・6号窯の遺跡保存を明らかにした。なお、保存される地域の具体的な利用計画の策定、整備計画については今後、京都府教育委員会、日本道路公団、亀岡市教育委員会および土地所有者との協議を行うこととし、その解決は将来に委ねられた。

なお、この間、京都大学 樋口隆康(当調査研究センター副理事長)、文化庁調査官 浪貝 毅、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財調査センター指導部長 佐原 真(当調査研究センター理事)の各氏ほか多くの学識経験者からの有益な指導・助言を受けた。また奈良教育大学市川米太氏には熱ルミネッセンス、富山大学 広川公夫氏には熱残留磁器測定依頼を心よくお受けいただいた。

調査終了後、1～4号窯は埋め戻し作業を行い、5・6号窯については窯体全面を覆う仮設小屋を設置し、今後の保存処置に備えることが決定した。

第2節 地 区 割

発掘調査地区の地区割は、昭和51年度より始まった京都府教育委員会の地区割に準拠し、3 m方眼を最小地区とし、最小区を東から西へA～T区までの20区(60 m)を中地区とし、中地区を包括するものとして小字名により大地区を設定した。

これにより今回の調査地は、篠・西長尾F地区に相当する。

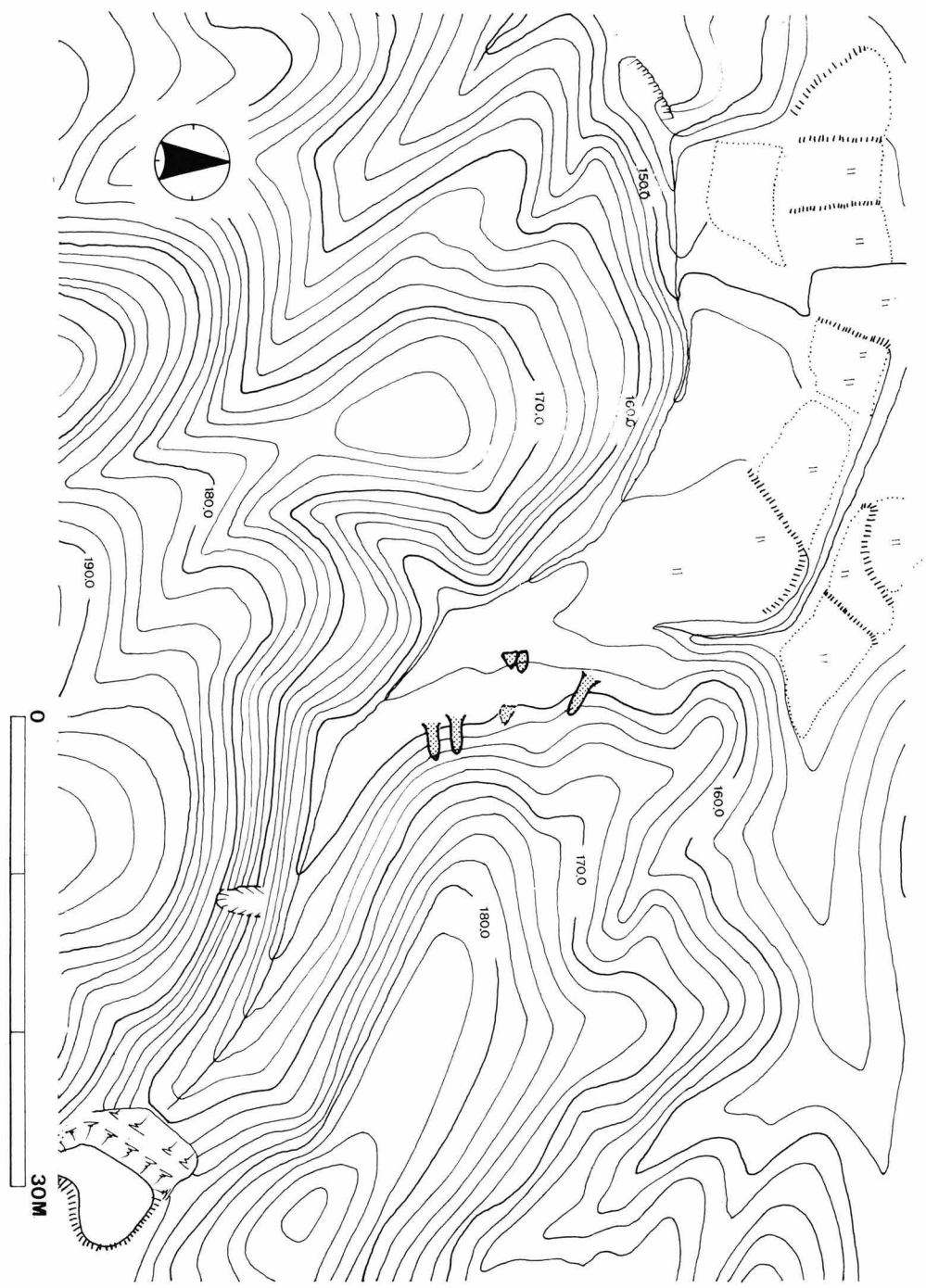
なお、最小区の地区割は東南隅を基準杭とし、東西をローマ数字、南北をアルファベットで標示する。

第3節 地 形 と 層 位

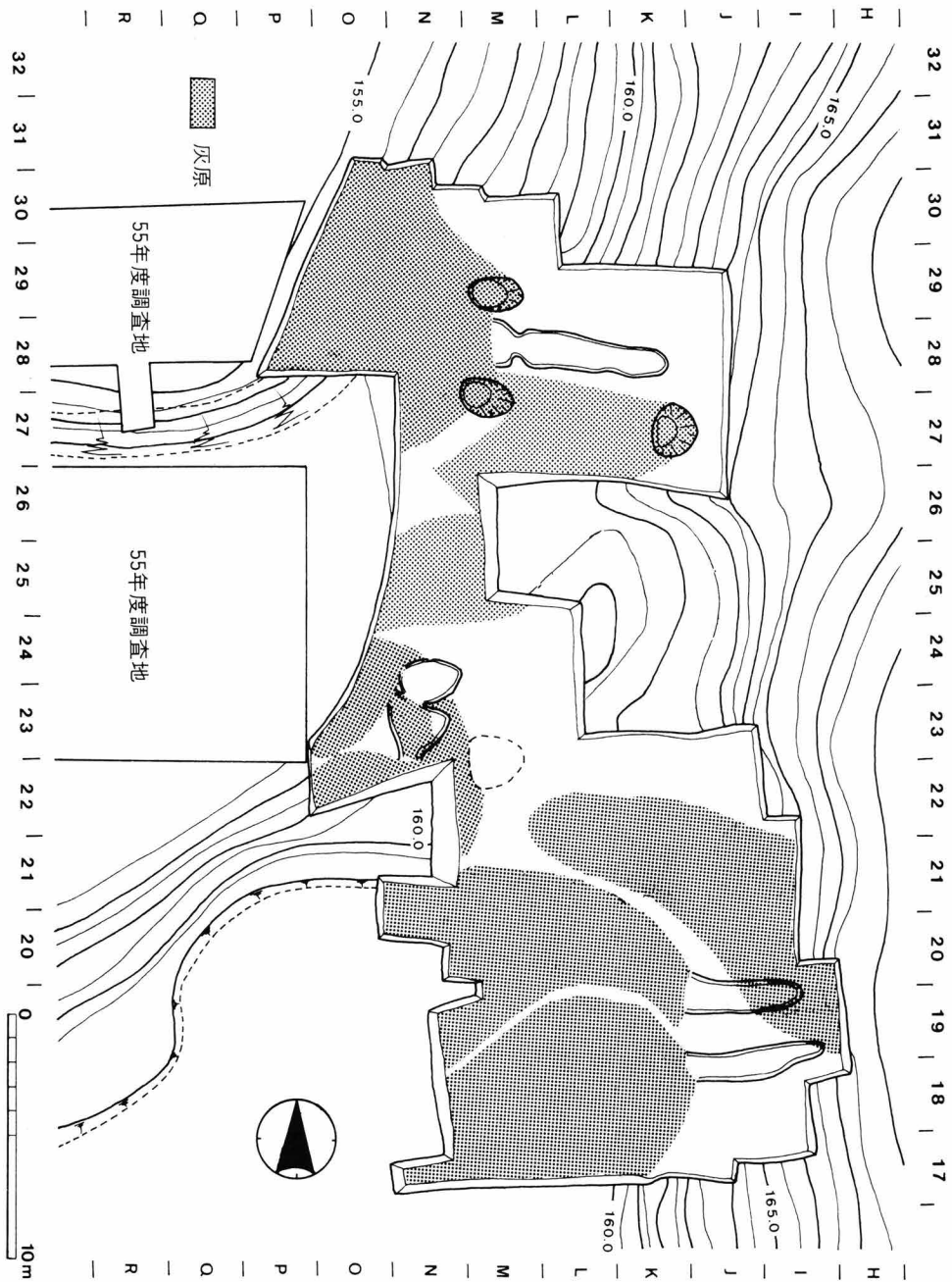
西長尾窯跡群は、亀岡市篠町小字西長尾に所在し、標高約200 mの丘陵にはさまれた狭い谷地形に立地する。1・3・4号窯は丘陵西側斜面の標高158～165m、丘陵傾斜角30～40°に立地する半地下式窖窯である。5・6号窯は1・3・4号窯より低く、標高158m、丘陵裾部平坦面に立地する平窯である。5・6号窯の西約8～10 mに小川が流れ、窯の操業に必要とされる水の便は良好と考えられる。また、立地面では、これまで篠で調査された各窯が西長尾窯跡群と同様に、丘陵西側斜面の谷の奥まったところに立地することより、季節風を考慮して、窯を構築したものと考えられる。

1・4号窯は表土下40～50 cmで、窯体側壁の上部が検出でき、基本層位は表土(厚さ10～20 cm)・黄褐色粘質土(厚さ20～40 cm)と堆積し、窯体直上には黄褐色粘質土が火をうけ、濃赤褐色土に変化している。1・4号窯は約1.4 mの間隔で隣接しており、1・4号窯の窯体断ち割りの結果、1号窯が操業を終えたのち、側壁焼土が崩落し、その上に黄褐色粘質土(地山土に近似)の盛土を行い、4号窯を操業したと思われる。1・4号窯の窯体はいずれも天井部が崩落しており、窯体内に還元炎焼成された青灰色の窯壁とその上層に赤色焼土、黄褐色粘質土が互層に堆積している。1号窯窯体が表土下約40～50 cmの浅い面で検出されたのに対し、灰原は後世、ため池として使用されていたため堆積土が多く、表土(厚さ約10～20 cm)、黒灰色土層(厚さ約20～40 cm、4号窯灰原を含む)、植物遺体層(厚さ約10～20 cm)、黒灰色土層(厚さ約20～40 cm、4号窯灰原を含む)、植物遺体層(厚さ約5～10 cm)、黄褐色砂層(厚さ約20 cm)、植物遺体層(厚さ約5～10 cm)、黄褐色粗砂(厚さ約20～30 cm)、淡青灰色粘土層(厚さ約20～30 cm)、黒褐色炭層(厚さ約30～40 cm、1号窯灰原)と堆積しており、表土より地山直上まで1.6～2.5 mを測る。

1号窯の灰原上層に青灰色粘土層、植物遺体層が堆積していることにより、1号窯の灰原が排棄されたのち、一時期滞水した状態が考えられ、そののち、4号窯を操業し、灰原を排棄したと考えられる。

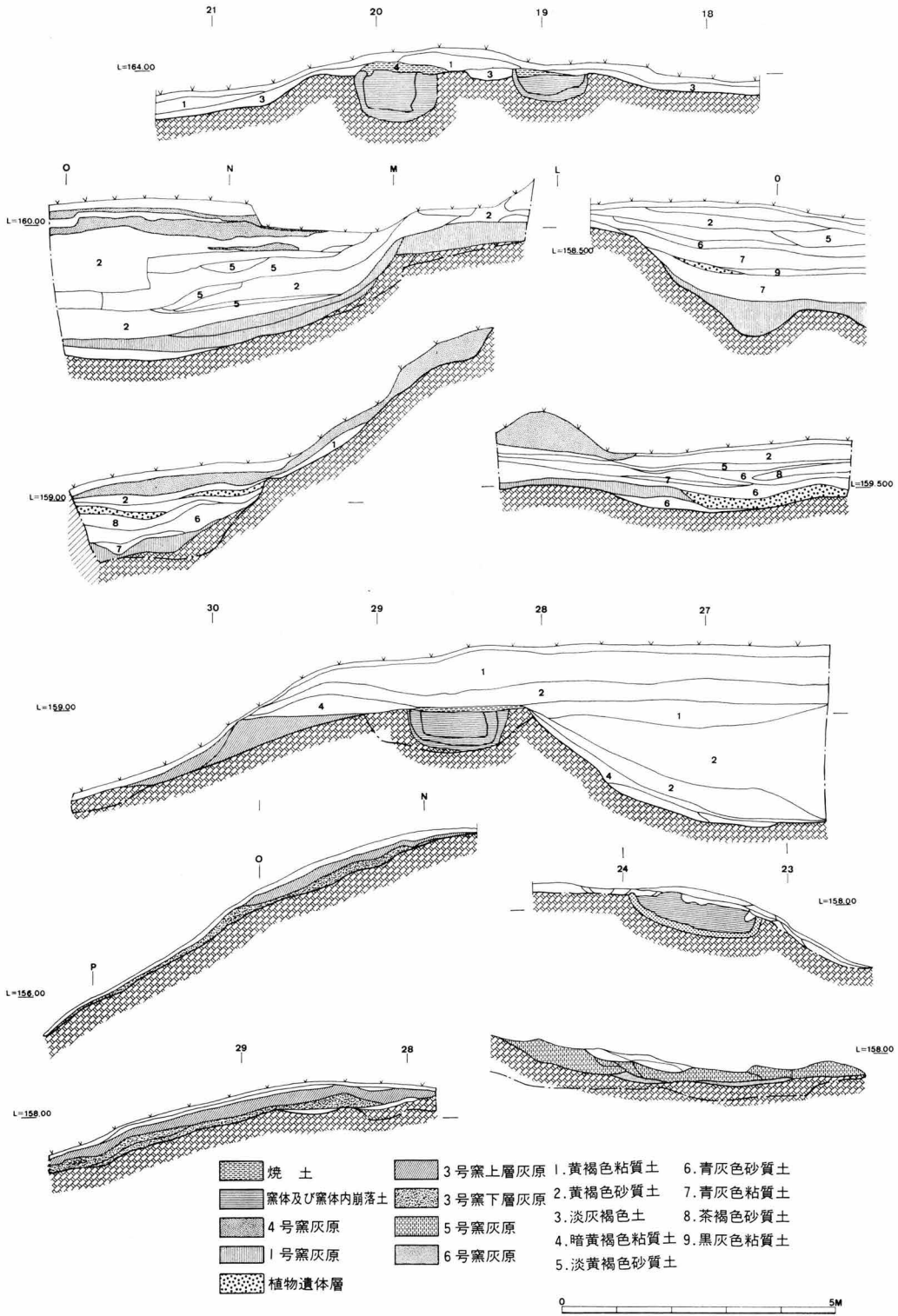


第 3 图 西長尾窯跡地形図



第4図 西長尾窯跡遺構配置図

1号窯灰原は、焚口部より東西約5m・南北約5mの範囲に広がり、灰原内よりコンテナ・バット70箱以上の遺物が出土した。4号窯灰原は焚口部より東西約5m・南北約5mの範囲に広がる。4号窯灰原は後世土塁を築く際、黄褐色粘質土と灰原を交互に積み上げ、



第5図 西長尾窯跡土層図

版築をしていることが土塁の断ち割りの結果、明らかになった。

3号窯は煙道部の一部が地表に露出しているが、燃焼部近くでは地表下1.2～1.5mを測る。3号窯上層の基本層位は表土(厚さ約10～20cm)、暗黄褐色粘質土層(厚さ約10～20cm)、黄褐色粘質土層(地山土に近似、厚さ約80～100cm)、淡褐色粘質土層(焼土を含む、厚さ約10～20cm)があり、その下に窯体の側壁および焼土が確認できた。

3号窯は窯体を頂部として、窯体主軸に直交する形で南北に山形に成形し、窯体を構築しており、窯体断ち割りの結果、一部盛土を行った可能性がある。

灰原は表土下約10cmで検出でき、遺物のほか、焼土・窯滓を多量に含む中層をはさんで3層に分かれる。

5・6号窯は表土下約1.3～1.5mで検出でき、基本層位は表土(厚さ約10～20cm)、淡黄灰色砂質土層(厚さ約80～100cm、地山土に近似)、暗赤褐色土層(厚さ約10～30cm)、淡黄灰色砂質土層(厚さ約10～20cm)が堆積しており、窯体直上には1・4号窯と同様に暗赤褐色土層(焼土)が検出できた。5・6号窯は窯壁の一部が重複しており、6号窯が5号窯に先行することが明らかになった。6号窯窯体内には黒色炭層が堆積しており、これは6号窯が操業を停止し、天井部があいたままの時点で5号窯を構築し、操業した際、焚口部に堆積したオキを6号窯に排棄したと考えられる。6号窯は地山を穿って構築され、5号窯は一部盛土を行って構築されたと考えられるが、5・6号窯の保存を考慮し、断ち割りを行わなかったため、明らかにできなかった。(石井 清司)

第4節 各窯跡の概要

西長尾窯跡では、3基の半地下式窖窯(1・3・4号窯)と2基の平窯(5・6号窯)と不明窯(2号窯)の6基が確認された。そのほか、1号窯北側に隣接して集石遺構がある。

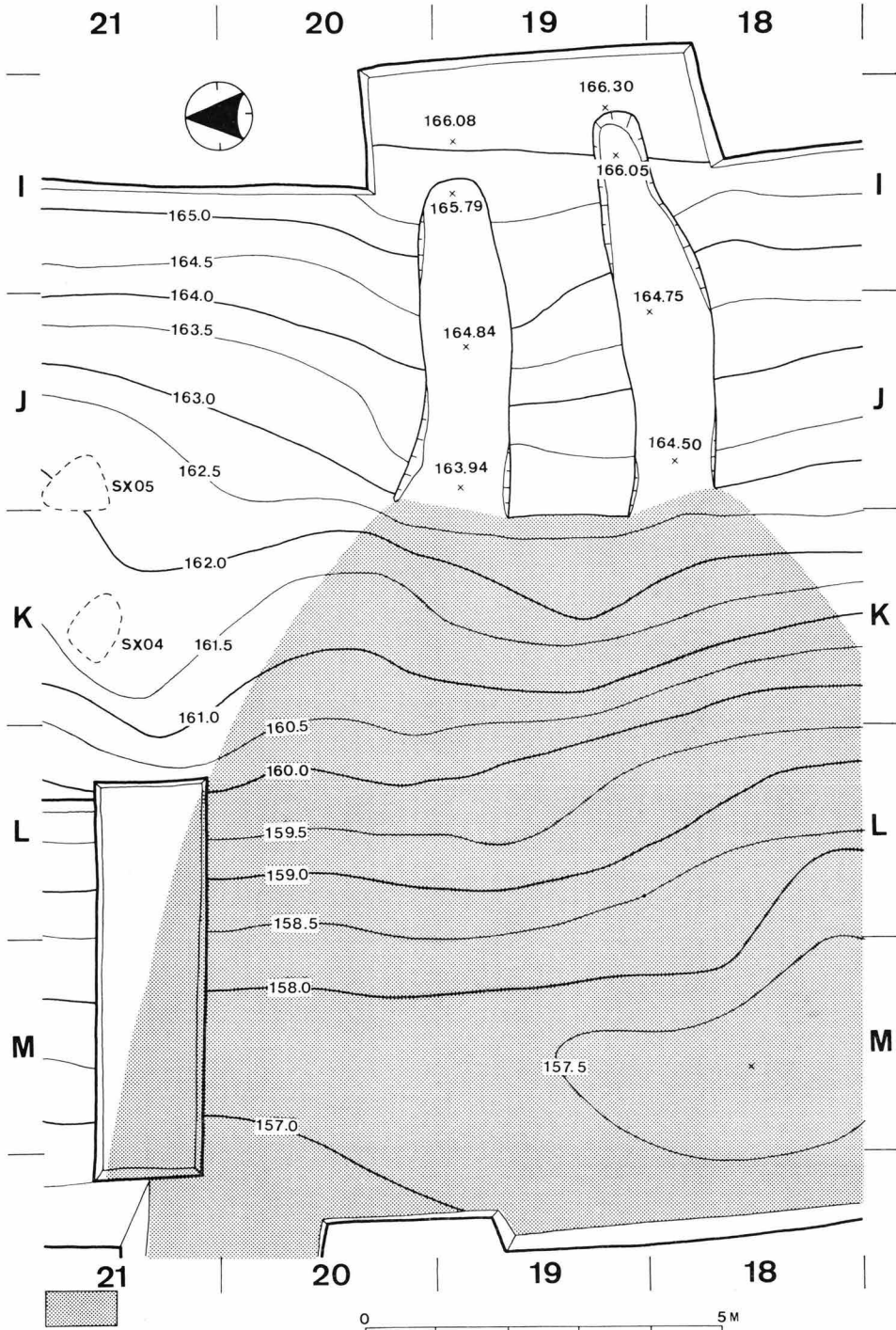
1. 西長尾1号窯(第6・7図)

1号窯はF18・19区の丘陵西側斜面(傾斜角40°)の自然地形を利用して構築された半地下式窖窯である。この1号窯は4号窯の南約1.4mに隣接し、角礫混じりの黄褐色砂質土の地山を「U」字形に掘り込み、窯体部および側壁に厚さ5～10cmのスサ入り粘土を貼りつけて構築されたもので、床面には段をもたない無段式である。

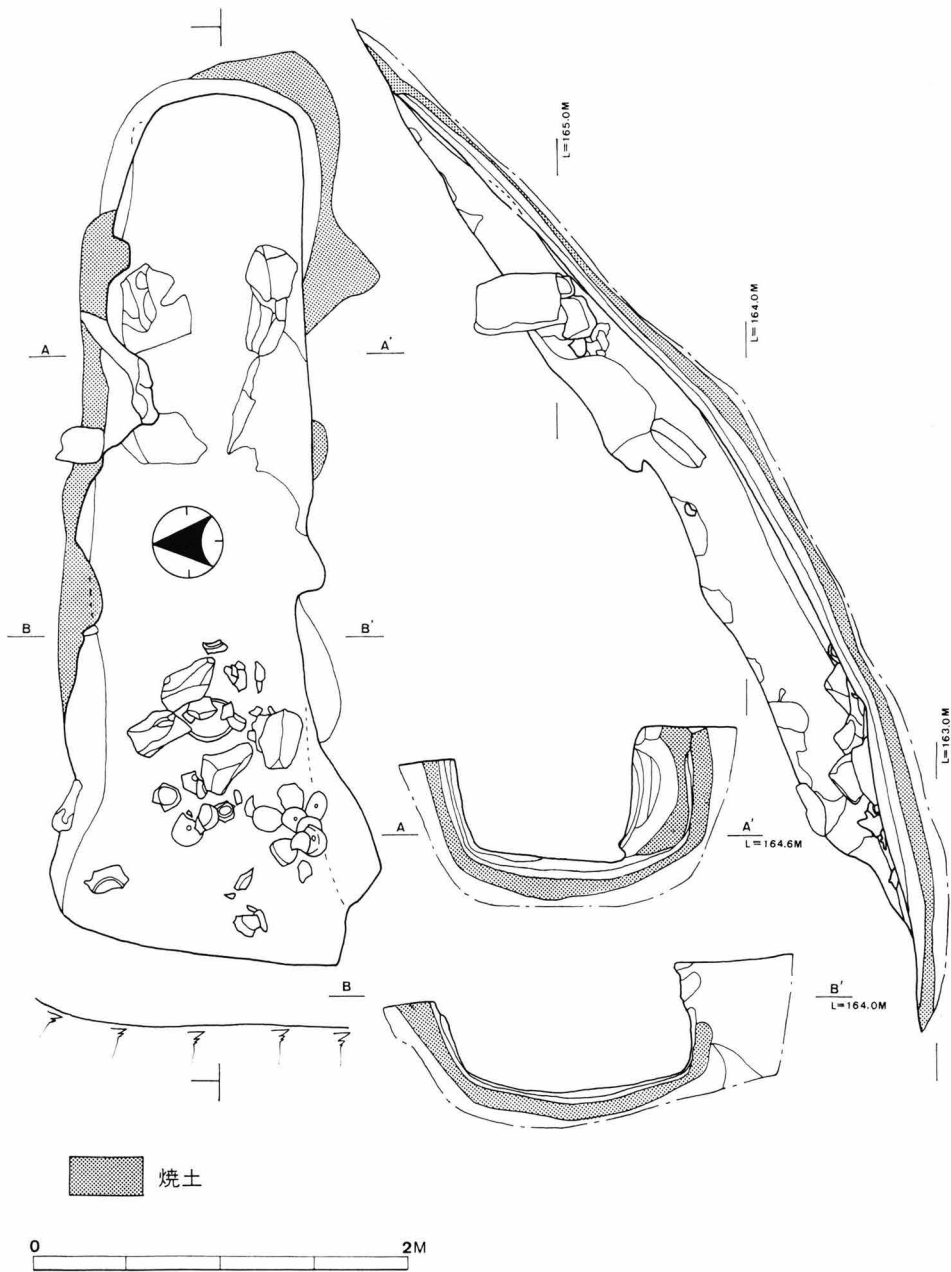
窯体規模は現存長約5.5m・床面最大幅約1.35mを測り、焚口部床面の標高約162mに対し、煙道部端の標高約166mと比高差約4m、床面傾斜角28°を測る。窯体の主軸方位はN91°Eである。

焚口部および前庭部

焚口部および前庭部は自然地形が急傾斜のため崩落しており、遺存状態は悪い。焚口部



第 6 图 西長尾 1・4 号窯遺構図



第7図 西長尾1号窯窯体図

は現存長約1m・床面最大幅1.5mを測り、焚口部から前庭部に向かって、扇状に37°の角度で左右に広がる。焚口部および前庭部はほぼ水平面をなし、床面の窯壁は中性炎(淡青灰色)もしくは酸化炎(明黄灰色)により低温に焼かれている。床面直上には薄く炭層が堆積していた。

	窯体構造	主軸方向	総長 (m)	最大幅 (m)	床面傾斜角	出土遺物	備考
1号窯	半地下式窖窯	N91°E	5.50	1.35	28°	杯, 蓋, 皿, 鉢, 壺, 盤, 平瓶, 短 頸壺, 硯	
2号窯	不明	—	—	—	—	杯, 碗, 壺	
3号窯	半地下式窖窯	N99°E	8.00	1.50	32°	杯, 蓋, 皿, 鉢, 壺, 硯, 耳杯, 甕, 碗	
4号窯	半地下式窖窯	N80°E	5.00	1.30	37°	杯, 蓋, 皿, 鉢, 壺, 盤, 平瓶, 硯, 短頸壺	
5号窯	半地下式平窯	N75°E	2.40	1.35	第1次床面 10°30' 第2次床面 8°30'	杯, 蓋, 皿, 鉢, 壺, 碗	焚口が2方向ある。
6号窯	半地下式平窯	N77°E	2.40	2.30	8°	杯, 蓋, 皿, 鉢, 壺, 碗	焚口が2方向ある。

付表 1 西長尾窯跡窯体規模一覧表

燃 焼 部

焚口から焼成部の傾斜にいたるまでの、比較的なだらかな斜面を燃焼部と考える。

燃焼部は長さ約1.1m・床面最大幅約1.2mを測り、焼成部に向かって11°の角度で傾斜する。焼成部側壁は床面よりほぼ垂直に0.5m立ちあがり、遺存状態は良い。南側側壁には天井部の窯体がずり落ちた状態で密着していた。燃焼部床面には床面に接した状態で完形品を含む須恵器杯身、杯蓋、壺など28個体がいずれも散在した状態で出土していることより、製品取り上げの際取り残したものと思われる。

焼 成 部

焼成部は長さ約3.6m・床面最大幅約1.1mを測り、煙道部に向かって26°の角度で傾斜する。焼成部側壁の遺存状態がよく、また、天井部のアーチの一部が遺存していた。床面より天井部内面までの推定高は1.2m前後と思われる。焼成部側壁を断ち割った結果、一部4回以上の補修作業が認められた。床面および側壁には、燃焼部同様スサ入り粘土が貼られ、窯壁表面には手の圧痕がある。

煙 道 部

煙道部は長さ約2.1m・床面最大幅1.0mを測り、傾斜角44°である。煙道部の側壁は床面より垂直に10~40cmと立ちあがり、端部に向かうにしたがい遺存状態が悪くなる。

灰 原

灰原は1号窯に隣接する4号窯灰原と重複しており、窯体の前後関係から推して灰原下層を1号窯灰原と考えた。灰原の範囲は、焚口部より60°の角度で左右に東西約5.0m・南北約5.0mの範囲で扇状に広がる。

1号窯灰原は現地表下約1.6mのところ、厚さ20～60cm堆積しており、トレンチ隅にいくにしたがい、灰層は薄くなる。同層には須恵器のほか窯滓を多く含む。なお、1号窯灰原の分層に努めたが、灰原の土質変化に差異がなく単層と考えられる。

2. 西長尾3号窯（第8・9図）

3号窯は調査地北端、F28区で、丘陵西側斜面（傾斜角30°）の自然地形を利用して構築された半地下式窖窯である。

3号窯は調査前に窯体の一部（調査の結果、煙道部の一部）が表面に露出しており、同地点を中心に試掘を行い、主軸方位、灰原の範囲の確認に努めた。その結果、3号窯は1・4号窯と同様、黄褐色砂質土の地山を「U」字状に掘り込んだのち、床面および側壁に約5～10cmの粘土（側壁および天井部にはスサを含む）を貼りつけたもので、床面には段をもたない無段式である。3号窯の窯体の左右は地山面を削り取り、窯体部が高位にあるよう成形されており、排水を意図したものと考えられる。

窯体の規模は全長約8.0m・焼成部床面の最大幅約1.5mを測り、焚口部床面の標高約159mに対し、煙道部端の標高約163mで、その比高差約4m、床面傾斜角32°となる。なお、窯体の主軸方位はN99°Eである。

焚口部および前庭部

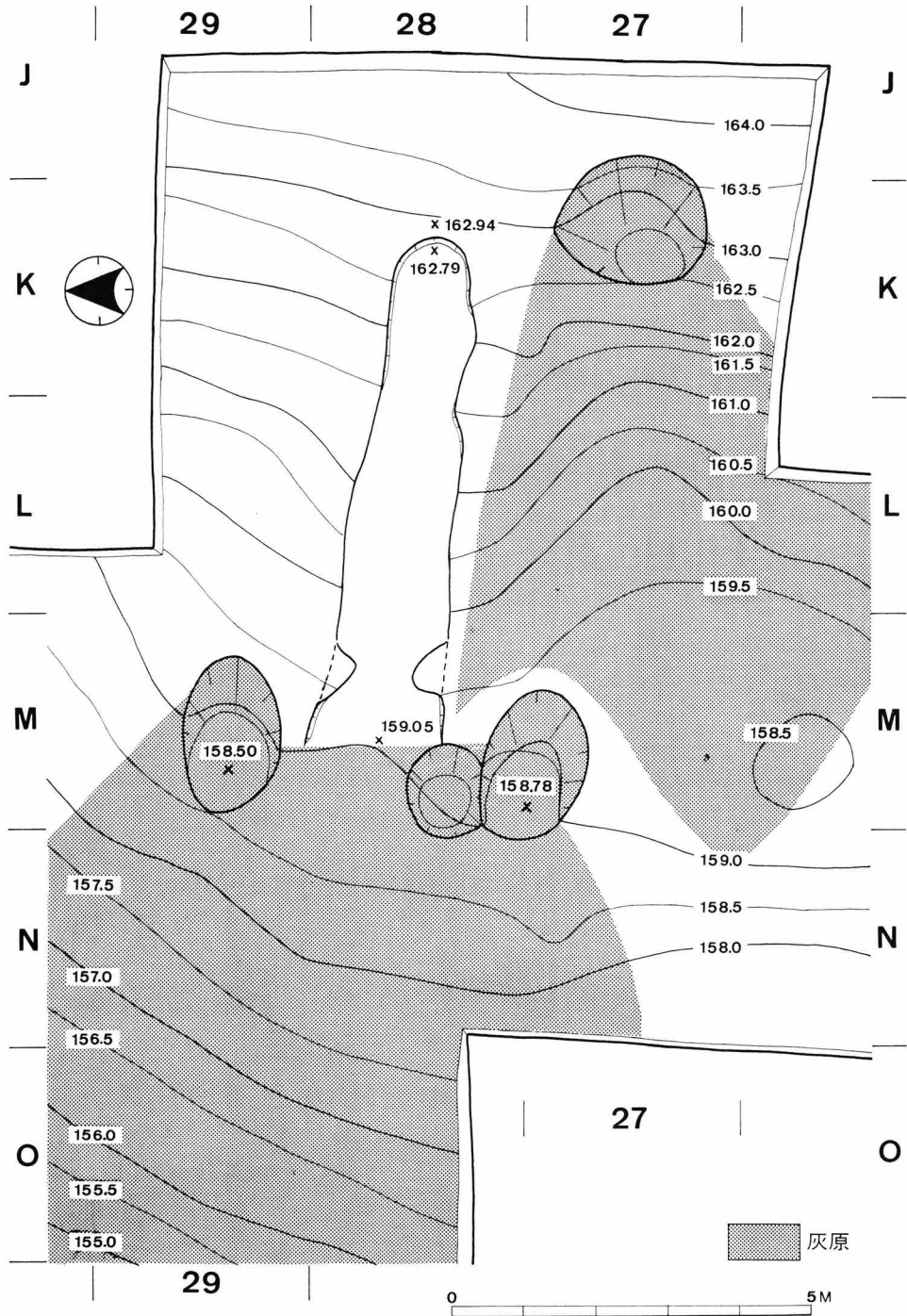
焚口部から前庭部にかけて、やや「ハ」字状に開きぎみであり、焚口部の側壁の遺存状態がよく、床面より天井部に向かってアーチが一部残っていた。そのアーチより、天井部内面までは1.2mと推定される。焚口部床面にはほぼ半円状に焼土（明赤褐色土）の広がり認められ、特に、中央では幅約60cmの帯状にやや厚い焼土の堆積がみられる。前庭部は幅約1.75mで広がる。焚口部および前庭部はほぼ水平面をなし、断ち割りの結果、地山土を積み上げて成形したことが明らかになった。

燃 焼 部

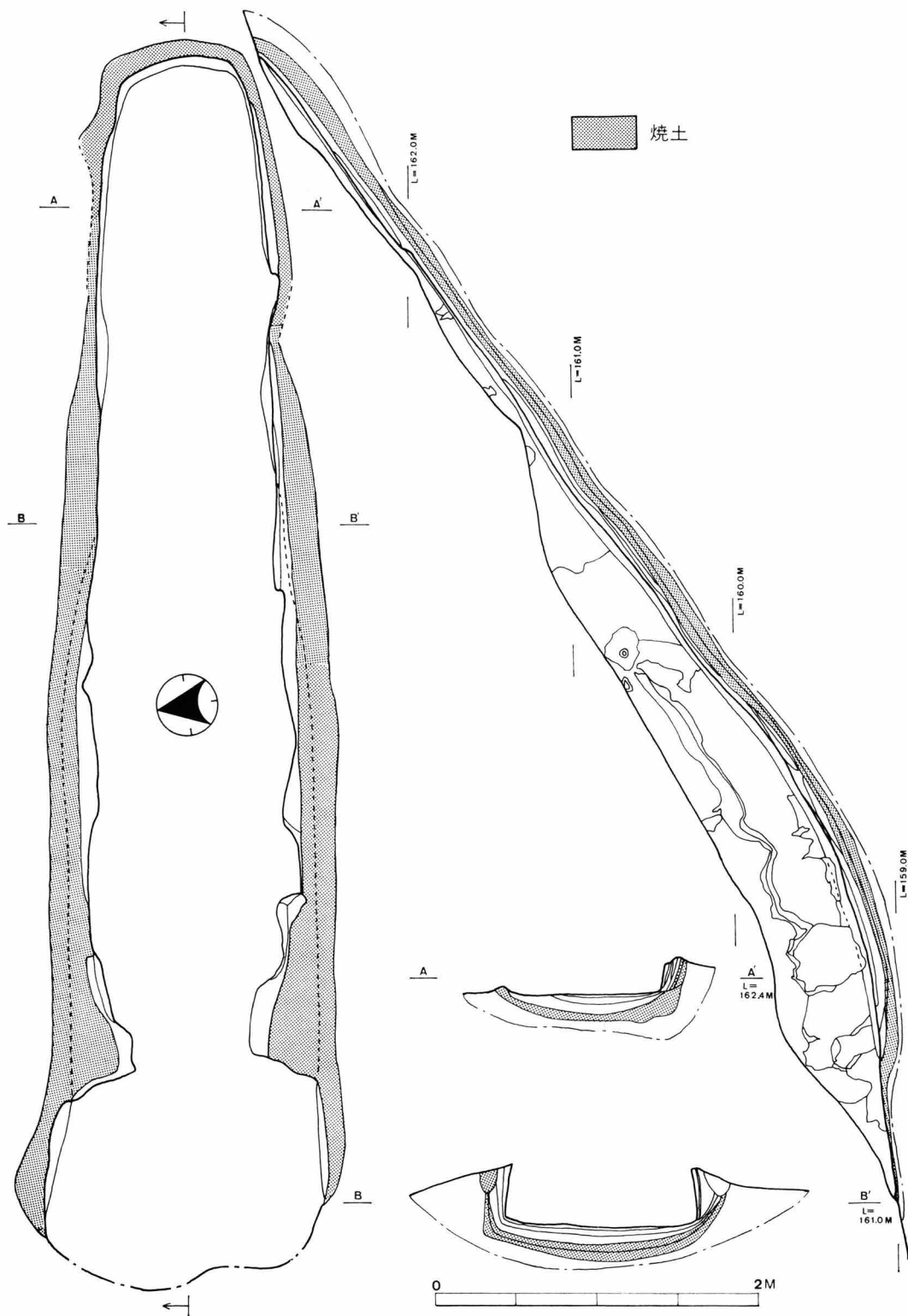
燃焼部は、長さ約1.5m・床面の最大幅約1.5mを測り、床面は焼成部に近い青灰色に焼きしまった部分と、焚口部寄りの明赤褐色土部分に分かれる。燃焼部側壁は床面より約60cm遺存しており、表面には手の圧痕が認められる。燃焼部は、窯壁の断ち割りの結果、青灰色土と赤褐色土が互層に堆積しており、2～3回の補修作業の行われていたことが知られる。

焼 成 部

焼成部は、長さ約4m・床面の最大幅約1.3mを測り、側壁は床面より垂直に約10～40cm立ちあがる。床面は煙道部に向かって26°の角度で傾斜しており、煙道部と焼成部の境は床面の幅をやや狭くしている。床面の一部には、杯身が粘土塊に溶着した状態で出土したが、



第 8 図 西長尾 3 号窯遺構図



第9図 西長尾3号窯窯体図

これは焼台に用いられたものと考えられる。

煙道部

煙道部は、長さ約1.6m・床面の最大幅約1mを測り、傾斜角40°である。煙道部は、前述のように、側壁および床面の一部が露出しており、地表下約10～20cmで床面を検出した。床面は、焼成部床面が強還元を示す青灰色に焼けているのに対し、煙道部床面は中性炎あるいは酸化炎を示す黄褐色土をなす。煙道部の火のひきは悪かったものと思われる。これは灰原内出土遺物に焼成不十分なものが多いことと符合する。なお、煙道部床面では、床面の色調に差異があり、煙道部床面の補修、もしくは煙道部の引き伸ばしの行われたことが考えられる。

灰原

灰原は焚口部より45°の角度で、東西約4.3m・南北約3.3mの範囲で扇状に広がり、トレンチ隅にいくにしたがい灰原は薄くなる。灰原は、前庭部より傾斜する傾斜面に、厚さ10～40cm堆積し、裾部に向かって薄くなる。灰原は3層に分層できる。上層より黄褐色土を混入する黒色灰層、窯壁・窯滓・黄褐色土を含まない単純炭層、遺物・窯滓を多量に含む炭層に大別できる。

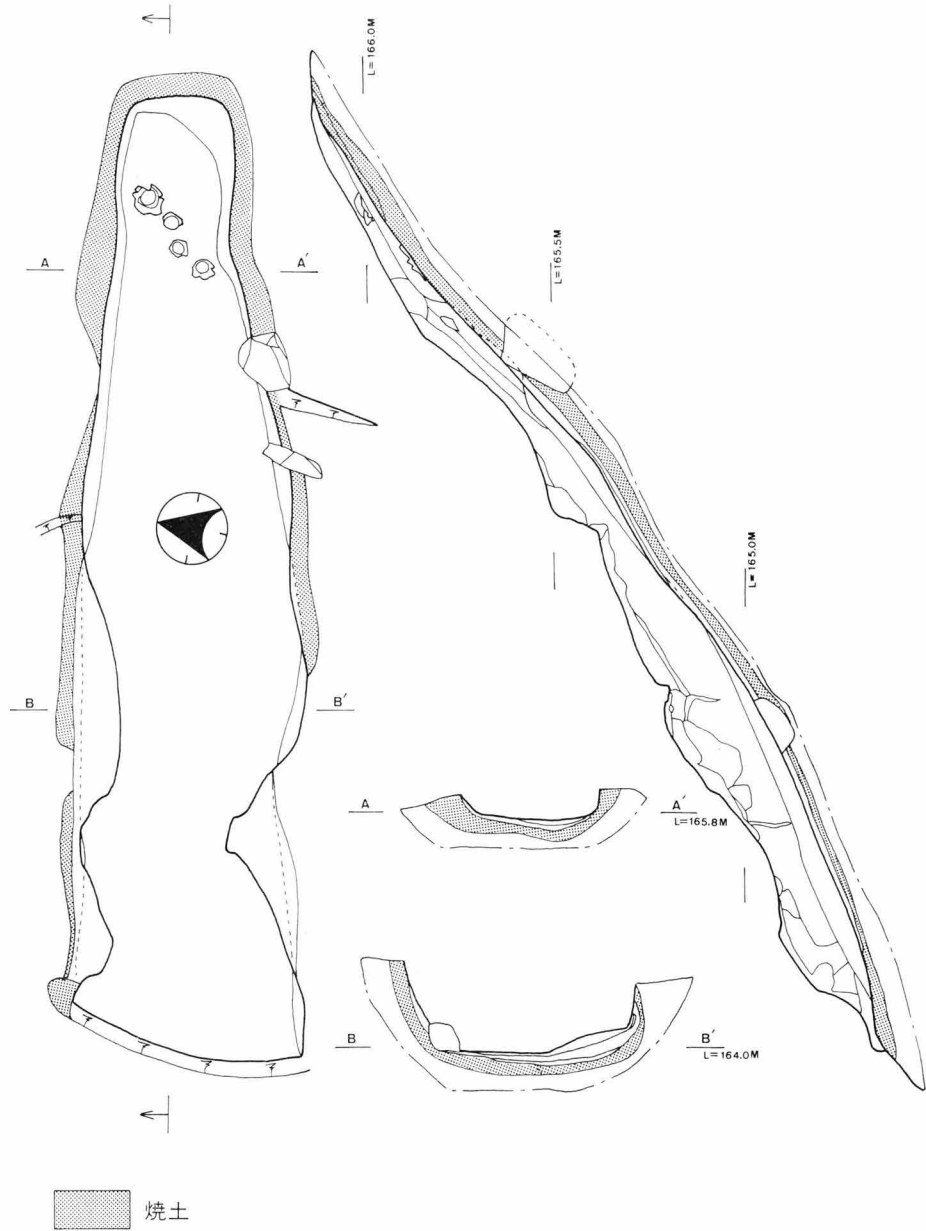
3号窯関連遺構

焚口前庭部には、焚口をはさむ左右対称の位置に、長径約1.3m・短径約1.0m・深さ約0.3mを測る楕円形土坑(SK 01, SK 02)がある。これら2つの土坑は焚口および前庭部を水平に積み上げた整地層より穿たれ、同土坑の埋土にはいずれも黒色炭およびカラケシが堆積しており、数点の遺物が含まれていた。上記の状況から、両土坑は、操業時に焚口部および前庭部に堆積したオキを排棄したもので、あたかも火種を消すための消しツボ的役割をした遺構と考えられる。

SK07は煙道部の東南約1.0mにあり、東西約2.0m・南北約1.7m・深さ約0.5mを測る円形土坑である。SK 07はSK 01・SK 02と同様、埋土は単純炭層であり、また、SK 06より西側斜面低位に向かって灰原が広がる。SK 07および低位の灰原を確認したため別の窯体があると考え、新たにトレンチをF区に設けて掘削したが、窯体は確認できなかった。SK 07および同灰原は3号窯に関連する遺構と考えられるが、性格は不明である。

3. 西長尾4号窯(第10図)

4号窯はFK～M区、1号窯の南約1.4mに隣接し、1号窯と同様、丘陵西側斜面(傾斜角35°)の自然地形を利用して構築された半地下式窖窯である。この4号窯は角礫混じりの黄褐色砂質土を「U」字形に掘り込み、底部および側壁に厚さ約5～10cmの粘土を貼りつけたもので、床面は段をもたない無段式である。



第10図 西長尾4号窯窯体図

窯体の規模は現存長約5m・焼成部床面最大幅約1.3mを測り、天井部は崩落しており高さは知り得ない。焚口部床面の標高約163.5mに対し、煙道部端の標高約166.5mと比高差約3m、床面傾斜角37°である。窯体主軸方位はN80°Eを測る。1・4号窯の前後関係は、4号窯側壁の赤褐色焼土が1号窯窯壁焼土と間層をはさんで上層にあり、1号窯が4号窯に先行する。

焚口部および前庭部

焚口部および前庭部は、自然地形が急傾斜のため崩落しており、遺存状態は悪い。現存長約30cm・床面最大幅約1.2mを測る。焚口部床面直上には薄く炭層が堆積する。前庭部は削平を受けて不明である。

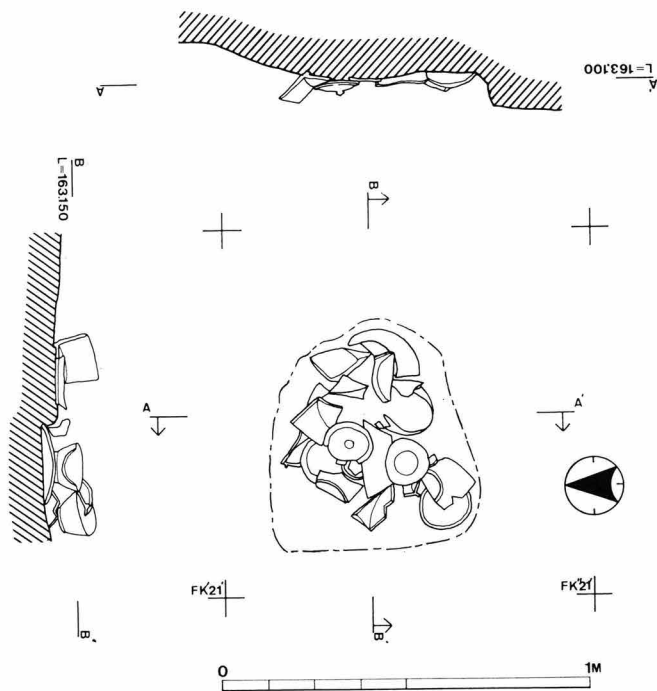
燃 焼 部

焚口部から焼成部にいたるやや平坦な面が燃焼部と考えられる。燃焼部は長さ約1mを測るが、燃焼部から焼成部への傾斜変換が緩斜面であり不明瞭である。燃焼部床面は焚口寄りの明黄灰色あるいは明赤褐色の焼土の部分と、焼成部に近い淡青灰色を呈する部分に分かれる。床面の一部には窯滓および焼石が検出された。側壁の遺存状態の良い部分では、床面より高さ約40cmを測る。

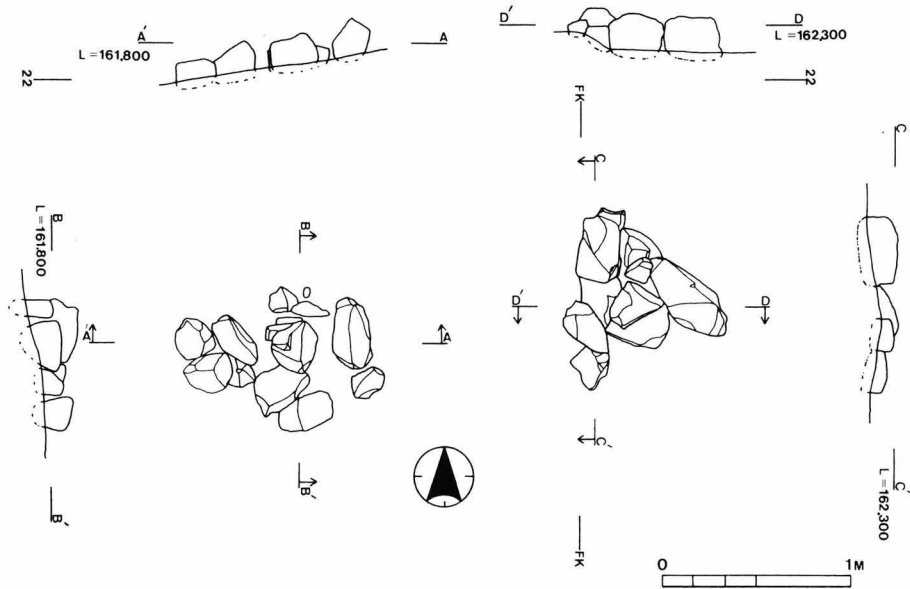
焼 成 部

焼成部は、長さ約2.5m・床面最大幅約1.1mを測り、煙道部に向かって28°の角度で傾斜する。

焼成部側壁は遺存状態が悪く、床面より15～50cm 垂直に立ちあがる。南側壁には人頭大の角礫を据え、窯を補強したものと思われる。床面は強還元(淡青灰色)に焼きしめられているが、煙道部に近づくにつれて中性炎、あるいは酸化炎(明黄



第 11 図 西長尾 S K 06 遺構図



第12図 西長尾 SX04・SX05 遺構図

褐色)に変わり、煙道部との境には若干の段をもつ。

煙道部

煙道部は、長さ約1.8m・床面最大幅約60cm・床面傾斜角37°を測る。側壁は床面より10~20cm立ちあがり遺存状態は悪い。床面は明黄灰色および暗赤紫色・明橙色の中性炎あるいは酸化炎と思われる、煙道部に向かったの火のひきは悪い。煙道部床面には杯身4点が散在していた。

灰原

4号窯灰原は、地表に露出しており、後世、土堤を築いた際、黄褐色土(地山土)と灰原を版築状に土盛したことが土堤の掘削により明らかになった。4号窯灰原は1号窯灰原の上に淡青灰色粘土・茶褐色粗砂土・植物遺体(特に松葉、椎の実)・黄褐色砂層があり、その上に4号窯灰原が堆積しており、1号窯操業ののち、滞水した上に4号窯灰原を排棄したものである。

4. その他の遺構

1号窯北側FK21区、1号窯焼土層下より直径40cmに炭層があり、炭層上面には杯、皿など50点以上の遺物が散在していた(SK06)。SK06は、層序関係より、SK06の遺物を排棄したのち、地山土を盛り上げ、1号窯を構築したものである。

また、1号窯の煙道部の上面に薄く灰層が堆積しており、1・4号窯上部で新たに窯体

があると考え、トレンチ（1×10m）を設定したが、窯体は確認できなかった。

（久保田健士・立花正寛）

5. 西長尾5号窯（第13～17図）

5号窯は、丘陵西側斜面の丘陵裾部平坦面より斜面に続く傾斜変換点に構築された半地下式平窯であり、3号窯から南西方向へ約14mのところに位置する。焚口部の標高は約158mである。

窯体は、平面砲弾形を呈し、長軸約2.40m・短軸約1.35m、主軸方位N75°Eを測る。天井部の残存は認められなかったが、窯壁および床面については、きわめて良好な遺存状態であり、焼成部は二重構造を呈し、ロストル（火格子）型式による特異な窯体構造をなす。なお、便宜上、底部床面を第1次床面、支柱上面に敷かれた床面を第2次床面と称する。床面の傾斜角は、第1次床面10°30′、第2次床面8°30′を測る。

燃 焼 部

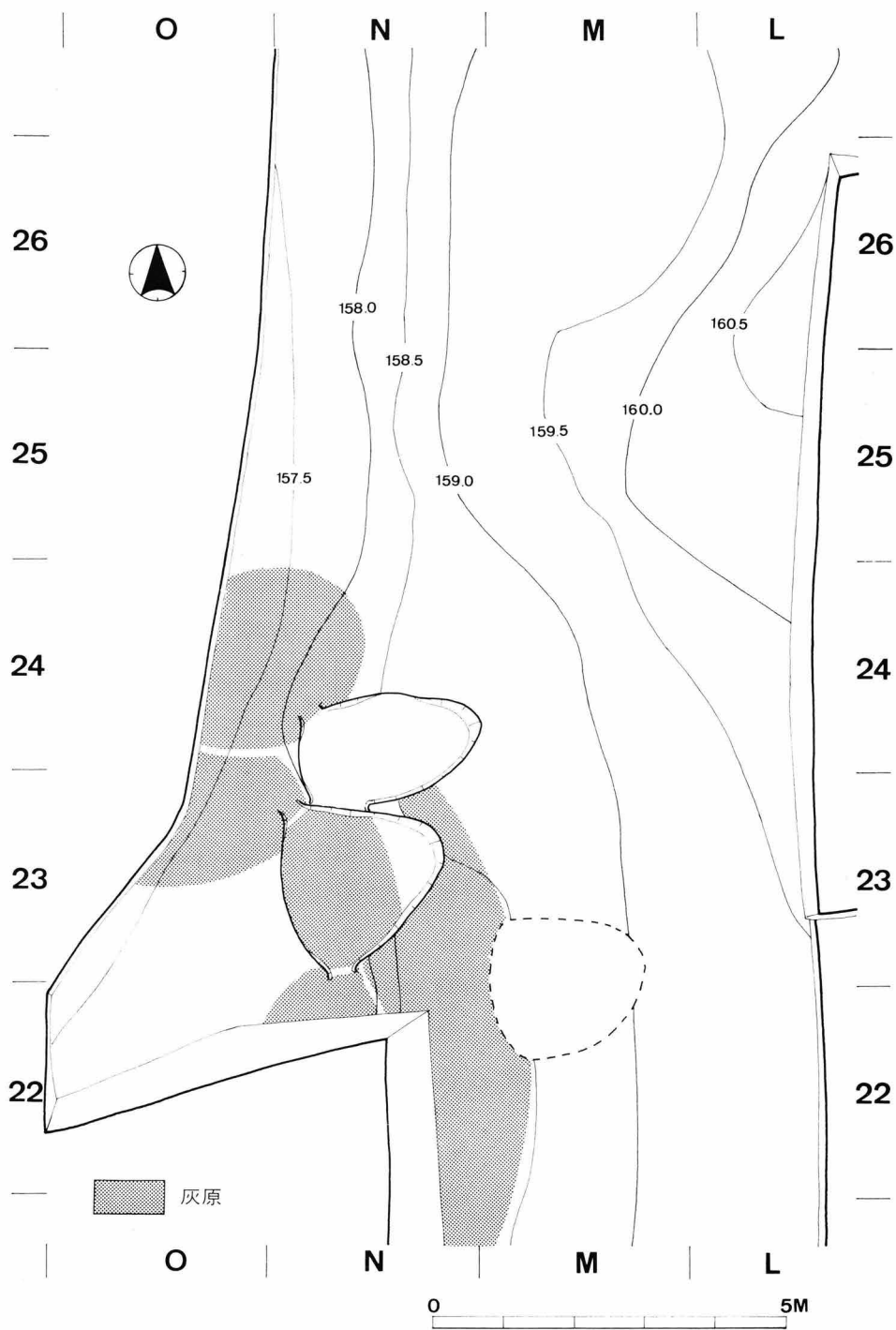
燃焼部は長さ約45cmを測り、中央部に底壁に平行して30cmの間隔をおいて直径約13cm・高さ約25cmの円柱が立てられており、分焰柱の役割をすると同時に火格子の支柱になると考えられる。また、一部燃焼部にまで入り込んでいる第2次床面は燃焼部の延長とも考えられる。

燃焼部床面には、薄く灰層が堆積し、焼成部にはおよんでいない。床面は凸レンズ状に中央部から両側壁に向かって低く傾斜している。焼成部の第1次床面にもこの傾向が見られるが、焼成部の床面ほど著しくない。

焚口部は南北の2か所にあり、北焚口部幅約40cm・南焚口部幅約54cmを測る。両焚口部とも若干、天井部のアーチの一部がそのまま崩落した状態で検出された。また、両焚口部は、中軸に対して対称の位置にはなく、南焚口部が煙道部側に少し片寄り、さらに北焚口部より南焚口部が9cm高くなっている。南焚口部床面では、床面の下層に薄い灰層と床面が検出され、少なくとも2回以上の補修作業が考えられる。なお、5号窯は6号窯とともに、窯体を現状保存するということから、側壁および床面の断ち割り観察は実施できなかった。

焼 成 部

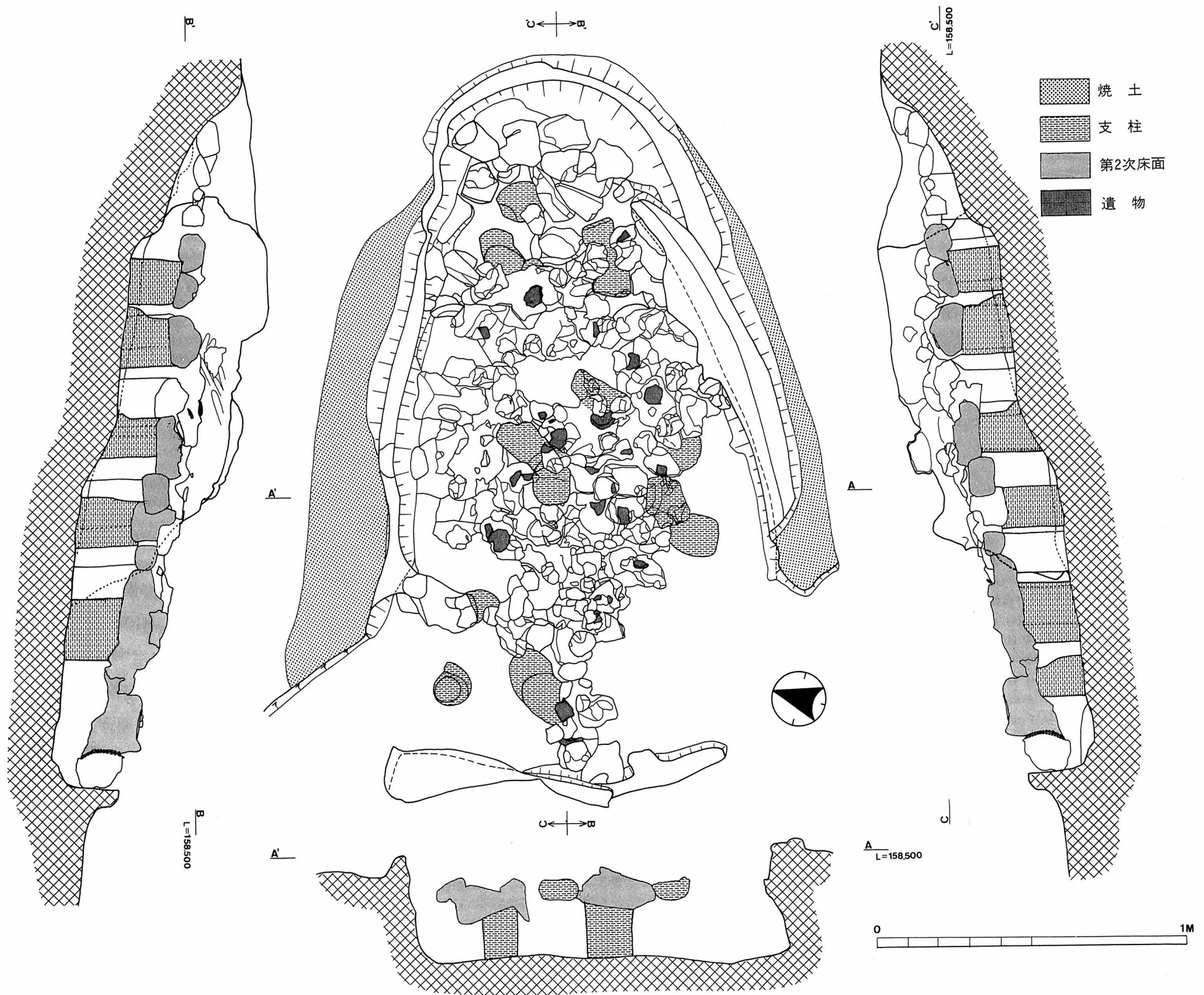
焼成部は、長さ約1.53m・最大幅約1.35mを測り、燃焼部および煙道部床面とは約10cmの段差をもつ。また、燃焼部との境を中心として埋土内には、拳大の粘土塊が多量に含まれ、煙道部との境にも円柱が数点崩落した状態で検出された。このことは、第2次床面の煙道部と焼成部、燃焼部と焼成部の各境には、側壁を内側にしぼりこむだけでなく、円柱、粘土塊で壁を構築しているものと考えられる。



第13図 西長尾5・6号窯遺構図



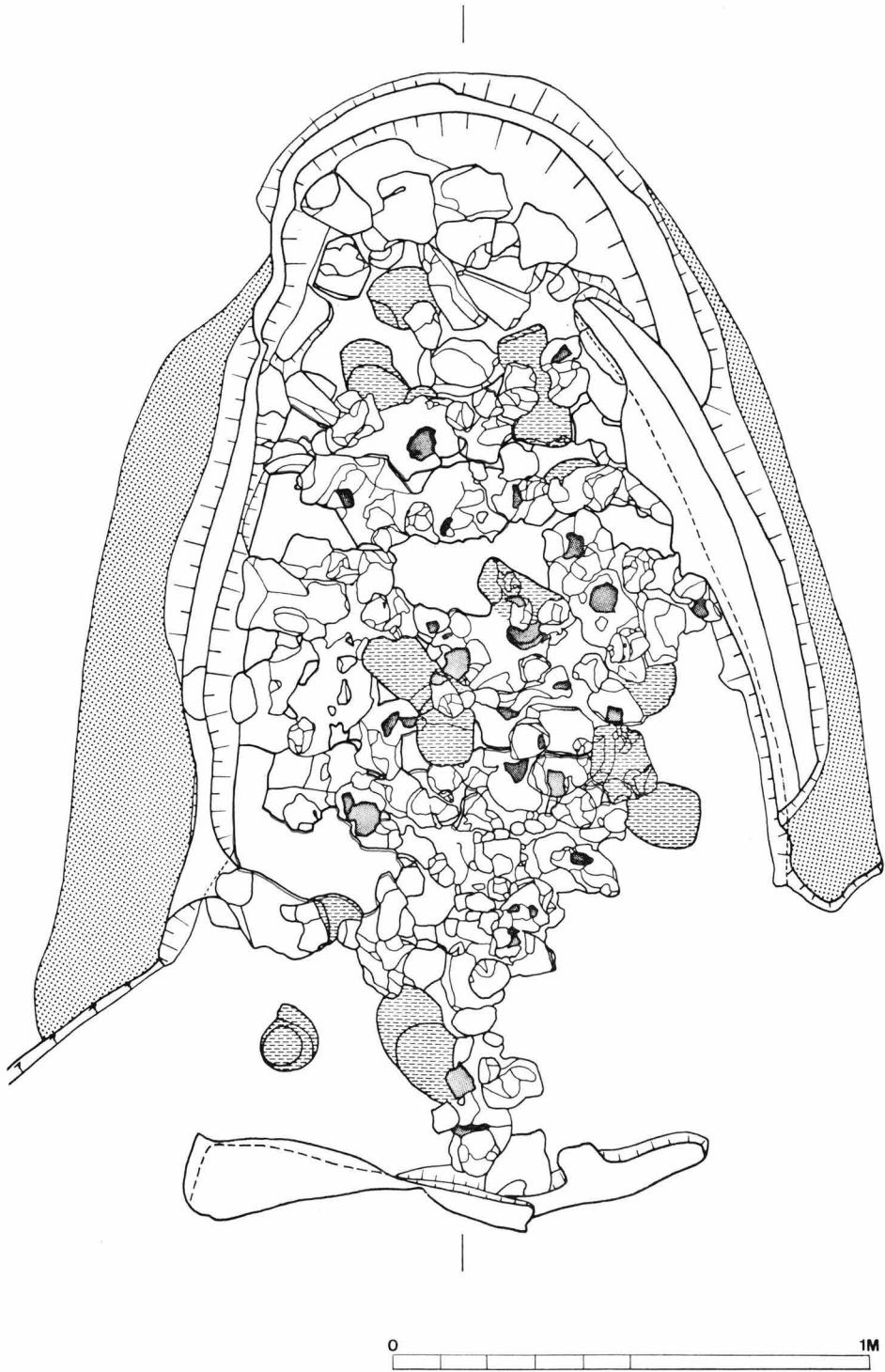
第14图 西长尾5·6号窑窑体图



第15图 西長尾5号窯窯体图(1)



第 16 图 西長尾 5 号窯窯体图(2)支柱配置状态



第17図 西長尾5号窯窯体図(3)狭穴状態

焼成部は第1次床面より、直径約10~15cmの円柱を焚口部側より縦4列にそれぞれ放物線状に16本立てたもので、円柱を立てるのに際し、一部確認したところでは、第1次床面を若干掘り込み、固定している。円柱の配列は、燃焼部近くでは円柱中心より30cmの間隔をおいて立て、煙道部に向かうにしたがって円柱間は15cmと狭くなる。円柱の高さも第1次床面と第2次床面の傾斜の違いにより、焚口部では25cm、煙道部側では16cmとしだいに低くなっている。なお、最も煙道部側の列の南の円柱については、円柱を第2次床面に使用しているため約4cmの石を円柱の代用としている。

第2次床面は円柱上面に拳大の粘土塊を不規則に敷き、床面を構成したもので、粘土塊は、側壁にまで及んでいる。粘土塊の間にはわずかに隙間(ホール)をあけている。なお、粘土塊だけでなく5本の円柱を支柱間に架け、第2次床面を補強している。個々のホールの大きさは、焚口部から煙道部に向かって若干大きくなるが、中央部の3か所の大ホールについては、西半部の支柱が傾むいたずれによるものと考えられる。図には示されていないが、径約1cm以下のホールが床面上に多数認められ、火は粘土塊の間を走り上昇あるいは下降する。ホールは第2次床面の上面と下面では、下面の方が径が大きくなり、断面では台形状を呈する。

第2次床面の直上には土器底部片等が多数密着し、さらにその土器直上に、一部粘土塊が据えられていることにより、第2次床面については2回以上の補修作業がなされたものと考えられる。

煙道部

煙道部は長さ約42cmを測る。煙道部床面には径約14cm・高さ約14cmの円柱1本を立て、さらに、径約15cm大の角礫が表面を焼かれた状態で4点出土した。これは火を焼成部にとどめるための火だての役割をしていたものと考えられる。奥壁については、床面との傾斜角は焼成部境から約33cmに傾斜変換点があり、25°から42°30'に傾斜角が変化している。

側壁

窯体両側壁は還元炎焼成により堅く焼かれ、北側では、床面から高さ約42cm、南側では高さ約44cmが遺存している。壁面にはスサ入り粘土を貼りつけた際の「手の指跡」が認められ、南側壁には性格は不明であるが約8cm四方の範囲に布目の痕跡が認められる。また、南側壁には焼成部中央から焚口部にかけて壁面に5cm大の礫を使用し、粘土で修復されていたが、北側壁には壁の乱れはなく、焚口部まで指跡が認められる。このことから、南側壁の乱れは、窯出しの際に主に南側焚口部を壊して取り出したためと考えられる。

灰原

灰原は、5号窯の西約1.5mから削平され全容を知ることはできなかったが、南北両焚口

部よりそれぞれ広がっている。北焚口部側の灰原は焚口から扇形に広がり、前庭部では土壇状に約50cmの厚さを測るが、全体に約15~20cmの厚さをもつ。北焚口部からかき出された灰原からは、多量の土器が出土し、椀類の破片のほか、完形のものが3~5段重ねで出土したものもあった。また、緑釉陶器皿が椀と重なった状態で、1点はほぼ完形で出土している。南焚口部側の灰原は、隣接した6号窯窯体内全体に堆積していたが、やはり扇形に広がっている。このことから、6号窯を排棄した時点で窯体を埋め戻さずに5号窯を構築し、6号窯に灰を捨てたものと考えられる。出土遺物は椀類の破片のみで、完形品は出土しなかった。

6. 西長尾6号窯（第13・14・18図）

6号窯は、5号窯の南側に隣接して構築された半地下式平窯で、焚口部の標高は約157.5mを測り、5号窯に比べて約50cm低くなる。5・6号窯は層位的には6号窯窯体内に5号窯の灰が堆積していることから、6号窯が排棄され、連続して5号窯が構築されたと考えられる。

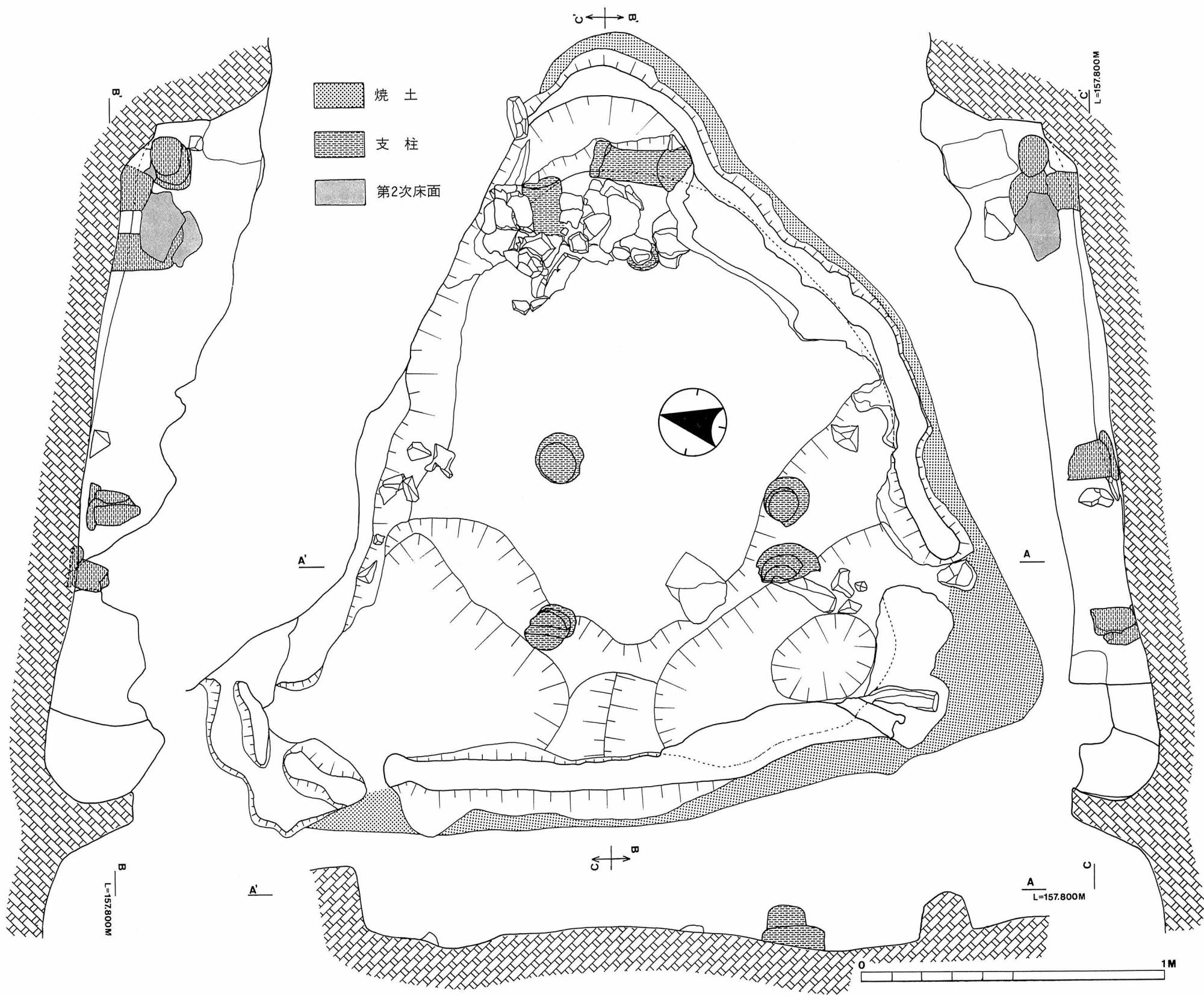
窯体は平面三角形を呈し、煙道部頂点より焚口部を二等分する点を主軸とすれば主軸長約2.4m・一辺長約2.3m、主軸方位N77°Eを測る。焼成部は5号窯と同様に二重構造を呈し、ロストル(火格子)型式による特異な窯体構造をなす。底部床面を第1次床面、支柱上面に敷かれた床面を第2次床面と称する。窯体の遺存状態は、天井部および側壁の大半は5号窯構築に際し削平されているため残存せず、また、第2次床面も、わずかに煙道部側に残存するのみである。窯壁については良好な遺存状態である。床面の傾斜角は第1次床面では8°を測るが、第2次床面については、煙道部側が若干遺存するのみで、傾斜角は測定できなかった。

燃 焼 部

燃焼部は焼成部との境が明確でなく、両焚口部より半径約40cmの円弧を描いて床面に薄い灰層と焼土が堆積する凹みを検出したことにより、この範囲を燃焼部と考える。燃焼部から焼成部へかけて約4~8cm大の角礫が認められる。これらは表面が焼かれ、さらに、床面に粘土で塗りつけられている。また、燃焼部の第1次床面は、中央部が凸レンズ状に高くなり、焚口部に向かって傾斜しているが、焼成部の第1次床面では、逆に中央部より側壁に向かって高くなる凹レンズ状を呈している。

焚 口 部

焚口部は南北の2か所にあり、北焚口部の幅約36cm・南焚口部の幅約48cmを測り、両焚口部とも天井部のアーチがそのまま崩落した状態で検出された。また、両焚口部は中軸に対して対称の位置にはなく、南焚口部が煙道部側に片寄り、さらに、南焚口部は北焚口部に比べて8cm高くなっている。



第18图 西长尾6号窑窑体图

焼成部

焼成部は、長さ約1.64m・最大幅約1.12mを測り、焼成部と煙道部床面との境は、約9cmの段差をもつ。支柱については、第2次床面が6号窯の操業停止時に崩落あるいは取り壊されているために、遺存状態は悪く、焚口部側に4本、煙道部との境に4本の計8本の円柱が遺存するのみであり、その配列については規則的に立てられたかどうか確認はできなかった。これらの支柱は、径約10~12cm・高さ約10~18cmを測る。なお、焼成部には支柱の立っていた痕跡が認められなかった。ただ、焚口部側の4本の支柱については、前述の5号窯と同様に、床面を掘り込み支柱を立てるのではなく、径約14~16cmの粘土塊を敷き、その上に円柱を立てている。

第2次床面は、前述したように長さ約26cmを残すのみで傾斜角の測定すら不可能であった。床面は支柱上面に拳大の粘土塊を敷き、粘土塊を不規則に並べてわずかに隙間(ホール)を開け、床面を構成したと思われるもので、5号窯と同様、粘土塊は側壁にまで及んでいる。また、第2次床面には粘土塊だけでなく円柱を支柱に架け、床面を補強している。ホールの大きさは5cm大から1cm以下のものまで認められ、第2次床面の上面と下面では、下面の方の径が大きくなり、断面で台形状を呈する。以上のように第2次床面の諸特徴は、5号窯と似か寄っているが、5号窯との相違点は、第2次床面が煙道部の奥壁近くまで達し、焼成部と煙道部を分ける側壁の内側へのしぼりこみが認められないということである。

煙道部

煙道部は長さ約26cmを測り、南側壁から径約10cm・長さ約30cmの円柱が架けられており、火を焼成部にとどめるための火だての役割をしたと考えられ、ほかに火だてとなる円柱、角礫は認められなかった。奥壁については、幅4cmのフラットな床面からはほぼ垂直に約18cm立ちあがり、ここから61°に傾斜角が変化している。

側壁

窯体両側壁は還元炎焼成により堅く焼かれ、北側では高さ約42cm、南側では高さ約44cmが遺存している。両側壁面は、凹凸が著しく、一部には5cm大の角礫が塗り込められている。なお、スサ入り粘土を塗りつける際の「指跡」は認められなかった。

灰原

灰原は南北両焚口部より、それぞれ外方へ広がっている。北焚口部の灰原は、焚口部より扇形に広がり、約20cmの厚さを測るが、6号窯の西約1.3mからは後世に削平されているため、全容を知ることが出来なかった。また、南焚口部の灰原も扇形に広がっているが、5号窯の南約0.6mでトレンチの肩になるため全容を知ることができなかった。なお、灰原は厚さ約30cmを測る。

(波多野 徹)

第5節 出土遺物

西長尾窯跡の出土遺物はコンテナ・バットで170箱以上をかぞえ、遺構別の内訳は1・4号窯は70箱以上、3号窯は60箱以上、5号窯は35箱以上であり、推定2号窯、6号窯は各2箱ずつである。各窯関係の出土遺物は灰原内から検出したものが大部分であり、窯体内床面からは極少である。

1・4号窯は遺構のところで記述したように、灰原の堆積状況から、1号窯が4号窯に先行するが、1・4号窯の出土遺物を検討するとほぼ同時期と考えられるので、良好な一括資料である1号窯出土遺物を優先的に図化し、資料として提示することとした。また、1号窯の北に位置するSX04・SX05・SK06の直上に堆積した灰原内出土遺物は、1号窯に帰属するものと考え、1号窯の補填資料とした。

推定2号窯および6号窯出土遺物は極少であり、全体の土器様相を明らかにしうる資料に乏しい。5号窯は6号窯を削平して構築された窯であり、灰原内より多量の土器が出土した。これらの土器は2・6号窯出土のものと同形態と考え、5号窯窯体内および灰原内出土遺物の資料を提示した。

出土遺物の整理作業では、灰原内出土遺物の多くが変形しているため、変形が少なく全体の様相が明らかな土器を優先的に図化し、また、特徴的な土器については細片の資料も図化した。同形態の資料については個数を数え、土器組成表を作成した。

1. 西長尾1号窯出土遺物

西長尾1号窯出土遺物は燃焼部床面に杯A・B、蓋A・B、皿が28個体遺存するほかは、いずれも灰原内より出土した。灰原内出土遺物には、杯A・B、皿A・B、蓋A・E・D、壺A・B・C・D、盤、鉢A・B・C、平瓶、円面硯、二面硯がある。

窯体内出土遺物（第19図）

窯体内出土遺物には、燃焼部床面より杯A・B、蓋A・Bなど完形品を含め28個体が出土した。

杯A（19～23）は、底部より斜め上方に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみにおわる。口縁部内・外面および内底面はロクロナデ調整を行い、底部外面にはヘラ切り痕をとどめる。口径12.2～15.5cm・器高2.4～4.4cmを測る。

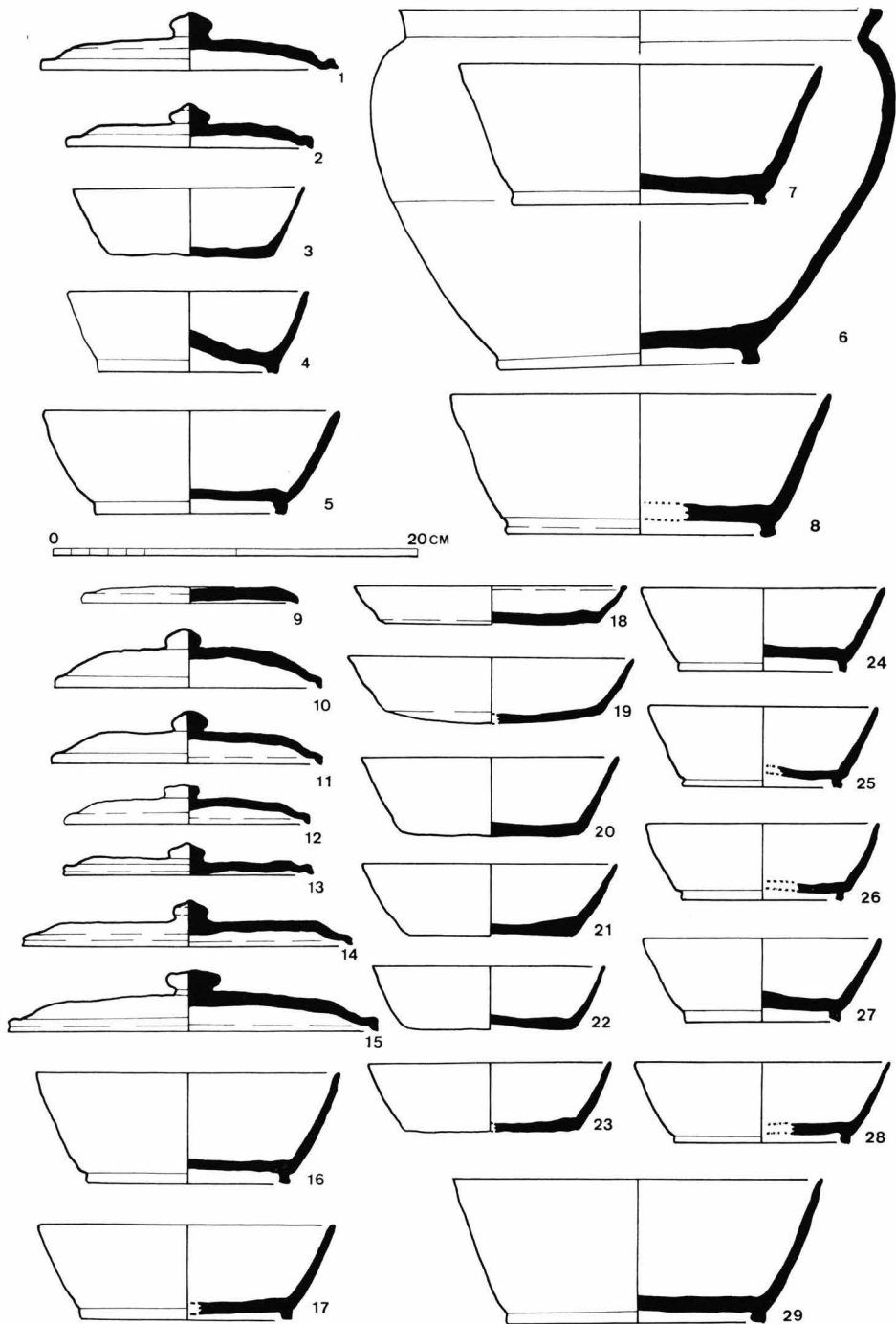
杯B（16・17・24～29）は、杯Aに高台を貼りつけたもので、高台はわずかに外方に踏んばった形を呈し、底部と口縁部の屈曲部に貼りつけるもの（17・24・27～29）とやや内側に貼りつけるもの（16・25・26）がある。口縁部内・外面および内底面はロクロナデ調整を行う。杯Bは口径12.0～16.8cmと器高4.6～7.0cmと大小の差異がある。

蓋A（10～15）は、平坦な頂部より屈曲する口縁部へ続くもので、頂部中央には扁平な

		個体数	総個体における比率 (%)	法量計測可能な個体数	法量計測可能な個体数における比率	備考
杯	A	759	13.7%	70 (100%)	I 6 (8.6%) II 35 (50.0%) III 29 (41.4%)	口径11cm未満 口径11~14cm 口径14.5cm以上
	B	1,971	35.5%	187 (100%)	I 5 (2.7%) II 76 (40.6%) III 70 (37.4%) IV 36 (19.3%)	口径7~10cm, 器高3cm前後 口径11~13.5cm, 器高2~4cm 口径14.0~16.5cm, 器高3~3.5cm 口径17cm以上, 器高4cm以上
蓋	A	2,035	36.6%	1,303 (100%)	I 29 (2.2%) II 432 (33.2%) III 614 (47.1%) IV 228 (17.5%)	口径10~12cm 口径12.5~15cm 口径15.5~18.5cm 口径19cm以上
	D	8	0.14%			
	E	5	0.09%			
皿	A	404	7.3%	103 (100%)	I 6 (5.8%) II 52 (50.5%) III 45 (43.7%)	口径11~12.5cm, 器高15cm前後 口径13.0~17.0cm, 器高1~2cm 口径17.5cm以上, 器高1~2.5cm
	B	1	0.02%			
鉢	A	52	0.94%			
	B	2	0.04%			
	E	2	0.04%			
壺	A	137	2.5%			
	B	4	0.08%			
	C	1	0.02%			
	D	1	0.02%			
盤		133	2.4%			
平瓶		29	0.51%			
頸壺 短壺		1	0.02%			
硯		4	0.08%			
総数		5,549	100%	2,966		

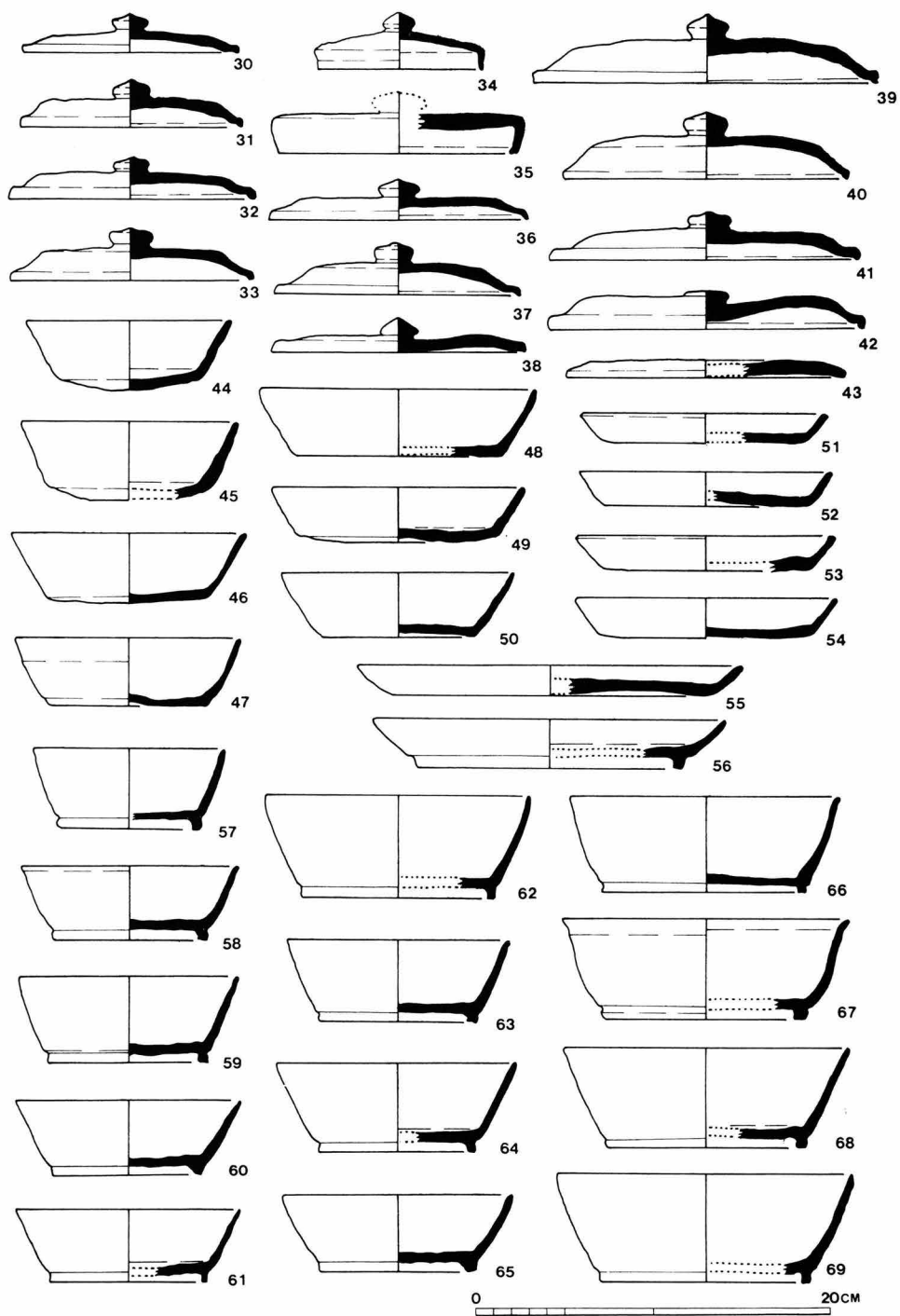
付表 2 西長尾 1 号窯土器集計表

宝珠形つまみを貼りつける。口縁部内・外面および頂部内面はロクロナデ調整，頂部外面はヘラ削りののち，一部ナデ調整を加える。蓋Aは，頂部が平坦なAa(11~15)と頂部から縁部にかけて断面笠形を呈するAb(10)がある。口径13.8~20.4cm・器高1.8~3.3cmと大小の差異がある。



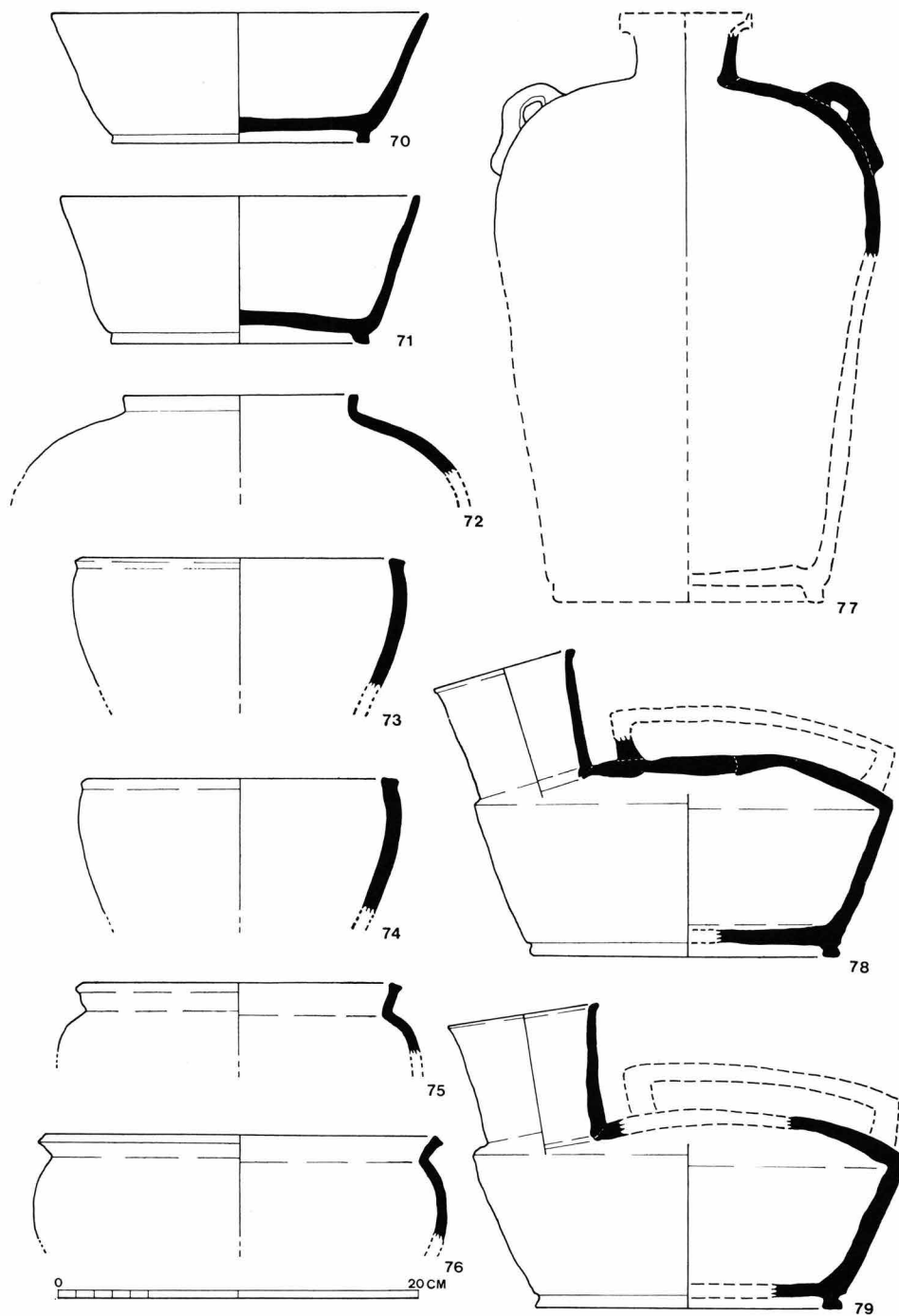
第19図 西長尾 SK 06・1号窯焚口部出土遺物

SK 06 ; 1~8, 蓋AⅡ ; 2, 蓋AⅢ ; 1, 杯AⅡ ; 3, 杯BⅡ ; 4, 杯BⅢ ; 5, 杯BⅣ ; 7・8,
鉢A ; 6
1号窯窯体内 ; 9~29, 蓋AⅡ ; 10~13, 蓋AⅢ ; 14, 蓋AⅣ ; 15, 蓋E ; 9, 杯AⅡ ; 22・23,
杯AⅢ ; 19~21, 杯BⅡ ; 24~27, 杯BⅢ ; 16・17・28, 杯BⅣ ; 29,
皿AⅡ ; 18

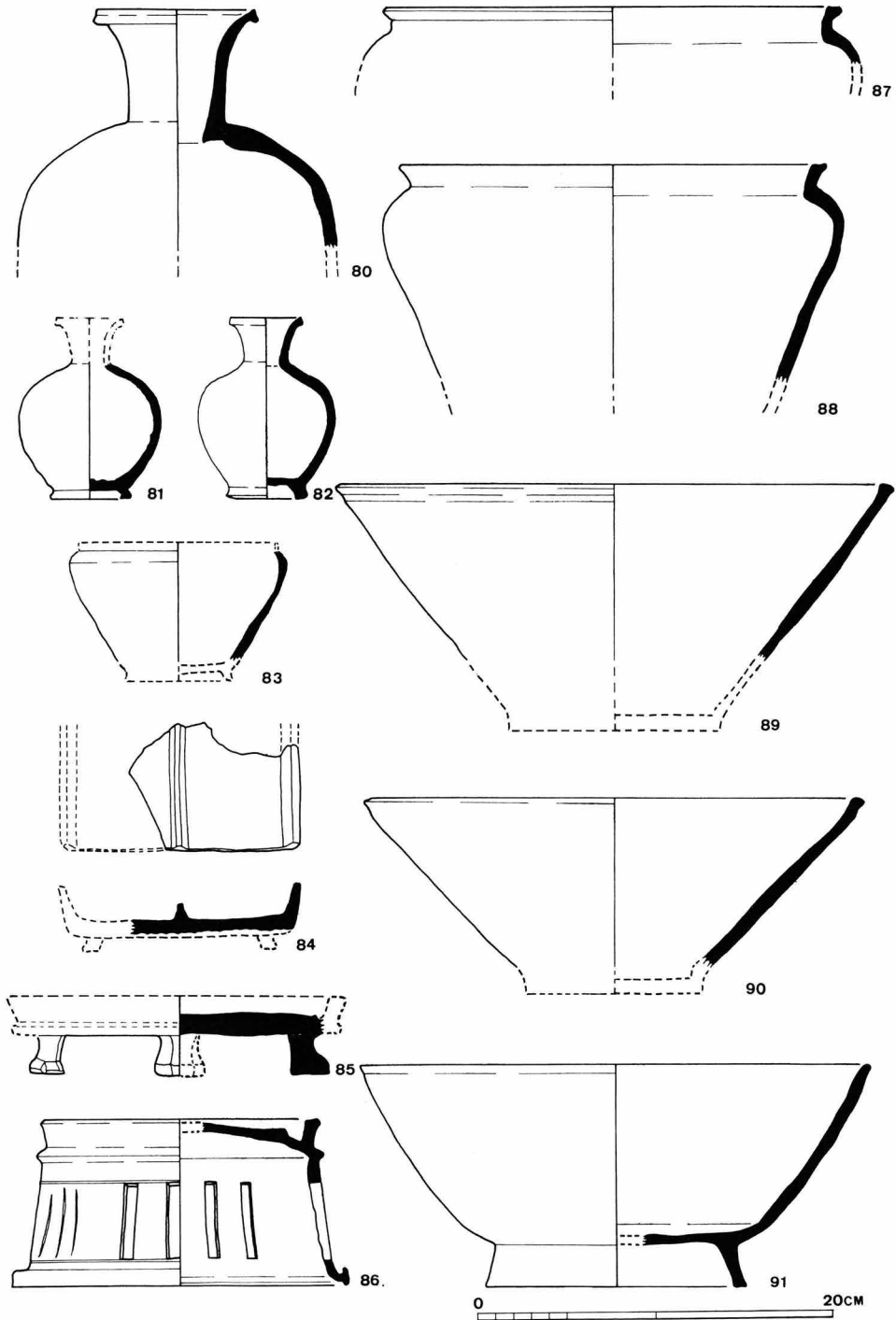


第 20 図 西長尾 1 号窯灰原内出土遺物 (1)

蓋 A II ; 30~33・36~38, 蓋 A III ; 40~42, 蓋 A IV ; 39, 蓋 E ; 43, 蓋 D ; 34・35,
 杯 A II ; 44~47・49・50, 杯 A III ; 48, 杯 B II ; 57~61・63~65, 杯 B III ; 62・66
 ~69, 皿 A II ; 51~54, 皿 A III ; 55, 皿 B ; 56

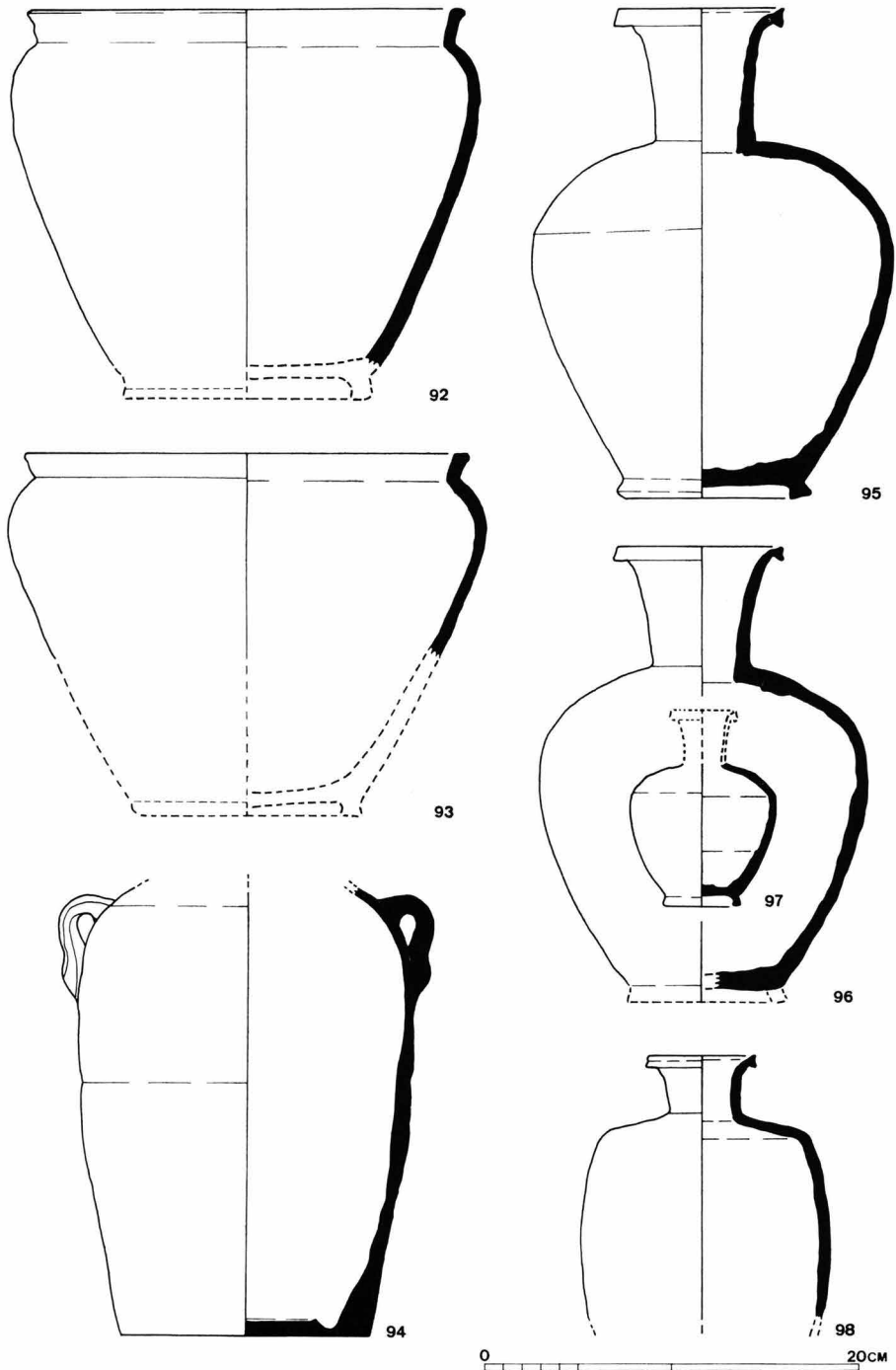


第21図 西長尾1号窯灰原内出土遺物(2)
 杯BⅣ；70・71，鉢A；75・76，鉢E；73・74，壺B；77，壺D；72，平瓶；78・79



第22図 西長尾1号窯灰原内出土遺物(3)

鉢A；87・88，鉢B；91，盤；89・90，壺AⅠa；81・82，壺AⅢ；80，壺D；83，二面硯；84，円面硯85・86



第23図 西長尾 SX 04・SX 05 直上灰原内出土遺物
鉢A ; 92・93, 壺AⅠa ; 97, 壺AⅢ a ; 95・96, 壺B ; 94, 壺E ; 98

蓋 E (9) 平坦な頂部よりわずかに屈曲する縁部へ続き、頂部には蓋 A と異なり宝珠形つまみをもたない。口径 12.0cm・器高 0.9cm を測る。

灰原内出土遺物 (第 20～22 図)

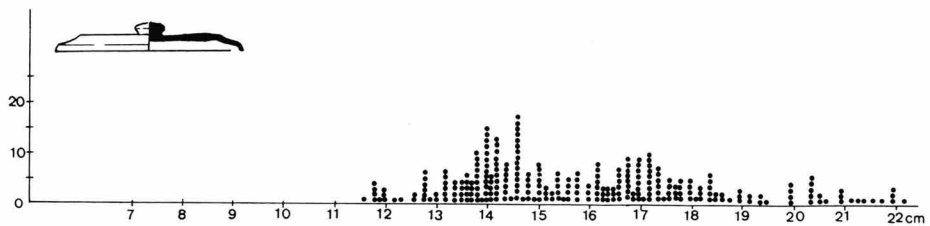
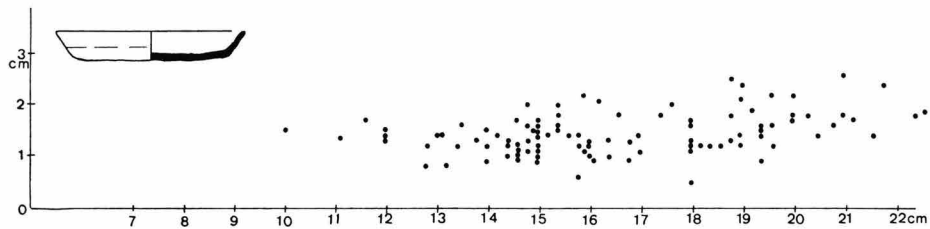
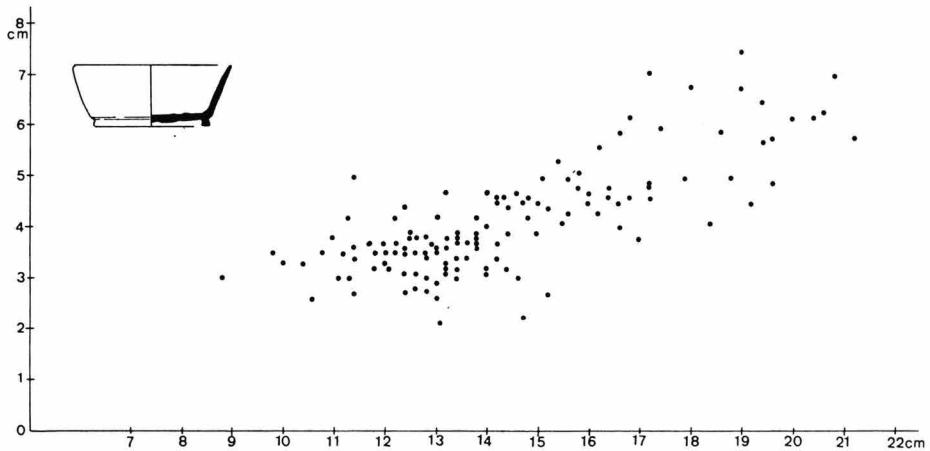
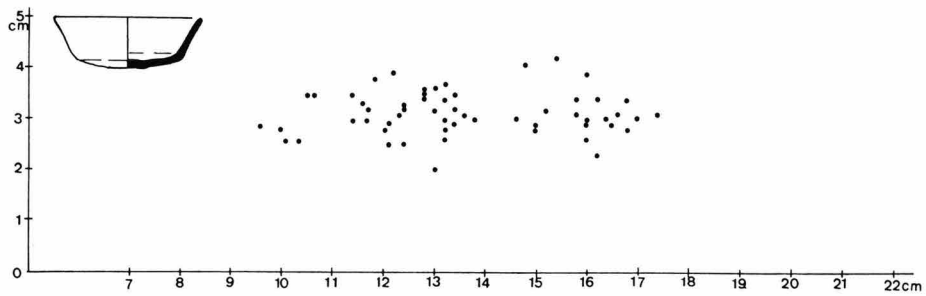
灰原内出土遺物は、コンテナ・バットで 60 箱以上出土し、器種を判別しえるものは 5,521 個である。器種は、杯 A・B, 皿 A・B, 蓋 Aa・Ab・E・D, 壺 Aa・Ab・B・C・D, 盤, 鉢 A・B・C, 甕, 平瓶, 円面硯, 二面硯があり、そのうち、杯が 49.2% と半数近くをしめる。

杯 A (44～50) は、扁平な底部より斜め上方に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部はいずれも丸みをもっておわる。口縁部内・外面および内底面はロクロナデ調整を行い、底部外面にはヘラ切り痕を明瞭にとどめる。杯 A は口径・器高の差異により口径 11cm 未満・器高 2.5～3.5cm を測る A I, 口径 11～14cm・器高 2～4cm を測る A II, 口径 14cm 以上・器高 2～4.5cm を測る A III に細分できる。杯 A は 759 個 (13.7%) を測り、法量の計測可能な 70 個の内訳は杯 A I 6 個 (8.6%), 杯 A II は 35 個 (50.0%), 杯 A III は 29 個 (41.4%) である。

杯 B (59～71) は、杯 A に高台を付したもので、高台は、底部と口縁部の屈曲部近くに断面台形を呈する高台を貼りつける。口縁部は直線的に斜め上方に立ちあがるもの (57・59～61・63・64・68～71) と内彎ぎみに立ちあがるもの (62・65) がある。口縁部内・外面および内底面はロクロナデ調整、底部外面はヘラ切り痕を明瞭にとどめる。杯 B は口径・器高の差異により、口径 7～10.5cm・器高 3cm 前後を測る杯 B I, 口径 11～13.5cm・器高 2～4cm を測る杯 B II, 口径 14.0～16.5cm・器高 3～3.5cm を測る杯 B III, 口径 17.0cm 以上・器高 4cm 以上を測る杯 B IV に細分できる。杯 B は、1,971 個 (35.5%) あり、法量の計測可能な 187 個の内訳は杯 B I は 5 個 (2.7%), 杯 B II は 76 個 (40.6%), 杯 B III は 70 個 (37.4%), 杯 B IV は 36 個 (19.3%) であり、杯 B II・B III が大半をしめる。

皿 A (51～55) は、扁平な底部より斜め上方に短く立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は平坦な面をもつもの (51・54・55) と内側にわずかに肥厚するもの (52・53) がある。口縁部内・外面および内底面はロクロナデ調整を行い、底部外面にはヘラ切り痕を明瞭にとどめる。皿 A は口径 11.0～12.5cm・器高 15cm 前後を測る皿 A I, 口径 13.0～17.0cm・器高 1～2cm を測る皿 A II, 口径 17.5cm 以上・器高 1.0～2.5cm を測る皿 A III に細分できる。皿 A は 404 個 (7.3%) を数え、法量の計測可能な 103 個の内訳は皿 A I 6 個 (5.8%), 皿 A II 52 個 (50.5%), 皿 A III 45 個 (43.7%) である。

皿 B (56) は、皿 A に高台を付したもので、底部より内彎ぎみに立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみにおわる。高台は底部と口縁部の屈曲部近くに、断面長方形でやや外側に踏んばった形の高台を貼りつける。口縁部内・外面はロクロナデ調整を行う。



付表 3 西長尾1・4号窯出土須恵器法量比較表

蓋 A (30~32・36~42)は、頂部が平坦な Aa (30~32・36~39・41・42) と頂部より縁部にかけて断面笠形を呈する Ab(40) がある。Aa・Abとも頂部中央に扁平な宝珠形つまみを貼りつける。縁部内・外面および頂部内面はロクロナデ調整、頂部外面はヘラ削りののち、

一部ナデ調整を加える。蓋Aは口径10～12 cmを測る蓋A I, 口径12.5～15.0 cmを測る蓋A II, 口径15.5～18.5 cmを測る蓋A III, 口径19 cmを測る蓋A IVに細分できる。蓋Aは2,035個(36.6%)をかぞえ、法量の計測可能な1,303個の内訳は、蓋A I 29個(2.2%), 蓋A II 432個(32.2%), 蓋A III 614個(47.1%), 蓋A IV 228個(17.5%)を測り、口径および個数の比率より杯Bに符合する。

蓋E(43)は、平坦な頂部よりわずかに屈曲する縁部に続き、頂部中央には宝珠形つまみを付さないものである。縁部内・外面および頂部内面はロクロナデ、頂部外面はナデ調整を行う。蓋Eは灰原内より2個と極少である。

蓋D(34・35)は、平坦な頂部より直行する縁部に移行するもので、頂部中央に扁平な宝珠形つまみを貼りつける。縁部内・外面および頂部内面はロクロナデ、頂部外面はナデ調整を行う。蓋Dは壺Cとセットをなす。

壺A(80～82)は、倒卵形の体部より口縁部がゆるく外反する。口縁部は欠損し、体部最大径は肩部にある。底部は回転糸切りののち、内側にやや踏んばった形の高い高台を貼りつける。体部外面はロクロナデ調整を行う。壺Aは大小の差異があり、口径6～8 cm・器高10 cm前後を測るA Iと口径9 cm前後・器高25 cm前後を測るA IIに細分できる。壺Aは137個(2.5%)を測る。

壺B(77)は、体部下半を欠損し、肩の張った体部より口縁部は短くわずかに外反する。肩部に断面円形の耳を左右対称に貼りつける。口縁部内・外面および体部外面はロクロナデ調整。

壺C(72)は、体部下半を欠損し、肩の張った体部より口縁部が短く直立する短頸壺である。口縁部内・外面および体部外面はロクロナデ調整を行う。

壺D(83)は、斜め上方に立ちあがる体部で、肩部近くで内側に鋭く屈曲し、明瞭な稜線をなす。口縁部は欠損するが、わずかに外反する短い口縁を付す。体部下半は欠損するが、高台を付したものであると思われる。体部最大径12.4 cmを測る小型品である。

平瓶(78・79)は、肩部の張った扁平な体部に注口と把手を付したものである。体部はロクロ成形により仕上げ、上面中央の円孔を粘土でふさぐ。肩寄りには直径約6 cmの円孔を穿ち、直立する注口をつける。注口の後方に断面長方形の把手を付したものである。体部外面上半および注口部内・外面はロクロナデ調整、体部外面下半はヘラ削りによる面取りを行う。高台は断面台形を呈する低い高台を貼りつける。平瓶は29個体(0.51%)をかぞえるが、全体を図化しえるのは2個体分である。

鉢C(73・74)は、体部下半を欠損する。内彎ぎみに立ちあがる口縁部で、口縁端部はわずかに外方に肥厚させる。口縁部内・外面はロクロナデ調整を施す。

鉢B(75・76・87・88)は、やや肩の張った体部より口縁部が短く外反する広口短頸の土器である。体部下半は欠損する。体部および口縁部内・外面はロクロナデ調整を施す。

鉢C(91)は、底部より丸みをもって口縁部へ続き、深い椀状を呈する。高台は高く外方に広がる。器壁表面の遺存状態が悪く、調整不明。

盤(89・90)は、底部下半を欠損する。外方に広がる体部より口縁部はわずかに内側に屈曲する。口縁端部は内・外方にわずかに肥厚し丸みをもつ。体部および口縁部内・外面はロクロナデ調整を施す。

円面硯(85・86)は、円形の陸部と、それをとり囲む外堤により海部を画し、獣脚を貼りつけたもの(85)と圈台を付したのものがある。圈台部には長方形の透し孔がある。

二面硯(84)は、平坦な陸部の中央に断面台形の堤を貼りつけ、二分するものである。

SX 04・SX 05 灰原内出土遺物(第23図)

SX 04・SX 05 は1号窯の北5.0mにあたり、1号窯の煙道部近くより、SX 04・SX 05の上層にかけて灰原が堆積していた。同灰原内より杯A・B、皿A、蓋A、壺A・B・E、甕が出土した。杯A・B、皿A、蓋Aは1号窯灰原内出土遺物と同形態を示すため図化せず、1号窯灰原と異なった器種を補填資料とした。

壺A(95~97)は、倒卵形の体部より口縁部が直立ぎみに立ちあがり、端部近くで強く外反する。口縁端部は上下わずかに肥厚し面をなす。底部と体部の屈曲部に外側にふんばった断面台形の高台を貼りつける。体部外面および口縁部外面はロクロナデ調整を行い、体部下半に一部ヘラ削り痕をとどめる。底部外面に回転糸切り痕をとどめる。

壺B(94)は、口縁部を欠損する。器高35cmに対し、体部最大径が17.5cmを測る長胴形の体部を呈する。体部はナデ肩を呈し、肩部に断面円形を呈する耳を左右対称に貼りつける。体部外面はロクロナデ調整を行う。

壺E(98)は、下半を欠損する。体部最大径が腹部にあり、肩の張りが強い。口縁部は直立ぎみに立ちあがり、端部近くで強く外反する。口縁端部は上下に肥厚する。口縁部内・外面および体部外面はロクロナデ調整を行う。

鉢A(92・93)は、体部最大径が器高を凌駕し、肩部の張りが強い。口縁部は短く外反し、外方にわずかに肥厚させる。口縁部内・外面および体部外面上半はロクロナデ調整を行い、体部外面下半はヘラ削りをとどめる。

SX 06 出土遺物(第19図)

SX 06 は1号窯の北1.5mに位置し、1号窯焼土層の下より検出され、炭層を埋土とする小土塚である。

出土遺物としては杯A・B、蓋A、鉢Bがある。

杯A(1)は、底部より斜め上方に直線的に立ちあがる口縁部を付す。口縁部内・外面および内底面はロクロナデ調整を行い、底部外面にはヘラ切り痕を明瞭にとどめる。

杯B(4・5・7・8)は、杯Aに高台を付したもので、底部と口縁部の屈曲部に内・外方にややふんばった形の高台を貼りつける。口縁部はいずれも尖りぎみにおわる。杯Bは口径13.5cm・器高4.5cmを測るものから口径21.0cm・器高7.8cmを測るものまでである。

鉢B(6)は、体部最大径が29cmに対し器高が19.5cmと体部最大径が器高を凌駕し、扁平な感を与える。肩部の張りが強く、口縁部は短く外反する広口短頸の土器である。底部と口縁部の屈曲部に、断面長方形を呈し、やや内側にふんばった形の高台を貼りつける。口縁部内・外面および体部内面はロクロナデ調整、体部外面上半はロクロナデ、下半はヘラ削りを明瞭にとどめる。

2. 西長尾3号窯出土遺物(第24・25図)

3号窯出土遺物は窯体および灰原内より出土した。灰原は前述のように3層に分かれ、中層には焼土・窯壁を多く含み、窯体の補修作業が考えられる。遺物は上・下層の灰原内より多量に出土し、上・下層の灰原により遺物を分け、図化および土器組成の差異を検討したが、明瞭な差異を確認できなかったので一括して土器の説明を行う。

3号窯出土遺物には、杯A・B、椀B、皿C、鉢C、壺Abなどがある。

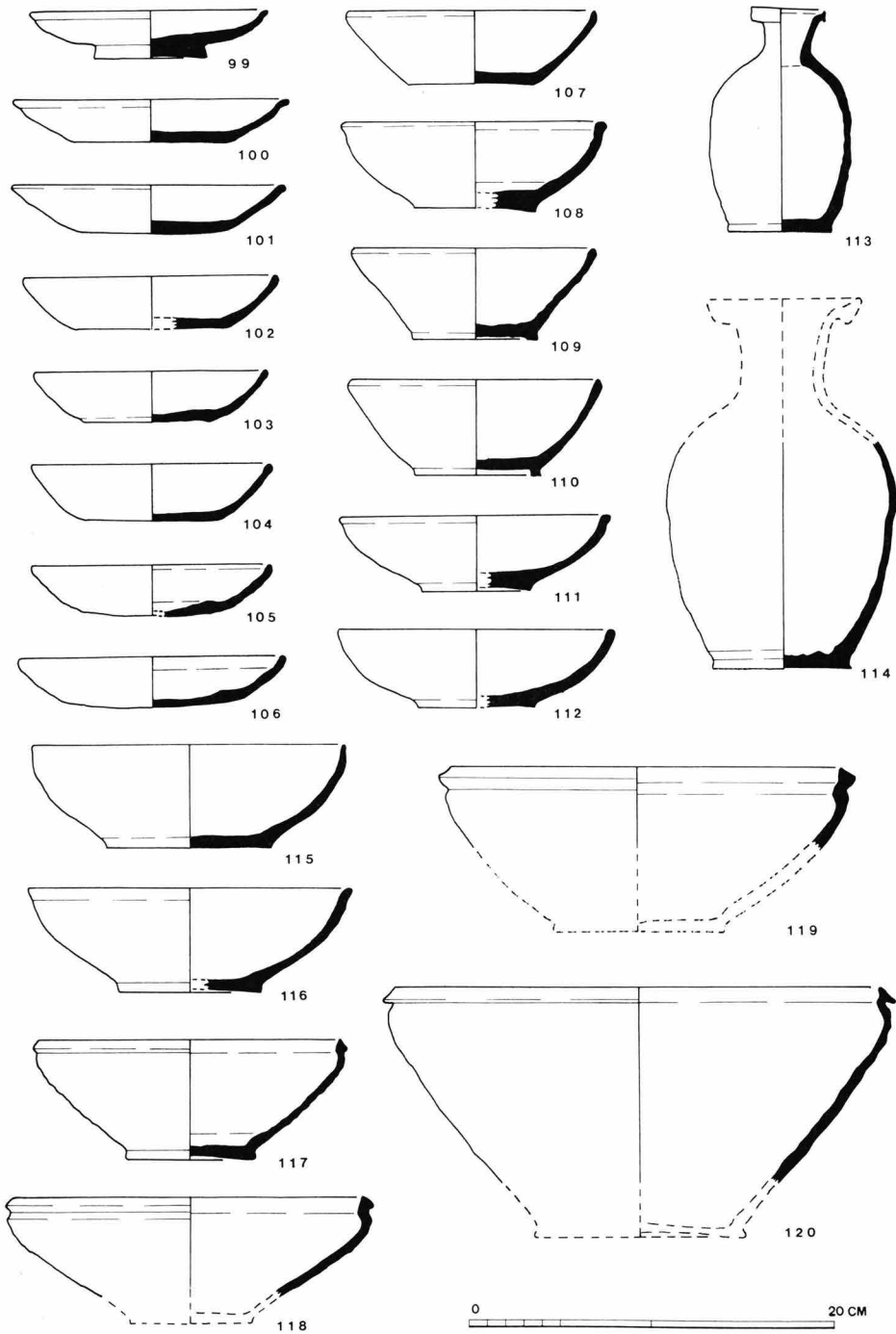
杯A(100~106・107・122~125)は、底部より外上方に広がる口縁部へ続くもので、口

縁端部がやや内彎ぎみのもの(102~106・123~125)と外反ぎみのもの(100・101・107・122)がある。口縁部内・外面はロクロナデ調整、内底面はナデ調整を行う。底部外面はヘラ切り痕を明瞭にとどめる。

杯B(109・110)は、平底の底部から内彎ぎみに立ちあがる深い口縁部に続く。口縁端部はやや内側に屈曲し、とがりぎみにおわるも

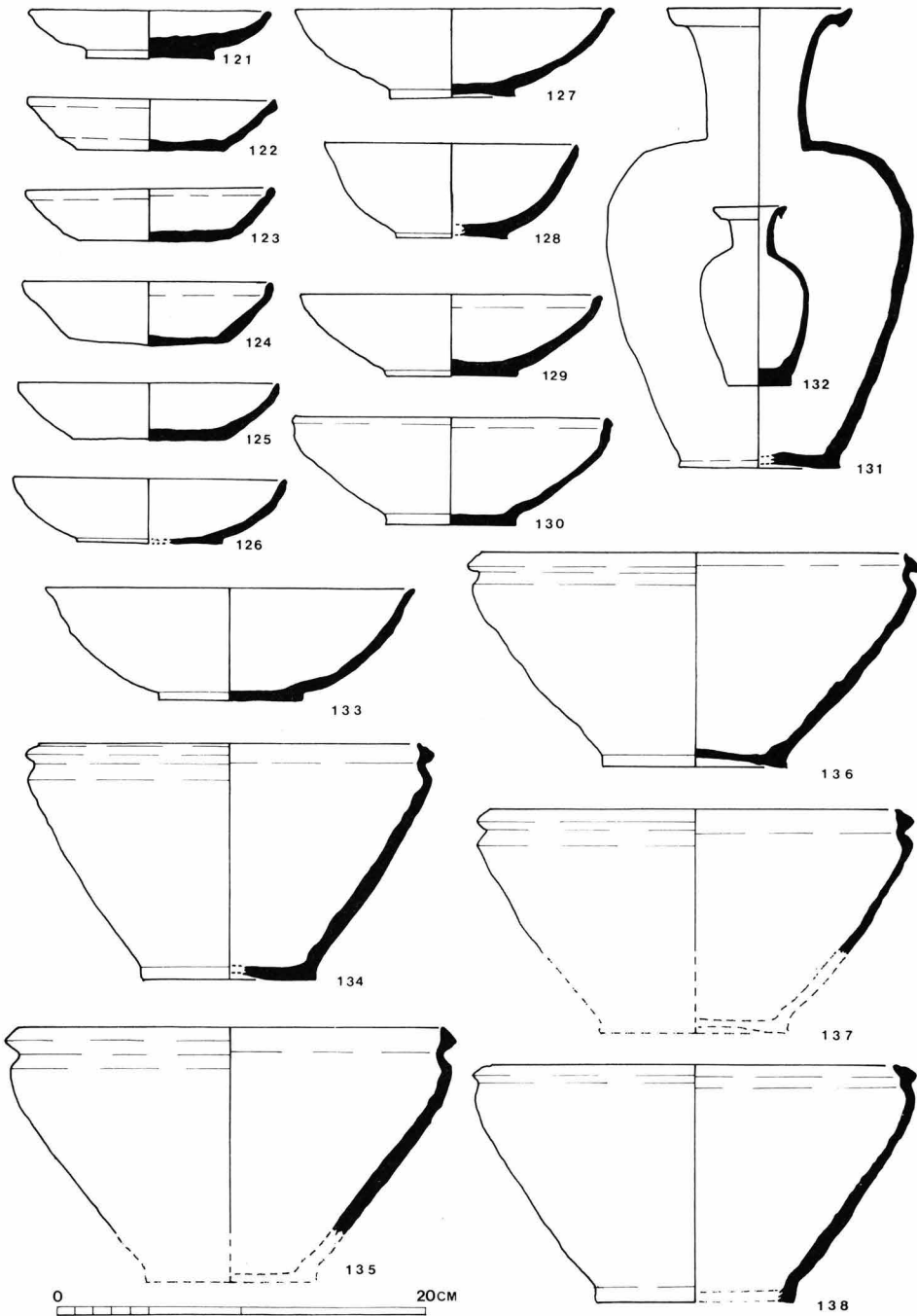
		3号窯灰原上層		3号窯灰原下層		総計	
		個体数	個体数における比率	個体数	個体数における比率	個体数	個体数における比率
杯	A	662	17.3%	569	15.2%	1,231	16.21%
	B	18	0.5%	2	0.05%	20	0.26%
椀	B	2,326	60.8%	2,396	63.8%	4,722	62.3%
皿	C	4	0.11%	5	0.13%	9	0.12%
鉢	C a	5	0.13%			5	0.07%
	C b	500	13.0%	521	13.89%	1,021	13.5%
蓋	C	3	0.08%	2	0.05%	5	0.07%
壺	A b	305	7.97%	256	6.82%	561	7.4%
耳杯		1	0.03%			1	0.01%
甕				1	0.03%	1	0.01%
硯		3	0.08%	1	0.03%	4	0.05%
		3,827	100%	3,753	100%	7,580	100%

付表4 西長尾3号窯灰原内土器集計表



第 24 図 西長尾 3 号窯窯体および灰原上層出土遺物

杯 A ; 100~106・107, 杯 B ; 109・110, 碗 B ; 108・111・112・115・116, 皿 D ; 99,
鉢 C a ; 117・119, 鉢 C b ; 120, 壺 A b ; 113・114



第 25 図 西長尾 3 号窯灰原下層出土遺物
 杯 A ; 122~125, 碗 B ; 126~129・133, 皿 D ; 121, 鉢 C a ; 130,
 鉢 C b ; 134~138, 壺 A b ; 131・132

の(107・110)と丸みをもつもの(109)がある。底部と口縁部の屈曲部に断面台形を呈する低い高台を削り出したもの(109・110)がある。

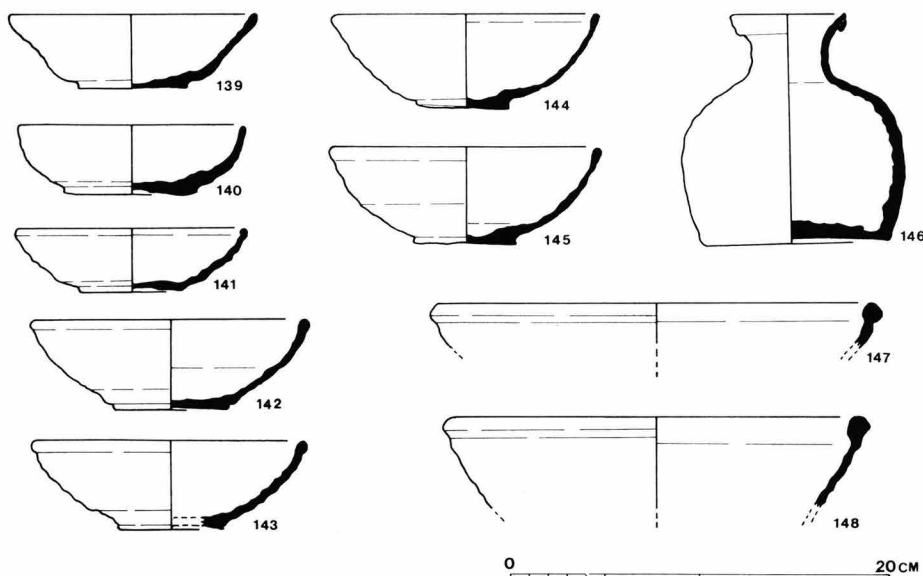
椀B(108・111・112・114～116・126～129・133)は、粘土塊よりロクロ成形により口縁部までいっきに引き上げたもので、口縁端部が尖りぎみにおわるもの(128・133)と内側に肥厚して丸みをもつもの(111・112・116・127・129)がある。底部はいずれも突出ぎみの平底であり、回転糸切り痕を明瞭にとどめる。

壺Ab(113・114・131・132)は、体部最大径が上位にあり、肩部の張りが強い。口縁部は頸部より直立ぎみに立ちあがったのち、口縁部で強く外反し、口縁端部は上下に肥厚する。底部はやや突出ぎみの平底を呈し、回転糸切り痕を明瞭にとどめる。

鉢C(117～120・130・134～138)は、突出ぎみの平底の底部より直線的に外上方に立ちあがり体部へ続く。体部は肩部で内側に屈曲したのち外反して口縁部につづき、口縁端部は内側に屈曲する。口縁端部はとがりぎみにおわり、断面三角形を呈する。口縁部内・外面はロクロナデ調整。底部は回転糸切り痕をとどめる。鉢Cは、口径17cm前後・器高が8cm前後を測る鉢Caの小型品と、口径21～23cm・器高は12～13cmを測る鉢Cbの中型品がある。

3号窯出土遺物の総数は器種の識別できる破片7,590個をかぞえ、そのうち、灰原上層出土遺物3,827個、灰原下層出土遺物3,753個である。ほかに窯体内より10個出土した。

器種別には椀Bが4,722個(62.3%)と半数以上をしめ、次に杯A 1,231個(16.21%)、鉢



第26図 西長尾5号窯窯体内出土遺物
杯Ab ; 139～141, 椀B ; 142～145, 鉢D ; 147・148, 壺Ab ; 146

		前山2・3号窯	黒岩1号窯及び CM14区作業場跡	西長尾5号窯	
杯	A	114 (1.1 %)	302 (7.1 %) 15 (0.36%)	467 (20.4 %)	
	B	85 (0.86%)			
		199 (1.96%)	317 (7.46%)		
蓋	A	1 (0.01%)	6 (0.14%)	1 (0.04%)	
	C	97 (0.98%)			
	D	1 (0.01%)			
	不明	9.9 (1.00%)			
皿	B	778 (7.77%)	360 (8.5 %) 9 (0.21%)	1 (0.04%)	
	C				771 (7.7 %)
	D				7 (0.07%)
椀	B	20 (0.20%)	565 (13.3 %) 2,795 (65.9 %) 116 (2.7 %)	1,343 (58.5 %) 1 (0.04%) 78 (3.4 %)	
	C	7,559 (76.0 %)			
	D	122 (1.2 %)			
		7,701 (77.4 %)	3,476 (81.9 %)	1,422 (61.94%)	
鉢	D	923 (9.3 %)	36 (0.86%)	371 (16.2 %)	
壺	A b	65 (0.66%)	22 (0.53%) 2 (0.05%)	32 (1.88%)	
	B	20 (0.20%)			
		85 (0.86%)	24 (0.58%)		
甕		39 (0.40%)			
硯		11 (0.11%)			
その他		117 (1.2 %)	15 (0.35%)		
総計		9,952 (100%)	4,243 (100%)	2,294 (100%)	

付表5 西長尾5号窯, 前山2・3号窯, 黒岩1号窯土器集計表

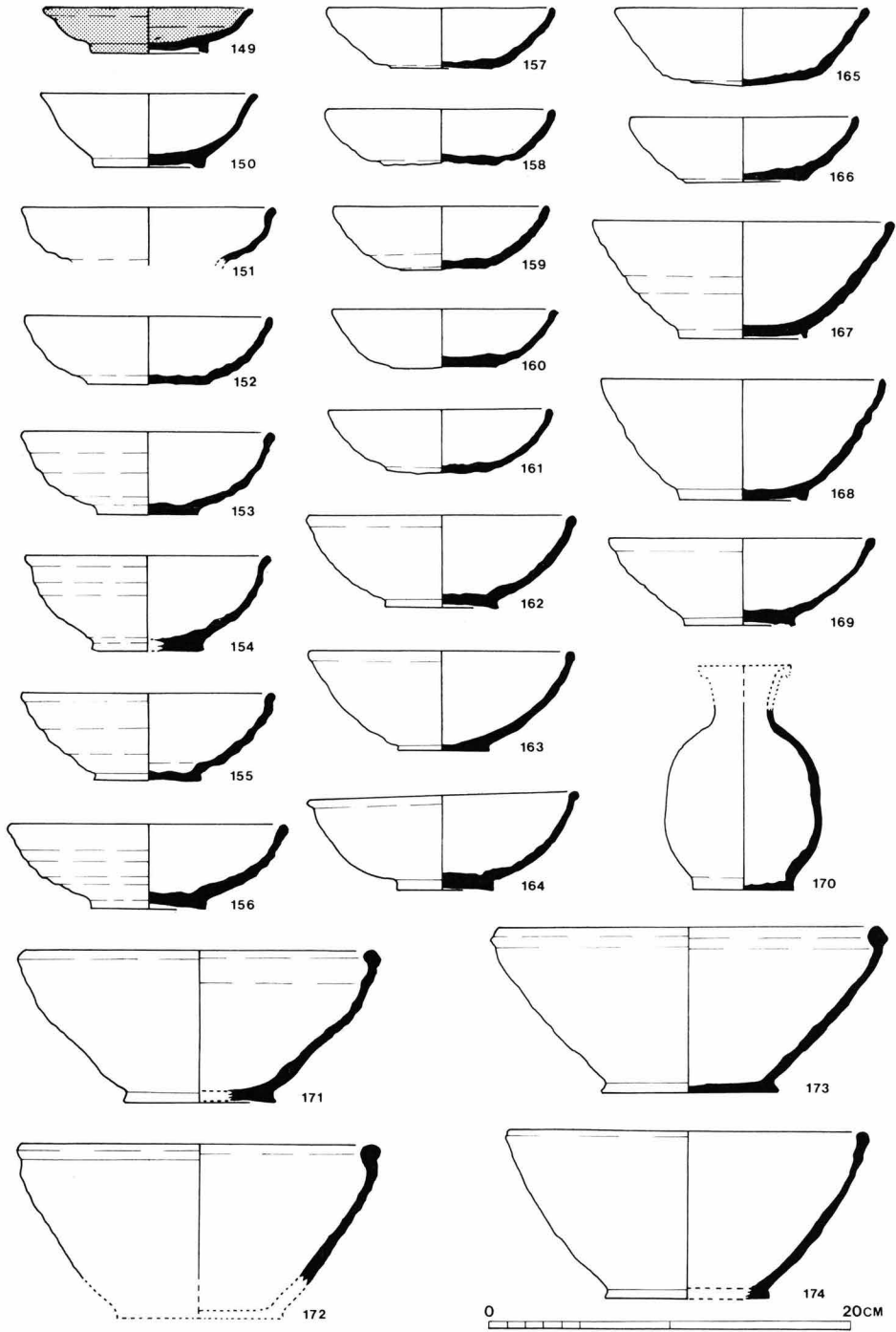
Cb 1,021個(13.5%)と続く。3号窯出土遺物の特徴は椀B, 鉢Cb, 皿C, 壺Abにみられる回転糸切り痕を明瞭にとどめるものが主体をしめ、ヘラ切りのものは器種が限定される。

3. 西長尾5号窯出土遺物 (第26・27図)

西長尾5号窯出土遺物は窯体内および灰原内より出土し、杯Aa・Ab, 椀B・C・D, 皿B, 鉢D, 壺Abがある。

杯A(139~141・157~161)は、平底の底部より内彎ぎみに立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は、内・外方に肥厚し、丸みをもっておわる。杯Aは椀Bと同様に、粘土塊よりロクロ成形で口縁部までいっきに引き上げており、器壁の凹凸が著しい。杯Aは底部がヘラ切りのものAa(157~161)と回転糸切りのものAb(139~141)があり、Aa 167個(35.8%), Ab 300個(64.2%)とAbが主体をしめる。口径10.5~13.2cm・器高2.0~2.5cmを測る。

椀B(142~145・151・153~156・162~164・169)は、突出ぎみの平底より内彎ぎみに高く立ちあがって口縁部へ続くもので、口縁端部は内・外方にわずかに肥厚し、丸みをもっ



第27図 西長尾5号窯北灰原内出土遺物

杯A a ; 157~161, 杯A b ; 151・152, 碗B ; 153~156・162~164・169, 碗C ; 150,
碗D ; 167・168, 鉢D ; 171~174, 壺A b ; 170, 緑釉陶器皿C ; 149

ておわる。底部には回転糸切り痕を明瞭にとどめる。椀Bは杯Aと同様、口縁部の凹凸は著しい。

椀C(150)は、底部より斜め上方に立ちあがったのち腰部で屈曲し、明瞭な稜線が入る。底部は削り出しにより底部と体部の屈曲部に断面台形の低い高台を付す。椀Cは体部および口縁部内・外面にヘラミガキを加え、また胎土が杯A、椀B・Dとは異なり精良で緑釉陶器焼成前のものと思われる。

椀D(167・168)は、椀Bと同様に、粘土塊よりロクロでいっきに口縁部まで引き上げたもので、底部は回転糸切りによる。椀Bとの相違は、そののち底部を削り出し、断面台形の高台を成形する。口縁部内・外面はロクロナデ調整ののち、外面下半および上半部凸面にヘラミガキを加える。口径15.4~16.2cm・器高3.1~3.4cmを測る。

鉢D(147・148・171~174)は、突出ぎみの平底の底部より内彎ぎみに立ちあがる体部から肩部近くでわずかに屈曲し口縁部へ続く。口縁部は内・外方に肥厚し、玉縁状を呈する。口縁部内・外面はロクロナデ調整、底部は回転糸切りによる。

壺Ab(146・170)は、突出ぎみの平底より体部が倒卵形を呈するもの(170)と、器高と体部最大径が等しく、扁平な感を与えるもの(146)がある。口縁部は直立ぎみに立ちあがり、頸部よりわずかに外反する口縁部に続き、口縁端部に粘土帯を継ぎたして下方に肥厚させる。口縁部内・外面および体部外面はロクロナデ調整、底部は回転糸切り痕を明瞭にとどめる。146は口径6.0cm・器高12.1cmを測る小型品である。

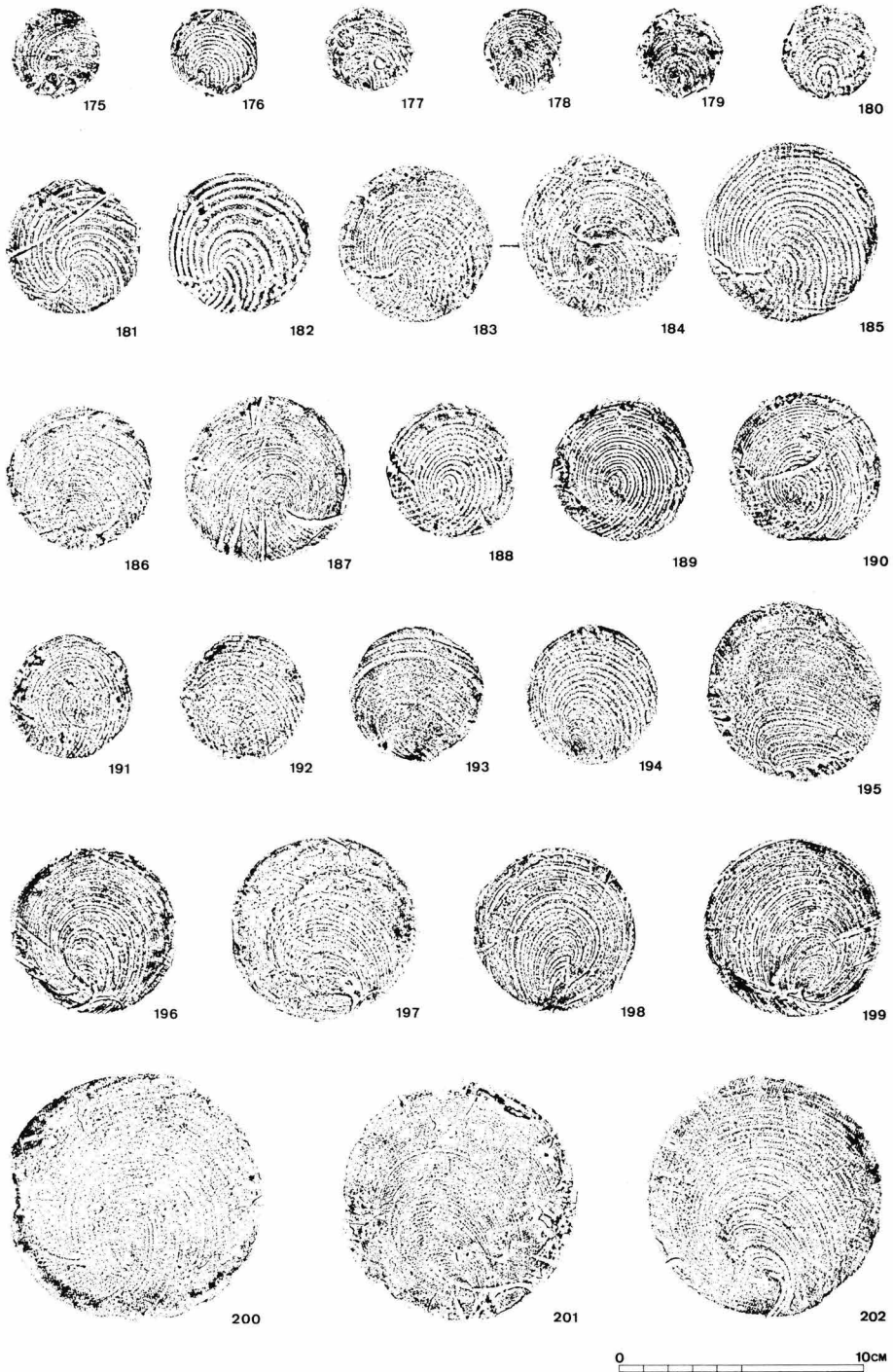
緑釉陶器皿B(149)は、5号窯北焚口部近くの灰原内より椀Bと重なった状態で出土した。削り出しによる断面台形の高台を付し、明瞭な稜線をもって屈曲し、口縁部へ続く。口縁部内・外面および内底面をヘラミガキ調整ののち、淡緑色の薄い釉を施す。釉は底部外面をのぞく全面に施され、ハケ塗りと思われる。

5号窯窯体内および灰原内出土遺物の総数は2,294個をかぞえ、椀Bが1,343個(58.5%)と半数以上をしめ、次に杯Aが467個(20.4%)、鉢Dが371個(16.2%)となり、椀C、壺Abは極少である。5号窯出土遺物の特徴は鉢Dを除き、いずれも口径・器高とも15cm未満の小型品が主体をしめ、杯A、椀Bの個数は総個数の75%以上をしめる。また5号窯出土遺物には杯Aaを除き、他はいずれも底部回転糸切りによる。(石井 清司)

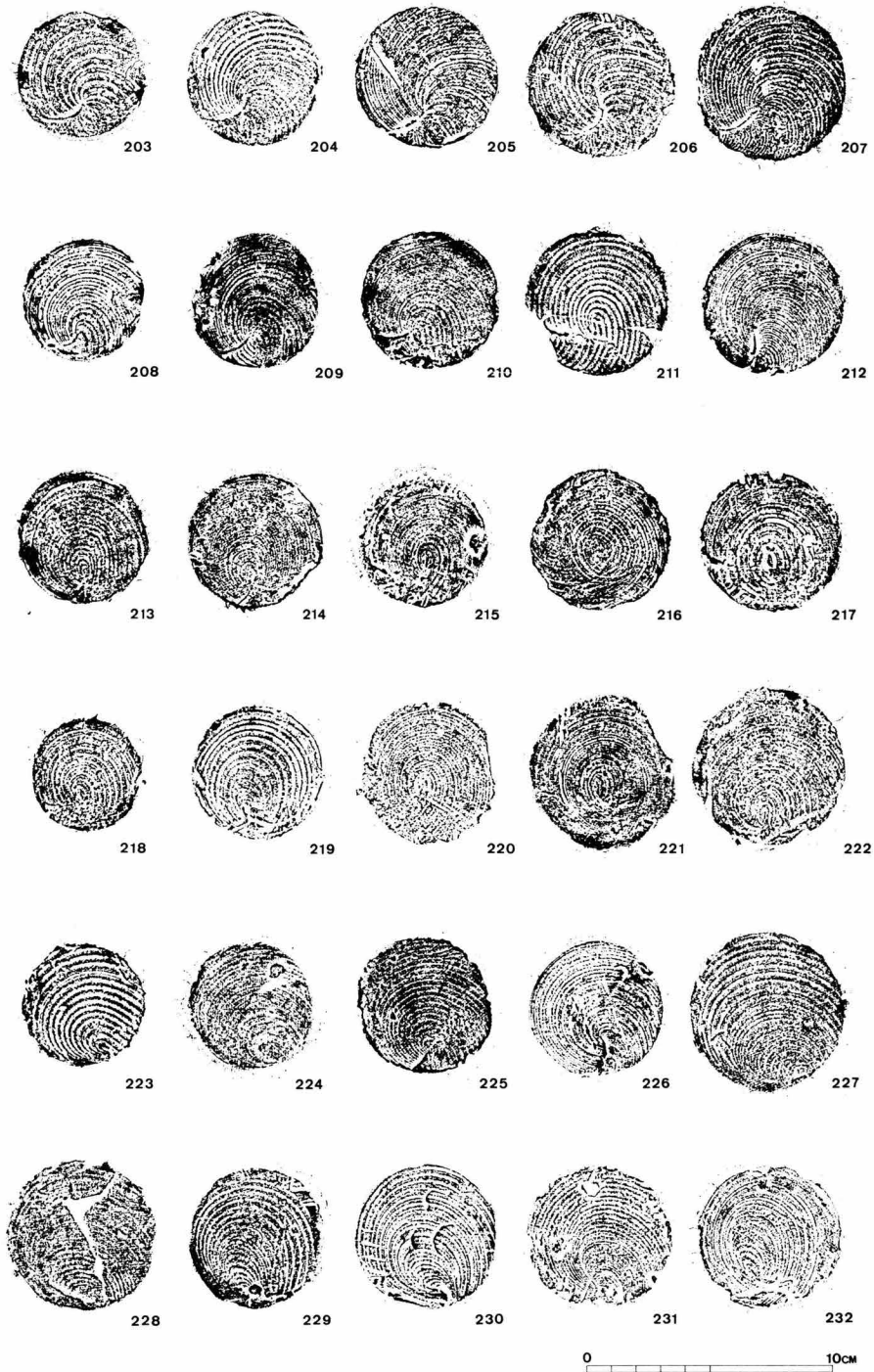
4. 回転糸切り技法について (第28・29図)

西長尾3・5号窯出土遺物のうち、底部を糸切りによって切り離すものが、3号窯では総個数の75.8%、5号窯では87.46%をしめる。

底部糸切り痕は各窯とも切り離し方法の異なるものがあり、糸切り痕の全容がわかり、切り離し方法が識別できるものについてすべて拓本を行い、分類作業を行った。



第28図 西長尾3号窯出土遺物回転糸切り拓本
壺Ab; 175~180, 椀B; 181~199, 鉢C; 200~202



第 29 図 西長尾 5 号窯出土遺物回転糸切り拓本

実験方法

糸切り方法については手動および電気ロクロの使用による実験作業を参考とした。

ロクロを使用しての実験作業を行うにあたって次のような分類を仮定し実験に臨んだ。

まず大別して糸を両手で持つ方法と片手で持つ方法(前者を回し糸切り, 後者を離し糸切りとする)を考えた。

次に回し糸切りの中では6種類のタイプの切り離し方(1~6)を, また, 離し糸切りの中では4種類のタイプの切り離し方(7~10)をそれぞれ考えた。

1. 粘土塊の向こう側に糸をかけ左手を固定し右手を引いて切り離す方法。
2. 粘土塊の向こう側に糸をかけ右手を固定し左手を引いて切り離す方法。
3. 粘土塊の向こう側に糸をかけ両手で引いて切り離す方法。
4. 手前から粘土塊に糸をかけ左手を固定し右手を押しして切り離す方法。
5. 手前から粘土塊に糸をかけ右手を固定し左手を押しして切り離す方法。
6. 手前から粘土塊に糸をかけ両手で押しして切り離す方法。
7. 粘土塊の向こう側から右手側の糸を粘土塊にかけて一周した時点で左手を引いて切り離す方法。
8. 粘土塊の向こう側から左手側の糸を粘土塊にかけて一周した時点で右手を引いて切り離す方法。
9. 手前から粘土塊に左手側の糸をかけて一周した時点で右手を引いて切り離す方法。
10. 手前から粘土塊に右手側の糸をかけて一周した時点で左手を引いて切り離す方法。

その他に考えられる要因としてロクロの回転の速さ・糸の引く(押す)速さ・糸の張り具合・切り離す際の糸の上下関係・回転の方向等が問題となるであろう。今回の実験ではこの要因についても十分に考慮しながら行った。ただし西長尾3・5号窯出土遺物はほとんどが右回転(時計回り)での切り離し方法であるので回転方向は右回転での実験を行った。

実験結果を簡単に述べると, 1・5の方法は回転方向(この場合右回転)に糸を動かす方法であり, 通常の場合回転に対する利用性・効率性・操作性を考えるとこのような切り離し方はほとんど行われなかったと考えられる。

2・3・4・6の方法は回転に対する利用性・操作性からいっても多用されていたと考えられ, 中でも2・3についての実験は切り離し後の糸の処理(離して置く)に対しても利便な点があり, この切り方が多用されていたものと推測できる。

1~6での切り離し痕については, 同条件ではほとんど見分けがつかず, 糸の引く(押す)速さ・引く(押す)位置・張り具合, また切り離す際の糸の角度により後述するA~Eのタイプに分類できる。

8・10の方法は糸が粘土塊にうまく巻きつかずほとんど無意味に近いものであった。

7・9の切り離し痕についても同条件では区別しにくく、糸を引くときの角度により後述するF・Gタイプに分類できる。

最後にロクロ回転を反対(左回転)にするとまったく逆の切り離し痕が見られると推測でき、また全般的に見て多くの課題も残されている。以上が今回の実験の概略である。

分類基準

回転糸切り方法については、前述の実験を参考として分類を行った。これによると、糸切り方法はA・B・C・D・E・F・Gの7タイプに分かれ、糸を両手で張り、粘土塊にかけたのち、糸を離すことなく粘土塊を切り離す回し糸切り(A・B・C・D・E)と両手で糸を張り、粘土塊にかけたのち回転方向と反対の手(右回転の場合は左手)を離して、糸を粘土塊に巻きつけて先端が引き手の位置にきた時に一気に引く離し糸切り(F・G)に大別できる。

Aタイプ：ロクロ回転に際して両手で糸を張り、粘土塊中央でいったん糸を止めぎみにし、さらに最終まで引き離すもので、糸切り文様は中央より放射状に凸線が広がる。

Bタイプ：両手で糸を張り、粘土塊にかけたのち、左手を固定する場合には手前より前方右手を押しぎみに切り、前方より手前へ切る場合は右手を固定し、左手で引き切る方法で、後述するDタイプと比較して、ロクロの回転速度は早い。糸切り文様は「J」の放物線を描く。

Cタイプ：両手で糸を張り、粘土塊にかけたのち、最終の切り離しに際して、両手を内側に近づけぎみに切り離す。糸切り文様は「J」状に広がる。

Dタイプ：Bタイプと同様、両手で糸を張り粘土塊にかけたのち、左手を固定し、右手を引きぎみに切り離すが、Bタイプと比較してロクロの回転速度が早いか、あるいは糸の引きが早い場合にみられる。糸切り文様は「S」状に広がる。

Eタイプ：両手で糸を張り、粘土塊にかけたのち、糸を張った状態で切り離す。ロクロの回転速度がおそい場合にみられる。糸切り文様は「^」状に広がる。

Fタイプ：両手で糸を張り、粘土塊にかけたのち、粘土切り離しの最終に際して右手で引っ張り、左手で糸を離す。糸を引く際、やや下げぎみに引く。糸切り文様は「R」状に広がる。

Gタイプ：Fタイプと同手法によるが糸を引き離す最終段階でやや上げ気味に引く。糸切り文様はFタイプと逆転し「J」状に広がる。

西長尾3号窯出土遺物(第28図)

3号窯出土遺物のうち、底部切り離し痕が確認できる杯A・椀B 1,614点のうち、ヘラ

切りによるものが1,231点(76.3%),糸切りによるものが383点(23.7%)あり、糸切り痕の全容が確認できる138点について分類を行った。鉢Dは154点のうち149点が糸切りであり、その全容がわかるもの13点と、壺Abの糸切り痕51点中19点について分類を行った。

その結果、椀・壺ではCタイプに属するものが椀B43.7%,壺Ab57.9%と半数をしめ、回し糸切りが主体をなす。鉢は底部糸切りの全容がわかり、分類しえる資料が13点と少なく、比較資料に欠けるが、離し糸切りによるGタイプが7点(53.8%)をかぞえ、椀・壺と比較して離し切りが多い。

西長尾5号窯出土遺物(第29図)

5号窯出土遺物のうち、底部糸切りによる切り離しがあるものは総数のうち、杯13.1%,椀58.5%,鉢16.2%,壺1.88%がある。ただ鉢・壺には糸切りの全容を識別し得るものがなく、椀に器種を限定し、分類を行った。その結果、回し糸切りは213個(97.3%)と主体をしめ、離し糸切りは26個(2.7%)である。回し糸切りのうち、Bタイプ84個(39.4%),次にCタイプ59個(27.7%),Aタイプ42個(19.7%)と続き、3号窯とはB・Cタイプの比率が逆転する。

小 結

3・5号窯の底部糸切り痕分類の結果、器種別にみると杯A・椀B・壺Abでは3・5号窯とも回し糸切りによるB・Cタイプが主体をしめ、鉢C・Dは離し糸切りによるGタイプが主体をしめる。

杯・椀・壺とも底部の直径が10cm未満と小さく、また、底部の器壁が7~9cmと厚いため、B・Dタイプにみられる回転速度の差異、回し糸切りの際にみられる手の振れによる水平の誤差から生じる中央の凹みを問題としない。これに対し、鉢は底部の直径が13~14cmと大きく、また底部の器壁が6~8cmと、底径に対し薄いため、回し糸切りによると、底部の器壁が薄くなるか、あるいは底が抜ける場合がある。このため、鉢C・DはGタイプの糸切り方法が主体をしめると考えられる。ただ、熟練した工人によると離し糸切りの場合、切り離し痕がほぼ水平に切れるという利点があり、また、切り離し速度は回し糸切りにくらべて早い。その場合、離し糸切りによるとロクロ回転が一定する必要があり、回し糸切りとは異なる。

回し糸切りに限定した場合、3号窯ではCタイプ、続いてBタイプが主体をしめ、5号窯は逆転し、Bタイプ・Cタイプとなる。回し糸切りはロクロの回転速度・糸の引き方・引く速度により微妙な差異があり、意図して糸切りを変化させたかは疑問である。ただ糸切りの際、生産者(=工人)のくせが読みとれ、3号窯では5号窯にみられないEタイプがあり、またロクロの左回転による成形がみられ、5号窯と比較し、手法が多様である。こ

れは3号窯窯体が全長8.44mを測る半地下式窖窯であり、5号窯(全長2.44mの平窯)と比較し、一操業に際する製品の多さを物語り、その製作に従事した工人の多さを裏付けるものと考えられる。(小島敏明・石井清司)

第6節 小 結

1. 西長尾1号窯出土遺物について

1号窯は遺構で記したように、1号窯灰原に青灰色砂層・粘土層・植物遺体層などが堆積しており、1・4号窯の前後関係が考えられるが、出土遺物では形態・組成変化が認めがたく、相前後した時期に操業されたものと考えられる。

1号窯出土遺物は、5,549片以上をかぞえ、そのうち、供膳用土器である杯A・B、皿A、蓋Aが90%以上をしめる。

杯はA・Bの二種があり、杯Aは法量の差異によりIⅡⅢに、杯BはIⅡⅢⅣに細分でき、法量のばらつきが認められるが、杯A・杯BともⅡⅢが主体をなす。

杯は総破片数の49.2%をかぞえ、杯A・Bの比率は1:2.6と杯Bの増加がみられる。

皿はA・Bに大別でき、皿Aは杯と同様、法量の差異によりIⅡⅢに細分でき、口径13.0cm以上を測るⅡⅢが主体をなす。皿Bは1個体と極少である。

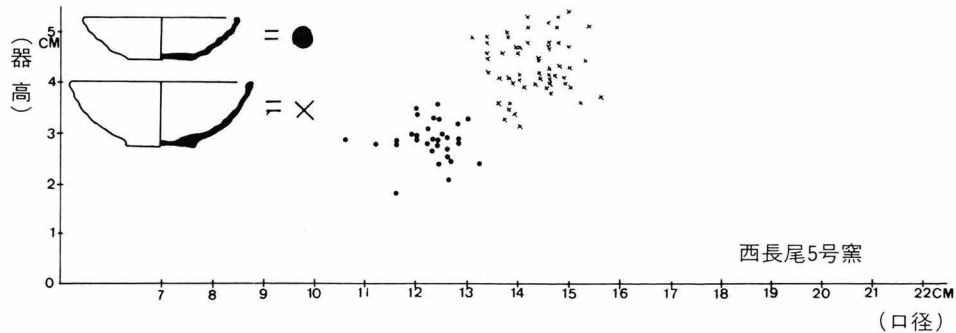
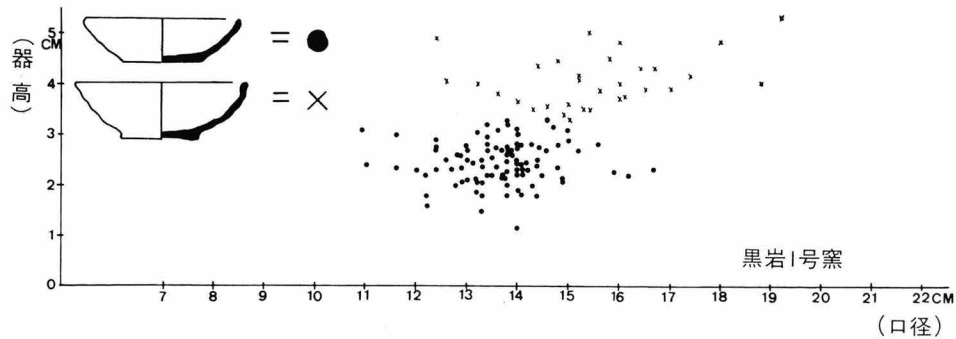
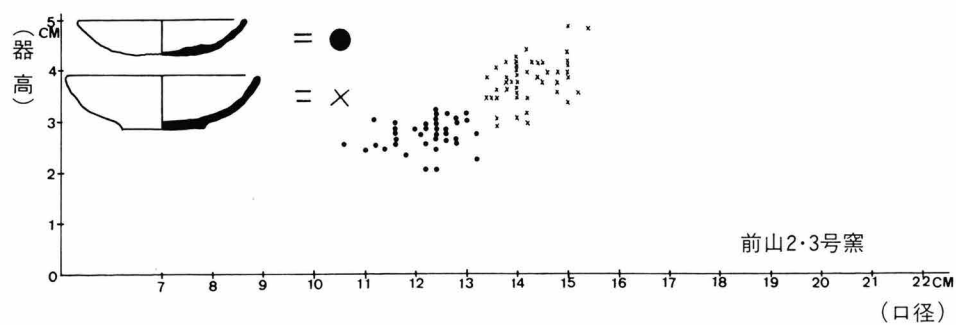
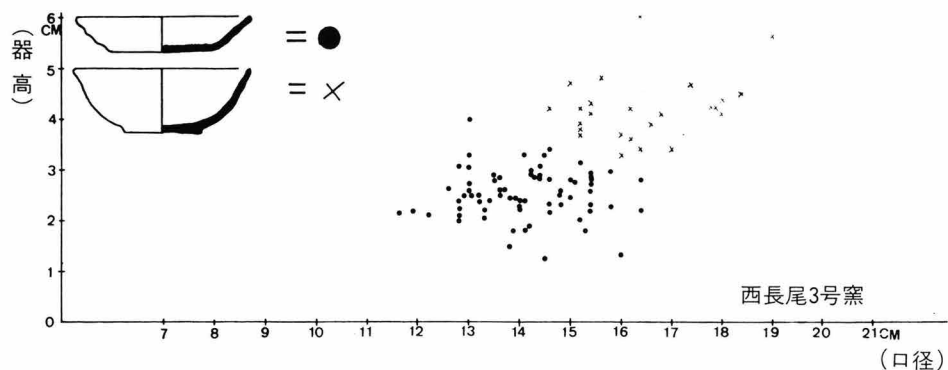
杯B・皿Bとも底部縁端部に接して、断面長方形あるいは台形の低い高台を貼りつけるもので、皿Bの消滅化とともに奈良時代末葉の様相をしめす。

蓋はA・D・Eの各器形があるが、蓋Aが主体をなす。蓋Aは法量の差異によりIⅡⅢⅣに細分でき、杯Bと同傾向をしめす。

壺は倒卵形の体部より長い頸部へ続き、口縁部は外反ぎみに立ちあがる壺Aが主体をなし、壺B・C・Dは数点である。壺Aは法量によりIⅡに細分でき、口径9cm・器高25cmを測る壺AⅡが主体をなす。壺Aは底部縁端部に接して外方に踏んばった高台を貼りつけるものが主体をなすが、小型品である壺AⅠには2点、平底で回転糸切りをとどめるものがあり、西長尾1号窯以降、小型壺から回転糸切りによる平底へと変化するものと考えられる。

鉢はA・Bの二者があり、Aが主体をなす。鉢Aは完形に復元できるものが少ないが、扁平な体部と口縁部が「く」の字形に屈曲したものであり、縁端部に接して高い高台を貼りつけるが、西長尾1号窯に続く小柳1号窯では、体部が長胴化し、底部は回転糸切りによる平底へと変化する。

以上、西長尾1号窯出土遺物は奈良時代の様相をとどめるが、杯A・Bの高台の形態、杯Bの破片数が杯Aの個体数を凌駕すること、皿Bの消失、壺Aの増大化より奈良末か



付表 6 西長尾3・5号窯, 前山2・3号窯, 黒岩1号窯出土杯A・碗B法量比較表

ら平安前期の様相を呈する。消費地で同傾向をしめす資料として長岡京跡右京第13次(7 ANESH 地区)SD 1301^(注11)がある。同遺構には、紀年銘をもつ木簡が出土しており、延暦6～9(787～790)年に機能した溝と考えられ、同遺構より類推し、西長尾1号窯は8世紀末～9世紀初頭と考えられる。

2. 西長尾3号窯出土遺物について

3号窯は窯体内のほか灰原内より多量の遺物が出土し、灰原は焼土・窯滓を含む層により、上下に分かれるが、出土遺物に差異がないことは前述した。

3号窯出土遺物は7,580片以上を数え、西長尾1号窯と同様に、杯・碗の供膳用土器が総個数の78%以上をしめ、特に、碗Bが62.3%と半数以上をしめる。

杯はA・Bに分かれ、杯Bは20個体と極少である。杯Aは西長尾1号窯でみられたように、底部と口縁部の屈曲が明瞭なものから、西長尾3号窯では丸みを持ち、口縁部も内彎ぎみになる。また、杯Aは口径に対し器高が低く皿形態に近くなる。

碗はB形態のみであり、底部から口縁部にむかってロクロ回転によりいっきにひきあげたもので、形態・調整ともに大量生産を意図したものである。碗Bは西長尾3号窯以降、前山2・3号窯、黒岩1号窯、西長尾5号窯へと続く器形であり、西長尾3号窯から西長尾5号窯へ移行するにしたがい、口径が小さくなるのに対し、器高が高くなり全体に深い器形となる。

鉢は口縁部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部が内側に強く屈曲する鉢Cであり、前山2・3号窯にみられるように、口縁端部を外方に折りかえし、玉縁状を呈する鉢Dへ移行するものと思われる。

壺Aは倒卵形の体部と長い頸部から口縁部が外反する壺であるが、底部はいずれも回転糸切りによる平底である。

壺Aの回転糸切りによる平底化傾向は西長尾1号窯の壺A Iに数点あり、続く小柳1号窯では壺A I(小型品)のいずれもが平底である。西長尾3号窯では、壺A II(中型品)も含め、いずれも平底へと変化する。

西長尾3号窯は器種の多様化がみられず、杯・碗・鉢と日用雑器が主体をなす。

西長尾3号窯に類似した消費地の出土例をみないが、杯A・鉢Cの形態が10世紀中葉と考えられる前山2・3号窯に先行することにより、西長尾3号窯は西暦1000年を前後する時期と考えられる。

3. 西長尾5号窯出土遺物について

西長尾5号窯と相前後した資料としては、前山2・3号窯、黒岩1号窯、小柳4号窯、西長尾5・6号窯がある。

遺構検出状態により前後関係が明らかなものとして前山2・3号窯、西長尾5・6号窯がある。前山2・3号窯は右焚口部に3号窯から堆積したと思われる濃黒色灰層があり、2号窯→3号窯という前後関係が明らかであり、西長尾5・6号窯は、6号窯を削平し、新たに5号窯を構築しており6号窯→5号窯となる。

ただ4基の窯の土器の様相は、前山2・3号窯での窯体内遺物は別にして、灰原内での区分が明らかでなく、2号窯と3号窯の灰原内出土遺物の差異を明らかにしえなかった。また、西長尾6号窯窯体内には遺物が極少であり、灰原も後世の削平を受け、遺存状態が悪く、土器編年の基準資料としえない。

前山2・3号窯は須恵器杯・椀・皿・蓋・壺・鉢のほか、緑釉陶器椀・皿・酒杯・蓋がある。

黒岩1号窯は1号窯に近接したCM14区作業場跡出土遺物とともに須恵器椀・皿・壺・鉢・円面碗のほか、緑釉陶器椀・皿・酒杯がある。

西長尾5号窯は杯・椀・壺・鉢がある。

各窯の土器組成をみると前山2・3号窯は椀・皿が主体をしめるが、椀には各形態があり、口縁部が屈曲し明瞭な稜線をもつ、いわゆる稜椀(椀C)が主体をしめ、西長尾5号窯でみられる粘土塊よりいっきにひく椀Bは少ない。

黒岩1号窯およびCM14区作業場跡出土遺物には、前山2・3号窯と同様に、椀・皿が主体をしめるが、椀は椀Cが減少し、椀Bが13%をしめる。

西長尾5号窯出土遺物には、皿は数点を数えるのみであり、椀は椀C(稜椀)が消え、椀Bが総破片数の半数以上をしめ、次に杯Aが20%・鉢Dが16%となる。

前山2・3号窯、黒岩1号窯で主体をしめる椀C・皿Cを比較した場合、前山2・3号窯、黒岩1号窯の三者とも底部は削りだし高台であるが、前山2・3号窯では底部と高台の屈曲部は明瞭であり、黒岩1号窯では屈曲が不明瞭であるか、あるいは回転糸切りののち、底部を不徹底に削り、高台の呈をとどめない退化状態をしめす。口縁部は前山2・3号窯では各タイプとも輪

花を施すものがあるが、黒岩1号窯では輪花を施す器形は口径16cm以上の中形品に限定される。

前山2・3号窯、黒岩1号窯、西長

	前山2・3号窯	黒岩1号窯 及びCM14区 作業場跡	西長尾5号窯
ヘラ切り	93(1.34%)	96(3.93%)	167(8.55%)
輪高台(削り出し)	5,924(85.45%)	1,599(65.43%)	78(3.99%)
蛇ノ目高台	252(3.63%)	79(3.23%)	
糸切り高台	664(9.58%)	670(27.41%)	1,709(87.46%)
総計	6,933 (100%)	2,444 (100%)	1,954 (100%)

付表7 前山2・3号窯、黒岩1号窯およびCM14区作業場跡、西長尾5号窯出土土器集計表

尾5号窯の各窯で出土する鉢Dは、前山2・3号窯では体部の上位で内側に強く屈曲し、肩部をつくったのち、口縁端部を内・外方に肥厚させて玉縁状口縁を呈するものが主体をしめる。黒岩1号窯では肩部の張りが弱くなるか、あるいは、底部よりそのまま内彎ぎみに立ちあがり、肩部を形成せず、口縁部に続くものがあり、後者が主体をしめる。西長尾5号窯では肩部の張りがなく、体部と口縁部の境が不明瞭なものみに変化する。なお、口縁端部の傾斜は前山2・3号窯にみられる内傾ぎみに屈曲するものから、西長尾5号窯にみられる直立あるいは外反ぎみに変化すると思われる。鉢Dは各窯とも口縁部から底部まで完形に図化しえるものが少なく、規格を明らかにしえるものが少ないが、前山2・3号窯は口径20.1cm・器高10.3cm・器壁の厚さ0.3~0.5cm・口径指数0.512、黒岩1号窯口径22.2cm・器高10.1cm・器壁の厚さ0.4~0.5cm・口径指数0.455、西長尾5号窯は口径19~20cm・器高8.4~9.4cm・器壁の厚さ0.4~0.6cm・口径指数0.442~0.495と小型化傾向がみられる。

椀Bは前述したように、前山2・3号窯では総個体数の0.20%と極少であるが、黒岩1号窯では13.3%、西長尾5号窯では58.5%となり椀Cから椀Bに各窯ごとに出土比率が変化する。椀Bの各窯の口径・器高平均は前山2・3号窯では口径12.5cm・器高3.0cm、黒岩1号窯では口径14.2cm・器高4.49cm・口径指数0.316、西長尾1号窯では口径14.35cm・器高4.8cm・口径指数0.335であり、若干変化する。

これら各窯出土遺物の土器組成・形態の変化より、前山2・3号窯→黒岩1号窯→西長尾5号窯という縦列が考えられる。これを消費地での出土例より検討すると、現在公表されている10世紀~11世紀の平安京を中心とした資料として平城京SD650A・B^(注12)、平安京左兵衛府SD01^(注13)、高速鉄道烏丸線内遺跡⑨-17井戸・No.42土壇45・48^(注14)、平安京内膳町SK18・SK19・SD41A^(注15)、平安京左京四条一坊^(注16)、京大構内遺跡^(注17)などがある。10~11世紀の編年作業は寛治5(1091)年の紀年銘を墨書した平安京左京四条一坊(SE-8)、初鑄が958年で、11世紀初頭には鑄造を停止したと考えられる「乾元大寶」が4枚、土器とともに出土した平安京内膳町SK18などの資料を定点として編年作業が行われ、100年を4期(25年単位)で細分することが試みられている。

平安京を中心とした各遺跡=消費地の一括資料内には、一部、篠窯跡群出土の須恵器と形態が近似したものがあり、篠窯跡群の各窯の絶対年代を推定することができる。ただし、篠窯跡群の10~11世紀前後の窯跡の主体である杯A・椀Bは、平安京内での出土量は極少であり、併行関係を考える場合の主体は鉢に限定される。前山2・3号窯は平城京東三坊大路(SD650B)一括資料内椀B(642)・鉢(659)、また、緑釉陶器椀・皿が前山2・3号窯出土遺物に近似するが、『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』に指摘するように、高台の

削りなどのやや粗さがみられ、10世紀中頃と考えられる。黒岩1号窯は平安京内膳町SK19出土遺物内に鉢Dがある。SK19は前述したように「乾元大寶」4枚が出土したSK18に切られた土塚であり、10世紀後半～末葉(980年前後)と考えられる。西長尾5号窯は土器組成形態の差異により、黒岩1号窯に後出する窯であり、西長尾5号窯出土鉢D・壺Abに近似した資料には高速鉄道烏丸線内遺跡⑤-17井戸などに近似し、11世紀前半と考えられる。なお、鉢Dは11世紀中頃～後葉の一括資料である平安京内膳町SD41A、高速鉄道烏丸線内遺跡No.42土塚45・48では、口縁端部を内側あるいは外側に折り返し玉縁状を呈するものに変化する。(石井 清司)

4. 西長尾5・6号窯の窯体構造について

西長尾6号窯は、篠窯跡群内で黒岩1号窯、前山2・3号窯に続き5例目をかぞえる、いわゆる「三角窯」である。

三角窯は、いずれも傾斜角10～15°を測るゆるやかな丘陵に構築され、三角形の頂点を煙道部とし、底辺の両端の2か所を焚口部とする平窯である。各窯はいずれも側壁が床面より30～40cm遺存する程度で、側壁上部および天井部の構造については不明である。

各窯の焚口部は、黒岩1号窯では両焚口部とも窯壁の両端に角礫や分焰棒の転用を対にして柱状に立てており、前山2号窯も黒岩1号窯と同様、自然石を柱状に立てている。前山3号窯は焚口部の遺存状態が良く、両焚口部とも粘土塊をつめ、窯体内を密閉した状態で検出され、前山2号窯と同様、焚口部に分焰棒が使用されていたと思われる。

西長尾5・6号窯は、焚口部に自然石あるいは分焰棒を立てた痕跡がない。遺存状態のよい西長尾6号窯南焚口部では、焚口部上部が土圧によりそのまま崩落した状態で検出され、上部の曲線より焚口部の推定高は50cm前後と考えられる。西長尾5号窯は南焚口部の分焰棒が欠如しており、焚口部周辺の窯壁の遺存状態が悪いことから推して、南焚口部を壊して製品を取り出した可能性がある。

黒岩1号窯、前山2・3号窯、小柳4号窯では、焼成部と燃焼部の境が不明瞭であったが、西長尾6号窯では、両焚口部から半径約40cmの円弧を描いて凹みがあり、同土塚直上に薄い灰層と焼土が堆積していることより燃焼部と考えられる。これにより西長尾6号窯の焼成部の範囲は、長さ約1.64m、最大幅約1.12mの狭い範囲となる。西長尾5号窯は、西長尾6号窯にみられる凹みがないが、両焚口部より45cmの範囲に薄い灰層が堆積しており燃焼部と考えられる。焼成部は、黒岩1号窯、前山2・3号窯と小柳4号窯、西長尾5・6号窯で基本的差異がある。西長尾5・6号窯は、底部を第1次床面とし、その上に支柱をたて拳大の粘土塊を敷いて第2次床面を作り、その床面上に製品を置いている。これに対し、黒岩1号窯、前山2・3号窯は、焼成部床面に直径約8～20cm・深さ約2～4cmの

不整形の凹みが十数か所に認められ、遺存状態の良い黒岩1号窯では、凹みの直上に拳大の粘土塊を焼台として据え、その上に緑釉陶器がふせた状態で検出された。小柳4号窯は、前二者とは差異があり、床面が平坦であり、また、西長尾5・6号窯にみられた支柱も遺存しない。

西長尾5・6号窯の煙道部は、黒岩1号窯、前山2・3号窯、小柳4号窯とともに床面における基本的差異はないが、西長尾6号窯では支柱を横転させ、西長尾5号窯では角礫を4個据え、焼成部からの火を止める火楯の施設がある。

以上、各三角窯の窯体構造をみると、黒岩1号窯、前山2・3号窯と小柳4号窯、西長尾5・6号窯の二種がある。各窯体の差異は製品の上にもあらわれ、黒岩1号窯、前山2・3号窯は、須恵器とともに緑釉陶器を含むが、小柳4号窯、西長尾5・6号窯では緑釉陶器を含まず、口径15cm前後の須恵器杯・碗を主に焼成している。

緑釉陶器は、周知のように須恵器あるいは土師器に鉛を主体とする釉薬をぬり青磁を模したものであるが、釉が素地に付着発色するには摂氏800°程度の低火度を必要とする。黒岩1号窯、前山2・3号窯は、緑釉生産のための低火度焼成を必要とするため窯体構造の工夫を行い、製品は、皿・碗の内底面に釉がたまるのを防ぐため焼台を据え、製品をふせた状態で焼成したものとわれ、京都市西京区小塩窯から派生して、前山2・3号窯、黒岩1号窯が構築された可能性がある。

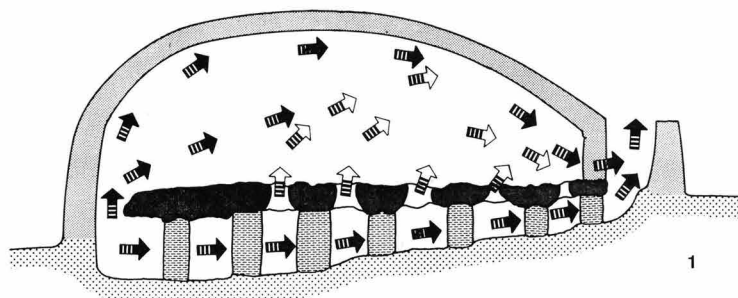
西長尾6号窯は、緑釉陶器を生産せず、摂氏1,200°以上の高温を必要とする須恵器を生産するため、窯体構造に工夫を凝らしたと思われる。支柱は燃焼部からの火力を拡散させ、窯全体に火がいきわたるようにするとともに、製品を第2次床面の正位置に据えることにより、第1次床面の酸素のながれがよく、また、火力が高くなる。煙道部に支柱を横倒しに据えることにより、火力が焼成部にこもる役割をなす。

西長尾6号窯が、これまでの須恵器生産窯に通有な半地下式窖窯でなく、小型平窯の三角窯であるのは、杯・碗の小型品の焼成を主な目的としたためで、その結果、燃料が少なく効率のよい焼成を可能にしたと考えられる。

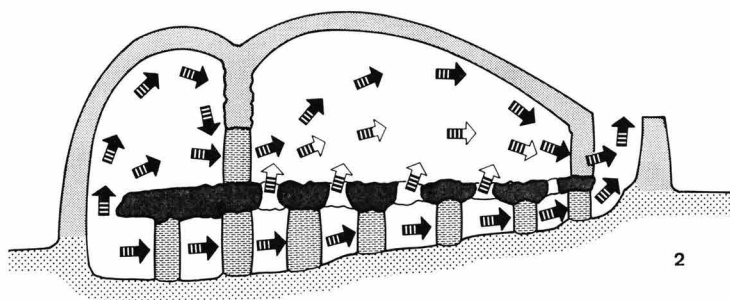
西長尾5・6号窯では、遺構の掘削状態により6号窯が5号窯に先行することは前述した。

西長尾5号窯は、西長尾6号窯に比し遺存状態が良く、焼成部および燃焼部の一部に第2次床面がある。西長尾5号窯の側壁は還元炎で硬く焼きしめられ、西長尾6号窯に比し、燃焼効率の良さが窺える。

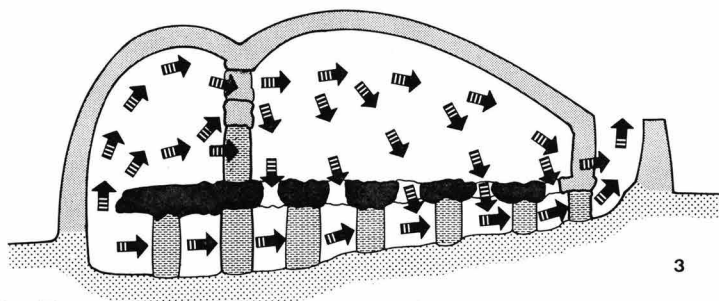
西長尾6号窯から西長尾5号窯への変化は、両焚口部の幅を狭め、平面三角形から楕円形に近い形に変化する点に認められる。焼成部第1次床面は、中央を頂部とし、わずかに



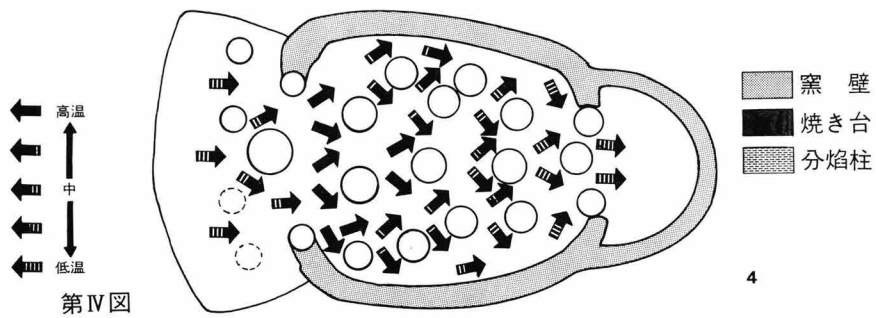
第I図



第II図



第III図



第IV図

第30図 西長尾5号窯燃焼時想定図

山形に粘土を貼りつけ、支柱の配置も扇状に配することにより、火を窯体全体に均等にめぐらす。煙道部は角礫を据えて火楯の役割をし、焼成部の境には支柱を10~20 cm 間隔の狭いすき間を残して配し、両側壁は焼成部内部に狭める。これは、いずれも燃焼部からの火が焼成部にこもるように工夫されたものであり、西長尾6号窯からさらに発展した窯体構造であると考えられる。

西長尾5・6号窯にみられるロストル型式の窯は、瓦窯としては知られるが、須恵器専門窯としては初見であり、瓦窯から発展したものか否かは今後の課題としたい。

(石井 清司)

5. 西長尾5号窯の構造と燃焼時における考察

陶磁器の素焼き焼成温度は、摂氏約800°である。例えば、マッチの炎の温度は、これとほぼ同じであるが、そのような炎の状態のみでは、素焼き焼成することは不可能である。そこでこの炎を囲む事により、素焼き焼成に必要な熱量を得ることが出来る。そして窯体中の製品は加熱され、素焼き焼成が可能となる。この焼成機能を有するものが窯である。

窯の形態決定には、焰の流れが大きな要素となっている。焰の流れにより窯を分類すると、次のように三形式に大別される。①倒焰式窯(down draft kiln) ②昇焰式窯(up draft kiln) ③横焰式窯(horizontal draft kiln)がある。ただし、この横焰式窯については、窯業研究者の中には倒焰式窯に含め、二形式とする者もある。

①倒焰式窯(down draft kiln)

焚口で発生した焰は、燃焼室内で温度が上昇し、火楯に沿って窯の天井部に当たり、製品の間を下降し、窯床の吸込孔に入り煙道より煙突に出る形式である。倒焰式窯の有する利点は次のようである。1. 燃料ロスが少ない。2. 窯体内の温度がほぼ均一に上昇する事により、焚口附近の製品が集中して高温にさらされることを防ぐ。

②昇焰式窯(up draft kiln)

焚口で発生した焰は、燃焼室内で温度が上昇し、自然対流により窯体の天井にある煙突へと排出される形式である。これは、低火度(800°C以下)の窯に多く、ギリシャの古代コリントの板画にも描かれている。また、古代ローマの窯についても同様であり、イギリスにおける考古学の研究により、窯の側壁から天井部にかけて、スサが検出される等からして、ほぼ、全容が判明しており、最も古い形式の窯である。

③横焰式窯(horizontal draft kiln)

焚口で発生した焰は、燃焼部を経て焼成室内に入り、窯体床面に沿って進み、製品を加熱し、煙道から煙突へと排出される形式である。この窯は、焚口および燃焼部の温度は高くなり、煙道部付近の温度は低くなること、また、窯体内の温度が火の焚き方、焚口の一

次空気の取り入れ具合等により、不安定になることなどの欠点がある。篠西長尾地区で検出された1号・3号・4号窯のような半地下式窖窯は、この形式に当たるといえる。

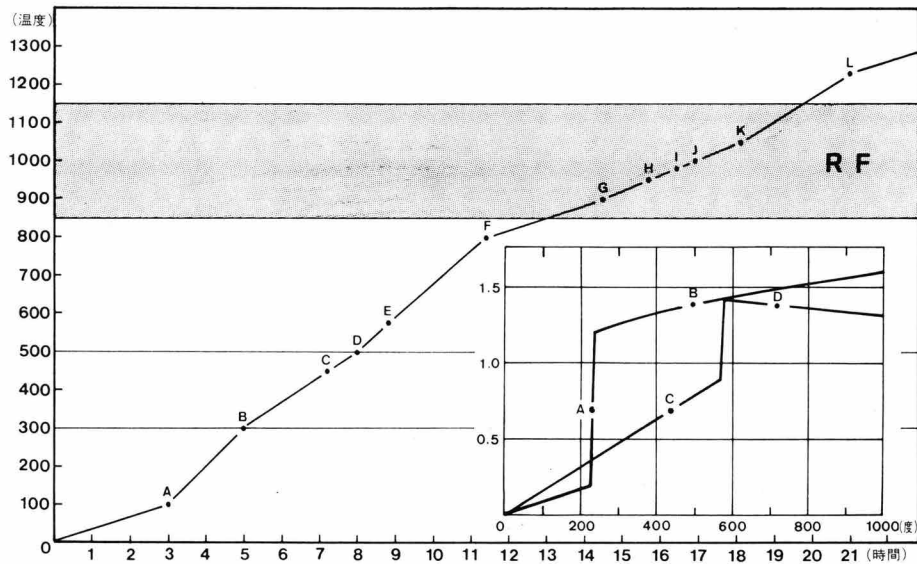
西長尾5号窯第一次床面における焔の流体変化と焼成温度変化について(第30図参照)

窯体の燃焼室で燃料の薪が、窯体外の一次空気を取り込み燃焼し、二次空気になり焼成室に入るが、一次床面ですべての薪が燃焼したとは考え難い点が幾つかある。第一には焚口の床面は、焼成された層が1cm~2cmであり、焼け方は浅い。二層目以下の黄褐色および赤色酸化層も浅く、また赤色酸化層の赤色の大部分を占める酸化鉄(Fe₂O₃)の熱変化から見て、ほぼ焼成温度を推定出来る。なかでも、土中に含まれる硫化鉄は、約450°Cで分解されFeS₂=FeS+S+Sとなり酸素が多い場合には4FeS+7O₂=2Fe₂O₃+4SO₂, 4FeS+9O₂=2Fe₂O₃+4SO₃となる。また、炭酸鉄は700°C前後でFeCO₃=FeO+CO₂炭酸ガスを放出し、酸化鉄FeOとなり、赤く焼けた土層を成している。従って、床面推定温度は、摂氏450°以上、700°以下と思われる。第二には、第一次床面で薪を燃焼させた場合を考えると、燃焼スペースが足りない。このような点から見て、主燃焼室は、第二次床面の可能性が高い。主燃焼室の補助として、第一次床面を使用したと思われる。また、第二次床面燃焼部が、火格子(ロストル)状になっているため、そこより落ちる燠を溜め、外部より取り入れる一次空気を上昇させる役目と、補助的に薪を燃す程度である。窯体内の温度が摂氏900°を越える頃になると、酸化雰囲気(oxidizing atmosphere)、または中性雰囲気(neutral atmosphere)より還元雰囲気(reducing atmosphere)に変化する。その時点において大量の燃料を必要とするため、第一次床面にも多少の薪を投入したものと思われる。大型の窯の場合においては、比較的燃焼室も大きく、還元焼成は比較的簡単であるが、5号窯のような小型の場合には困難であるために細部に渡り複雑な構造になったものと思われる。このようにして絶えず刻々と変化する窯体の焚口部のロストル部直下では温度変化も激しく、それを支えた支柱も摂氏100°~300°では内部の水分が急膨張し、大きく亀裂を生じている。また、摂氏573°では、石英は大きく膨張し、低温型より高温型へと変化する。有機質を多く含む粘土を使用した場合などにも同じような膨張現象が生じる。そのため、一列目の支柱は強度限界を越え現存しているものは少ない。このようにして一列目の支柱を通った一次空気は、薪を燃焼させ、その焔は、二次空気となり焼成室へと導かれる。さらに二列目以後の扇状に配置された分焔柱にあたり、その焔は分散することにより均一温度の焔となる。第一次床面は、林立した分焔柱によって枝煙道の役割も果たし、窯体出口の集中煙道に繋がり煙突へと排気される。焔は、必然的に中央部に集中するため、分焔柱を扇状に配置することは、その焔を分散させ、温度の均一化を意図したものと思われる。また、二列目以後の中央部より三列目にかけて、凸レンズ状に盛り上がっており、天井部との間隔が

狭くなっている。分焰柱では主に水平方向に温度均一化がなされるが、この盛り上がりによってさらに垂直方向にも温度均一化がなされる。そして、床面で最も堅牢に焼成されており、暗青灰色の須恵器独得の色調を示している。これは、窯内の温度が摂氏 900° を越えた時点で、還元雰囲気にするため、酸素の供給を不十分にし、意図的に強還元焼成したものであると思われる。これは、須恵器窯と他の窯との焼成方法の著しい相異点である。また、焰の中の炭素量も多く、有機質の粘土中の炭素もあい増して、素地に含まれる酸化鉄 (Fe_2O_3) から酸素をとり、三酸化鉄として黒色に変化し、初期の焼成により酸化していた酸化鉄も、強い還元焰によって酸化第一鉄となり灰色となる。また、このような色調になる粘土は鉄分が 4% 以上含まれる土である。ほかに含まれる微量の酸化金属も、ほぼ同様の還元作用で金属質に変化し、黒灰色となる。それにあい増し、素地中の気孔にも炭素が吸着し、さらに、緻密な組織を構成するようになり、須恵器独得の色感と感触を増している。5 列目付近より、焰の温度は弱くなり始める。そのため、おのずから、焼成室内の温度も少しずつ下がり始める。しかし、これは、須恵器焼成には足り得る温度である。また、第一次床面の幅は少しずつ狭くなっており、傾斜角度も急となり、第一次床面の体積は、減少する。このことにより、焰の力が衰え始めるのを防ぎ、温度を保持する。さらに 5 列目以後になると枝煙道の役割も終わり、その奥の一本化した集中煙道部へと繋ぐポイント部にもなっている。したがって、そこでは焰の速度も次第に早くなり、熱も外に抜けることとなる。それを防ぐために分焰柱の間隔を少し狭くしたものである。この辺で焼成部も終わり、集中煙道部は煙突部へと続き、熱もここより外へ排出される。よって、集中煙道部の床面の焼成度は急激に浅くなっている。

B 図 5 号窯の分焰柱および窯壁の粘土が焼成によって受ける熱変化を温度別にみると第 31 図のようになる。すなわち、

- Ⓐ 100°C 粘土中に含まれる吸着水の放出が始まる。
- Ⓑ 300°C 粘土中に含まれる吸着水の放出がほぼ終わる。
- Ⓒ 450°C カオリン ($\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2 \cdot \text{H}_2\text{O}$) の結晶水放出によって、メタカオリン ($3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$) となるが、焼かれる素地粒子の細かさおよび密度・温度上昇速度等により、分解温度の幅も持っており、温度上昇率が遅いほど低温度分解する。
- Ⓓ 500°C 絹雲母・葉蠟石・およびカオリンの結晶水放出が始まる。ほぼこの温度の頃になると、粘土中の結晶水が放出するため窯体内の製品は熱を強く吸収する。このような現象を吸熱反応という。この頃、窯体温度はあまり上昇せず無理にこの温度範囲を通過させようとすると製品に亀裂を生ずる。
- Ⓔ 573°C 石英が低温型 220°C~250°C で膨張した状態を α 石英という。高温型 573°C で



第 31 図 焼成時における粘土中に含まれる鉱物の熱変化^(注18)
 A・B—α クリソバライト—β クリソバライト
 C・D—α 石 英—β 石 英

異常膨張した状態をβ石英という。その温度変化は第31図に示す。このようにして、粘土中に多く含まれる珪酸鉱物は、この温度域で急激に温度を上昇させた場合、容積が急激に膨張し、製品に亀裂を生じる。また、大きな粒子の物では、石ハゼを生じることもある。

Ⓕ800°C 絹雲母および葉蠟石の結晶水が放出しおわる。白雲母は同様にして無水雲母となる。

Ⓖ900°C 還元焼成が始まる。燃料を大量に投入し焚口を閉めた状態にする。そのため、必然的に温度上昇は低下することとなる。

Ⓕ960°C カオリン、少量の結晶水を放出する。

Ⓖ980°C カオリンはスピネル (Si+Al+SiO₂) に変化する。

Ⓖ1,000°C 葉蠟石はムライト・クリソバライトに変化する。

Ⓖ1,050°C 白雲母では、白榴石およびガラス変化が始まり、ガラス化するのは1,100°C～1,200°Cである。

Ⓖ1,230°C カリ長石、純粋なカリ長石は1,220°Cで白榴石という鉱物を析出し、ガラス化するが、長石の平均融点はSK7～SK8、1,230°C～1,250°Cである。また、長石が溶けて製品の外に丸く溶け出ているのが肉眼で検出でき焼成温度の目安となる。この丸く出たものを蛙目と呼ぶ。

第二次床面の構造と熱対流変化

西長尾5号窯を、以上に述べた3様式の何れかに当てはめることは非常に困難である。ただ、窯体を掘って行く段階から、所々に見られる出土遺物からみて、ほぼ、本窯の概要を知ることができると思われる。第二次床面の燃焼部から焼成部にかけて、握り拳大の須恵質に焼かれた塊が多数折り重なるように出土したが、それは2列目、分焰柱上の第二次床面を中心に両方向へ山形に堆積していた。第二次床面の焼成具合や状況からみて、この地点に火楯として、この堆積物があつたと思われる。2列目を境にして、燃焼部床面ではガラス化した部分は非常に少ない。焼成部上面の特に中央部に分焰柱状の粘土塊を横にして、使用している部分ではガラス化した部分が数か所見られた。このような諸条件からみて、燃焼部と焼成部の温度差は数 10° であると思われる。また火楯部分は、常に焰の回り方や、温度の上昇具合等により、空白地で積まれているため、積み替え、高さを変える事が出来る。また、そうすることにより窯体内雰囲気微妙にコントロールできる。焰の動きや火楯の有無は、窯体形式の決定に重要な役割を果たしている。焰の対流形式は、火楯の有無によって大きく変化する。窯入れ・窯出しでは焚口部の一部分を取り除き、さらに火楯部分を取り除いておこなつたものと思われる。本窯のような小型窯では、焼成温度が極めて不安定なため、強還元域に入る時点で燃料を多量に投入することにより窯体内温度が一時的に低下する。その後も十分に燃料が燃え切らず温度上昇率も低く不安定なため、あらかじめ第二次床面の温度を上昇させておくことや、窯体の焼成表面積を広く取る事等により温度均一化を補助したものと思われる。この焼成部第二次床面は分焰柱上に粘土塊を載せた構造のため、多少の起伏を持ちながら集中煙道部へと続いている。ここで焼成室はおわるが、これもまたおそらく火楯を置くことにより熱の放出を防いだと思われる。

天井部については、完全に崩落して残存せず、その断片もほとんど確認されなかつた。従つて、製品の重ね焼きを考慮し、高さは70~90cmと仮定し、天井部を想定した場合、焰の流れおよび対流方向より本窯の型式は、初期における倒焰式窯と推察する。

(立花 正寛)

第3章 石原畑窯跡

第1節 調査の経過

石原畑窯跡の発掘調査は、昭和51年度から行ってきた亀岡老ノ坂峠から曾我部町風の口に至る延長10kmの国道9号バイパス予定路線内における試掘調査で、石原畑A区、丘陵裾部で灰原を確認し、同地区に窯体があると想定し、実施された。^(注19)

昭和57年度、京都府教育委員会は、昭和55年度試掘調査で確認された石原畑窯跡が老ノ坂・亀岡バイパスの予定路線帯の中央に位置するため、工事に先立ち、事前発掘調査を行い、今後の処置を検討する必要がある旨、日本道路公団に報告した。日本道路公団は京都府教育委員会の指導を受け、昭和57年度4月付で京都府教育委員会を経て当調査研究センターに調査の依頼書を提出し、それを受けて当調査研究センターは同年度事業として発掘調査を行った。

発掘調査は同年6月に開始され、まず、試掘調査で確認されたA区灰原を中心に10×10mの範囲にわたり樹木伐採および周辺部の地形測量を行ったのち、丘陵斜面に直交する形で長さ15m×幅2mの試掘トレンチを4か所設け、遺構の検出に努めた。試掘トレンチの掘削の結果、第1トレンチで灰原を確認した。同灰原内には奈良時代的様相をもつ須恵器杯・皿・蓋などが多量に出土し、第1トレンチより上部に窯体(3号窯)があると考えられた。第2・3・4トレンチでは、窯体に関連した焼土および窯壁2か所(1号窯・2号窯)を確認し、主軸方位が明らかになったため、A区の全面調査に切り換えた。

1・2号窯は、主軸を異にし、各窯の焚口部周辺には円形土坑(SK 01・SK 03・SK 04)、溝状遺構(SD 05)、不明遺構(SX 02・SX 06)が確認できた。特にSK 03は、1号窯の関連遺構と思われ、1号窯が操業を終了したのち、1号窯灰原と地山土を交互に埋め、盛土を行ったのち、2号窯を構築したことが明らかになった。

1・2号窯灰原の範囲を確認するため、田畑部A区250m²にトレンチを設定した。田畑部の掘削の結果、上部はいずれも耕作に際し削平を受け、田畑部の狭い範囲で灰原を確認した。灰原は、焼土および黄褐色粘質土を挟んで2層に分かれ、1・2号窯の遺構検出状況より、上層を推定2号窯灰原、下層を推定1号窯灰原と考えた。

1・2号窯窯体および灰原関連遺構の掘削・図面作成ののち、第1トレンチで確認された灰原の丘陵上部での窯体の確認を予定したが、1・2号窯の土地所有者が異なるため、新たに借地契約および樹木伐採補償締結のため6月1日より1か月間発掘調査を中断した。

土地所有者との各契約締結後、新たに8月よりA区、推定3号窯窯体の発掘調査を再開した。調査が進むにつれ、3号窯の焚口部および燃焼部は、現在使用されている農業用水路下にあるため、発掘調査が行えず、窯体の一部を調査したのみである。また、3号窯上部A区で長さ1m×幅1mの第6トレンチ・第7トレンチ・第8トレンチを設定したが、遺構は確認できず、3号窯の図面処置を行ったのち、調査地全面の埋め戻し作業を行った。埋め戻し作業は、同年11月1日に始まり、すべての作業が終了したのは同年12月1日である。

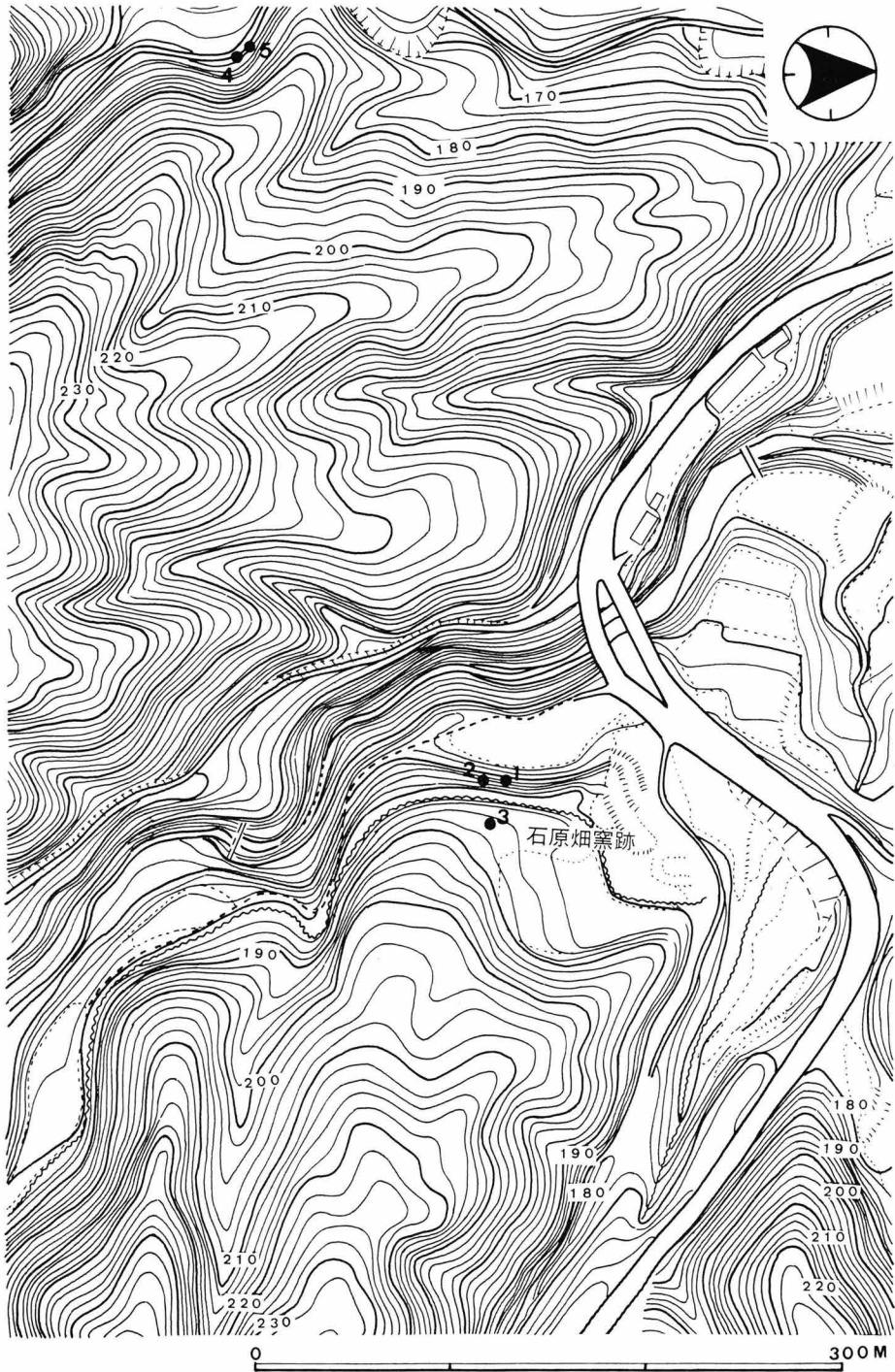
整理事業は現地調査と併行して、洗浄・接合・ネーミング作業を行い、土器実測および各遺構の土器分類作業は、現地調査終了後行った。出土遺物はコンテナ・バット500箱以上の莫大な量にのぼる。今回、報告は主要遺構の整理事業を中心に行い、次年度以降、攪乱部灰原も含めた遺物の検討を行いたい。(石井 清司)

第2節 地形と層位

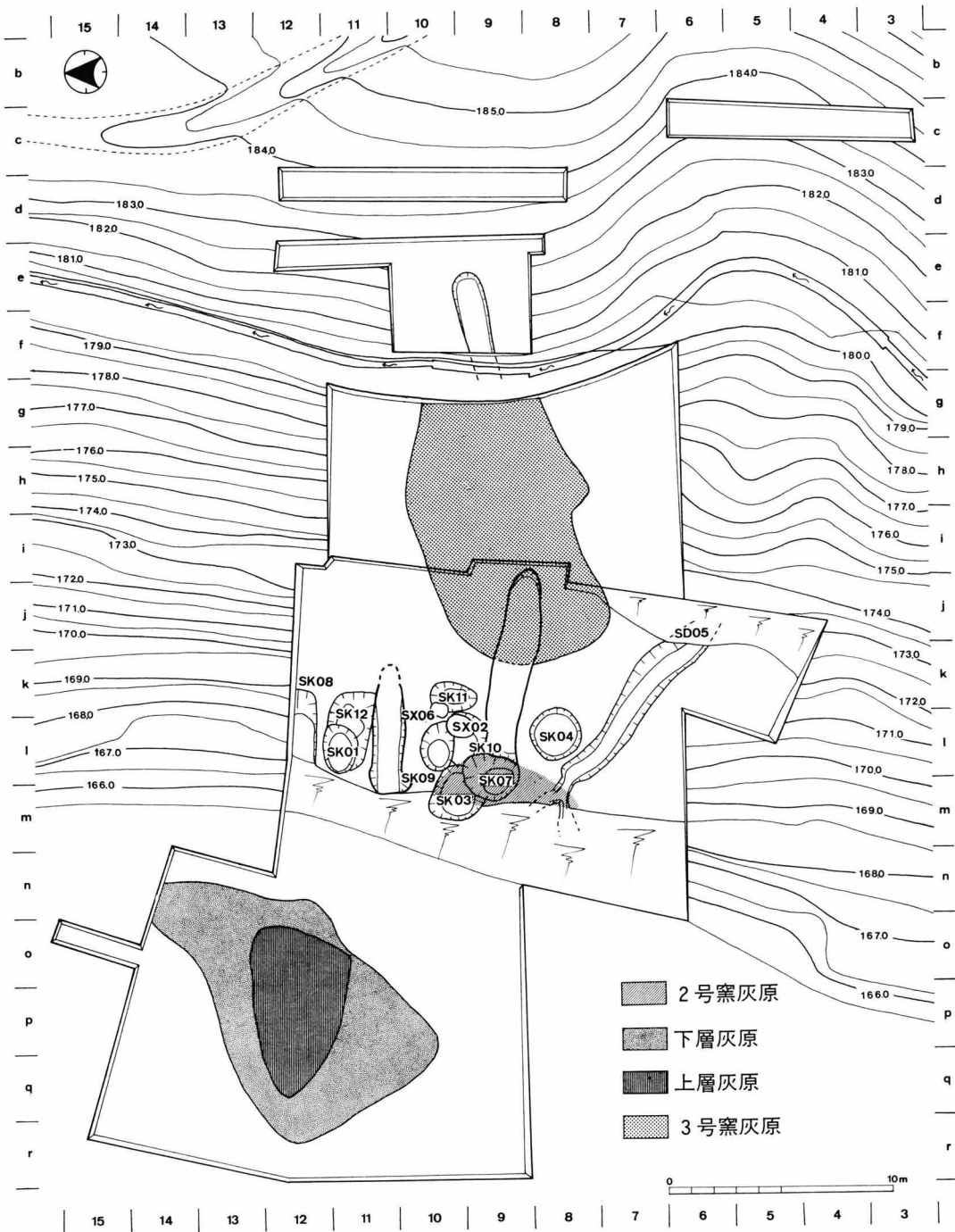
石原畑窯跡は、亀岡盆地西端、亀岡市篠町王子石原畑に所在する。

亀岡盆地西部、篠丘陵は、洪積地の浸蝕作業によりせまい谷地形が無数にあり、石原畑窯跡はその西端、標高245.6mを頂部とし、北東に延びる舌状の丘陵の裾部に立地する。丘陵はゆるく北東に傾斜するが、窯が立地するA○13区からは、丘陵平坦部に向かって傾斜角30~40°の急角度で丘陵が延びる。これは窯が立地する調査地から、南約50mに亀岡盆地西部を縦断する鶴川の起点があり、谷水を集めた鶴川の氾濫による浸蝕作用のため丘陵端部が削られたものと思われる。このことはo~q区田畑部の地山断ち割りの際、40~50cmを測る円礫を含む粗い砂質土が2m以上堆積していることより窺える。

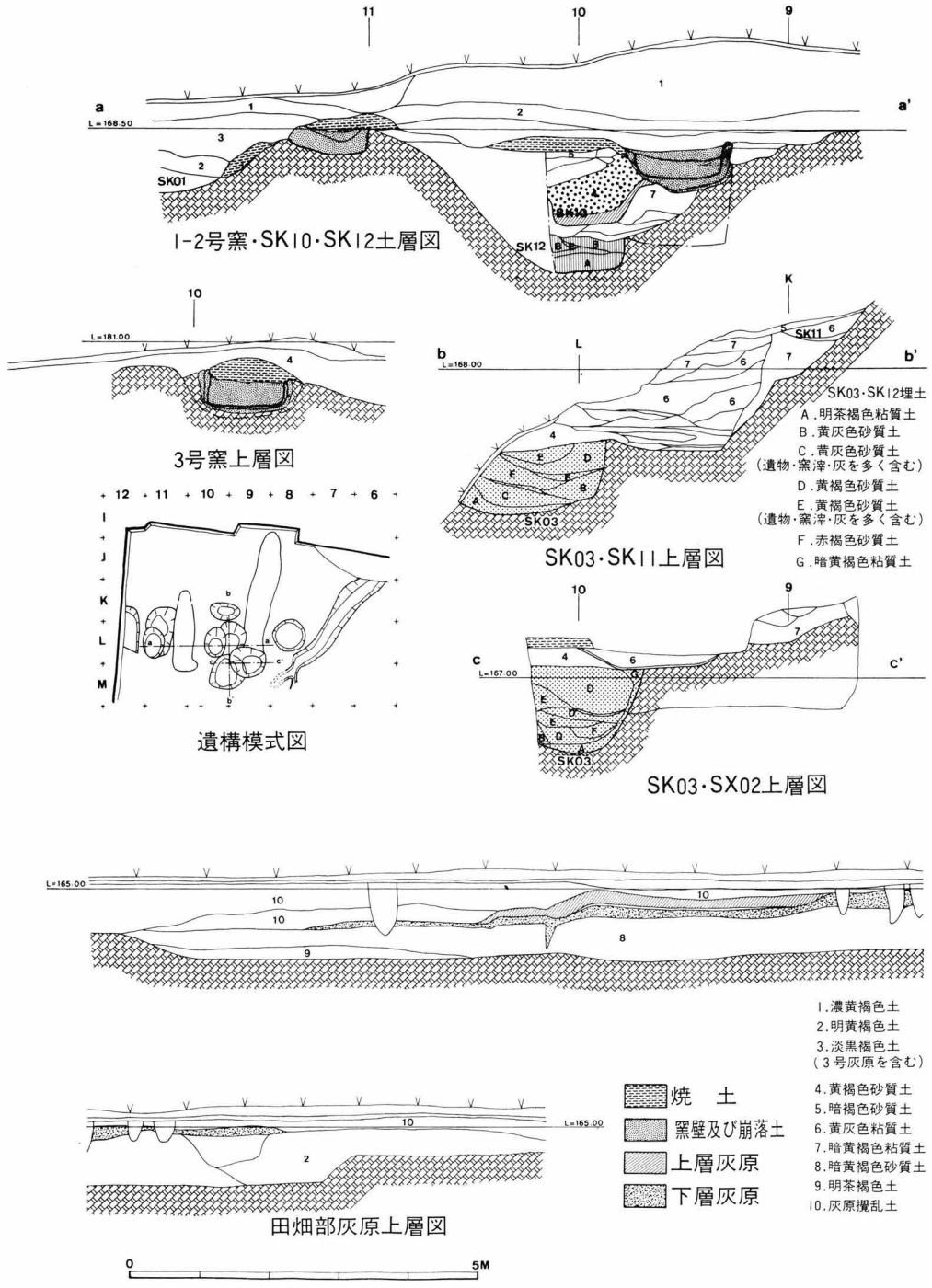
石原畑1・2号窯は標高166.5~173.0m、地山傾斜角40°の急斜面に立地し、1号窯焚口部および前庭部は後世、田畑の開墾に際し削平を受け遺存しない。1・2号窯窯体上部の基本層位は、表土下・濃黄褐色土層(厚さ50~120cm)・明黄褐色土層(厚さ20~30cm)・淡黄黒褐色土層(厚さ20~40cm)が堆積し、それを除去すると焼土および窯壁の一部が検出できる。窯体上部の淡黒褐色土層には遺物および灰層が混入している。これは、当初1・2号窯上部に堆積している3号窯灰原が、後世土砂崩れにより1・2号窯の上部を覆ったことを示しており、事実、堆積層内に3号窯関連遺物とともに瓦器碗が混在していた。1号窯焚口部は、標高166.6mを測り、焚口部南北の西側に、窯の関連遺構と思われるSK01・SK03・SK09・SK12がある。2号窯焚口部は、標高168mを測り、1号窯と同様、その関連遺構としてSK04・SK07・SD05がある。1・2号窯は3mの間隔をお



第32図 石原畑窯跡地形図



第 33 图 石原畑窯跡遺構配置图



第34圖 石原畑窯跡土層断面図

いて隣接し、出土遺物よりその前後関係は考え難いが、1号窯の関連遺構であるSK 03の掘削の結果、1号窯が2号窯に先行することが明らかになった。SK 03の埋土は、下層より明黄褐色粘土層(厚さ10~30cm)・黄灰色砂質土層(厚さ10~30cm, 遺物, 窯滓を多量に含む)・焼土層(厚さ5cm)・黄灰色砂質土層(厚さ10~30cm)・黄褐色砂質土層(厚さ10~20cm, 遺物, 窯滓を多量に含む)と堆積し、地山近似土と遺物を多量に含む黄灰(褐色)砂質土が互層に堆積し、SK 03の上面輪郭が2号窯燃焼部下層の断ち割りの結果確認されたことより、SK 03を埋め、盛土したのち2号窯を操業したことが明らかである。

1・2号窯灰原は、後世、開墾時に削平を受け、遺存状態が悪く、各窯の焚口部から続く灰原は丘陵裾部で切れ、田畑部へは直接灰原が続かない。Ar~n・6~13区田畑部の基本層位は、表土下床土(厚さ5~10cm)・灰原攪乱層(厚さ20~50cm, 1・2号窯関連遺物のほか、近世陶磁器を含む)があり、その下に攪乱時の遺物を含まない灰原層がある。灰原層は、焼土を含む明赤褐色土をはさんで3層に分かれる。灰原下層は遺物を少量含む暗黄褐色土層が50~80cm堆積し、その下に40~50cmの円礫を多量に含む暗褐色砂質土(地山)となる。

3号窯は、1・2号窯の上部、標高180~182mに立地し、基本層位は表土下、黄褐色砂質土層(厚さ20~40cm)があり、その下層より焼土および窯壁の一部が検出できた。3号窯が立地する丘陵の地山が粘板岩質の岩盤であり、それを穿って3号窯を構築している。

(石井 清司)

第3節 検出遺構

石原畑窯跡では3基の半地下式宍窯(1・2・3号窯)と9基の不整あるいは円形土坑(SK 01・SK 03・SK 04・SK 07・SK 08・SK 09・SK 10・SK 11・SK 12)、溝状遺構(SD 05)、炉跡と思われる焼土坑(SX 02・SX 06)がある。

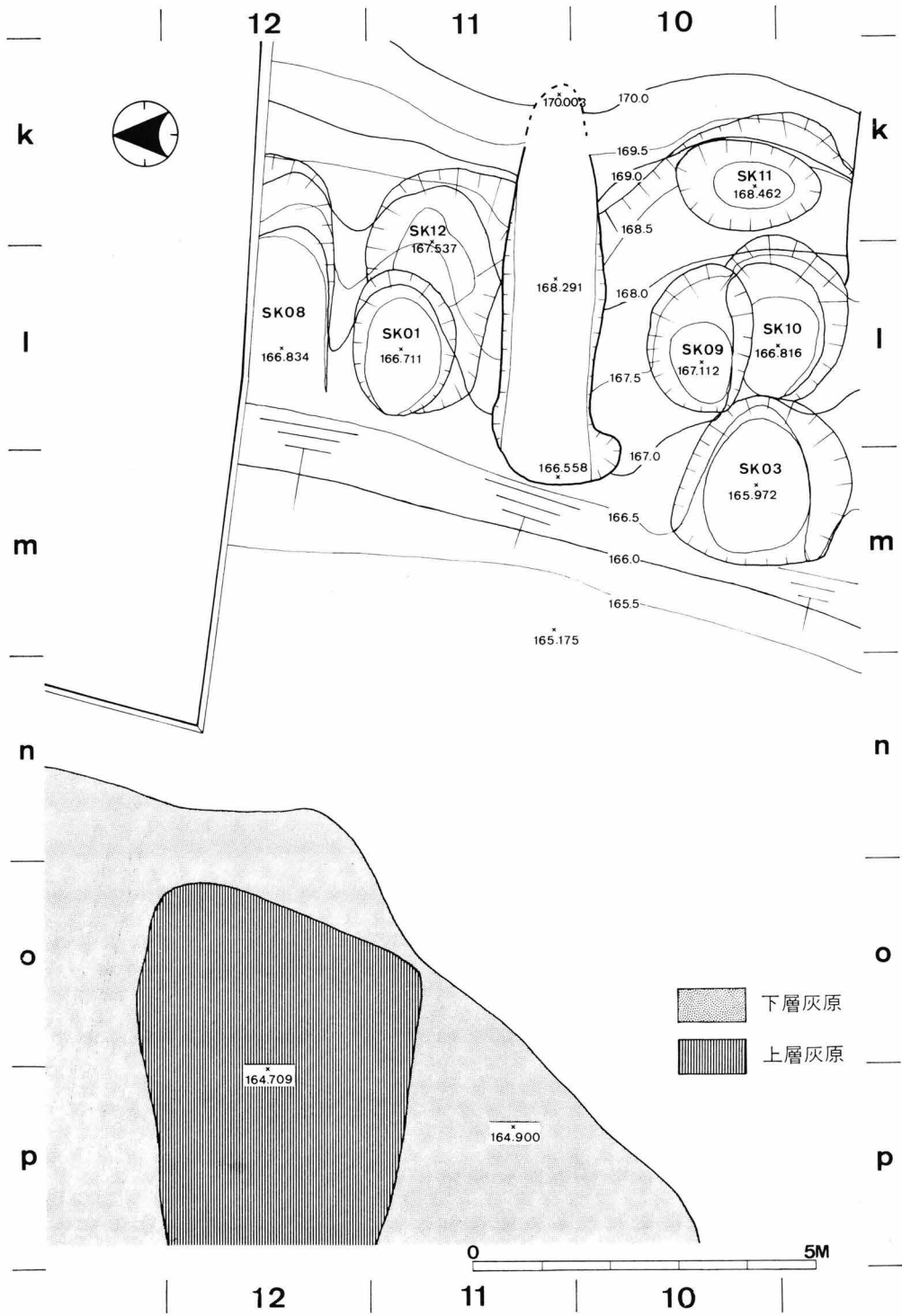
以下、各遺構の概略を記す。

1. 石原畑1号窯(第35・36図)

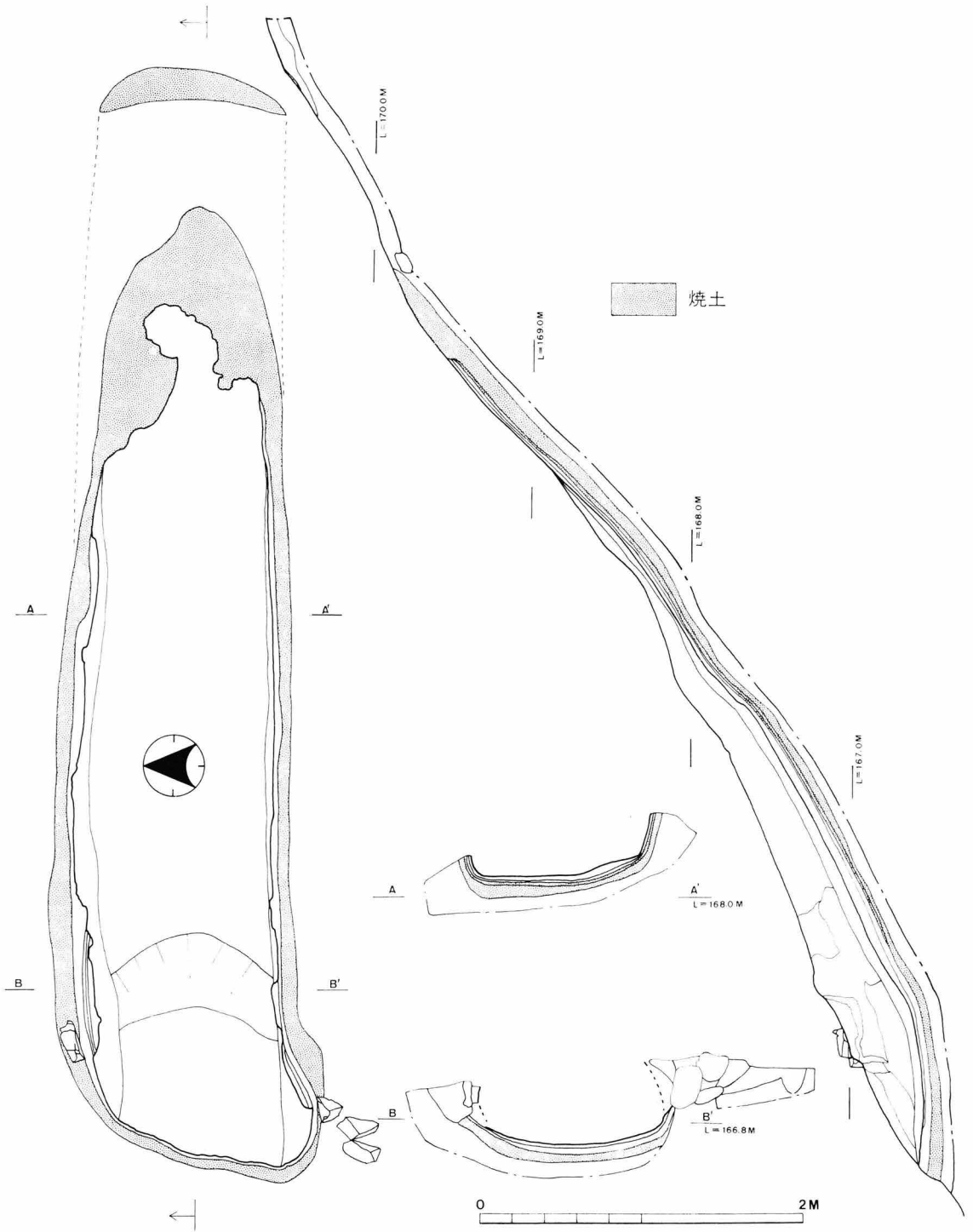
1号窯は丘陵西側斜面(傾斜角40°)の自然地形を利用して構築された半地下式宍窯である。

1号窯は2号窯の北約3mに隣接し、明黄褐色粘質土の地山を掘り込み、天井部および側壁にスサ入り粘土を貼りつけたもので、床面は段を持たない無段式である。

窯体規模は現存長約5.0m・床面最大幅約1.3mを測り、床面傾斜角は31°を測る。窯体の主軸方位はN90°Eである。



第35図 石原畑1号窯遺構図



第 36 图 石原畑 1 号窯窯体图

焚口部および前庭部

焚口部および前庭部は耕地開墾のため削平されており、遺存状態は悪く、現存長約60cm・床面最大幅は約1.0mを測り、焚口部から前庭部に向かって約30°の角度で外方に広がる。ことが南側窯壁によって認められる。前庭部床面は低くなった焚口部に向かってやや傾斜面をなし、床面は酸化炭により低温で焼かれている。側壁は中央部が低く彎曲した床面より鈍角的に約44cm立ちあがり、焚口部両側壁外面には、天井部の崩落を防ぐためと考えられる人頭大の石があてられている。

前庭部に完形品を含む須恵器(杯身・杯蓋)など10数個体が窯壁小片を多量に含む床面直上に散在した状態で出土しており、製品取り上げの際取り残されたものが窯の廃棄後、前庭部まで押し流されてきたものと考えられる。

燃 焼 部

焚口部から焼成部の傾斜にいたるまでの斜面を燃焼部と考える。

燃焼部は長さ約90cm・床面最大幅約1mを測り、焼成部に向かって19°の角度で傾斜する。床面は1枚のみで表面下6~7cmまで青灰色に還元し、焚口から焼成部に向かって酸化層・弱還元層・強還元層へと変化している。側壁は中央部が低くやや彎曲した面をなし、床面より鈍角的に約40cm立ちあがる。南側壁では4回以上の修復作業が認められた。

焼 成 部

焼成部は長さ約3.2m・床面最大幅約1.8mを測り、煙道部に向かって26°の角度で傾斜する。煙道部と焼成部の境は、煙道部が山道によって削平を受け確認が困難であったが、床面の傾斜変換点をそれと推定した。床面は3~6cmの青灰色還元層1枚のみで、燃焼部同様、修復作業はなされていない。側壁はフラットな床面から鈍角的に約30cm立ちあがり、一部2回以上の修復作業が認められる。側壁にはスサ入り粘土が貼られ、表面には手の圧痕がある。

煙 道 部

煙道部は山道により削平を受け現存長約1.2mを測るが、煙道部と焼成部との境より約2mで赤色酸化土層が認められ、煙道部の長さは2m以上と考えられる。これにより窯体全長も6.7m以上と考えられる。

灰 原

灰原は耕地開墾により削平され全容を知り得なかったが、1号窯焚口より西方約16mにおいて検出された。1号窯灰原は現地地表下約1.2mに、厚さ8~10cm堆積しており、

南北約 14 m・東西約 10 m の範囲で広がる。検出された灰原は、扇状に広がる灰原の北西端部と考えられるが、灰原の北西方向への大きな片寄り、旧地形の北西方向への傾斜によるものである。なお、灰層の土質変化の検出は灰原端部であったため、厚さも薄く、検出不可能であった。

2. 石原畑 1 号窯関連遺構 (第35図)

1 号窯関連遺構は SK 01・SK 03・SK 08・SK 09・SK 10・SK 11・SK 12 があり、各土壇は 1 号窯の南北に隣接し、操業時の施設あるいは補修用の粘土だめの性格を持つものと考えられると同時に、窯の両側を低くすることによる排水施設とも考えられる。なお、各土壇は 2 号窯構築時に埋め戻されている。

SK 01

SK 01 は 1 号窯の北約 0.4 m に位置し、地山に掘り込まれた円形の土壇で、東側の一部が削平を受けているが、東西 2 m 以上・南北約 1.9 m・深さ約 0.55 m を測る。埋土は上層より暗黄褐色土層・明黄褐色粘質土層・灰褐色粘質土層の 3 層に分かれ、粘質土層で完形品を含む 20 点以上の土器が出土した。

SK 03

SK 03 は 1 号窯の南約 1 m に位置し、ほぼ円形の土壇で径約 2.4 m・深さ約 1.2 m を測る。埋土は基本的に上層より、土器・窯滓・灰を含む黄褐色砂質土層と無遺物層の明黄褐色粘質土層の 2 層に分かれる。

SK 08

SK 08 は 1 号窯の北約 2.4 m に位置する土壇で、東西 3.2 m 以上・南北 0.6 m 以上・深さ 0.8 m 以上を測る。遺構がトレンチ北壁に接しているために全容を明らかにすることはできないが、トレンチ北側に広がる円形の土壇と考えられる。埋土は上層より暗黄褐色灰層・明黄褐色粘質土・粘土層である。

SK 09

SK 09 は 1 号窯の南約 2.2 m に位置した長円形の土壇で、東西約 1.8 m・南北約 2.4 m・深さ約 1.6 m を測る。埋土は SK 03 と同様に 1 号窯廃棄時に埋め戻されている。埋土の基本層位は窯滓・焼土・灰を含む上層と無遺物層との 2 層に分かれる。

SK 10

SK 10 は SK 09 の北に接して位置した土壇で、SK 09 により南半部が切られており、その全容は明らかでないが、東西 0.6 m 以上・南北 2.4 m・深さ 0.5 m 以上を測る。

SK 11

SK 11 は 1 号窯の南約 1.3 m に位置する不整形な土壇で、東西約 1.9 m・南北約 1.6 m・

深さ約 0.28 m を測る。埋土は上層より暗黄褐色粘質土層(スミ・焼土を多く含む)・暗灰色粘質土の 2 層に分かれる。

SK 12

SK 12 は 1 号窯の北に接し SK 01 の東に位置する方形に近い土塚で、東西約 1.2 m・南北約 1.4 m・深さ約 0.5 m を測る。

3. 石原畑 2 号窯 (第37・38図)

2 号窯は 1 号窯の南側約 3 m に隣接して、1 号窯と同様、丘陵西斜面(傾斜角 40°)の自然地形を利用して構築された半地下式窖窯である。

2 号窯は 1 号窯同様、黄褐色粘質土の地山を掘り込んだ後、床面および側壁に粘土(側壁および天井部にはスサを含む)を貼りつけたもので、床面は段を持たない無段式である。なお、燃烧部から前庭部にかけては水平面をなすように 1 号窯の関連遺構である各土塚(SK 01・SK 03・SK 08・SK 09・SK 10・SK 11・SK 12)を埋め戻し、最大約 90 cm の土盛を行った後に掘り込んで構築されている。

窯体規模は全長約 8.4 m・床面最大幅約 1.2 m を測り、床面傾斜角は $30^{\circ}30'$ となる。窯体の主軸方位は $N100^{\circ}E$ である。

焚口部および前庭部

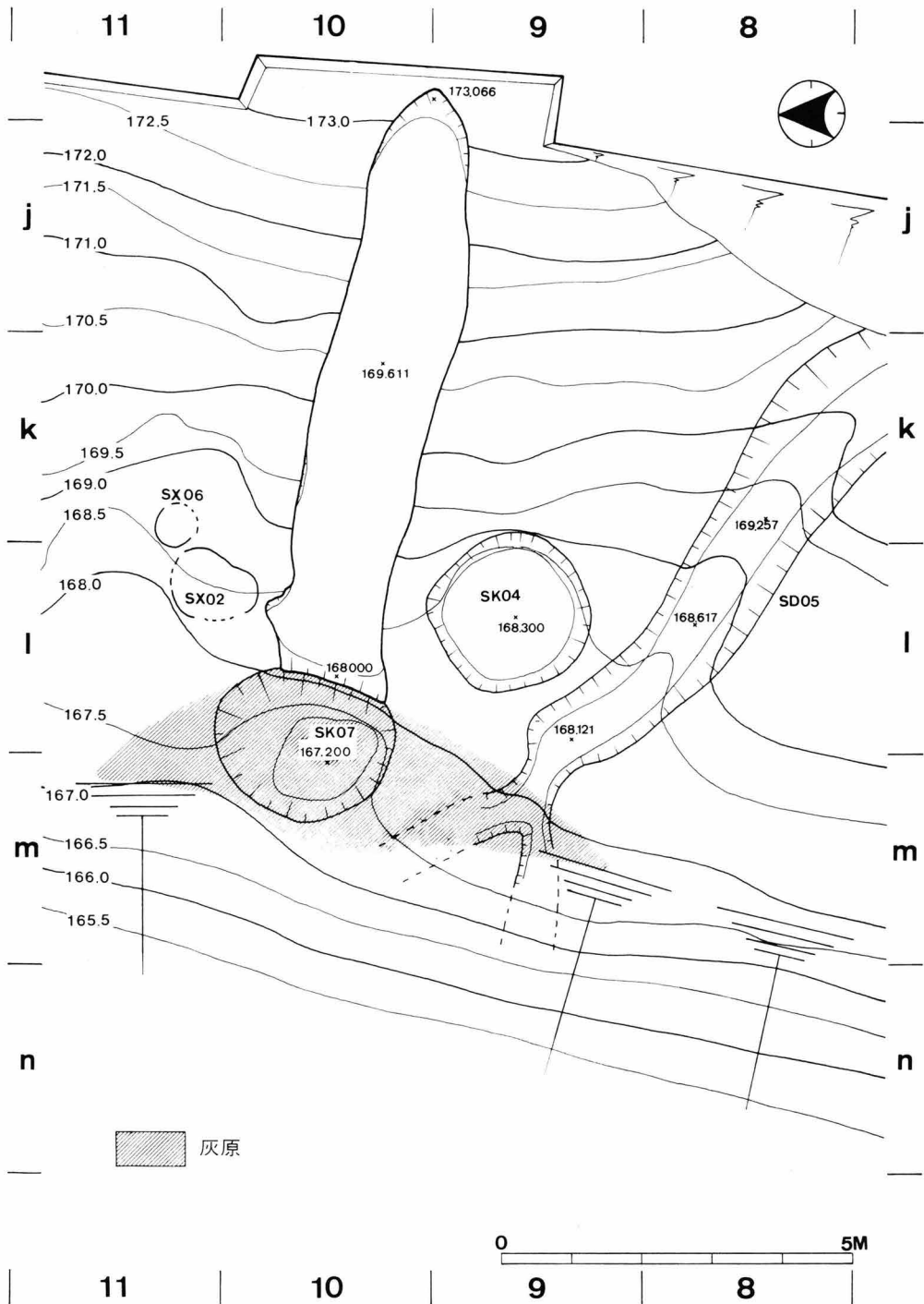
焚口部および前庭部は遺存状態が良く、長さ約 1.2 m・床面最大幅は約 1.1 m を測り、焚口部から前庭部に向かっての広がり無く、直線的である。前庭部は低くなった焚口部に向かってゆるやかに傾斜し、床面は 1 枚のみで修復作業は行われず、還元炎により低温で焼かれている。側壁はほぼフラットな床面より垂直に約 42 cm 立ちあがり、焚口部両壁面の外面には 1 号窯同様、天井部の崩落を防ぐためと考えられる人頭大の石があてられている。

燃 焼 部

燃烧部は焚口部から焼成部の傾斜変換点にいたるまでの斜面と考えられる。燃烧部の長さは約 1.1 m・床面最大幅約 1 m を測る。床面は焼成部に向かって 25° で傾斜し、1 枚のみで修復作業は行われず、床面下 2~6 cm まで青灰色に還元し、焚口部から焼成部に向かって酸化層・弱還元層・強還元層へと変化している。側壁はフラットな床面から鈍角的に約 50 cm 立ちあがり、遺存状態も良く、5 回以上の修復作業が認められる。

焼 成 部

焼成部は長さ約 4.6 m・床面最大幅約 1.2 m を測り、煙道部に向かって 34° で傾斜する。焼成部と煙道部の境は、構築当初床面に約 10 cm の段差を持ち、床面幅をやや狭くしている。しかしながら段差は、火の調整の必要からか、直線的な傾斜面に修復作業がなされている。この修復作業は床面から側壁にいたるものが 1 回、側壁だけのものが 2 回以上と考



第 37 图 石原畑 2 号窯遺構図

えられる。側壁は中央部が低く彎曲した床面から鋭角的に約 68 cm 立ちあがり、表面には手の圧痕が認められる。なお、床面直上に完形の壺が 6 個体 1 群で出土しており、製品取出しの際取り残されたものと考えられる。

煙道部

煙道部は長さ約 1.6 m・床面最大幅約 90 cm を測り、床面傾斜角は 39° である。床面および側壁とも強還元を示す青灰色に焼けてしまっており、煙道部の火のひきは良かったものと考えられる。煙道部床面はフラットになり、側壁もほぼ垂直に約 60 cm 立ちあがる。奥壁については焼成部と煙道部の境より約 1 m の点で傾斜が 50° に変化したのち、上方に引き上げられると考えられる。

灰原

灰原は 1 号窯でも述べたように耕地開墾により削平され、2 号窯焚口部より北西約 11 m において灰原北端部が検出された。2 号窯灰原は 1 号窯灰原の直上に暗黄褐色土層の間層をはさんで上面に重複し、現地表下約 70 cm に厚さ 8~10 cm 堆積しており、南北約 5 m・東西約 4.5 m で広がる。検出された灰原が北西方向に大きく片寄るのは 1 号窯灰原と同様、旧地形の北西方向の傾斜によるものと考えられる。

4. 石原畑 2 号窯関連遺構 (第37図)

SK 04

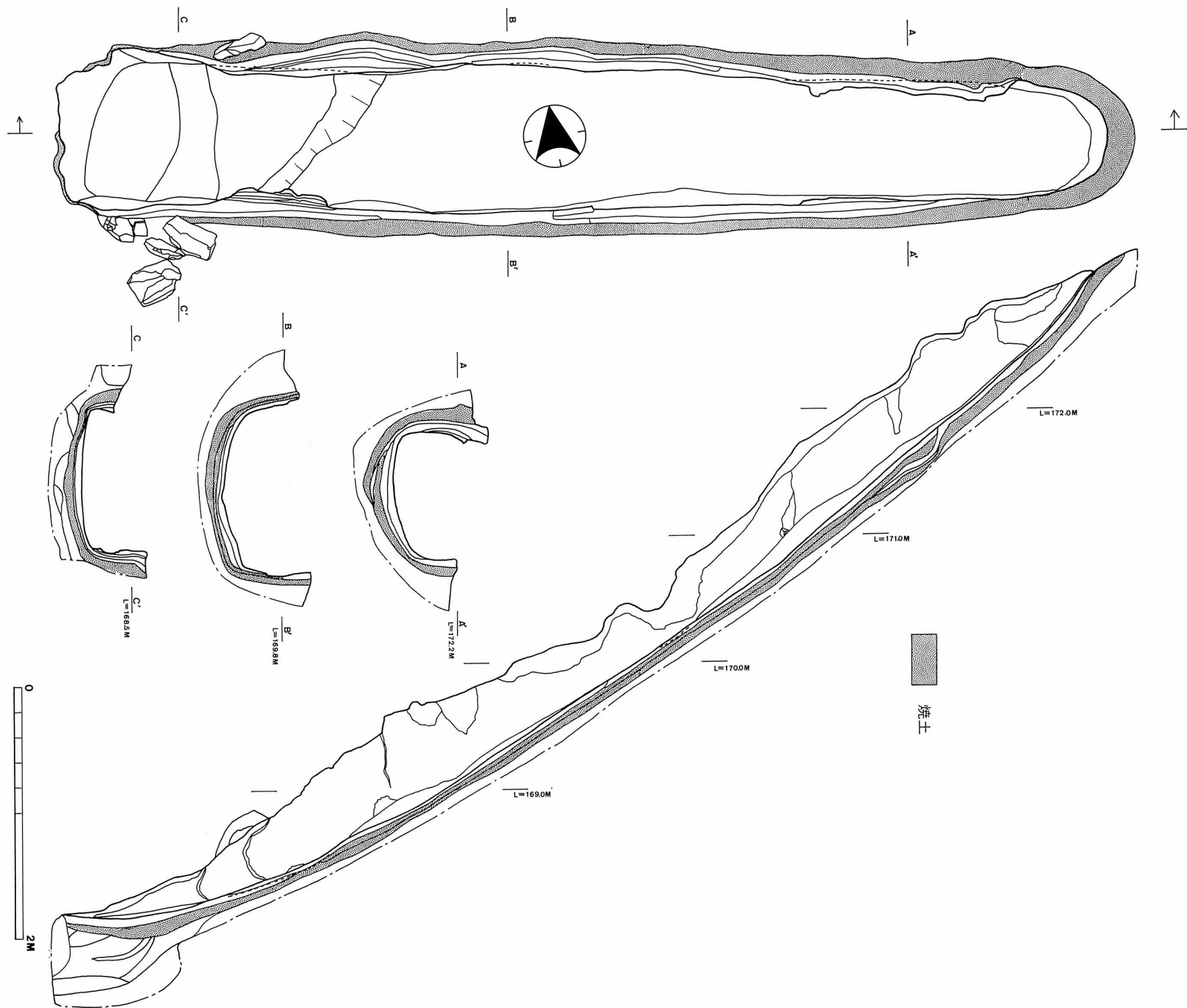
SK 04 は 2 号窯の南約 40 cm に位置し、3 号窯灰原の崩れによる堆積層を掘り込んだ円形の土坑である。直径約 2.3 m・深さ約 0.3 m を測り、埋土は上層より暗黄褐色灰層・明黄褐色粘質土・暗黄褐色粘質土・明灰色粘質土・明黄褐色粘土の 5 層に分けられ、各層には多量の土器が含まれている。

SD 05

SD 05 はトレンチ南西部端より 2 号窯焚口部に向かって検出された溝で、焚口部付近で 2 方向に分かれる。検出長約 9.5 m・最大幅約 1 m・深さ約 0.15~0.6 m を測る。溝の東南半部は岩盤を「U」字状に掘り込み、埋土は青灰色粘土の単層で、北西半部については暗黄灰色粘質土を掘り込み、埋土は明黄灰色粘質土の単層となる。なお、溝の検出されたところは旧地形では小さな谷筋になっており、現在も水が流れており、溝は排水施設と考えられる。

SK 07

SK 07 は 2 号窯前庭部西側に接し、2 号窯構築時の盛土層を掘り込んだ楕円形の土坑である。東西約 1.6 m・南北約 2.4 m・深さ約 0.28 m を測り、東側が 2 段に落ち込んでおり、埋土は黒褐色灰層の単層である。この土坑の性格は、窯出しの際の灰を落とすための施設か、あるいは操業時の作業用足場とも考えられる。



第 38 图 石 原 畑 2 号 窑 窑 体 图

5. 石原畑3号窯 (第39・40・41図)

3号窯は2号窯東側約8mに位置し、丘陵西側斜面上部(傾斜角20°)の自然地形を利用して構築された半地下式窖窯である。

3号窯は緑褐色岩盤の地山を掘り込んだ後、床面および側壁に粘土(天井部にはスサを含む)を貼りつけたもので、床面は段を持たない無段式である。窯体規模は現存長約3.9m・最大幅約1.1mを測り、床面傾斜角は32°を測る。窯体の主軸方位はN78°Eである。なお、窯体の前庭部・焚口部・燃烧部・焼成部の一部が農業用水路の下に潜り込み、その全容を知り得なかった。

焼成部

焼成部は現存長約2.8m・床面最大幅約90cmを測り、煙道部に向かって32°で傾斜する。焼成部と煙道部の境は、床面に約18cmの段差を持ち、床面幅をやや狭くしている。また、

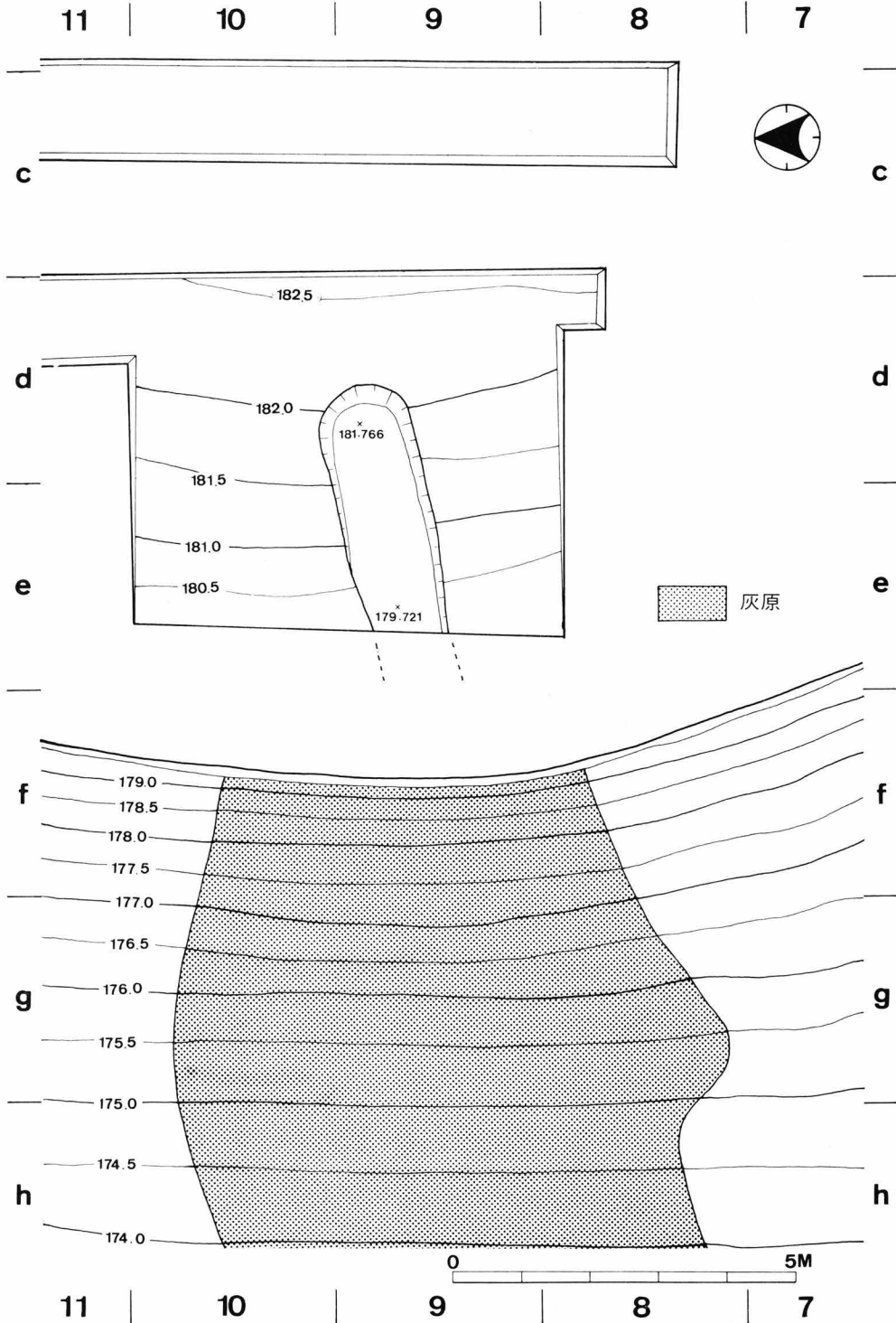
焼成部床面は粘土を貼りつけず直接岩盤を使用している。側壁は中央部が低く彎曲した床面から垂直に約80cm立ちあがり、焚口部の側壁は岩盤をそのまま利用し、煙道部側にいくにつれ、床面のみが岩盤を利用し、側壁は黄褐色粘質土に厚さ4~10cmのスサ入り粘土が貼りつけられている。70個体以上の土器片(杯・蓋など)が床面上に散在しており、ほとんどが半完形品であることから、窯の最終操業時に放置されたものと考えられる。

煙道部

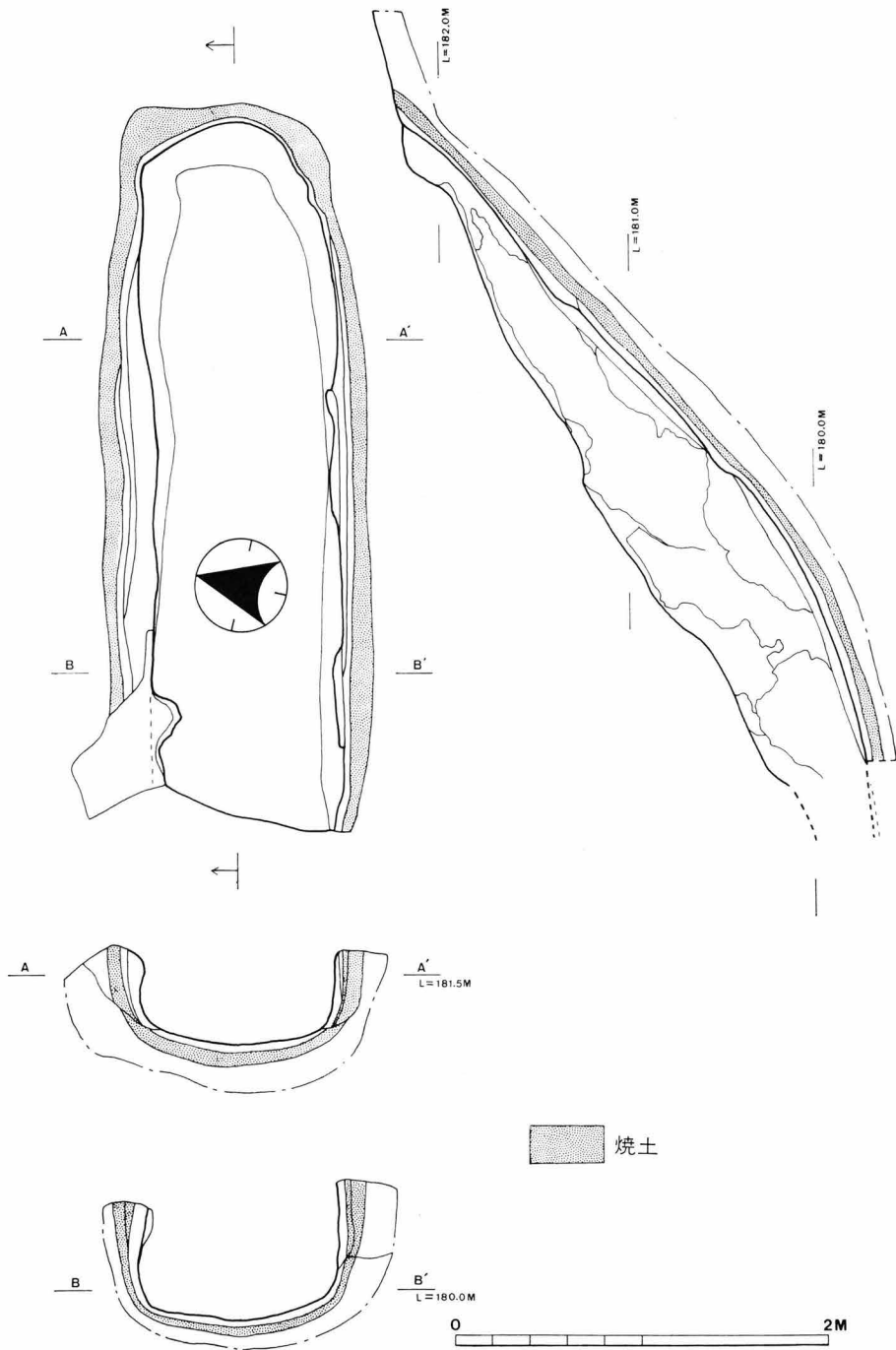
煙道部は長さ約1.1m・床面最大幅約75cmを測り、床面傾斜角は42°である。床面は粘土が岩盤に貼りつけられ、還元炎により強く焼きしめられていることから、煙道部への火の引きは良かったものと考えられる。側壁は、ほぼフラットな床面から約



第39図 石原畑3号窯窯体内遺物出土状態



第40図 石原畑3号窯遺構図



第41图 石原畑3号窯窯体图

20cm 鈍角的に立ちあがる。

灰 原

前庭部付近の灰原は農業用水路により検出作業が行えなかったので不明であるが、表土直下に前庭部より窯体の中軸線をはさんでほぼ対称に東西約8m・南北約8m・厚さ約30～50cmの範囲に扇状に広がり、さらに流出によると考えられる灰層が、北は1号窯、南はSD05にまで広がっている。

6. その他の遺構（第37図）

SX 02・SX 06

SX 02・SX 06 は2号窯焚口部の北0.5～1.5mにあり、2号窯操業ののち、構築された焼土壇である。SX 02 は直径約1.5mの範囲に焼土があり、両側部に角礫を据え、中央には窯壁を転用した台部があり、炉跡と思われる。SX 06 は直径約0.8mの範囲に焼土があり、SX 02 と同様に角礫を据える。

（波多野 徹）

第4節 出土遺物

石原畑窯跡出土遺物は3基の窯体および灰原内のほか、その関連遺構より多量の遺物が出土し、コンテナ・バット500箱以上をかぞえる。

土器は須恵器が99%以上を占め、そのほかに土師器・瓦器が十数点をかぞえるのみである。

整理作業は現地調査と併行して洗浄を行い、現地調査終了後、接合・ネーミング・実測作業を行っているが、報告書提出期日の関係上、今回は一括資料と考える遺物を取り上げ、その代表的な器形は、完形あるいは完形に復元し得るものを優先的に図示し、特異な器形については細片も図示することとした。分類作業は全体の2/3以上を残す破片の個数を測り、そのうち、完形あるいは完形に復元し得る資料については法量を計測した。

1. 石原畑3号窯窯体内出土遺物（第43図）

3号窯窯体内には、杯A・B・C、皿A・B、蓋Aなどがある。

杯A(1～7)は、平底あるいはわずかに丸みをもつ底部より、斜め上方に直線的に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は丸みをもっておわる。口縁部内・外面にはロクロナデ、内底面中央には一方向のナデを施し、底部外面はヘラ切りをそのまま残す。口径は12.0～13.0cm・器高3.7～4.0cmを測る。

杯B(15～18)は、底部より斜め上方に直線的に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみにおわる。底部縁端部より内側に、外方に踏んばった高台を貼りつける。調整は杯Aと同様である。杯Bは口径10.7cm・器高4.1cmを測るもの(15)と口径15.5cm・器高4.6～6.0cmを測るもの(16～18)がある。

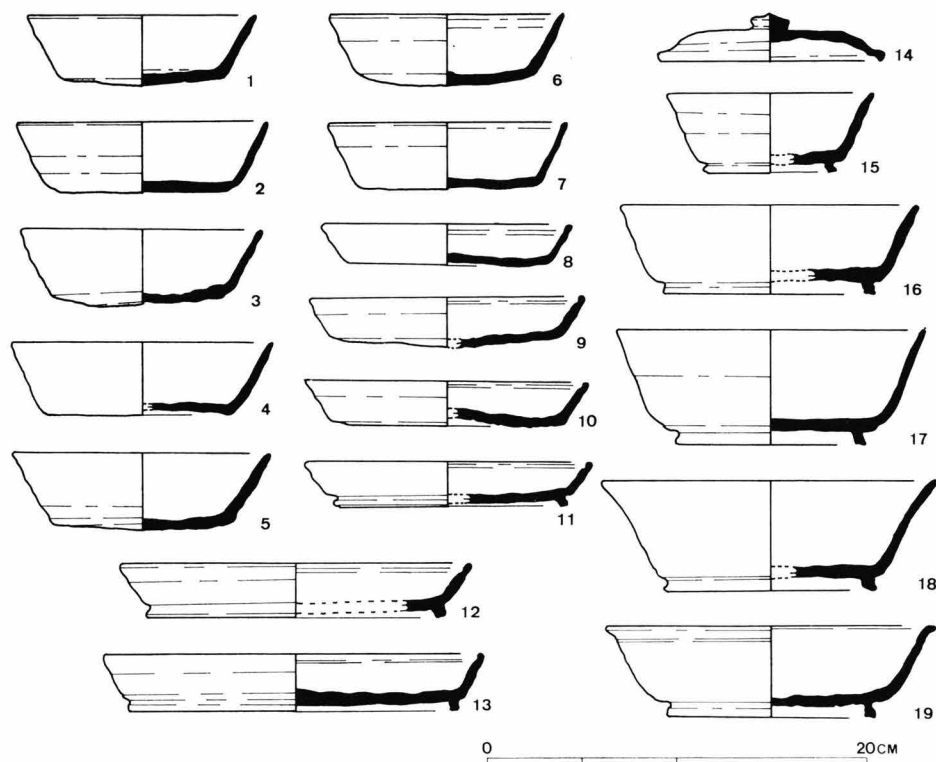


第42図 石原畑窯跡 SX02・SX06 遺構図

杯C(19)は、底部よりやや丸みをもって斜め上方に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部で強く外方に屈曲させる。底部縁端部より内側に、外方に踏んばった高台を貼りつける。調整は杯A、杯Bと同様である。口径17.3cm・器高4.8cmを測る。

皿A(8～10)は、上げ底あるいは平底の底部より斜め上方に直線的に短く立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は丸くおわり、内側に1条の明瞭な沈線をめぐらす。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面中央は一方向のナデ調整を施す。底部外面はヘラ切りののち、一部ナデ調整を施す。口径13.0～14.8cm・器高2.1～2.5cmを測る。

皿B(11～13)は、底部より斜め上方に短く立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は丸くおわり、内側に1条の明瞭な沈線をめぐらす。底部縁端部より内側に外方に踏んばった高台を貼りつける。調整は皿Aと同様である。口径15.0～19.8cm・器高2.3～3.0cmを測る。



第43図 石原畑3号窯窯体内出土遺物
杯A；1～7，杯B；15～18，杯C；19，皿A；8～10，皿B；11～13，蓋A；14

2. 石原畑3号窯灰原内出土遺物（第44・45図）

3号窯灰原内には多量の須恵器が出土しており、コンテナ・バット60箱以上をかぞえるが、一部1・2号窯と思われる遺物が混在しているため、ここでは3号窯の純粹遺物を抽出した。

出土遺物は、杯A・B・C，椀A，皿A・B，大型皿B，蓋A・B・D，大型蓋A，短頸壺，平瓶，盤，高杯などがある。

杯A(21～29)は、平底あるいは丸底ぎみの底部より、口縁部は斜め上方に立ちあがり、口縁端部が尖りぎみにおわるものと、丸みをもっておわるものがある。杯Aは口径10.2～16.0cm・器高3.0～4.3cmを測り、口径12～14cm・器高3～4cmのものが主体を占める。

杯B(37～43)は、底部より斜め上方に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部が上方に尖りぎみにおわるものとわずかに外反させるものがある。底部縁端部より内側に外方に踏んばった高台を貼りつける。杯Bは口径10.4～24.2cm・器高3.5～6.4cmと法量に差異があり、口径13.0～14.5cm・器高3.5～4.5cmのものが主体を占める。

器種		個体数	比率 (%)
食	杯 A	434	24.7
	杯 B	289	16.5
	杯 C	98	5.6
	皿 A	240	13.7
	皿 B	166	9.5
	蓋 A	402	22.9
	蓋 B	59	3.4
	蓋 D	2	0.11
器	椀	2	0.11
	鉢	3	0.17
	盤	8	0.46
貯蔵器	壺 A a	20	1.1
	短頸壺	2	0.11
	平瓶	1	0.05
	甕	11	0.63
その他	円面硯	2	0.11
	その他	15	0.85
計		1,754	100.00

付表 8 石原畑 3 号窯出土遺物集計表

杯 C (65・66) は、底部より丸みをもって屈曲したのち、斜め上方に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部を外方に強く屈曲させる。底部縁端部より内側に、外方に踏んばった高台を貼りつける。杯 C は口径 16.0～19.0 cm・器高 4.6～5.7 cm を測り、蓋 B とセットをなすと思われる。

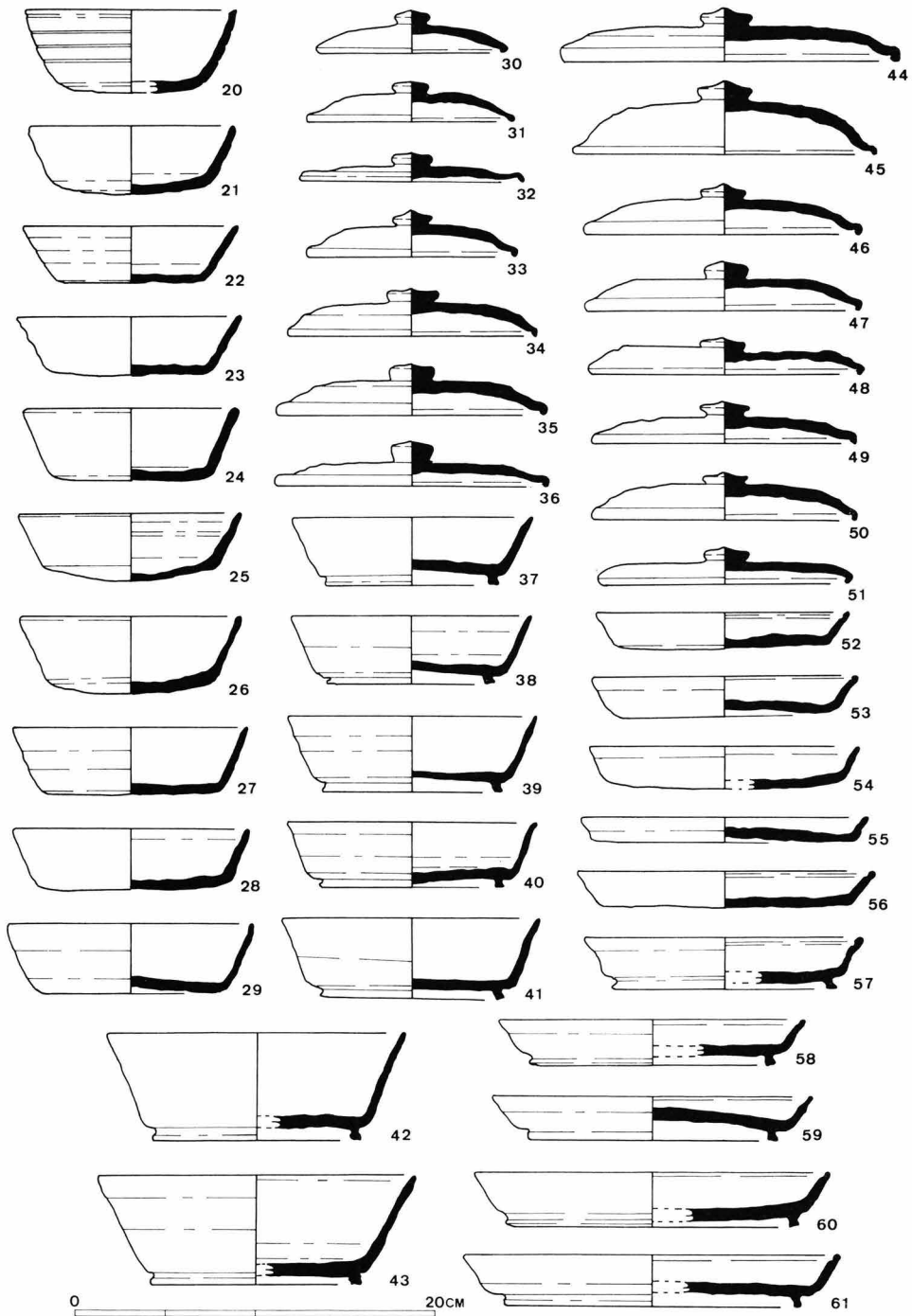
椀 A (20・67) は、平底の底部より内彎ぎみに立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は内側に平坦面をもつもの(20)と尖りぎみにおわるもの(67)がある。20は口縁部外面に4条の明瞭な沈線がめぐり、67は口縁部外面下半に横方向のヘラ削りをとどめる。

皿 A (52～56) は、上げ底あるいは平底の底部より、斜め上方に短く立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部が尖りぎみにおわるもの(54・55)と丸みもち内側に明瞭な沈線をめぐらすもの(52・53・56)があり、後者が主体をなす。皿 A は口径 12.8～20.6 cm・器高 1.2～3.1 cm を測り、口径 14.0～16.5 cm・器高 1.8～2.5 cm が主体をなす。

皿 B (57～61) は、底部より斜め上方に短く立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部はいずれも内側に明瞭な沈線をめぐらす。底部縁端部より内側に、外方に踏んばった高い高台を貼りつける。皿 B は、口径 13.6～22.8 cm・器高 2.0～3.8 cm を測り、口径 18.0～20.0 cm が主体をなす。

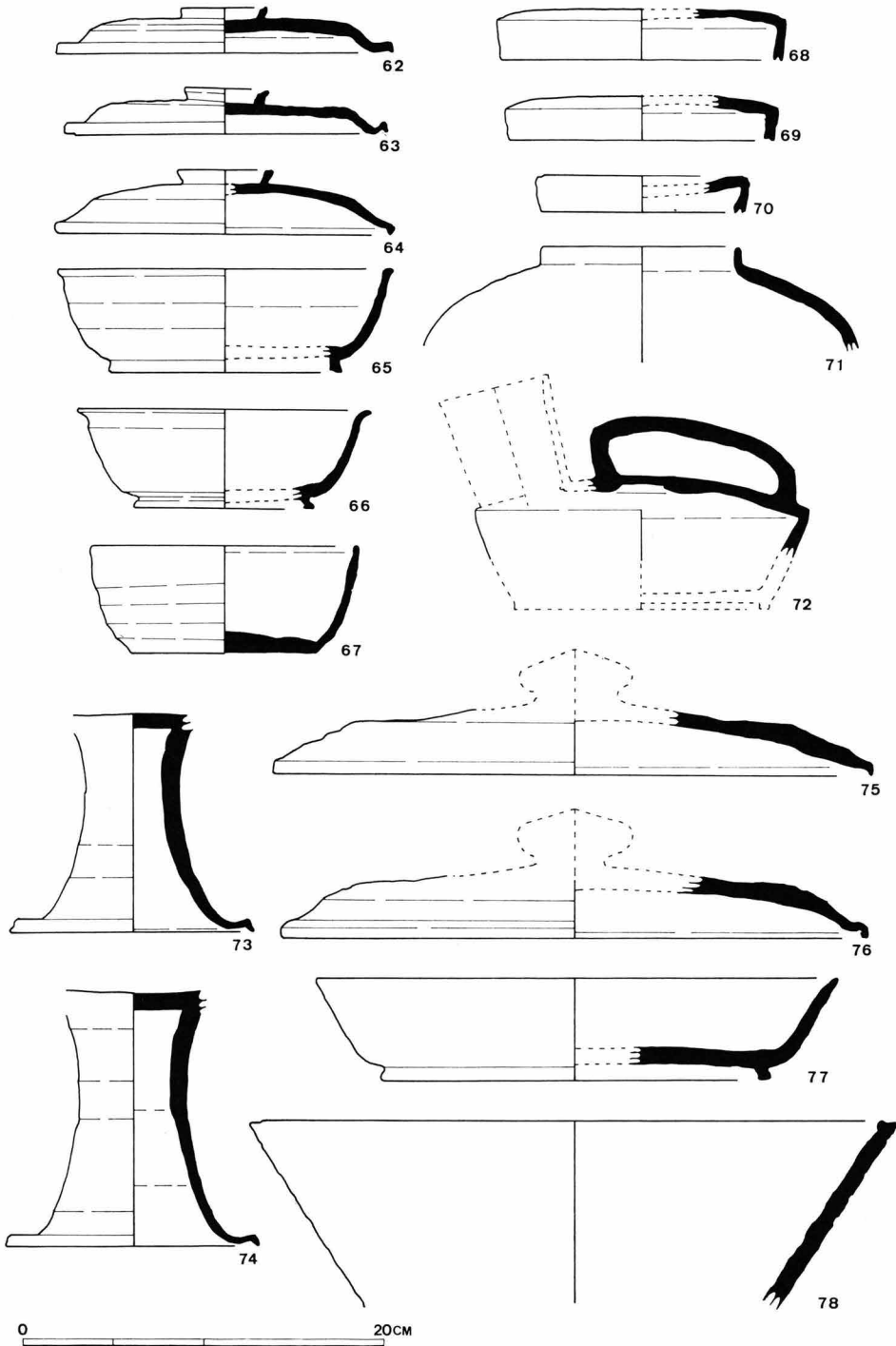
大型皿 B (77) は、底部より斜め上方に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみにおわる。底部縁端部より内側に、外方に踏んばった高台を貼りつける。口縁部内・外面および内底面はロクロナデ調整を行い、底部外面はヘラ切りののち、ナデ調整を加える。大型皿 B は口径 28.8 cm・器高 5.6 cm を測り、セットをなす蓋も出土している。

蓋 A (30～36・44～51) は、平坦な頂部より屈曲する縁部へ続き、縁端部が内側にまきこむもの(32・35・36・44・48・49)、平坦な頂部より丸みをもって縁部へ続き、縁端部が鋭く屈曲するもの(34・46・47・51)、頂部が丸く笠形を呈するもの(30・45)がある。頂部中央には扁平な宝珠形のつまみを貼りつける。縁部内・外面はロクロナデ、内面中央は一方方向のナデを施す。頂部外面はヘラ切りののち、一部ナデ調整を加える。蓋 A は口径 10.2～



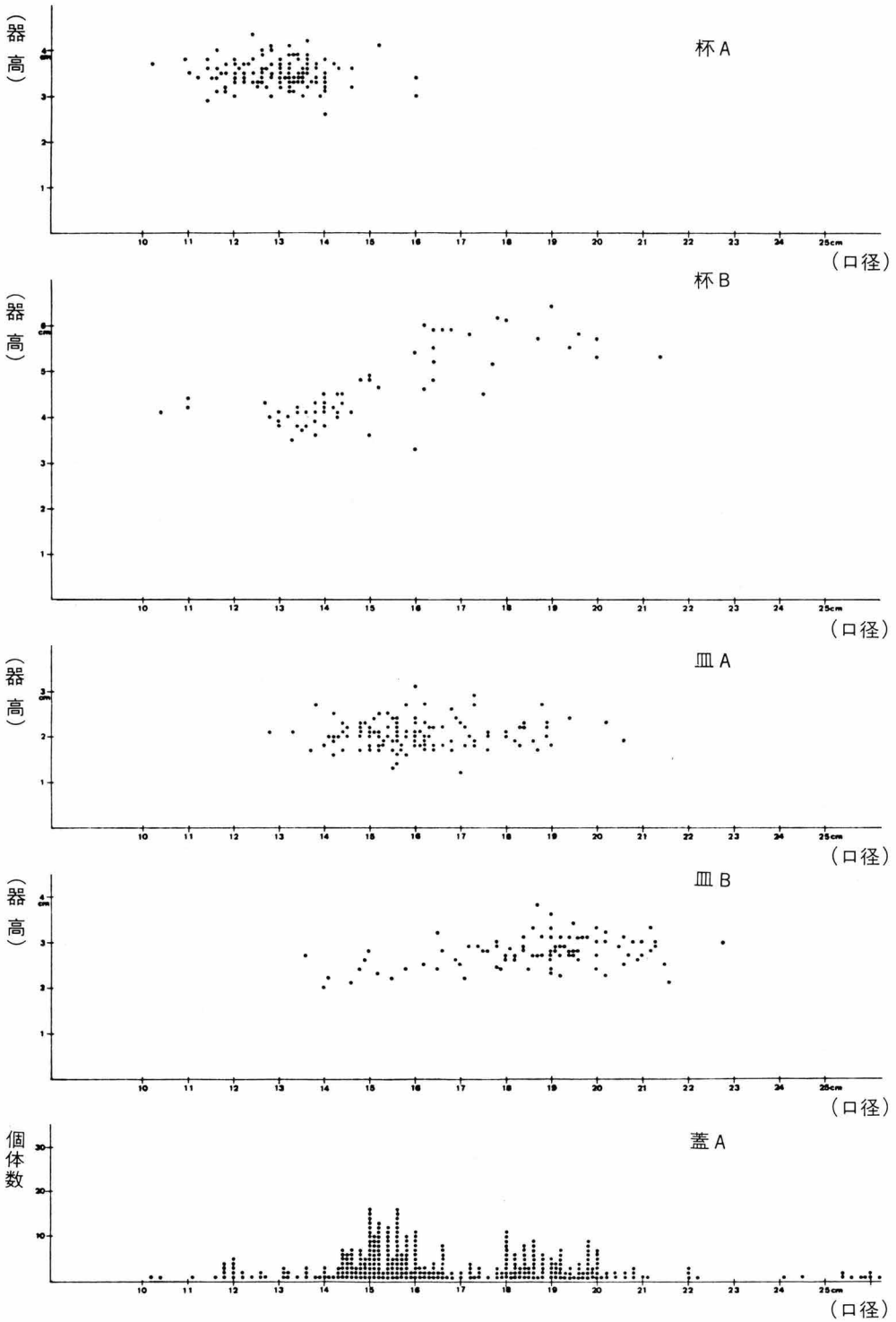
第44図 石原畑3号窯灰原内出土遺物(1)

杯A；21~29，杯B；37~43，碗A；20，皿A；52~56，皿B；57~61，
蓋A；30~36・40~51



第 45 図 石原畑 3 号窯灰原内出土遺物 (2)

杯 C ; 65・66, 碗 A ; 67, 大型皿 B ; 77, 大型蓋 A ; 75・76, 蓋 B ; 62~64,
蓋 D ; 68~70, 短頸壺 ; 71, 平瓶 ; 72, 盤 ; 78, 高杯 ; 73・74



付表 9 石原畑 3 号窯出土遺物法量比較表

28.0 cm を測り、口径 14.0~16.0 cm を測るものと、18.0~20.0 cm を測るものがあり、前者は杯 B と、後者は皿 B とセットをなす。

大型蓋 A (75・76) は、頂部より屈曲する縁部へ続き、頂部中央は欠損しているが、宝珠形つまみを貼りつけたものと思われる。縁部内・外面はロクロナデ、頂部外面には削りをとどめる。大型蓋 A は大型皿 B (77) とセットをなす。口径 30.0~33.4 cm を測る。

蓋 B (62~64) は、平坦な頂部より屈曲する縁部へ続き、頂部中央に直径 4.7~5.3 cm の輪状のつまみを貼りつける。調整は蓋 A と同様である。蓋 B は口径 18.0~19.0 cm を測り、佐波里碗を模した杯 C とセットをなす。

蓋 D (68~70) は、頂部から垂直におれる縁部をもち、縁端部は中央に沈線状の凹みがある。口径 11.4~11.5 cm を測る。

短頸壺(71) は、ナデ肩の体部より垂直に立ちあがる頸部へ続き、端部は丸みをもっておわる。体部下半を欠損。体部上半および口縁部内・外面はロクロナデ、体部外面に自然釉が付着している。

平瓶(72) は、体部下半および口縁部が欠損している。把手は断面胴張りの長方形を呈する。外面に自然釉が付着している。

盤(78) は、体部下半を欠損している。直線的に広がる体部より口縁端部で内側に肥厚させる。体部外面には横方向のヘラ削りを施す。

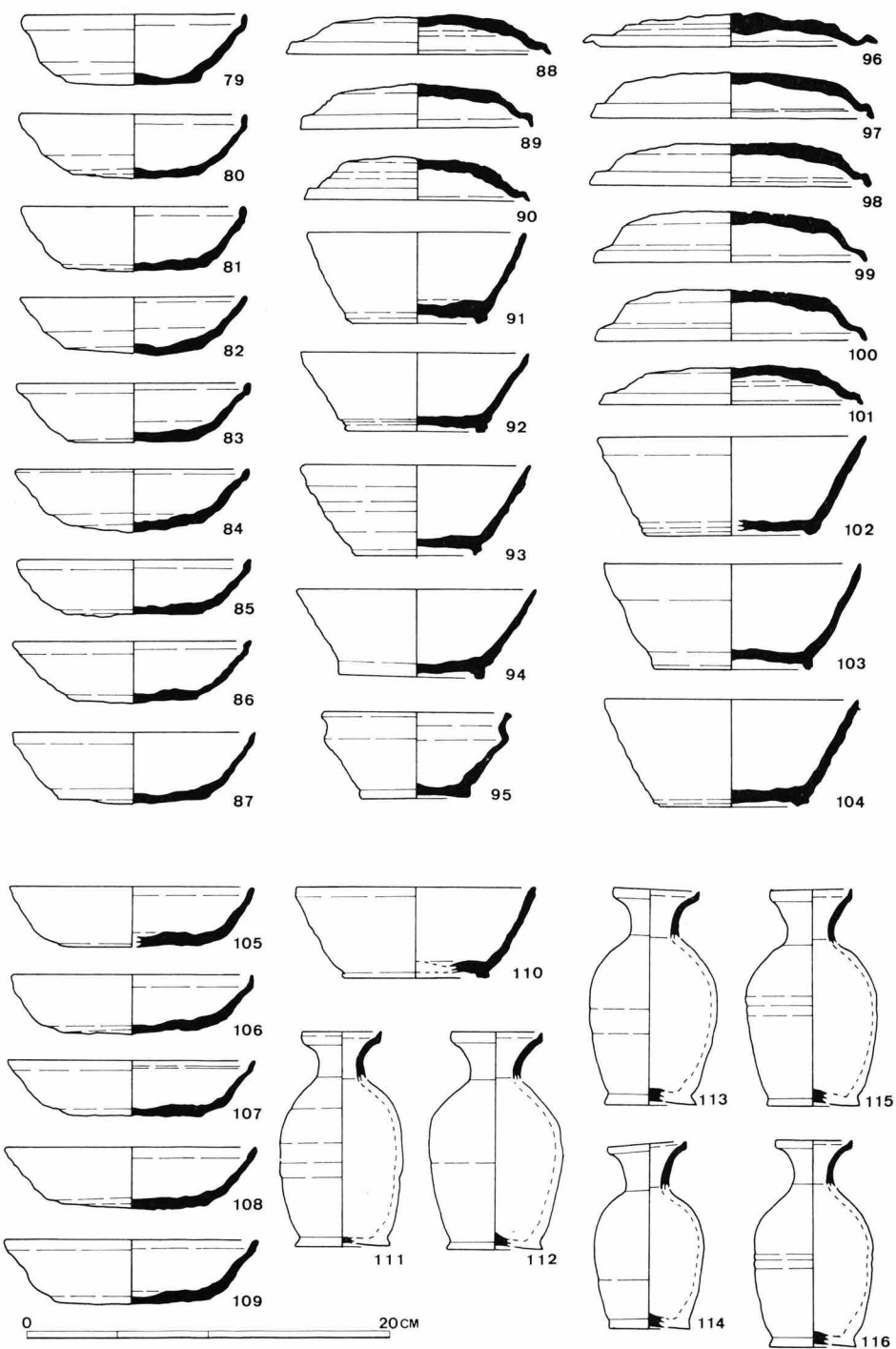
高杯(73・74) は、杯部を欠損している。筒状の脚部で、底部近くで裾広がりになり、端部では鋭く屈曲させる。外面はロクロナデ調整である。

3. 石原畑 1 号窯窯体内出土遺物 (第46図)

1 号窯窯体内には、杯 A・B、蓋 C、小型鉢、鉢、壺がある。鉢、壺は細片のため図化しなかった。窯体内出土遺物は主に焚口部床面直上で検出された。

杯 A (79~87) は、丸底ぎみの底部より内彎ぎみに立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部はわずかに内側に屈曲させ、尖りぎみにおわるもの(79・80・82・87)と内側に丸く肥厚させるもの(81・83~86)がある。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面はナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りののち、一部ナデ調整を施すものがある。口径 12.5~12.9 cm・器高 3.0~4.0 cm と斉一性がある。

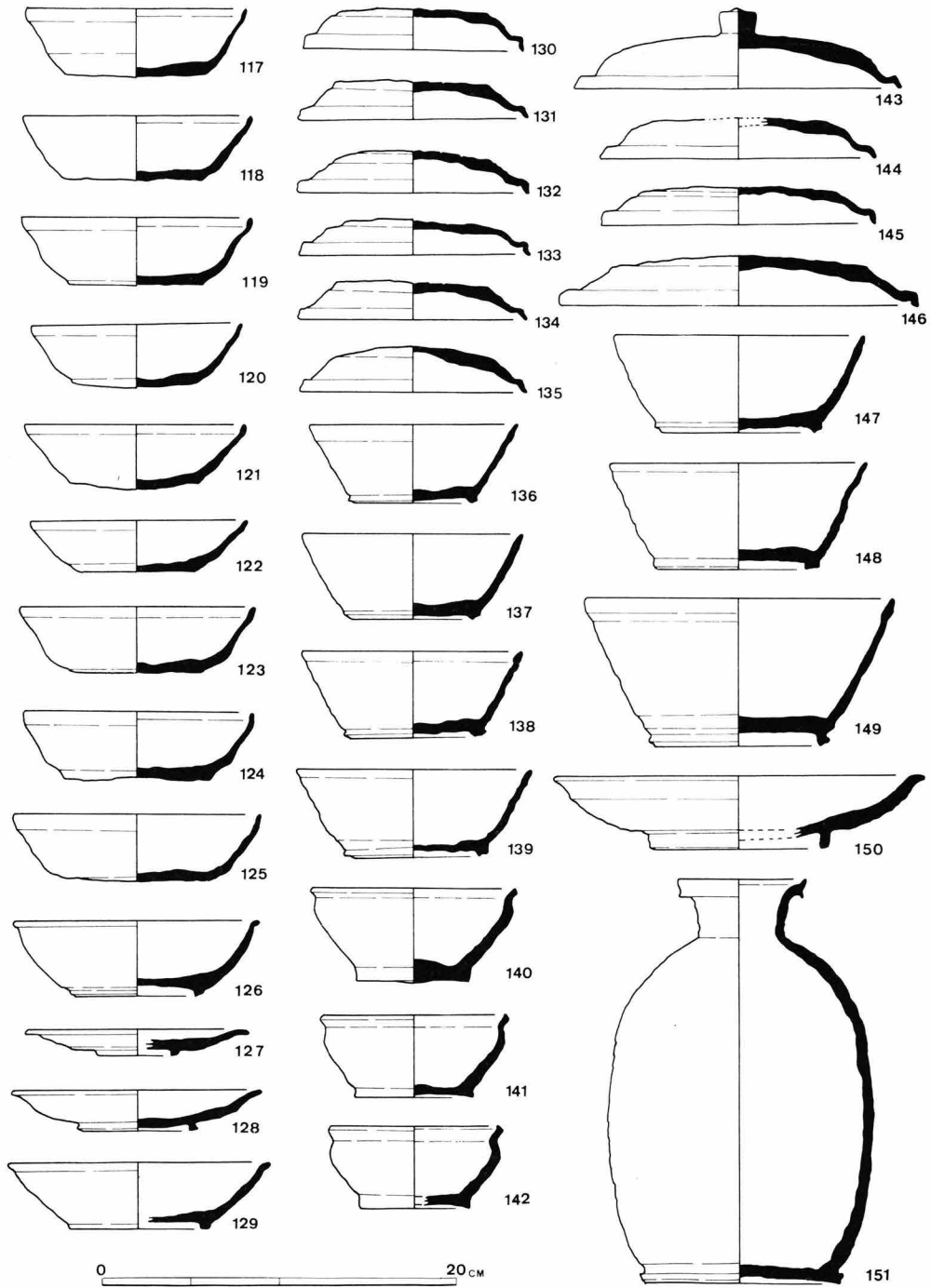
杯 B (91~94・102~104) は、底部より斜め上方に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部はいずれも尖りぎみにおわる。底部縁端部に、外方に踏んばる断面台形の低い高台を貼りつける。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面はナデ調整を施す。底部外面はヘラ切りののち、一部ナデ調整を施すものがある。杯 B は、口径 12.0~12.5 cm・器高 4.3~5.0 cm のもの(92~94)と口径 14.0~15.0 cm・器高 5.5~6.0 cm を測るもの(102~104)がある。



第46図 石原畑1・2号窯窯体内出土遺物

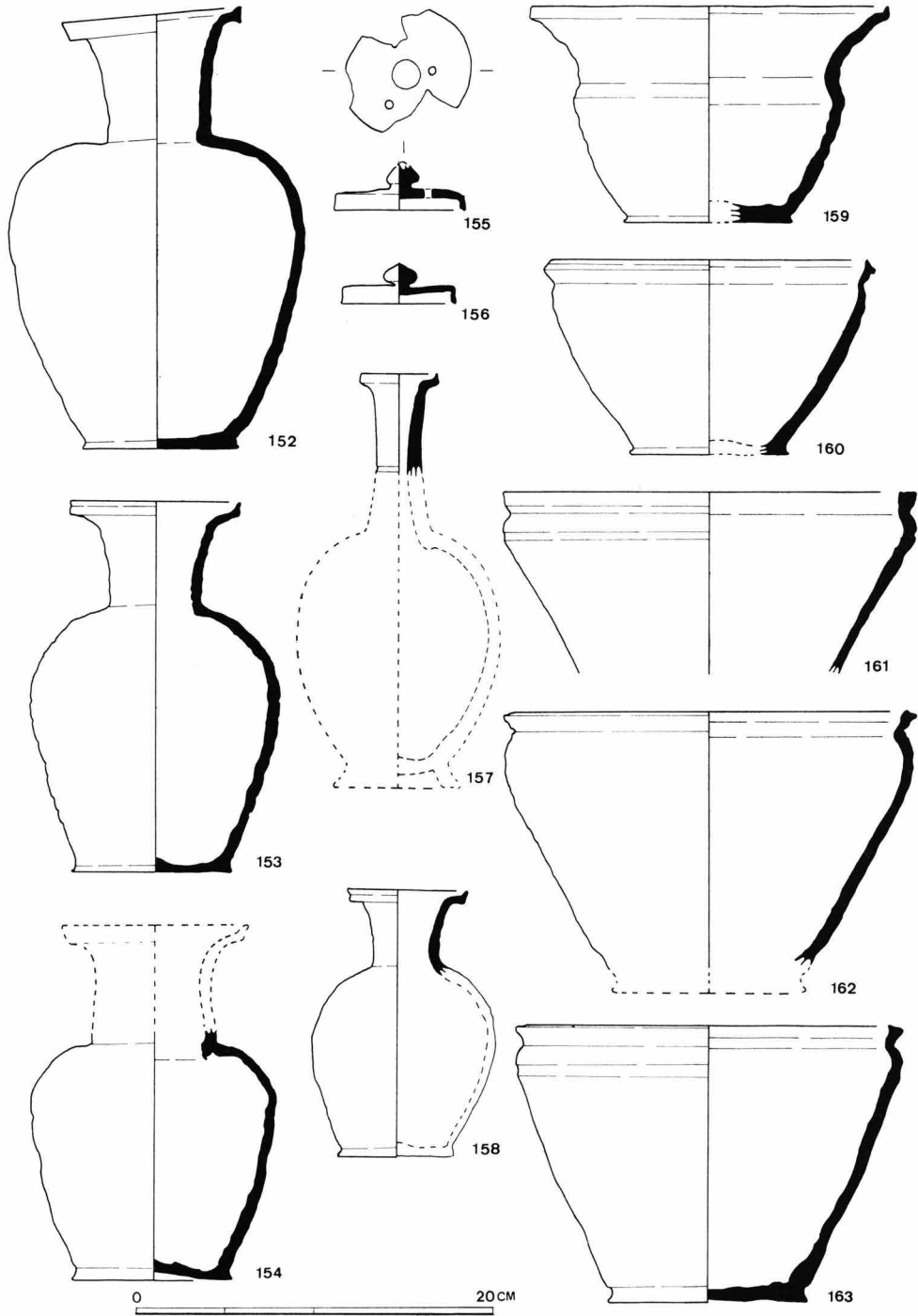
石原畑1号窯窯体内出土遺物(79~104) 杯A; 79~87, 杯B; 91~94・102~104,
蓋C; 88~90・96~101, 小型鉢; 75

石原畑2号窯窯体内出土遺物(105~116) 杯A; 105~109, 杯B; 110, 壺A b; 111~116



第 47 図 石原畑 2 号窯焚口部灰原内出土遺物(1)

杯A；117～125，杯B；136～139・147～149，皿C；127・128・150，碗D；126・129，
蓋A；143，蓋C；130～135・144～146，小型鉢；140～142，壺C；151



第48図 石原畑2号窯焚口部灰原内出土遺物(2)
 壺A b ; 152~154・158, 壺F ; 159, 鉢A b ; 161~163, 蓋D ; 155・156, 水瓶 ; 157

器種		個体数	比率 (%)
食器	杯 A	94	21.6
	杯 B	64	14.7
	蓋 A	1	0.23
	蓋 C	141	32.3
	蓋 D	2	0.46
	皿 B	2	0.46
	皿 C	11	2.5
	小鉢	12	2.8
貯蔵器	壺 A b	49	11.2
	短頸壺	1	0.23
	甕	4	0.92
その他	10	2.3	
計	436	100.00	

付表 10 石原畑 2 号窯焚口部南灰原内出土遺物集計表

蓋 C (88~90・96~101) は、平坦あるいは丸みをもつ頂部より、屈曲する縁部へ続き、縁端部は鈍角に屈曲し、尖りぎみにおわる。頂部中央にはいずれも宝珠形つまみをもたない。縁部内・外面および頂部内面はロクロナデ、頂部外面はヘラ切りをそのままとどめる。蓋 C は口径 12.5~15.5 cm を測る。

小型鉢(95)は、肩部を形成する体部より口縁部が外反し、口縁端部をわずかに上方へつまみ上げる。底部は上げ底ぎみの厚い平底である。体部外面および口縁部内・外面はロクロナデ調整を施し、底部は回転糸切り痕を明瞭にとどめる。

4. 石原畑 2 号窯窯体内出土遺物 (第46図)

2 号窯窯体内には、出土遺物が乏しく、

焼成部底面に壺 Ab が 6 個体集中してあったほか、杯 A・B が散在していた。

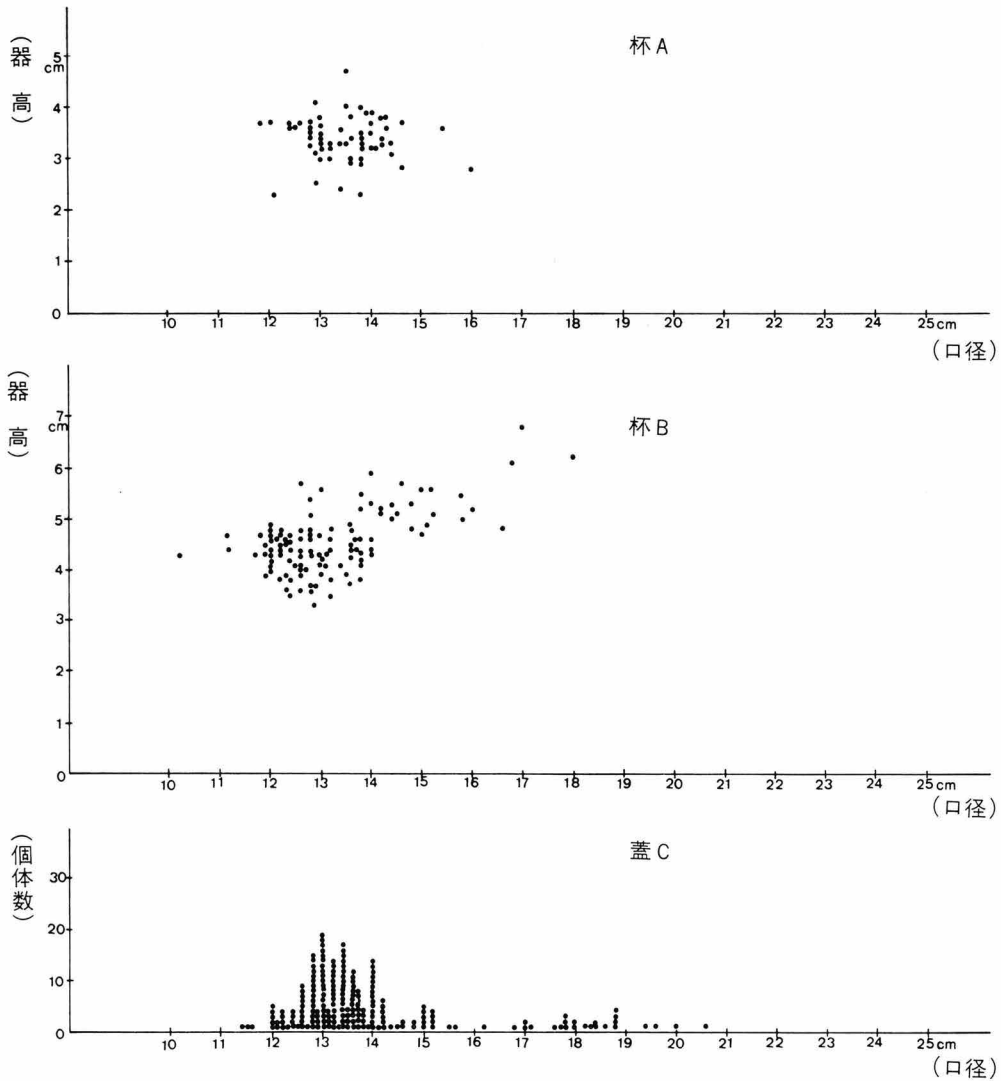
杯 A (105~109) は、平底あるいは丸底ぎみの底部より、内彎ぎみに立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部を内側にわずかに屈曲させる。調整は 1 号窯窯体内出土杯 A と同様である。口径 13.4~14.0 cm・器高 3.0~3.6 cm を測る。

杯 B (110) は、底部より内彎ぎみに立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみにおわる。底部縁端部に外方に踏んばった低い高台を貼りつける。口径 13.3 cm・器高 5.0 cm を測る。

壺 Ab (111~116) は、体部が長胴形を呈し、ナデ肩の体部より直立ぎみに立ちあがる頸部へ続き、口縁部は外反ぎみとなる。口縁端部は上方につまみ上げ、尖りぎみにおわる。底部は上げ底ぎみの平底である。体部外面および口縁部内・外面はロクロナデ調整を施し、底部外面には回転糸切り痕を明瞭にとどめる。壺 Ab はロクロナデにより一気に口縁部までひき上げて成形したものと思われる。壺 Ab は口径 3.1~5.0 cm・器高 10.4~11.9 cm を測る。

5. 石原畑 2 号窯焚口部灰原内出土遺物 (第47・48図)

2 号窯焚口部灰原は、焚口部より「ハ」の字状に半径約 3.5 m の狭い範囲に広がる。出土遺物は、杯 A・B、皿 C、椀 D、蓋 A・C・D、小鉢、壺 A b・C・F、水瓶、鉢 A b・F がある。



付 表 11 石原畑 2 号窯焚口部南灰原内出土遺物法量比較表

杯 A (117~125) は、平底あるいは丸底ぎみの底部より、内彎ぎみに立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は内側に屈曲させる。口径 12.2~14.0 cm・器高 2.7~4.2 cm を測る。

杯 B (136~139・147~149) は、底部より斜め上方に直線的に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部が尖がりぎみにおわる。138 は口縁端部内側をわずかに肥厚させる。口径 11.6~15.0 cm・器高 4.4~5.6 cm を測る。

皿 C (127・128・150) は、底部より口縁部へむかって直線的に広がり、口縁部中位で外反ぎみに屈曲させる。底部に低い高台を貼りつける。

椀 D (126・129) は、底部より内彎ぎみに立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は強く外方

に屈曲させる。底部縁端部に低い高台を貼りつける。

蓋A(143)は、丸みをもつ頂部より、屈曲する縁部へ続き、縁端部は鈍角に屈曲し、尖りぎみにおわる。頂部中央に高く変形した宝珠形つまみを貼りつける。

蓋C(130~135・144~146)は、平坦あるいは丸みをもつ頂部から屈曲する縁部へ続き、縁端部は鈍角に屈曲し、尖りぎみにおわる。口径 12.1~20.1 cm を測り、13.0 cm 前後が主体をなす。

蓋D(155・156)は、平坦な頂部より垂直におわる縁部へ続く。頂部中央には高い宝珠形つまみを貼りつける。155は頂部に直径 4 mm の円孔を焼成前に穿つ。

小型鉢(140~142)は、肩部を形成する体部から、口縁部が「く」の字状に外反し、口縁端部は内側に尖りぎみにおわる。底部は平底で回転糸切り痕を明瞭にとどめる。

壺 Ab(152~154・158)は、肩部の張った長胴形の体部より、直立ぎみに立ちあがる頸部へ続く。口縁部は強く外反させ、口縁端部は上方に肥厚させる。底部は平底で、回転糸切り痕を明瞭にとどめる。

壺C(151)は、体部最大径が底位にあり、ナデ肩の体部より外反する口縁部へ続き、口縁端部は上下に肥厚させ、外面に面をなす。底部は上げ底ぎみの平底である。体部外面および口縁部内・外面はロクロナデ、底部内面は乱ナデである。

壺F(159)は、平底の底部より肩部の張った扁平な体部へ続き、口縁部を強く外反させる。口径が体部最大径を凌駕する。体部外面および口縁部内・外面はロクロナデ、底部外面は回転糸切りである。口径 19.8 cm・器高 12.0 cm を測る。

水瓶(157)は、頸部および体部を欠損する。直立ぎみに立ちあがる頸部より、口縁部を

強く外反させたのち、口縁端部を上方につまみあげる。頸部外面に1条の沈線をめぐらす。口縁部内・外面はロクロナデ、外面に濃緑色の自然釉が付着する。157は、蓋Dとともに3号窯灰原から混入した可能性がある。

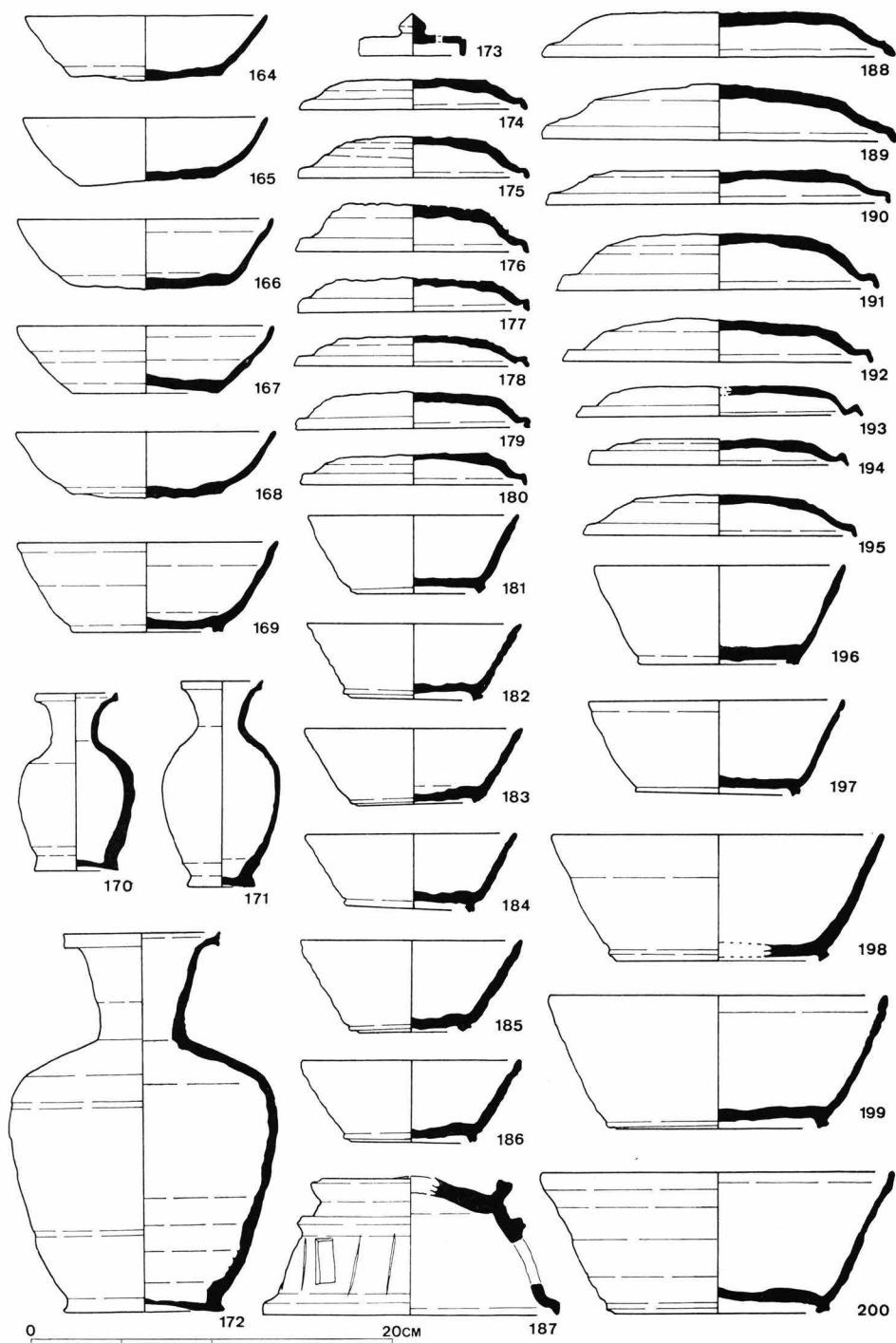
鉢 Ab(161~163)は、体部最大径が上位にあり、肩部を形成する。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部を内側につまみ上げる。

鉢C(160)は、平底の底部より内彎ぎみに立ちあがる体部へ続く。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部内側を上方に肥厚させる。

160は口径 17.6 cm・器高 10.8 cm を測る。

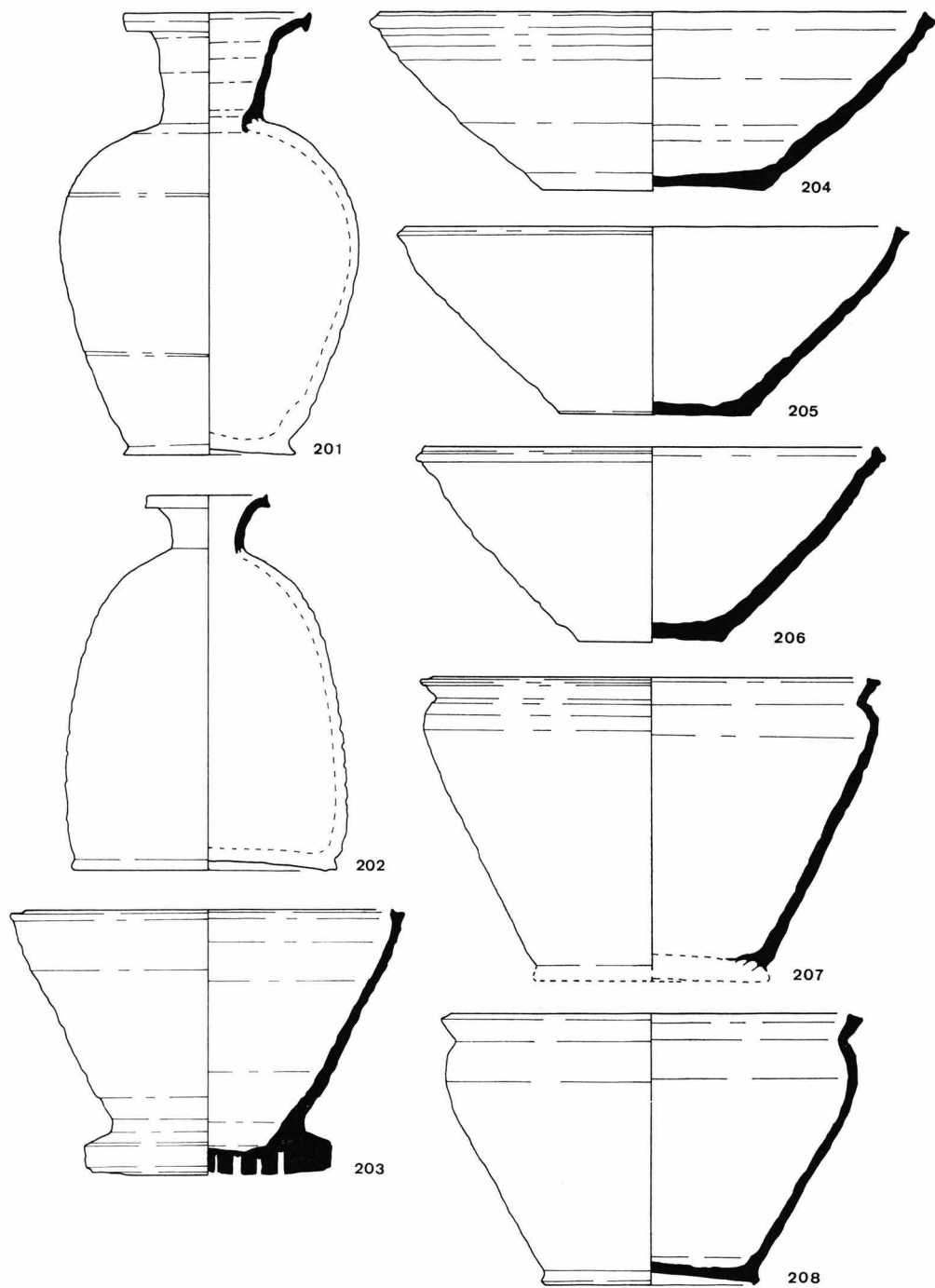
器種		個体数	比率 (%)	
食	杯 A	360	26.9	} 91
	杯 B	470	35.05	
	蓋 C	313	23.3	
	蓋 D	2	0.15	
	小型鉢	2	0.15	
器	壺 Ab	49	3.66	}
	鉢 Ab	24	1.79	
貯蔵器	壺 Ab	108	8.1	} 8.55
	甕	6	0.45	
その他		6	0.45	
計		1,340	100.00	

付表 12 石原畑窯跡 S K03 出土遺物集計表



第49図 石原畑窯跡SK03出土遺物(1)

杯A；164～168，杯B；169・181～186・196～200，蓋C；174～180・188～195，
蓋D；173，壺A b；170～172，円面碗；187

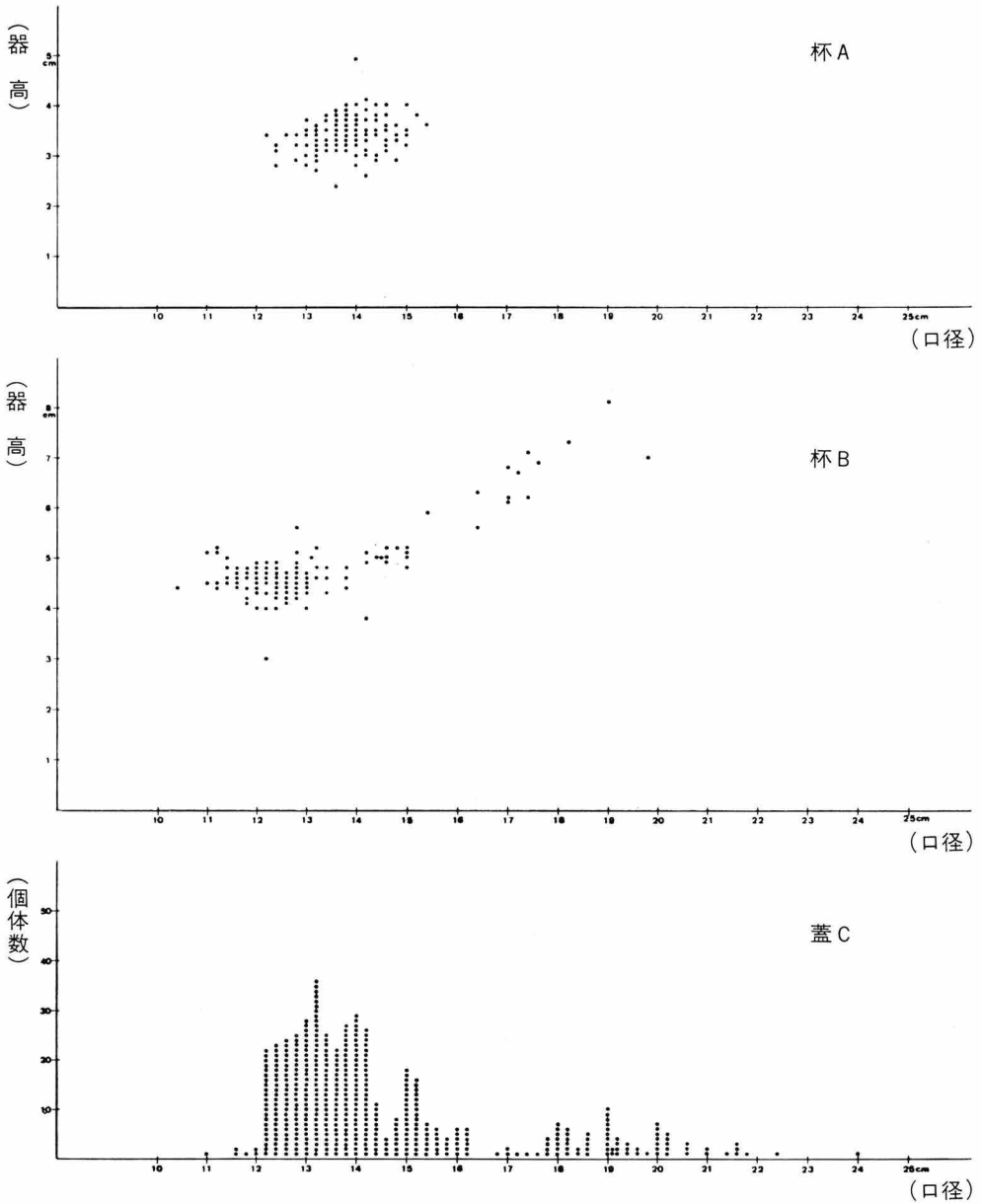


第 50 図 石原畑窯跡 SK03 出土遺物(2)
壺A b ; 201, 壺C ; 202, 鉢A b ; 207・208, 鉢F ; 203, 盤 ; 204~206

6. 石原畑窯跡 SK 03 出土遺物 (第49・50図)

SK 03 は、遺構で記述したように1号窯関連遺構と思われ、埋土内には窯滓・焼土・灰原とともに多量の遺物が出土した。

SK 03 では3号窯関連遺物も出土しており、明らかに3号窯出土遺物と思われる資料は除去して、図化および土器組成表を作成した。



付表 13 石原畑窯跡 SK 03 出土遺物法量比較表

SK 03 出土遺物は、杯 A・B、蓋 C・D、壺 A b・C、鉢 A b・F、盤、円面硯がある。

杯 A (164~168) は、平底あるいは丸底ぎみの底部より、内彎ぎみに立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部がわずかに屈曲するもの (166・167) と屈曲しないもの (164・165・168) がある。杯 A は口径 12.5~15.0 cm・器高 3.0~4.0 cm を測り、法量の斉一化がみられる。

杯 B (169・181~186・196~200) は、底部より斜め上方に直線的に立ちあがるものとわずかに内彎ぎみに立ちあがるものがあり、前者が主体を占める。口縁端部はわずかに外反あるいは内彎するものがある。底部縁端部には、いずれも外方に踏んばった高台を貼りつける。杯 B は口径 10.4~19.8 cm・器高 3.0~8.1 cm を測り、口径 11.6~13.0 cm・器高 4.0~4.8 cm が主体をなす。

蓋 C (174~180・188~195) は、平坦あるいは丸みをもつ頂部より屈曲する縁部へ続き、縁端部は鈍角に屈曲し、尖りぎみにおわる。口径 11.0~24.0 cm を測り、口径の差異により、12.1~14.4 cm を測るもの、14.6~16.2 cm を測るもの、17 cm 以上を測るものに大別でき、12.1~14.8 cm を測るものが主体をなす。

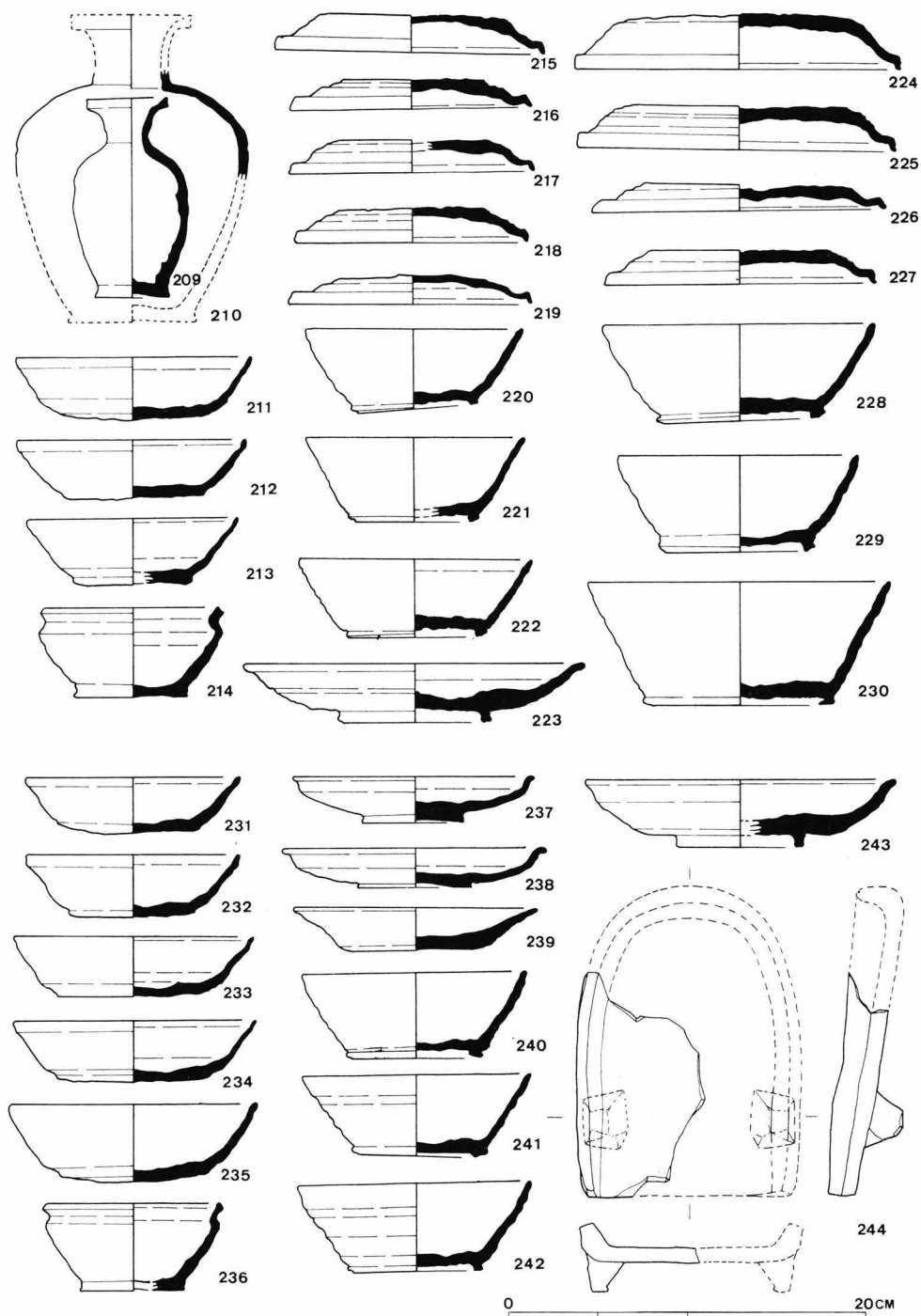
壺 Ab (170~172・201) は、器高 10.6~13.8 cm のもの (170・171) と、器高 16.0~25.0 cm のもの (172・201) に大別できる。肩部の張った体部より頸部は直立ぎみに立ちあがり、口縁部は強く外反させたのち口縁端部を上方につまみ上げ、外面に面をなす。底部は突出ぎみの平底である。体部外面および口縁部内・外面はロクロナデ調整を施し、底部外面には明瞭に回転糸切り痕をとどめる。

蓋 C (202) は、体部最大径が底位にあり、ナデ肩の体部より外反する口縁部へ続き、口縁端部は上・下方にわずかにつまみ出し、外面に面をなす。底部は上げ底ぎみの平底である。体部外面および口縁部内・外面はロクロナデ、底部はナデ調整を施す。体部外面には粘土水挽き痕を明瞭にとどめる。

蓋 D (173) は、平坦な頂部より垂直に折れる縁部をもち、頂部中央には高い宝珠形つまみを貼りつける。頂部に直径 4 mm の円孔を焼成前に穿つ。

鉢 Ab (207・208) は、体部最大径が上位にあり肩部を形成する。口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部を内側につまみ上げる。207は口径 24.8 cm、208は口径 22.6 cm・器高 15.6 cm を測る。

鉢 F (203) は、底径 13.9 cm・厚さ 2.3 cm の厚い平底の底部より斜め上方に立ちあがる体部へ続く。口縁端部は内・外方に肥厚させ、内方に向かってわずかにつまみ上げる。底部外面には直径 4 mm を測る未貫通の円孔を41個以上穿つ。体部および口縁部内・外面はロクロナデ調整を施す。



第51図 石原畑窯跡 SK01・SK04 出土遺物

SK01 出土遺物；209～230，杯A；211～213，杯B；220～222・228～230，皿C；223，蓋C；215～219・224～227，小型鉢；214，壺A b；209・210

SK04 出土遺物；231～244，杯A；231～235，杯B；240～242，皿C；243，皿D；237・238，皿E；239，山型鉢；236，風字硯；244

盤(204~206)は、平底あるいは上げ底ぎみの底部より、斜め上方に立ちあがり、口縁部でわずかに内・外方に屈曲させる。口縁端部は内・外方にわずかに肥厚させ、内方はわずかに上方につまみ上げる。体部および口縁部内・外面はロクロナデ調整を施し、底部外面は回転糸切り痕をとどめる。口径 23.4~32.8 cm を測り、完形に復元し得るものは底径 8.1~12.5 cm・器高 10.0~11.0 cm を測る。

円面硯(187)は、円形の陸部とそれを取り囲む外堤により海部を画し、裾広がりの中台を付したもので、脚部には長方形の透し穴とヘラにより界線を入れる。187は堤径 9.6 cm・底径 16.2 cm・器高 7.3 cm を測る。

7. 石原畑窯跡 SK 01 出土遺物 (第51図)

SK 01 は、埋土が上層より暗黄褐色土層・明黄褐色粘質土層・灰褐色粘質土層の3層に分かれ、暗黄褐色土層には、推定1号窯灰原が遺物とともに混入しており、粘質土層直上には完形品を含め、20点以上の土器が出土した。今回は粘質土層直上の遺物を図示した。

出土遺物は、杯 A・B、皿 C、蓋 C、小型鉢、壺 A b がある。

杯 A (203~211) は、平底の底部より内彎ぎみに立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は内側に屈曲させる。口径 11.7~12.6 cm・器高 3.2~3.7 cm を測る。

杯 B (220~222・228~230) は、底部より斜め上方に直線的あるいは内彎ぎみに立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部はいずれも尖りぎみにおわる。底部縁端部には外方に踏んばった低い高台を貼りつける。杯 B は口径 12.0~13.0 cm・器高 4.5 cm 前後を測るもの(220~222・229)と口径 15.0~17.0 cm・器高 5.5~7.0 cm を測るもの(226・230)に分かれる。

皿 C (223) は、底部より内彎ぎみに広がる口縁部へ続き、口縁端部は強く外反し、水平面をなす。底部には外方にわずかに踏んばった高台を貼りつける。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面はナデ調整を施す。223は口径 19.0 cm・器高 3.3 cm を測る。

蓋 C (215~219・224~227) は、平坦あるいは丸みをもつ頂部より屈曲する縁部へ続き、縁端部は鈍角に屈曲し、尖りぎみにおわる。蓋 C は、口径 13.5~18.2 cm を測る。

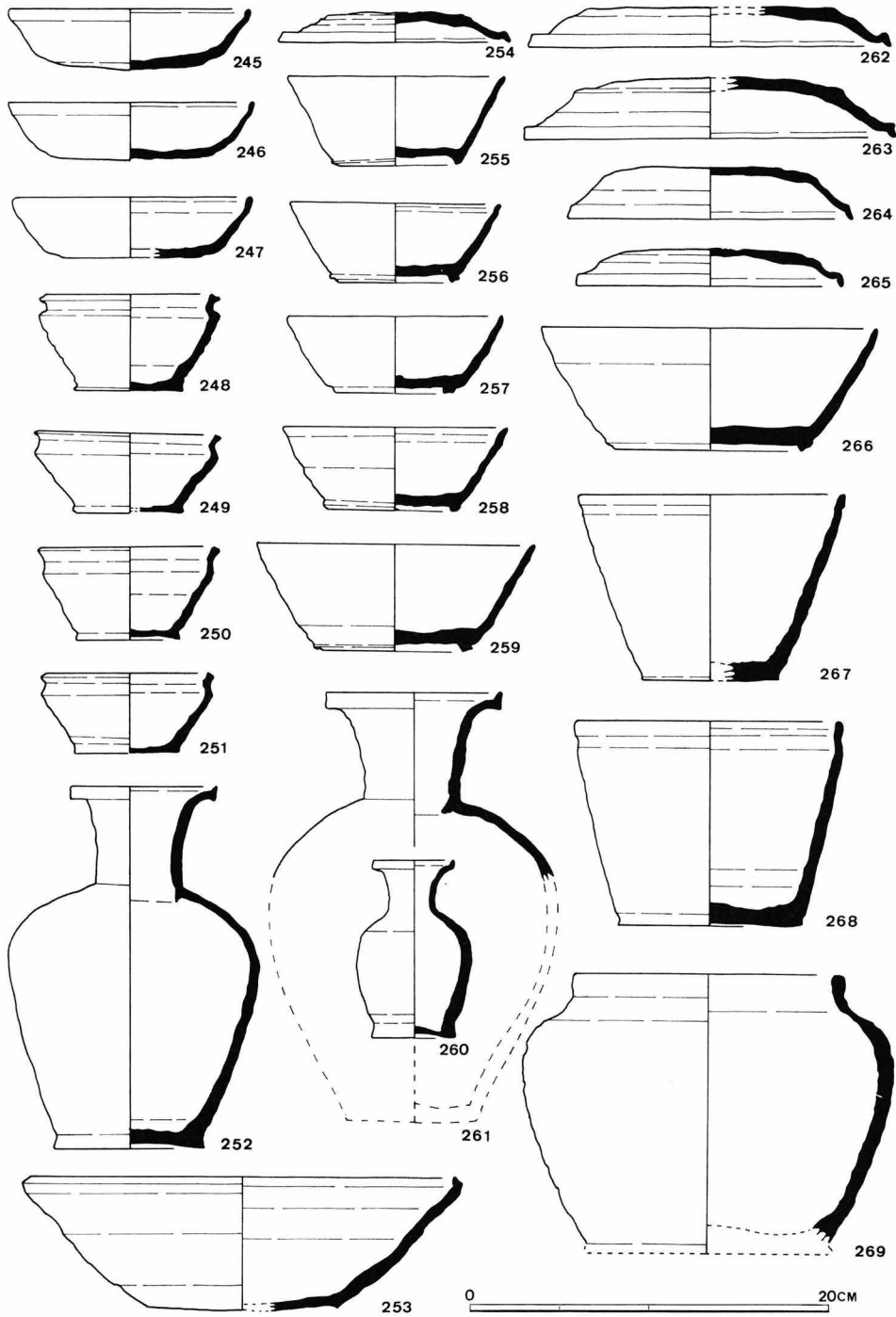
小型鉢(214)は、肩部の張りが強く、口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部内側は尖りぎみにおわる。底部に回転糸切り痕をとどめる。214は口径 9.7 cm・器高 5.0 cm を測る。

8. 石原畑窯跡 SK 04 出土遺物 (第51図)

SK 04 は、SK 01 と同様、3号窯関連遺物が混在していたが、混入遺物と考え、ここでは明らかに2号窯関連遺物と思われる資料を図示した。

出土遺物は、杯 A・B、皿 C・D・E、小型鉢、風字硯がある。

杯 A (231~235) は、平底あるいは丸底ぎみの底部より、口縁部が内彎ぎみに立ちあがり、



第 52 図 石原畑窯跡 SD 05 出土遺物

杯 A ; 245~247, 杯 B ; 255~259・266, 蓋 C ; 254・262~265, 小型鉢 ; 248~251,
壺 A b ; 252・260・261, 短頸壺 ; 269, 鉢 G ; 267・268, 盤 ; 253

口縁端部を内側に屈曲させる。口径 12.0~13.4 cm・器高 3.5 cm 前後を測る。

杯 B (240~242) は、底部より斜め上方に直線あるいは内彎ぎみに立ちあがり、口縁端部は尖りぎみにおわる。242 はロクロ水挽き痕が明瞭である。

皿 C (243) は、底部より内彎ぎみに広がる口縁部へ続き、口縁端部は外方に屈曲させる。底部には断面長方形の高い高台を貼りつける。口径 17.3 cm・器高 3.7 cm を測る。

皿 D (237・238) は、厚い平底の底部より、口縁部が斜めに広がったのち端部近くで上方に屈曲させ稜をもつ。口縁端部は外方に強く屈曲させ、水平面をなす。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面はナデ調整を施す。底部は回転糸切りである。237 は口径 13.4 cm・器高 2.6 cm、238 は口径 14.7 cm・器高 2.2 cm を測る。

皿 E (239) は、平底の底部より、外反する口縁部へ続く。口縁端部内・外面および内底面はロクロナデ調整を施す。底部外面は回転糸切りである。

小型鉢 (236) は、肩部の張った体部より、口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部内側は尖りぎみにおわる。底部は回転糸切りである。

風字硯 (244) は脚部および海部の一部が残るのみである。脚部は断面台形を呈する。

9. 石原畑窯跡 SD 05 出土遺物 (第52図)

SD 05 出土遺物には杯 A・B、鉢 F、小型鉢、蓋 C、壺 A b、短頸壺、盤がある。

杯 A (245~247) は、丸底ぎみの底部より内彎ぎみに立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部を内側に屈曲させる。杯 A は口径 13.2~13.7 cm・器高 3.1~3.5 cm を測る。

杯 B (255~259・266) は、底部より斜め上方に直線的に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部をわずかに外反させるもの (255・258) がある。杯 B は口径 12.0~18.4 cm・器高 4.3~6.3 cm を測る。

小型鉢 (248~251) は、肩部の張った体部より、口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部内側を上方に屈曲させる。小型鉢は口径 9.0~9.8 cm・器高 4.4~5.2 cm を測る。

鉢 G (267・268) は、平底の底部より直立ぎみに立ちあがる体部へ続き、口縁部はわずかに内彎する頸部から、わずかに外反する口縁部へ続く。体部および口縁部内・外面はロクロナデ調整を施し、底部外面は回転糸切り痕をとどめる。267 は口径 14.6 cm・底径 7.5 cm・器高 10.2 cm、268 は口径 14.6 cm・底径 10.2 cm・器高 11.4 cm を測る。

蓋 C (254・262~265) は、平坦あるいは丸みをもった頂部より屈曲する縁部へ続き、縁端部は鈍角に屈曲し、尖りぎみにおわる。口径 12.8~20.6 cm を測る。

壺 A b (252・260・261) は、肩部の張った長胴形の体部より直立ぎみに立ちあがる頸部へ続き、口縁部は強く外反する。口縁端部は上方に屈曲させ外面に面をなす。底部は上げ底ぎみの平底で、外面には回転糸切り痕をとどめる。

短頸壺(269)は、肩部の張った体部より、頸部が内彎ぎみに短く立ちあがる。体部は体部最大径が器高を凌駕し、扁平な感を与える。269は口径14.4cm・体部最大径20.6cmを測る。

盤(253)は、底部より斜め上方に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部は内側に屈曲し、尖りぎみにおわる。口径13.8cm・底径10.6cm・器高7.6cmを測る。

10. 石原畑窯跡 Ao 区上層灰原出土遺物 (第53~55図)

上層灰原は、11~13・o~q区に広がり、特にoq10~14区で集中して遺物が出土した。上層灰原は遺構で記述したように1・2号窯焚口部とは連続せず推定の域をでないが、下層灰原とは間層をはさむことより、1号窯に後出する2号窯灰原と考えた。

上層灰原内出土遺物には、杯A・B、蓋C、壺Ab・B・C、鉢Ab、小型鉢、盤、円面硯、甕などがある。

杯A(270~279)は、平底あるいは丸底ぎみの底部より、口縁部が内彎ぎみに立ちあがり、口縁端部を内側に屈曲させる。

杯B(292~297・307~310)は、底部より斜め上方に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部が尖りぎみにおわる。底部には縁端部に低い高台を貼りつける。杯Bは口径10.2~18.0cm・器高3.5~6.8cmを測り、口径12.0~13.2cm・器高3.5~4.8cmを測るものと、口径13.6~16.0cm・器高4.4~5.5cmを測るものが主体をなす。

壺Ab(311~314・316~320・323・325)は、倒卵形あるいは長胴形の体部より、頸部が直立ぎみに立ちあがり、口縁部を強く外反させる。口縁端部は内・外方に肥厚させ、外面に面

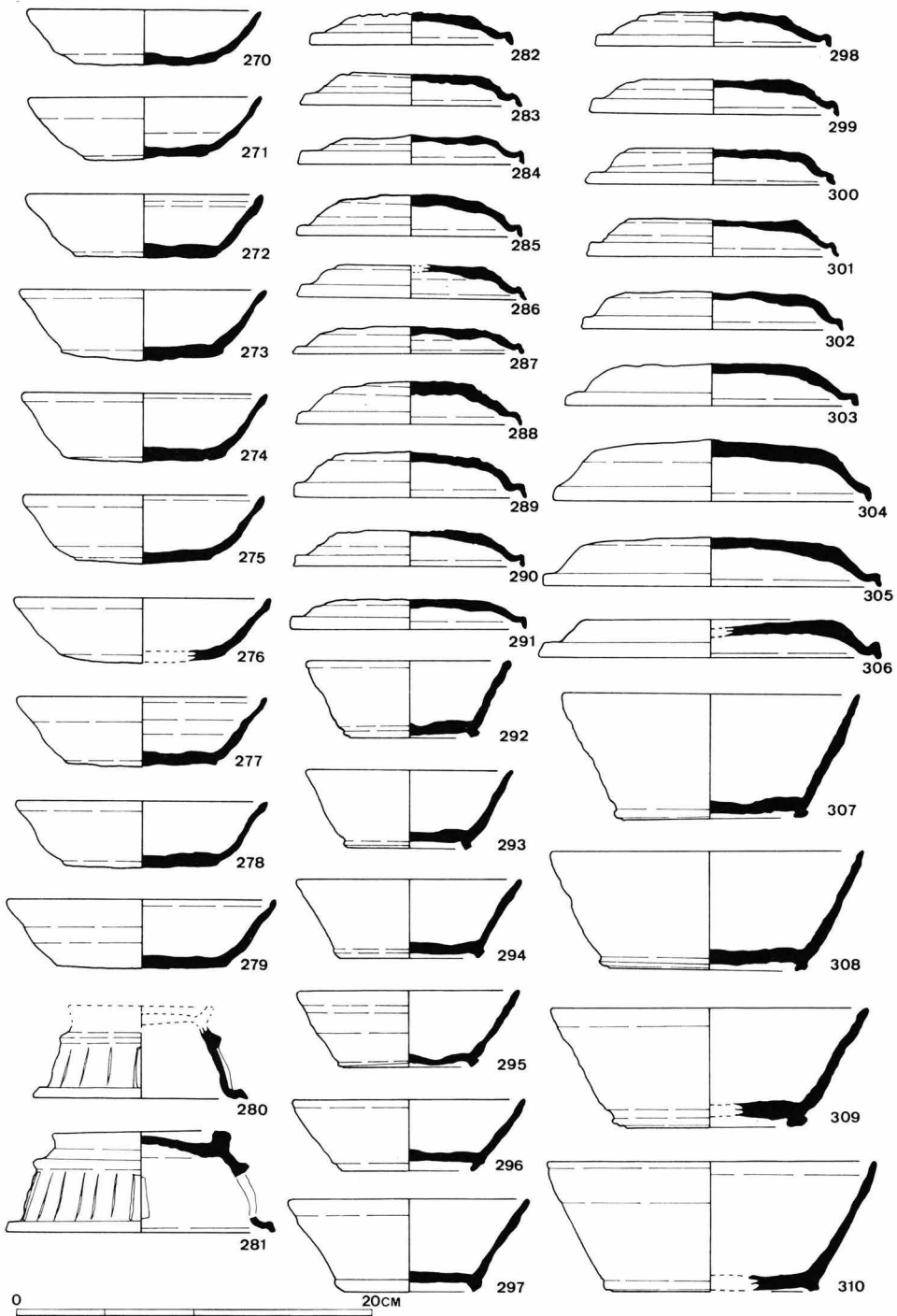
をなす。壺Abは、器高10.0~13.0cmを測る小型品(311~314・316)と、器高(20.5~27.5cm)を測る中型品(317~320・323・325)に大別できる。

壺B(321)は、体部最大径が上半にあり、筒状の体部から頸部が直立ぎみに立ちあがり、口縁部を強く外反させる。口縁端部は上・下方に肥厚させる。肩部に断面円形の把手を2か所貼りつける。口縁部内・外面および体部外面にロクロナデ調整を施す。

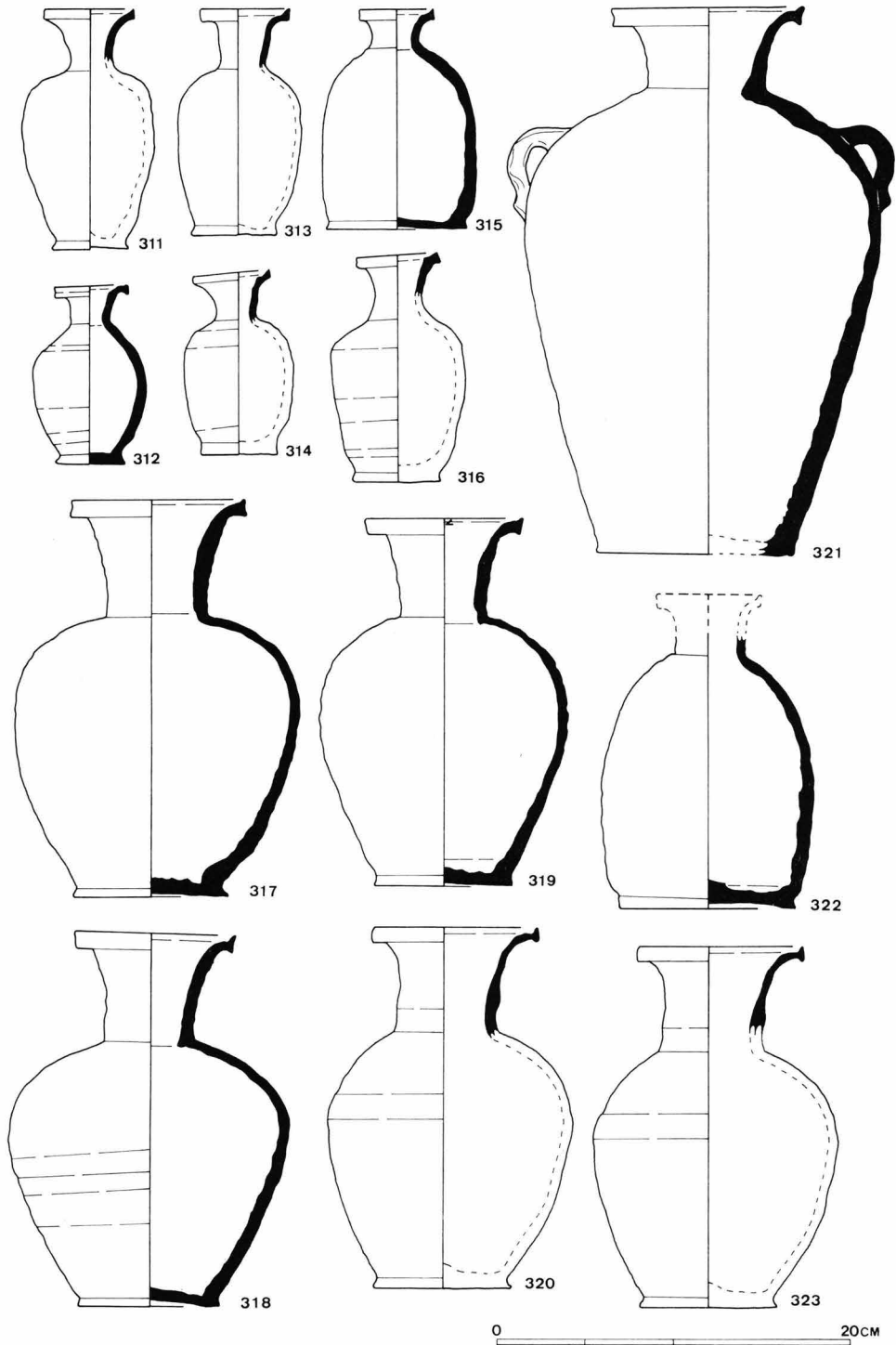
壺C(315・322・324)は、体部最大径が中位あるいは下半にあり、筒状の体部より口縁部が外反ぎみに短く立ちあがる。口縁端部は

器種		個体数	比率 (%)	
食器	杯 A	296	21.8	75.35
	杯 B	256	18.8	
	鉢 C	402	29.5	
	小鉢	13	0.95	
	鉢 A	30	2.2	
	盤	29	2.1	
貯蔵器	壺 Ab	317	23.3	24.38
	鉢 C	3	0.2	
	甕	12	0.88	
その他	円面硯	1	0.07	0.27
	その他	3	0.2	
計		1,362	100.00	

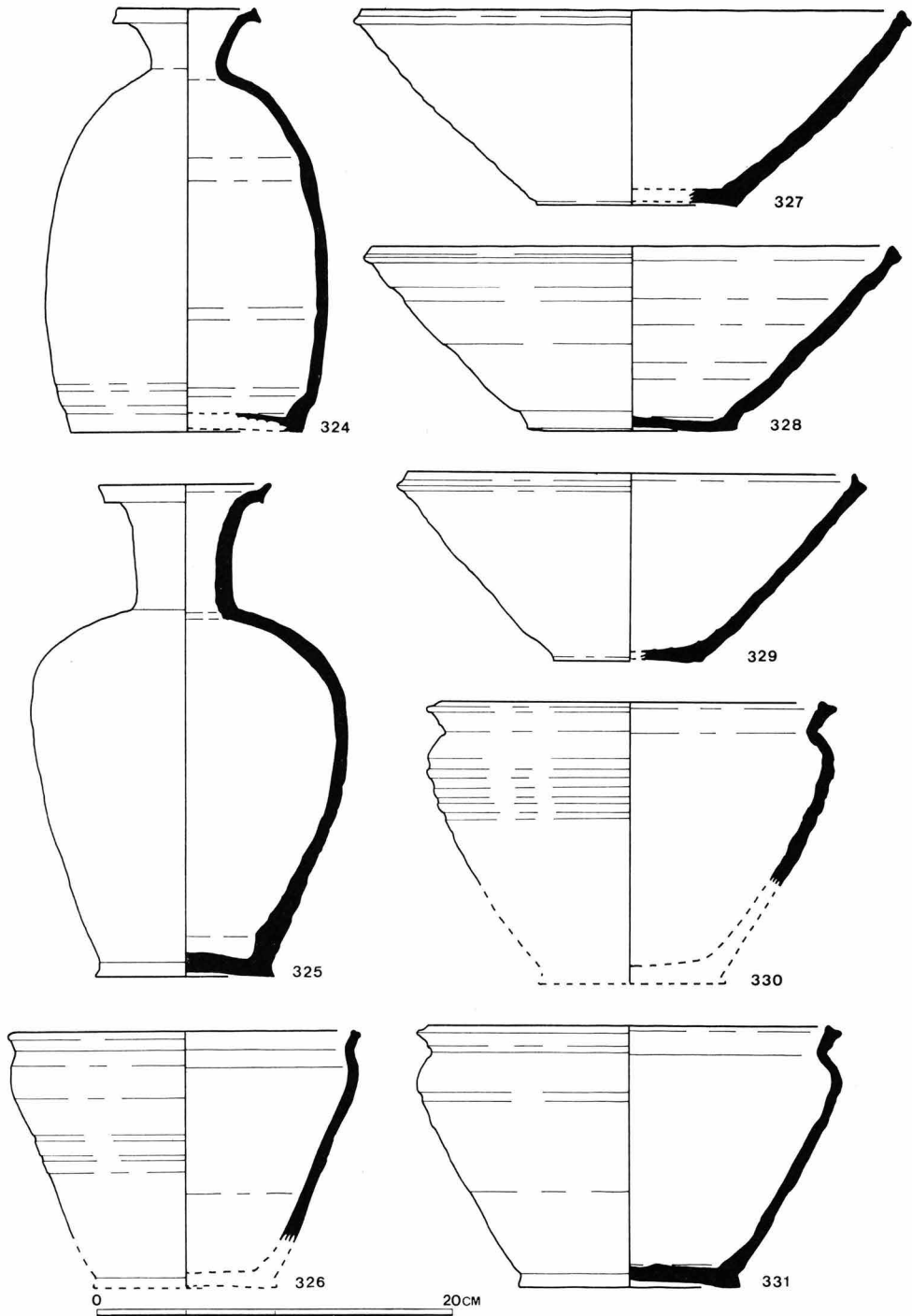
付表14 石原畑窯跡 Ao 区上層灰原内出土遺物集計表



第 53 図 石原畑窯跡 A。区上層灰原内出土遺物(1)
 杯 A；270~279，杯 B；292~297・307~310，蓋 C；282~291・296~306，円面硯；280・281



第54図 石原畑窯跡A○区上層灰原内出土遺物(2)
 壺A b ; 311~314・316~320・323, 壺B ; 321, 壺C ; 315・322



第 55 図 石原畑窯跡 A○区上層灰原内出土遺物(3)
壺A b ; 325, 壺C ; 324, 鉢A b ; 326・330・331, 盤 ; 327~329

上方につまみ上げる。

鉢 Ab (326・330・331)は、体部最大径が上位にあり肩部を形成し、口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部内側を上方につまみ上げる。底部は平底で外面には回転糸切り痕をとどめる。331は体部最大径が器高を凌駕し、扁平な感を与える。

盤(327～329)は、平底の底部より斜め上方に立ちあがる口縁部へ続き、口縁端部内側を上方に強くつまみ上げる。

円面硯(280・281)は円形の陸部とそれを取り囲む外堤により海部を画したもので、脚部には未貫通のヘラによる界線と長方形の透し穴を入れる。281は堤径 8.5 cm・器高 5.8 cm を測る小型品である。(石井 清司)

第5節 小 結

1. 石原畑3号窯出土遺物について

石原畑3号窯には窯体内より49個、灰原内より1,705個以上の須恵器が出土し、その内訳は、杯A434個、杯B289個、杯C98個、皿A240個、皿B166個、蓋A402個、蓋B59個、蓋D2個で、ほかに、短頸壺、鉢、盤、平瓶、円面硯などがあり、杯A、杯B、皿A、皿B、蓋の供膳具が総個体数の80%以上を占める。

杯Aは、口径 11.0～14.0 cm・器高 3.0～4.0 cm を測るものが主体をなす。これは、石原畑3号窯に後出すると考えられる西長尾1号窯出土遺物と比較すると、西長尾1号窯出土杯Aは、口径 11.5～14.0 cm・器高 2.5～4.0 cm を測る一群(杯AⅡ)と、口径 14.5～17.0 cm・器高 3 cm 前後を測る一群(杯AⅢ)に分かれ、全体に石原畑3号窯出土杯Aが器高に対し口径が小さく、法量の集中化が認められるのに対し、西長尾1号窯は、器高に対し口径が大きくなり、法量が2群に分かれる。この傾向は杯B、皿A、蓋Aにもみられる。

石原畑3号窯出土杯Bは、口径 10.5～19.8 cm・器高 3.1～8.1 cm を測るが、その多くが口径 13.0～14.5 cm・器高 3.2～5.2 cm に集中するのに対し、西長尾1号窯出土杯Bは、口径 7.4～21.4 cm・器高 2.0～7.6 cm とばらつきがあり、口径 11.0～13.5 cm・器高 2.0～4.0 cm を測る一群(杯BⅡ)と、口径 14.3～16.5 cm・器高 3.0～3.5 cm を測る一群(杯BⅢ)に分かれる。法量の変化とともに杯A、杯Bの数量比では石原畑3号窯出土杯Aが434個、杯Bが289個と 1.2 : 1 に対し、西長尾1号窯では杯Aが759個、杯Bが1,971個と 1 : 2.5 で、杯Aと杯Bの比率が逆転する。この傾向は平城宮でも認められ、平城宮Ⅰ～Ⅲ期においては、杯Aと杯Bの数量比が 2 : 1 に対し、平城宮Ⅳ期以降には、杯Bが量的に杯Aをしのご傾向にある。

皿Aは、石原畑3号窯出土皿Aが口径 12.8～20.6 cm・器高 1.2～3.1 cm を測り、その

うち、口径 14.0~16.5 cm・器高 1.8~2.5 cm に法量が集中するのに対し、西長尾 1 号窯出土皿 A では口径 10.0~22.5 cm・器高 1.0~2.5 cm と法量の幅が広がる。石原畑 3 号窯出土皿 A・皿 B の比率では、皿 A が 240 個、皿 B が 166 個と 1.5:1 に対し、西長尾 1 号窯は皿 A 404 個に対し、皿 B は 1 個であり、皿 B の激減化が認められる。

石原畑 3 号窯出土蓋は、頂部に宝珠形つまみをもつ蓋 A と輪状のつまみをもつ蓋 B に分かかれ、蓋 A は口径 9.2~26.2 cm を測り、そのうち、口径 14.0~16.0 cm と口径 18.0~20.0 cm に法量が集中し、前者は杯 B の、後者は皿 B の法量の集中化と符合する。蓋 B は口径 18.0~19.0 cm に集中し佐波里碗を模した杯 C の法量と符合する。

石原畑 3 号窯出土杯 B、杯 C、皿 B の形態的特徴として、高台はいずれも縁端部より 0.5~1.0 cm 内側に外方に踏んばった高台を貼りつけ、西長尾 1 号窯出土杯 B では、縁端部に接して高台を貼りつける。

杯・皿・蓋の器種以外、石原畑 3 号窯・西長尾 1 号窯とも、壺・鉢・盤・短頸壺など 10 個体未満と完形品に復元し得るものが少なく、法量・形態の差異を検討する資料に欠ける。ただ、石原畑 3 号窯では、西長尾 1 号窯にない器形として大型皿とセットをなす大型皿蓋、杯 C とセットをなす蓋 B があり、石原畑 3 号窯にはなく、西長尾 1 号窯にある器形として蓋 D、鉢 B、二面硯がある。

以上、石原畑 3 号窯を中心に、西長尾 1 号窯との形態・法量の比較検討をした。石原畑 3 号窯は、杯 A・杯 B とも法量の集中化がみられ、杯 A と杯 B の個体数の比率が 1.2:1 であること、佐波里碗を模した杯 C が口径 18.6~20.0 cm を測り、それとセットをなす蓋 B があること、皿 A・皿 B とも法量の集中がみられる。また、土師器を模した皿 A・皿 B の法量が平城宮Ⅲ期の土師器皿 A・皿 B に近似すること、皿 A・皿 B の個体数比率が 1.5:1 であること、大型皿 B とそれとセットをなす大型皿蓋があることより石原畑 3 号窯は、奈良時代後期、8 世紀第 3 四半期を前後する時期と考えられる。ただ、奈良時代中期の代表遺跡である平城宮内遺構 (SK 820 など)、京都府木津町上津遺跡出土遺物とは、肉眼観察によると胎土は異なり、今後、消費地への供給地の問題がある。

2. 石原畑 1・2 号窯出土遺物について

1・2 号窯は遺構で記したように 1 号窯の操業を終了したのち、1 号窯の関連遺構である SK 03 を埋め戻し、盛土(版築)を行ったのち、2 号窯を構築したことが明らかであり、1 号窯が 2 号窯に先行する。

出土遺物は 1・2 号窯窯体内のほか、2 号窯焚口部灰原 oq 10~14 区、上・下層灰原のほか、SK 01・SK 03・SK 04・SD 05 があり、器種が多種にわたる。

ここでは、一括資料と考えられる 1 号窯窯体内およびその関連遺構である SK 03、2 号

窯窯体内および同焚口部灰原，oq 10～14 区上層灰原出土遺物の検討を行いたい。

1号窯窯体内および SK 03 内には，杯A・B，蓋C，壺Ab・B・E，鉢Ab，盤，円面硯が出土し，その多くが杯A・杯B・蓋Cである。

1号窯窯体内および SK 03 出土杯Aは，底部が平底あるいは丸底ぎみのものから，口縁部へ向かって丸みをもって屈曲し，石原畑3号窯および西長尾1号窯出土杯Aとは形態を異にする。SK 03 出土杯Aは，口径 12.5～15.0 cm・器高 3.0～4.0 cm を測り，法量の斉一化がみられる。杯Bは口径 10.4～19.8 cm・器高 3.0～8.1 cm とばらつきがあるが，その多くが口径 11.6～13.0 cm・器高 4.0～5.0 cm を測り，杯Bとセットをなす蓋Cの口径と符合する。杯Bは，口径 10.4～19.8 cm・器高 3.0～8.1 cm とばらつきがあるが，その多くが口径 11.6～13.0 cm・器高 4.0～5.0 cm を測り，杯Bとセットをなす蓋Cの口径と符合する。杯Bは，口径と底径の比率(口径/底径)平均が1.61で，石原畑3号窯が1.29，西長尾1号窯が1.36と，石原畑3号窯，西長尾1号窯，石原畑 SK 03 と順次，口径に対し底径が小さくなる。蓋はいずれも縁端部の屈曲が鈍角ぎみで尖りぎみに終わり，頂部中央にはつまみが消失する。壺 Ab は，西長尾1号窯に比し体部の長胴化がみられ，体部と口縁部の接合が西長尾1号窯の2段に対し1段となる。底部は西長尾1号窯壺Aaの外方に踏んばった高台を貼りつけるのに対し，石原畑2号窯では平底で回転糸切り痕を明瞭にとどめる壺Abに変化する。壺Bは，底部ナデ調整であり，この器形は小柳1号窯より石原畑1・2号窯へ続き，後出する西長尾3号窯では消失し，ある程度時間幅が限定できる資料と考えられる。盤は，石原畑3号窯以降出土するが，石原畑1・2号窯では，口径 2.34～3.28 cm・器高 12.6～11.0 cm を測り，縮小化傾向とともに壺Abと同様，底部回転糸切りとなる。鉢Abは，西長尾1号窯出土鉢Aと比較すると，口径および体部最大径に対し器高が高くなり，長胴化傾向がみられる。底部は壺Abと同様，すべて回転糸切りとなる。

1号窯窯体内および SK 03 出土遺物と，2号窯窯体内および SK 04，SK 05 出土遺物と比較すると，杯A，杯B，蓋Cとも法量は近似し，壺Ab，鉢Ab，盤とも形態の差異は認め難く相前後した資料と考えられる。ただ，1号窯関連遺構である SK 01 より出土している皿Cは，2号窯焚口部灰原およびその関連遺構内(SK 04・SK 05)より出土量が増加し，新たな器形として皿Dがある。皿C・皿Dは石原畑2号窯以降，西長尾3号窯，前山2・3号窯，黒岩1号窯へ続く器形である。

1・2号窯およびその関連遺構出土遺物は，器形・法量ともに近似することにより，相前後した時期に構築されたと考えられる。1・2号窯およびその関連遺構出土遺物に近似した消費地の資料として，平城宮^(注20)650 AB，京都大学教養部構内^(注21)AD 22 区，SK 265・257がある。平城宮650は東三坊大路東側溝で2度にわたって改修があり，SD 650 A・SD 650 B に

区別されている。SD 650 A は一部古相の遺物を含むが、天長 5・7 (828・830) 年の紀年銘をもつ木簡が出土しており、SD 650 B は SD 650 A の埋没後掘り開いた遺構である。石原畑 1・2 号窯に近似した土器は、SD 650 A では鉢 Ab (401・402)、SD 650 B では皿 C (652)、壺 C (658) がある。平安京京都大学教養部構内 AD 22 区、SK 257、SK 265 は梵鐘を鑄造した特殊な遺構であり、同土坑内には、鑄型・溶解した曲面をもつ粘土塊のほか、土師器・黒色土器・須恵器が出土している。同遺構の概要報告は、『京都府埋蔵文化財情報』第 5 号で記され、出土遺物のうち、杯 A (12・13)、杯 B (15)、壺 Ab (16・17) は、石原畑 1・2 号窯に近似する。

平城京 SD 650 A は前述のように 9 世紀中頃に掘削され、SD 650 B は 9 世紀末葉～10 世紀初頭と考えられている。京大構内 SK 257、SK 265 は、須恵器とともに土師器・黒色土器・梵鐘文様の鑄型があり、9 世紀末葉と考えられているが、土師器の形態より若干遡ると考えられる。消費地の出土例が少なく、今後、新たな知見が表われると思われるが、消費地の年代より類推し、1 号窯は 9 世紀第 3 四半期、2 号窯は前後関係から 1 号窯より若干新しくなると考えられる。

(石井 清司)

第4章 総括

第1節 篠窯跡群出土須恵器について

国道9号バイパス建設に伴う篠窯跡群の発掘調査は昭和51年度より始まり、総数14基の窯体構造および出土遺物が明らかになった。ここで、概要報告と記述が重複すると思われるが、各窯出土遺物の形態および器種の消長変化を検討し、土器の編年案を明らかにしたい。

各窯出土遺物は、コンテナ・バット100～500箱の莫大な量にのぼるが、その多くが、杯・椀・皿・蓋の供膳用土器が70%以上を占める。各窯の詳細な検討は前述したため、ここでは形態・器種の消長変化を中心に、時期ごとに検討していきたい。

これまでの篠窯跡群の発掘調査で良好な一括遺物が出土した窯は10基をかぞえ、出土遺物より類推すると、石原畑3号窯→西長尾1号窯→小柳1号窯→石原畑1・2号窯→西長尾3号窯→前山2・3号窯→黒岩1号窯→西長尾5号窯という前後関係が考えられる。

ここで、器種別に形態・消長変化をみると、杯Aは石原畑3号窯から西長尾5号窯まで連続と続くが、形態・法量の差異が認められる。

石原畑3号窯出土杯Aは、底部と口縁部の屈曲が明瞭であり、形態は西長尾1号窯出土杯Aに近似するが、法量が口径11.0～14.0cm・器高3.0～4.0cmに集中し、西長尾1号窯にみられる法量のばらつきは少ない。また、石原畑3号窯出土杯Aの径高指数(口径/器高)平均が3.74に対し、西長尾1号窯出土杯Aは径高指数3.2となり、石原畑3号窯から西長尾1号窯へと器高が低くなる反面、口径は大きくなる。

小柳1号窯出土杯Aは、底部と口縁部の屈曲部が丸みをもち、口縁部の広がり強く、椀形態に近づき、小柳1号窯以降、西長尾5号窯まで杯と椀の識別が困難である。

石原畑1・2号窯出土杯Aは、底部が丸底ぎみとなり、口縁部の屈曲が丸みをもち、内彎ぎみに立ちあがる。

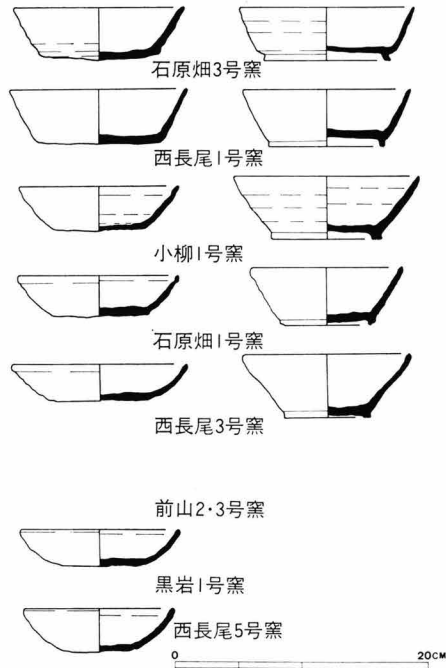
西長尾3号窯出土杯Aは、底部より内彎ぎみに立ちあがり、口径に対し器高は低くなる。

黒岩1号窯・西長尾5号窯出土杯Aは、西長尾3号窯と口縁部の形態は同じであるが、口径が小さくなり、また、黒岩1号窯・西長尾5号窯出土杯Aには、底部がヘラ切りのもと回転糸切りのものがあらわれる。

杯Bは、石原畑窯跡では、口径10.4～24.2cm・器高3.5～6.4cmを測り、その多くが口径13.0～14.5cm・器高3.5～4.5cmに集中し、径高指数は3.34を測る。西長尾1号窯では、口径7.4～21.2cm・器高2.3～11.5cmを測り、全体に法量のばらつきがみられ、口径・器高とも石原畑3号窯出土杯Bに対し大きくなる。また、径高指数平均は2.9を測

り、口径に対し器高が低くなる。形態では、石原畑3号窯出土杯Bが口縁端部より内側に外方に踏んばった高台を貼りつけるのに対し、西長尾1号窯では口縁端部に接して断面長方形の高台を貼りつける。

小柳1号窯出土杯Bは、石原畑3号窯・西長尾1号窯に比し、さらに口径・器高とも大型化がみられ、口径12.7cm前後・器高4.0~5.5cm、口径15.0cm前後・器高5.0~6.0cm、口径18cm前後・器高7~^(注22)7.5cmの3タイプに大別されている。小柳1号窯に続く石原畑1・2号窯では法量が、口径12.5~15.0cm・器高3.0~4.0cmに集中し、小型化傾向がみられ、径高指数平均は2.74を測る。石原畑1・2号窯に続く西長尾3号窯では口径に対し底径が小さくなり、



第56図

篠窯跡群出土杯A・杯Bの形態変遷図

石原畑3号窯出土杯Bの底径指数(口径/底径)平均が1.3に対し、石原畑1・2号窯では1.6となる。高台は底部縁端部に接して、外方に踏んばった低い高台へと変化する。

総個体数における杯A・杯Bの割合は各窯で変化がみられ、石原畑3号窯では杯が総個体数の41.2%を占め、そのうち、杯Aと杯Bの比率が1.5:1と杯Aが杯Bを凌駕するが、西長尾1号窯では、杯が総個体数の49.2%を測り、杯Aと杯Bの比重が1:2.6と杯Aと杯Bの個数が逆転する。続く小柳1号窯では杯Aがさらに減少し、杯Bが総個体数の50.6%を占めるのに対し、杯Aは27.9%となる。西長尾3号窯では、杯Aが16.2%であるのに対し杯Bは0.26%であり、杯Bの消滅化傾向がみられる。杯Aも西長尾3号窯以降、減少化傾向がみられ、前山2・3号窯の1.1%、黒岩1号窯の7.12%、西長尾5号窯の20.4%となる。

皿Aは、石原畑3号窯では皿Bとともに口縁端部内側に1条の沈線をめぐらす。西長尾1号窯、小柳1号窯では沈線をめぐらすものは極少である。法量を比較すると石原畑3号窯では、口径12.8~20.6cm・器高1.2~3.1cmを測り、その多くが口径14.0~16.5cm・器高1.8~2.5cmに集中する。これに対し、西長尾1号窯では、口径10.0~22.5cm・器高0.5~2.5cmを測り、石原畑3号窯に比し口径が大きくなり、かつ、全体にばらつきがみられる。小柳1号窯では、口径14.0cm・器高17.5cm前後を測る。

皿Bは、西長尾1号窯では1個体、小柳1号窯では8個体と比較資料に欠ける。

皿Cは、小柳1号窯より出現し、石原畑1・2号窯、西長尾3号窯、前山2・3号窯、黒岩1号窯へと続き、皿A・皿Bにかわる器形である。小柳1号窯出土皿Cは、口径29.1 cm・器高3.2 cmを測り、石原畑1・2号窯では、口径12.6~14.6 cm・器高1.4~2.4 cmを測るものと、口径17.4~21.0 cm・器高4.2~5.2 cmを測るものがある。西長尾3号窯では出土量が少なく不明であるが、前山2・3号窯、黒岩1号窯では、口径12.4~14.1 cm・器高2.5~3.2 cmと小型化傾向がみられる。

各窯における皿の割合は、石原畑3号窯では23.2%を測り、皿Aと皿Bの割合が1.5:1に対し、西長尾1号窯では皿Aが404個に対し皿Bが1個と消滅化傾向にある。小柳1号窯では皿Bとともに皿Aが減少し、皿Aの比率が2.2%に対し、新たな器形として皿Cが出現する。皿Cは、小柳1号窯以降主体をなし、石原畑2号窯2.5%、前山2・3号窯7.7%、黒岩1号窯8.5%となる。奈良時代的様相を呈する皿Aは小柳1号窯以降で消滅する。

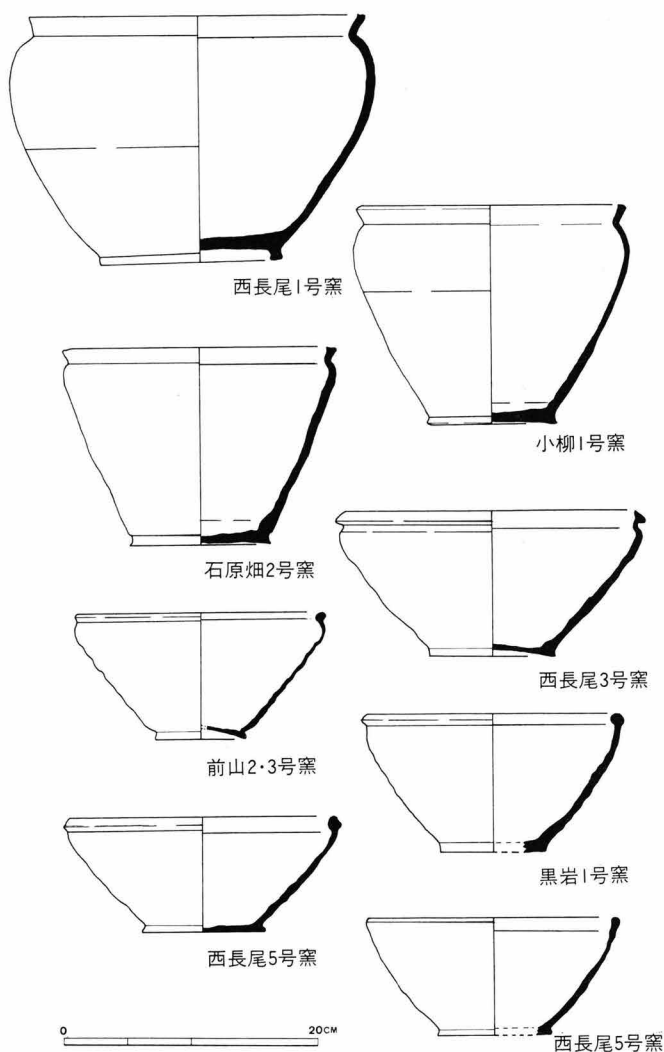
椀Bは、西長尾3号窯より出現し西長尾5号窯まで続き、西長尾3号窯では総個体数の62.3%と主体をなすが、前山2・3号窯、黒岩1号窯では0.2%、13.3%と極少である。これは前山2・3号窯、黒岩1号窯が緑釉陶器生産のための二次焼成窯という特殊窯であるため緑釉陶器の器形である皿C・椀Cが主体を占め、日用雑器である椀Bが激減したと考えられる。

蓋Aは、石原畑3号窯、西長尾1号窯、小柳1号窯、石原畑2号窯で出土している。石原畑3号窯出土蓋Aは、口径10.2~28.0 cmを測り、口径14.0~16.0 cmの一群と、口径18.0~20.0 cmを測る一群に分かれ、出土遺物より前者は杯B、後者は皿Bの蓋と考えられる。西長尾1号窯では、口径11.6~22.2 cmを測り、皿Bの消失より、杯Bの蓋と考えられる。小柳1号窯では蓋Aとともに宝珠形つまみをもたない蓋Cが出現し、蓋Aと蓋Cの比率は蓋Aが440個に対し蓋Cが49個である。小柳1号窯に続く石原畑2号窯では蓋Aが1個に対し蓋Cが292個をかぞえ、個数が逆転する。小柳1号窯以後、蓋Aが消失し、蓋Cのみとなる。蓋Cは、石原畑1・2号窯以降、杯Bと関連し、小型化の傾向が認められる。総個数における蓋Cの比率は小柳1号窯の3.9%、石原畑1号窯の23.4%、石原畑2号窯の32.3%と増大するが、西長尾3号窯では0.07%と激減し、以後、蓋形態は消える。

壺Aは、西長尾1号窯では体部が倒卵形を呈し、底部には外方に踏んばった高台を貼り付ける壺Aaが大半である。小柳1号窯出土壺Aは、器高9~11 cm前後の小型品、器高15 cmの中型品、器高20~23 cm前後の大型品と3種に大別されており、小・中型品より底部回転糸切り(壺Ab)が認められ、大型品は高台を貼りつけたもの(壺Aa)となる。続く石原畑1・2号窯、西長尾3号窯では、体部の長胴化傾向がみられ、大型品も含め底部回転糸切りとなり西長尾5号窯まで続く。

壺Aは、石原畑3号窯より西長尾5号窯まで連続と続き、石原畑3号窯1.1%、西長尾1号窯2.5%、小柳1号窯16.9%、石原畑1号窯8.1%、石原畑2号窯17.2%と増大化するが、西長尾3号窯以降7.4%、前山2・3号窯0.66%、黒岩1号窯0.53%、西長尾5号窯1.38%と極少となる。

鉢は、西長尾1号窯では扁平な体部を呈し、底部に高い高台を貼りつけるが、続く小柳1号窯、石原畑1・2号窯では、器高が体部最大径を凌駕し、長胴化傾向がみられ、底部回転糸切りによる平底へ変化する。石原畑1・2号窯では口縁端部内側を強く上方につまみ上



第 57 図 篠窯跡群出土鉢の形態変遷図

げる。この傾向が続く西長尾3号窯では、肩部を形成し、口縁部を「く」の字状に屈曲させるもの(鉢C)へ変化する。前山2・3号窯、黒岩1号窯、西長尾5号窯では、西長尾3号窯にみられる「く」の字状口縁から、口縁端部を外方に折り返し玉縁状口縁に変化させたもので、前山2・3号窯にみられる肩部を形成し、玉縁状口縁を内傾させるものから、肩部が消え底部から口縁部へそのまま続き、口縁部をわずかに内傾させる黒岩1号窯、口縁部を内・外方のいずれかに肥厚させ、退化した玉縁状口縁をなす西長尾5号窯へと変化する。

各器種の形態・器型の消長変化を羅列したが、篠窯跡群全体を通じては、甕、壺などの大型品が僅少であり、口径15cm前後の杯・椀・皿・蓋の小型器型が主体をなし、石原畑

3号窯，西長尾1号窯の奈良時代的様相から，小柳1号窯以降，平安時代的様相に変化する。回転糸切りによる平底は，小柳1号窯出土鉢，盤の大型品から順次移行し，篠窯跡群の最終窯と考えられる西長尾5号窯では，回転糸切りによる平底が総個体数の80%以上を占める。

ここで，各窯遺物を検討すると，石原畑3号窯と西長尾1号窯との間には，杯A・杯B・皿A・皿Bの法量個体数の変化，大型皿・大型皿蓋の消失，杯C・蓋Bの消失より1型式の間隙が考えられ，西長尾1号窯と小柳1号窯では，蓋Cの出現，小型壺A，鉢A，盤の回転糸切りによる平底の出現，皿Cの出現より1～2型式の変化が考えられる。小柳1号窯と石原畑1・2号窯では，蓋A・蓋Cの比率に差異があらわれるが，杯A・杯B・鉢・盤とも形態・法量が近似することより近接した時期と考えられる。石原畑1・2号窯と西長尾3号窯では，椀B・鉢Cにみられる器種構成に大きな差異が認められ，1～2型式の間隙が考えられる。西長尾3号窯と前山2・3号窯では，半地下式窖窯と特殊窯という窯体構造の差異により，製品である土器の器種構成の変化が考えられるが，皿C・椀Cの量的変化，鉢Cから鉢Dへの移行などにより1～2型式の間隙を考えたい。前山2・3号窯，黒岩1号窯では器種構成・法量ともに近似し，近接した時期と考えられるが，続く西長尾5号窯は，日用雑器を主体とする特殊窯という限定があるが，皿C・椀Cの消滅，椀Bの増大より1～2型式の間隙が推される。

これら出土遺物より各窯は，石原畑3号窯→○→西長尾1号窯→○→小柳1号窯→石原畑1・2号窯→○→西長尾3号窯→○→前山2・3号窯→黒岩1号窯→○→西長尾5号窯と考えられる。

各窯の年代は，各窯の概報，あるいは『京都府埋蔵文化財情報』で記したように^(注23)，消費地における数点の資料より類推すると，石原畑3号窯は8世紀第3四半期，西長尾1号窯は8世紀末葉～9世紀第1四半期，小柳1号窯は9世紀中葉～9世紀第3四半期，石原畑1・2号窯は9世紀第3・第4四半期，西長尾3号窯は10世紀第1四半期，前山2・3号窯は10世紀中葉～10世紀第3四半期，黒岩1号窯は10世紀第3・第4四半期，西長尾1号窯は11世紀第1四半期と考えられる。

(石井 清司)

第2節 篠窯跡群の窯体構造について

篠窯跡群では9基の半地下式窖窯と5基の平窯の調査を行った。

各窯は，芦原1号窯と黒岩1号窯を除き，丘陵西側斜面に位置している。これは，最も焼成に適した一定方向の乾燥した北西風を受け入れるため，篠地域の谷あいの地形を考慮し，西側斜面に築窯したものと考えられる。

各窯の窯体全長、焚口部最大幅、床面傾斜角は、付表15のとおりである。数値に多少の誤差がみられるのは、築窯に際して、微妙な考慮がなされたためであると推測される。

窯体について、基準を設けるために、窯体全長を焚口部最大幅で割ることにより、窯体指数を算出した。その結果から、窯体形式は短形から長形に移行していることが認められる。窯体の全長は、時代が新しくなるにつれて長くなり、焚口部最大幅は広くなる。また、最大傾斜角は小さくなっている。8世紀後半～10世紀にかけて、年代を経るにしたがい窯体の大型化が認められる。

各窯は窯体指数より、ABCの3群に大別することができる。

A群は、石原畑3号窯、西長尾1号窯、小柳1号窯である。特徴としては、煙道部が非常に短く、焼成部より煙道部にかけての傾斜が大きく切り上がっている。

B群は、西長尾4号窯、芦原1号窯である。特徴としては、A群に比べ、煙道部が長くなり、傾斜もゆるやかになっている。特に、西長尾4号窯においては、煙道部中央まで遺物が認められる。

C群は、石原畑1号窯、石原畑2号窯、前山1号窯、西長尾3号窯である。A・B群に比べ煙道部は細く長くなっていて、焼成温度は低く、本来の煙道部としての機能を果たしている。なかでも、A・B群では、燃焼部および焼成部と煙道部の急激な焼成温度差および還元状態の境が不明瞭であったものが、C群の西長尾3号窯では顕著に認められる。そして、焼成部は強還元層(高温型)で950°以上となり、灰色化している。煙道部は酸化層(低温型)で950°以下となり、赤色化している。また、煙道部には遺物焼成の痕跡が認められず、明らかに煙道部として、焼成部に継ぎ足されたものであると推測される。その誘因となったものは、傾斜がゆるやかになり、大型化し、著しく炎の引きが低下したために、その欠点を補うため煙道部を長くし、窯体全体の炎の回りのバランスをとったものと推定

される。

各窯出土遺物をみると、A・B・C群に、顕著な差異が認められる。A群出土遺物には、急激な温度下降による緑褐色の自然釉が認められる。

年代	窯跡名	窯体内全長	焚口部最大幅	係数	最大傾斜	
750	石原畑3号窯	3.68m	1.07m	3.439	46.5°	A
800	西長尾1号窯	4.59	1.10	4.145	45.6°	A
	西長尾4号窯	4.92	1.15	4.278	41.0°	B
	芦原1号窯	6.50	1.52	4.276	45.0°	B
	小柳1号窯	5.70	1.17	4.872	46.0°	A
850	石原畑1号窯	5.47	1.13	4.840	33.5°	C
	石原畑2号窯	8.16	1.11	7.351	41.0°	C
	前山1号窯	6.64	1.37	4.160	30.0°	C
900	西長尾3号窯	7.46	1.30	5.738	38.0°	C

付表 15 篠窯跡群各窯体規模一覧表

窯体形式と自然釉について

自然釉の微妙な色調の変化は、窯体の型式・構造により、大きく左右される。植物の灰はそれ自体でも釉を形成する。植物の灰は釉の主成分である珪酸(SiO₂)に酸化カルシウム(CaO)・酸化アルミニウム(Al₂O₃)から成り立っている(付表16)。したがって、遺

種類		マ	ツ	ナ	ラ	カ	シ	イ	ネ
成分									
珪酸	SiO ₂	24.39	63.71	39.62	85.28				
リン酸	PO ₄	2.78	4.86	2.62	1.42				
酸化アルミニウム	Al ₂ O ₃	9.71	3.87	16.34	1.19				
酸化第二鉄	Fe ₂ O ₃	3.41	0.88	3.83	0.58				
酸化カルシウム	CaO	39.73	22.59	23.69	3.03				
酸化マグネシウム	MgO	4.45	1.32	4.14	1.64				
酸化カリウム	K ₂ O	8.98	1.35	5.68	3.63				
酸化ナトリウム	Na ₂ O	3.77	0.33	1.52	0.62				
二酸化マンガン	MnO ₂	2.74	1.09	3.24	0.78				

付表 16 篠地域自生植物灰の分析値表^(注24)

物の表面は、篠地域で自生した植物を燃料としたために、植物の灰による自然釉が発生したものである。

それぞれの窯体別にみる遺物総個数における自然釉の割合は、A群の石原畑3号窯では、12.15%と最も大きくなり、C群の西長尾3号窯では、0.42%と最も小さくなる。A群のように、窯体全長が短く、傾斜角が大きい(45°以上)窯体では、焼成開始時に、温度の急上昇が起こることが認められる。また、遺物に、焼成開始時温度が450°Cまで毎時100°C以上の上昇がみられた場合に起こる火爆が認められることでも明確である。

篠地域から出土した特異な形態を持つ三角窯については、950年前後と推定される前山2号窯・前山3号窯・黒岩1号窯がある。これらは、一重の床面構造であり、焚口は両端に1か所ずつある倒焰式窯体である。焼成形式は、窖窯より発展した横焰式の流れを有している。そして倒焰式三角窯(西長尾5・6号窯)は、窯体の小型化につれて考案されたものと推測される。

この前山2号窯・3号窯、黒岩1号窯では、緑釉陶器は須恵器と平行して生産されているが、緑釉陶器は酸化炎焼成であり、須恵器は還元炎焼成である。この両極端の焼成を一窯で行うために焼成操作を容易にした。その反面、窯体の構造は複雑化していったものと推測される。これらの窯体をさらに、高度な型式に移行したものが、西長尾6号窯であり、西長尾5号窯である。この2つの窯体は、二重床面構造であり、完全倒焰式となり、現在の窯体型式とほとんど相違のみられないかたちで発展したものである。

篠窯跡群の中で、西長尾窯跡群・石原畑窯跡群は、1つの窯体型式の移行において、約100年のサイクルが認められる。この主な理由としては、重要な燃料である薪と深く関連しており、その伐採後における燃料となりえる植物の成長期間が、約100年と考えられることから、約100年という窯体の移動サイクルが生じたものと推測される。(立花 正寛)

第3節 篠窯跡群について

篠窯跡群は亀岡盆地の東南部篠町に所在し、大堰川を挟んで北丘陵と南丘陵に分かれる。

北丘陵には篠町A号瓦窯が調査され、平安時代後期の瓦窯跡として知られている。南丘陵は「篠古窯跡研究会」により分布調査が行われ、昭和57年度からは、京都府教育委員会・当調査研究センターで、分布・試掘および発掘調査を継続して行っている。

今回は、篠北丘陵に分布する窯の様相が明らかでないため、南丘陵を篠窯跡群と総称して記述を行う。

分布調査の結果、篠窯跡群では2.3 kmの範囲に100基以上の窯跡が存在することを確認している。そのうち、発掘調査は、9号バイパス予定路線帯に限定され、実際に発掘調査し、窯体構造・出土遺物を明らかにしたものは15基にすぎない。調査成果によると、石原畑地区では、3号窯が8世紀第3四半期に、1・2号窯が9世紀第3四半期に構築され、西長尾地区でも、1・4号窯が800年を前後する時期に、3号窯が900年を前後する時期に、5・6号窯が1000年を前後する時期に構築されており、100年を単位として、各支群内で窯の移動が行われている。また、石原畑1・2号窯、西長尾1・4号窯、前山2・3号窯というように、相前後した時期に隣接して窯が並列している。

各窯が100年を単位として、古い窯を壊すことなく各支群に移動が行われていること、窯体構造の規格が時期ごとに類似することより、同一系列の工人による生産が200年続いたと考えられる。

京都府下における須恵器生産は、陶邑の第1次画期である地方窯への派生時期と軌を一にし、古墳時代後期以降、窯跡が点在する。数基の窯跡群の分布は別にして、20基以上をかぞえる窯跡群としては、篠窯のほか、^(注25)幡枝窯、^(注26)園部窯、^(注27)末高内窯がある。

幡枝窯は京都盆地東北部岩倉に所在し、岩倉川を境に西南部を幡枝地区、西北部を木野地区、東部を花園地区に分け、精力的に分布調査が行われている。分布調査の結果、6世紀末に窯業生産が開始され、7世紀には瓦窯とともに瓦陶兼業窯が操業され、8世紀には須恵器専業窯となる。幡枝窯の特徴として8世紀末以降、平安京の瓦を焼いた官窯である栗栖野、小野西瓦窯が設けられ、以後、須恵器生産は衰退する。

園部窯は園部町の中心部、天神山北西部から弓状に彎曲しながら南東にのびる谷地形に形成されており、東西2.3 km・南北1.0 kmの範囲に約25基の窯跡を確認している。各窯は4～5群に分かれ、5世紀後半より8世紀に至る窯跡群であり、その盛期は7～8世紀とされ、平安時代には終息を迎える。

末高内窯は夜久野町に所在し、1.8 km四方の範囲に31基の窯跡と31か所の須恵器の散布

地を確認しており、採集遺物より、奈良時代から鎌倉時代初期に至る窯跡群と考えられる。

以上のように、京都府下における窯跡群は古墳時代以降、窯跡の点在が知られているが、平安時代にいたり各窯跡群に変化がみられる。幡枝窯は、瓦陶兼業窯、須恵器專業窯から平安京遷都後は官窯的色彩をもつ瓦窯へ変化し、園部窯は、古墳時代後期以降も、末高内窯同様、地方的様相を残し、平安時代には終息する。平安時代に至り、平安京に隣接する幡枝窯が瓦窯へ、口丹波に所在する園部窯が終息するのに対し、山を挟んで平安京と隣接する篠窯は、100基以上をかぞえる須恵器專業窯として8世紀に始まり、9世紀以降盛期を迎え、篠窯跡の最終窯と思われる西長尾5号窯の時期である11世紀前半をもって終息する。

各窯跡群が9世紀以降、衰退あるいは終息するのに対し、篠窯が9世紀以降、盛期を迎えるのは、一大消費地である平安京に隣接し、出土遺物が平安京に点在すること、硯などの特殊遺物があることより、陶邑窯以降の官窯としての性格をもつ窯跡群として位置づけられていたためと考えられる。

「延喜主計寮式」によると、須恵器の調納義務を負う国として、摂津・和泉・近江・美濃・播磨・備前・讃岐・筑前の7か国がある。「延喜主計寮式」の記された10世紀中葉には、陶邑窯の衰退がみられ、それに対応した二次的措置として国家が国別に須恵器の調納義務を命じたものと考えられる。^(注28)これに対し、篠窯の操業がなされているのかかわらず、篠窯の所在する丹波国が調納義務国として記載されていないのは、篠窯が山を挟んで平安京と隣接するという位置関係より、須恵器・土師器の需要機関である大膳職・内膳司が須恵器の調納悪化に対応して、篠窯の直接把握を行った可能性も考えられる。

篠窯は9世紀以降盛期を迎えるが、同様相を呈する窯跡群として尾張猿投窯がある。^(注29)

猿投窯は尾張東南部の猿投西南麓に立地し、総数100基以上をかぞえ、5世紀末から14世紀まで連綿と続く窯跡群である。そのうち、奈良時代後半より平安時代には灰釉陶器を生産した瓷器窯159基を含め、374基の窯跡が確認されている。9・10世紀に盛期を迎える両窯跡群は、11世紀以降、様相を異にし、篠窯では、11世紀前半に各地に派生することなく窯の終息を迎えるが、猿投窯では11世紀末～12世紀には灰釉陶器から山茶碗に代表される灰釉系陶器へ移行し、窯の分布範囲は猿投窯から派生し、美濃・三河・遠江に広がる。

猿投窯は良質の陶土と豊富な燃料の供給源があり、須恵器とともに、灰釉陶器の生産への転換、供給範囲の拡大により11世紀以降も隆盛を誇るが、篠窯は、谷地形のせまい範囲に窯の密集がみられ、窯の選地の限界、原材料の不足、須恵器生産のみに執着したとともに、政府あるいは国衙の支配下にあったため、律令体制の弛緩によって終息する運命にあったと考えられる。

また、11世紀、篠窯の終息と前後する時期に東播磨を中心に明石市魚住、神戸市神出などで100基以上をかぞえる須恵質土器の生産がみられ、これをもって畿内では中世窯業生産へ移行するものと考えられる。(石井 清司)

- 注1 村尾政人「千代川遺跡発掘調査概要」(『京都府埋蔵文化財情報』第2号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1981
- 注2 『亀岡市史』上巻 1960
- 注3 注2に同じ。
- 注4 樋口隆久「前山1号窯の発掘調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1978
- 注5 安藤信策「黒岩1号窯の発掘調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1978
- 注6 安藤信策・水谷寿克・山口 博「篠小柳窯跡群の発掘調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』京都府教育委員会) 1980
- 注7 安藤信策「前山2・3号窯の発掘調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
- 注8 安藤信策・水谷寿克「小柳4号窯の発掘調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
- 注9 安藤信策・岡崎研一「芦原1・2号窯の発掘調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
- 注10 安藤信策「西長尾地区(SNNO地区)の試掘調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
- 注11 山中 章・高橋美久二・百瀬正恒ほか「長岡京跡左京第13次(7ANESH地区)発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第4集 向日市教育委員会) 1978
- 注12 奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告VI」『奈良国立文化財研究所学報』第23冊 1975
- 注13 平尾政幸「平安京左兵衛府」『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1978-Ⅱ 1978
- 注14 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅱ 1976年度 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981
- 注15 平良泰久・伊野近富ほか「平安京左京跡(内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都府教育委員会) 1980
- 注16 田辺昭三・吉川義彦編『平安京跡発掘調査報告・一左京四条一坊一』平安京調査会 1975
- 注17 泉 拓良・宇野隆夫ほか『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和52年度 京都大学埋蔵文化財研究センター 1978
- 注18 青木洋一『工藝用陶磁』技報堂 1970
- 注19 安藤信策「西山地区及び石原畑地区試掘調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
- 注20 注12に同じ。
- 注21 五十川伸矢「京都大学教養部構内 AP22 区の梵鐘鑄造遺構」(『京都府埋蔵文化財情報』第5号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982.9
- 注22 注16に同じ。
- 注23 石井清司「篠窯跡群出土の須恵器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第7号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983.3
- 注24 加藤悦三『釉調合の基本』窯技社 1970
- 注25 『Trench』34 京大考古学研究会 1982

- 注26 丸川義広「口丹波地方における須恵器生産の開始」(『盾列』創刊号 奈良大学考古研究会) 1975
高橋美久二「園部町の古窯跡群」『京都考古』第7号 1974
同志社大学考古学実習室、園部町遺跡分布調査研究会(『園部盆地における考古学的調査』一分布調査の成果—昭和56年)
- 注27 『京都夜久野の文化財』夜久野町教育委員会 1981
- 注28 浅香山木「平安期の窯業生産をめぐる諸問題」(同『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局) 1971
- 注29 柴垣勇夫「東海地方の灰釉陶器」(シンポジウム「平安時代の土器・陶器」—各地域の諸様相と今後の課題—発表要旨) 1981

西長尾窯跡調査参加者名簿一覧

- (補助員) 波多野徹・立花正寛・山口文吾・中西 宏・小島敏明・大石淳也・後藤 馨・上畑右一
・平本 哲・山本喜昭・松元達也・三原 進・山本 健
- (作業員) 宇野三雄・平田数太郎・松本春樹・村田順次・木村千代一・矢代四一郎・法貴四郎・小
川ふじ・中西ふみ子・日下部イクエ・西田初江・木村一江・小西すみ江・井内悦子・小
西君江
- (整理員) 片山律子・冬木千恵・梁野いずみ・岩田且子・岡本美代子・村田澄恵・三木伸子・村上
晴美・山本末子・河原早苗・堤 涼子・土田めぐみ

石原畑窯跡調査参加者名簿一覧

- (補助員) 波多野徹・立花正寛・小島敏明・黒田恭正・松元達也・浦芝久照・山本 健・浅見康治
・吉田和弘・甲田陽亮・籠谷治男・吉田直人・松本保宣・阪田浩章・清水 隆・小出正
憲・植村則明・佐藤勝憲・金沢啓明・仲原克弘・中西秀行・児玉 泰・片山統夫・菅原
淳之
- (整理員) 冬木千恵・岡本美代子・岩田且子・村田澄江・三木伸子・河原早苗・山本末子・村上晴
美・藤田順代・岡田依子・関本典子・劉 和子・岡田貞子・西田初恵・橋本若子・岡本
早月・西垣みゆき・別所京子・石野まゆみ・溝林素子・冬木万里・中村公子・山口輝子
・安藤南子・中西 恵・砂山ちさと・山口和子・森川なる美・岡本静子・木下広美・西
田 薫・広瀬香苗・安達久美子・辻田典子・上田和子・北川ともえ・竹下和子・竹原京
子・中村美也・江田恵美子・冨田敦子・山本弥生・臼井千映子・小塩礼子・安達君江・
坂本明美・大塚弥生・石原俊子・酒井信子・斉田英子・中野あけみ・松家みはる・曾根
ひろ子・伊藤泰子・田中智子・並河智実・森ゆかり・星野京子・吉田真名美

付表 17 西長尾窯跡出土遺物観察表

SK 06 出土遺物

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
1	蓋 A III	16.4	3.2	◦水平な天井部より縁部で鋭く反転し、丸みをもった縁端部へ続く。	◦縁部内・外面はロクロナデ。 ◦天井部内面はロクロナデ、中央部はナデ。	精 良	堅 緻	淡青灰色
2	蓋 A II	13.7	2.4	◦天井部中央に高い宝珠形つまみを貼りつける。	◦外面はヘラ削りののち、一部ナデ。 ◦つまみ部はナデ。	精 良	堅 緻	淡黄灰褐色
3	杯 A II	12.8	3.7	◦口縁部は底部より斜め方向に直線的に立ちあがる。 ◦口縁端部は尖りぎみにおわる。	◦口縁部内・外面はロクロナデ。 ◦底部内面はロクロナデ、中央部はナデ、外面はヘラ切りののち未調整。	精 良	甘 い	淡黄灰褐色
4	杯 B II	13.3	4.5	◦口縁部は底部より斜め方向に内彎(5)あるいは直線的に立ちあがり、口縁端部はわずかに尖りぎみにおわる。 ◦底部と縁部の屈曲部に低い高台を貼りつける。 ◦(4)は焼けひずみにより、底部が強く屈曲する。	◦口縁部内・外面はロクロナデ。 ◦口縁端部外面は強くロクロナデを施す。 ◦底部内面はロクロナデ、中央部はナデ、外面はヘラ切りののち未調整。	精 良	堅 緻	淡青灰色
5	杯 B III	16.0	5.7			精 良	堅 緻	淡青灰色
7	杯 B IV	19.6	7.6			精 良	堅 緻	淡青灰色
8		20.6	7.7			精 良	堅 緻	淡黄灰褐色
6	鉢 A	25.6	19.6	◦底部より、体部下半は直線的に立ちあがり、体部中央で内彎ぎみとなり、口縁部へ続く。 ◦内彎する頸部より、口縁部は強く外反し、口縁端部は内側につまみ上げる。 ◦底部と体部の屈曲部に踏んばった高台を貼りつける。 ◦体部最大径が器高を凌駕し、全体に扁平な感を与える。	◦口縁部内・外面はロクロナデ。 ◦体部外面下半はヘラ削りののちナデ。外面上半はロクロナデ。 ◦体部内面はロクロナデ。 ◦底部外面は未調整、指頭圧痕が顕著である。内面はナデ。	細砂を多く含む	やや甘 い	淡黄灰褐色

1号窯体内出土遺物

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
9	蓋 E	12.0	0.9	◦水平な天井部より、縁部はわずかに屈曲し、縁端部は内側に丸みをもっておわる。	◦縁部内・外面はロクロナデ。 ◦天井部内・外面はロクロナデ、内面中央はナデ。	精 良	堅 緻	淡青灰色

挿図番号	器種	法 量		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
10	蓋 A II	14.7	3.3	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は水平きみのもの(11~15)と、頂部より縁部に向かって笠形を呈するもの(10)がある。 縁部は一段屈曲し、縁端部は丸みをもっておわる。 天井部中央には宝珠形つまみを貼りつける。 	<ul style="list-style-type: none"> 縁部内・外面はロクロナデ。 天井部外面はヘラ削りののち一部ナデを加える。内面はロクロナデ。中央はナデ。 つまみ部はナデ。 	細砂を含む	甘い	淡灰褐色
11		14.8	2.9			細砂を含む	やや甘い	淡灰褐色
12		13.4	2.3			細砂を含む	甘い	淡灰白色
13		13.8	1.8			細砂を含む	堅 緻	淡青灰色
14		蓋 A III	18.1			2.5	細砂を多く含む	甘い
15	蓋 A IV	20.4	3.4	精 良	堅 緻	淡青灰色		
18	皿 A II	14.6	2.0	<ul style="list-style-type: none"> 底部より斜め上方に直線的に立ちあがり、口縁部中央でわずかに内側に屈曲する。 口縁端部は丸みをもっておわる。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内・外面はロクロナデ。 底部内面はロクロナデ、中央はナデ。外面はヘラ切りののち未調整。 	精 良	やや甘い	淡灰褐色
19	杯 A III	15.5	3.6	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は底部より斜め上方に、直線的に立ちあがるもの(20, 21)と、内彎きみに立ちあがるもの(19, 22, 23)がある。 口縁端部は尖りきみに丸みをもっておわる。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内・外面はロクロナデ。 底部内面はロクロナデ、中央はナデ。外面はヘラ切りののち一部ナデを施すものと未調整のものがある。 	細砂を多く含む	甘い	淡灰白色
20		14.2	4.4			精 良	甘い	黒灰色
21		13.6	3.9			精 良	甘い	暗灰色
22		12.6	3.5			精 良	堅 緻	暗青灰色
23	杯 A II	13.4	3.8	細砂を含む	やや甘い	淡灰色		
24	杯 B II	13.2	4.6	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は底部より斜め上方に直線的に立ちあがるもの(17, 24, 25, 27, 29)と、内彎きみに立ちあがるもの(16, 26)がある。 口縁端部は尖りきみに丸みをもっておわる。 高台は底部と口縁部の屈曲部に貼りつけたもの(24, 27)と、縁部より内側に貼りつけたものがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内・外面はロクロナデ。 底部内面はロクロナデ、中央はナデ、外面はヘラ切りののち未調整。 高台は内・外面ロクロナデ。 	精 良	堅 緻	淡灰褐色
25		12.6	4.4			精 良	堅 緻	淡灰褐色
26		12.8	4.7			細砂を多く含む	堅 緻	淡灰褐色
27		13.2	4.5			精 良	堅 緻	暗青灰色
16	杯 B III	16.8	6.1	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は底部より斜め上方に直線的に立ちあがるもの(17, 24, 25, 27, 29)と、内彎きみに立ちあがるもの(16, 26)がある。 口縁端部は尖りきみに丸みをもっておわる。 高台は底部と口縁部の屈曲部に貼りつけたもの(24, 27)と、縁部より内側に貼りつけたものがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内・外面はロクロナデ。 底部内面はロクロナデ、中央はナデ、外面はヘラ切りののち未調整。 高台は内・外面ロクロナデ。 	細砂を多く含む	甘い	暗灰色
17		16.2	5.1			精 良	堅 緻	淡青灰褐色
28		13.8	4.55			精 良	堅 緻	淡灰白色
29	杯 B IV	20.2	7.9	精 良	堅 緻	暗青灰色		

1号窯灰原・S X04・05直上灰原内出土遺物

挿図番号	器種	法 量		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
30	蓋 A II	12.2	2.3	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は水平きみのもの(30~33, 36, 38)がある。 縁部は、天井部より強く屈曲し縁端部で鋭く反転させる。 縁端部は丸みをもって反転するもの(30, 32, 33)と尖りきみにおわるもの(31, 36, 	<ul style="list-style-type: none"> 縁部内・外面はロクロナデ。 天井部外面はヘラ削りののち、乱ナデ、内面はロクロナデ。中央はナデ。 	精 良	堅 緻	淡青灰色
31		12.8	2.7			精 良	堅 緻	淡黄灰色
32		14.1	2.4			精 良	堅 緻	暗青灰色
33		13.7	3.0			精 良	堅 緻	淡青灰色
36		14.7	2.35			精 良	堅 緻	淡青灰色

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調			
		口径 (cm)	器高 (cm)								
37		14.0	3.0	37)がある。 ○天井部中央に高い宝珠形つまみを貼りつける。		精 良	堅 緻	淡青灰色			
38		14.3	2.0						精 良	堅 緻	淡青灰色
40	蓋 A III	16.0	3.8	○天井部は、水平ぎみのもの(41)と、頂部より縁部に向かって笠形を呈するもの(40)がある。(42)は焼成時に変形している。 ○縁部は天井部よりゆるく屈曲したのち、縁端部を丸くおさめる。 ○天井部中央に扁平(41, 42)あるいは高い(40)宝珠形つまみを貼りつける。	○縁端部内・外面はロクロナデ。 ○天井部外面はヘラ削りののち乱ナデ、内面はロクロナデ、中央部はナデ。	精 良	堅 緻	青 灰 色			
41		17.6	2.75						精 良	やや甘い	淡灰褐色
42		18.0	2.15						精 良	堅 緻	淡青灰色
39	蓋 A IV	19.4	3.9	○天井部は頂部より縁部に向かって笠形を呈する。 ○縁部は、天井部よりゆるく屈曲したのち、縁端部で鋭く屈曲する。 ○天井部中央に高い宝珠形つまみを貼りつける。	○縁部内・外面はロクロナデ。 ○天井部外面はヘラ切りののち乱ナデ、内面はロクロナデ、中央部はナデ。	細砂を多く含む	堅 緻	青 灰 色			
43	蓋 E	15.8	1.0	○中央部で凹ぎみの低い天井部より縁部はわずかに屈曲する。 ○縁端部は丸みをもっておわる。	○縁部および天井部内・外面はロクロナデ。	精 良	堅 緻	淡青灰色			
34	蓋 D	9.0	3.2	○水平(35)あるいは山形の頂部より縁部は垂直に屈曲する。 ○縁端部は尖りぎみのもの(34)と、内側につまみだしたものの(35)がある。 ○天井部中央には、高い宝珠形つまみを貼りつける。	○縁部内・外面はロクロナデ。 ○天井部外面はナデ、内面はロクロナデ、中央部はナデ。	精 良	堅 緻	淡青灰色			
35		14.4	2.3						精 良	堅 緻	青 灰 色
44	杯 A II	11.6	4.0	○底部は丸底ぎみにふくらみ、底部より斜め上方に立ちあがる口縁部へ続く。 ○口縁端部は尖りぎみにおわるもの(46, 47, 50)と、丸みをもっておわるもの(44, 45)がある。	○口縁部内・外面はロクロナデ。 ○底部内面は中央を除き、ロクロナデ。外面はヘラ切りののち未調整。	精 良	堅 緻	淡青灰色			
45		12.2	4.5						精 良	堅 緻	淡青灰色
46		13.2	4.0						精 良	堅 緻	淡青灰色
47		12.5	3.85						精 良	甘 い	灰 白 色
50		13.2	3.7						精 良	堅 緻	淡青灰色
49		14.0	3.1						精 良	やや甘い	淡黄褐色

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
48	杯 A III	15.8	3.8	<ul style="list-style-type: none"> ○平底の底部より口縁部は斜め上方に直線的に立ちあがる。 ○口縁端部は丸みをもっておわる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内・外面はロクロナデ。 ○底部内面はロクロナデ、中央部はナデ。外面はへら切りののち未調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色
57	杯 B II	10.8	4.6	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は、底部より直線的に立ちあがるもの(58~61, 63, 64)と内彎ぎみに立ちあがるもの(57, 65)がある。 ○口縁端部は尖りぎみにおわる。 ○底部と口縁部の屈曲部に高台を貼りつけたもの(57~61, 63, 65)と、縁部よりわずかに内側に貼りつけたもの(64)がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内・外面はロクロナデ。 ○底部内面は中央のナデを除き、ロクロナデ。外面はへら切りののち未調整。 	精 良	堅 緻	暗青灰色
58		12.3	4.25			精 良	堅 緻	暗青灰色
59		12.2	4.8			精 良	堅 緻	淡青灰色
60		12.6	4.3			精 良	堅 緻	暗青灰色
61		12.6	4.3			精 良	堅 緻	暗青灰色
63		12.6	4.65			精 良	堅 緻	暗青灰色
64		13.6	5.0			精 良	堅 緻	淡青灰色
65		12.8	4.4			精 良	堅 緻	淡黄灰色
62	杯 B III	14.6	5.8	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は、底部より斜め上方に直線的に立ちあがるもの(68), 内彎ぎみに立ちあがるもの(62, 66, 69)と、底部よりわずかに内彎し、腰部を形成したのち、外反するもの(67)がある。 ○口縁端部は、つまみ上げ、尖りぎみにおわるもの(62, 69)と、口縁端部をわずかに外反させるもの(66, 67)がある。 ○底部と口縁部の屈曲部に断面長方形の高台を貼りつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内・外面はロクロナデ。 ○底部内面中央のナデを除いてロクロナデ、外面はへら切りののち乱ナデ。 	小石含む	堅 緻	濃青灰色
66		15.7	5.45			細砂を多く含む	堅 緻	青 灰 色
67		16.0	5.7			精 良	堅 緻	暗青灰色
68		15.8	5.6			精 良	堅 緻	淡青灰色
69		16.8	6.2			精 良	堅 緻	淡青灰色
70	杯 B IV	21.0	7.15	<ul style="list-style-type: none"> ○底部より斜め上方に、外反する口縁部へ続く。 ○口縁端部をわずかに外反させ、尖りぎみにおわるもの(70)もある。 ○底部と口縁部の屈曲部に低い高台を貼りつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内・外面はロクロナデ。 ○底部内面は中央のナデを除き、ロクロナデ、内面はへら切りののち乱ナデ。 	精 良	堅 緻	淡青灰色
71		20.0	8.1			精 良	堅 緻	青 灰 色
51	皿 A II	14.0	1.7	<ul style="list-style-type: none"> ○底部は平底のもの(51, 54)と、上げ底ぎみのもの(52)がある。 ○口縁部は底部より斜め上方に短く立ちあがる。 ○口縁端部は丸みをもつもの(54)と内側にわずかに肥厚させるもの(53)がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内・外面はロクロナデ。 ○底部内面は中央のナデを除いて、ロクロナデ、外面はへら切りののち未調整。 	精 良	堅 緻	青 灰 色
52		13.4	2.0			精 良	堅 緻	暗青灰色
53		13.8	2.0			精 良	堅 緻	暗青灰色
54		14.8	2.3			精 良	堅 緻	青 灰 色

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
55	皿A III	22.0	1.7	<ul style="list-style-type: none"> ○上げ底ぎみの底部より、口縁部は斜め上方に短く立ちあがる。 ○口縁端部は尖りぎみにおわる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内・外面はロクロナデ。底部内面は中央のナデを除き、ロクロナデ。外面はへら切りののち未調整。 	精良	堅緻	青灰色
56	皿B	19.6	2.8	<ul style="list-style-type: none"> ○底部より斜め上方に直線的に立ちあがる口縁部へ続く。 ○口縁端部は尖りぎみにおわる。 ○底部は口縁部の屈曲部より内側に断面長方形の高台を貼りつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内・外面はロクロナデ、底部内面はロクロナデ、外面は未調整。 	精良	堅緻	淡青灰色
72	壺D	12.2	—	<ul style="list-style-type: none"> ○いわゆる短頸壺である。 ○ナデ肩の体部より口縁部は短く垂直に立ちあがる。 ○口縁端部は、水平面をなす。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部および体部内・外面はロクロナデ、外面に自然釉付着。 	精良	堅緻	淡青灰色
73	鉢E	8.3	—	<ul style="list-style-type: none"> ○体部は内彎ぎみに立ちあがり、口縁端部でわずかに、外方に肥厚する。 ○体部と口縁部の区画が不明瞭である。 ○口縁端部は斜めに面をなす。 	<ul style="list-style-type: none"> ○体部および口縁部内・外面はロクロナデ。 	精良	やや甘い	暗灰白色
74		7.9	—			精良	堅緻	青灰色
75	鉢A	16.8	—	<ul style="list-style-type: none"> ○底部はいずれも欠損する。 ○底部より斜め上方に立ちあがったのち、体部上半で弱く内側に屈曲し、肩部を形成する。 ○ナデ肩の体部より口縁部は外反ぎみに短く立ちあがる。 ○口縁端部は外側にわずかに肥厚し面をなす。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内・外面はロクロナデ、体部外面はロクロナデ。内面はナデ。 	精良	堅緻	暗青灰色
76		21.6	—			精良	堅緻	黄淡灰色
87		24.5	—			精良	堅緻	暗青灰色
88		24.0	—			精良	堅緻	暗青灰色
92		22.2	—			精良	堅緻	暗青灰色
93		22.2	—			精良	堅緻	暗青灰色
81	壺A I	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ○体部最大径が中位よりやや上方にあり、倒卵形の体部より、口縁部は外反ぎみに立ちあがる。 ○口縁端部は、わずかに外方に垂下させ面をなす。 ○底部と体部の屈曲部に、やや内側に踏んばった高台を貼りつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内・外面はロクロナデ。 ○体部外面はロクロナデ、内面は未調整。 ○底部内・外面は未調整。 	精良	堅緻	淡青灰色
82		—	—			精良	堅緻	淡青灰色
97		4.0	10.2			精良	堅緻	淡青灰色

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調			
		口径 (cm)	器高 (cm)								
80	壺 A II	8.8	—	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部より斜め上方に直線的に立ちあがったのち、体部中位より上方で強く内側に屈曲し、肩の張りは強い。 ◦口縁部は、垂直に立ちあがる頸部で強く外反し、口縁端部は上下に肥厚する。 ◦口縁端部は、上方に強くつまみ上げる。 ◦底部と体部の屈曲部に外方に踏んばった低い高台を貼りつける。 ◦底部外面に糸切り痕をとどめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部内・外面はロクロナデ。 ◦体部外面はロクロナデ、内面は未調整。 ◦底部外面は糸切りののち未調整。 	やや粗	堅 緻	灰 白 色			
95		8.8	26.1						精 良	堅 緻	淡青灰色
96		8.8	—						精 良	堅 緻	暗青灰色
77	壺 B	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ◦頭部および口縁部は欠損する。 ◦体部は筒状を呈し、体部最大径が肩部にある。 ◦底部は、一部欠損しているが、高台を貼りつけたものと思われる。 ◦肩部に断面円形の把手を貼りつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部外面はロクロナデ、内面は未調整。 ◦底部調整は欠損のため不明。 	精 良	堅 緻	青 灰 色			
94		—	—						精 良	堅 緻	青灰白色
89	壺 C	5.7	—	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部下半を欠損する。 ◦体部は筒状を呈し、体部最大径が中位にある。 ◦頸部より垂直にのびる肩部を呈し、肩部の張りは強い。 ◦垂直に立ちあがる頸部より、口縁部は強く外反する。 ◦口縁端部は下方に垂下させ、丸みをもっておわる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦頸部および口縁部内・外面はロクロナデ。 ◦体部外面はロクロナデ、内面は未調整。 	精 良	堅 緻	暗青灰色			
83	壺 D	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部および口縁部を欠損する。 ◦体部下半は直線的に斜め上方に立ちあがり、上半で強く内側に屈曲し、肩部を形成する。 ◦口縁部は欠損するが、短く垂直に立ちあがるものと思われる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部内・外面はロクロナデ。 	精 良	堅 緻	淡青灰色			
89	盤 A	30.5	—	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部はいずれも欠損する。 ◦体部は、底部より外反して立ちあがり、口縁部でわずかに内側に屈曲させ、口縁部を形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦内・外面ともロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色			
90		27.5	—						やや粗	堅 緻	淡青灰色

3号窯出土遺物

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調			
		口径 (cm)	器高 (cm)								
100	杯 A	15.0	2.35	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部より内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。 ◦底部は平たいもの(100~102)や凹凸のもの(105,106)がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部および体部外面はロクロナデ調整。 ◦底部はヘラ切り。 ◦内面はロクロナデ調整。 	やや粗い	軟	灰白色			
101		14.8	2.7						やや粗い	軟	灰白色
102		13.6	2.9						やや粗い	軟	灰白色
103		14.6	2.85						やや粗い	軟	灰白色
104		13.0	3.1						やや粗い	軟	灰白色
105		13.0	2.8						やや粗い	軟	灰白色
106		14.4	2.7						やや粗い	軟	灰白色
107		13.2	4.1						精良	軟	灰白色
109	杯 B	13.0	5.0	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部は内彎ぎみに立ちあがるもの(110)と、直線的に立ちあがるもの(109)がある。 ◦口縁端部で内側へ丸くおさめるが、稜を有するもの(110)がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部内・外面はていねいなロクロナデ調整。 ◦高台は削り出し高台である。 	精良	堅緻	青灰色			
110		14.0	5.2						精良	堅緻	青灰色
108	碗 B	13.4	4.95	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部は、内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部でやや肥厚し、丸くまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部および体部外面はロクロナデおよび調整。 ◦底部は回転糸切りである。 ◦内面はロクロナデ調整。 	精良	堅緻	青灰色			
111		14.0	4.1						精良	堅緻	暗青灰色
112		14.6	4.25						精良	堅緻	暗青灰色
115		16.8	5.6						精良	堅緻	青灰色
116		17.8	5.7						やや粗い	やや軟	灰白色
113	壺 A b	4.1	12.4	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部より外上方に内彎ぎみに立ちあがったのち、肩部で強く屈曲する。 ◦肩部は強く張っている。 ◦口縁部はやや外反する頸部より端部で強く外反し、上下に肥厚する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部および体部外面はロクロナデ調整。 ◦底部は回転糸切りである。 ◦口縁部内面はロクロナデ調整。 ◦体部および底部内面はロクロ引き後未調整。 	細砂含	堅緻	淡青灰色			
114		—	—						細砂含	堅緻	淡青灰色
117	鉢 C a	16.4	6.6	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部は直線的に外上方に立ちあがる。 ◦口縁部で一度内彎し、端部で外方向に折れ、「く」の字状を呈する。 ◦端部は、丸くおさめるもの(118)と、三角形に突出させるもの(117)とがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部および体部外面はロクロナデ調整。 ◦底部は回転糸切り。 ◦内面はロクロナデ調整。 	精良	堅緻	淡青灰色			
118		18.8	—						精良	堅緻	淡青灰色

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調			
		口径 (cm)	器高 (cm)								
119	鉢 C b	22.4	—	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部は直線的に外上方へ立ちあがる。 ◦口縁部はやや強く屈曲したのち再び外方へ折れ、「く」の字状を呈する。 ◦口縁端部では、断面三角形状を呈する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部および体部内・外面ともにロクロナデ調整。 	粗い	軟	乳灰色			
120		13.3	—						細砂含	堅 緻	淡青灰色
122	杯 A II	13.4	2.8	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部から直線的に外上方に立ちあがる。 ◦口縁端部では、そのまま丸くおさめるもの(122, 125)がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部および体部内・外面ともロクロナデを施す。 ◦底部外面はヘラオコシ。 	精良	堅 緻	暗青灰色			
123		13.4	2.8						精良	堅 緻	淡青灰色
124		13.6	3.4						細砂を多く含む	軟	黄灰色
125		14.2	3.1						細砂を多く含む	軟	黄灰色
121	皿 D	12.8	2.6	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底を呈する。 ◦底部より、短く外上方へ立ちあがる。 ◦口縁部に小さな稜をもち、端部で丸くおさめる。 ◦高台は回転糸切りによる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部内・外面ともロクロナデ調整。 ◦外面底部は未調整。 ◦外面体部に指紋痕を有する。 	細砂を多く含む	堅 緻	暗青灰色			
126	碗 B	14.8	3.5	<ul style="list-style-type: none"> ◦立ちあがりは、内彎きみに、外上方に立ちあがる。 ◦口縁部で外方向へ折れ、丸くおさめる。 ◦底部は回転糸切りによる平底である。糸切り高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部内・外面ともロクロナデ調整。 	細砂を多く含む	堅 緻	淡青灰色			
127		17.2	4.7			精良	堅 緻	暗青灰色			
128		13.7	5.1			細砂を多く含む	軟	黄灰色			
129		16.3	4.4			細砂含	堅 緻	淡青灰色			
133		20.0	6.1			細砂を多く含む	堅 緻	淡黄灰色			
131	壺 A b	9.8	25.2	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部より、外上方へ直線的に立ちあがったのち、肩の張りの強いもの(132)とゆるやかなもの(131)がある。 ◦頸部ではやや外反しながら立ちあがり、口縁部で強く外反する。 ◦端部では上下に突出させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部内・外面はロクロナデ。 ◦体部外面はロクロナデ、内面は未調整。 ◦底部は回転糸切りによる。 	細砂含	堅 緻	淡青灰色			
132		4.1	9.7						細砂含	堅 緻	淡青灰色
130	鉢 C a	16.7	5.75	<ul style="list-style-type: none"> ◦主なプロポーションは(117, 118)に同じ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部の内・外面はロクロナデ調整。 ◦底部は回転糸切りによる。 	細砂含	堅 緻	淡青灰色			

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調									
		口径 (cm)	器高 (cm)														
134	鉢 C b	20.2	12.8	<ul style="list-style-type: none"> ○主なプロポーションは(119, 120)に同じ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部および体部外面はロクロナデ調整。 ○底部は回転糸切り。 ○内面はロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色									
135		25.2	—						精 良	堅 緻	淡青灰色						
136		23.0	11.5									精 良	堅 緻	暗青灰色			
137		21.6	—												精 良	堅 緻	淡青灰色
138		21.4	12.9														

5号窯出土遺物

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調						
		口径 (cm)	器高 (cm)											
139	杯 A b	12.8	3.9	<ul style="list-style-type: none"> ○底部より内彎ぎみに立ちあがるもの(140, 141)と、体部中心部よりやや外反気味に立ちあがるもの(139)がある。 ○口縁部は、上方向に丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部および体部内・外面とも粗いロクロナデ。 ○底部糸切り。 ○体部外面に指紋痕を有する。 	細砂を含む	堅 緻	淡黒灰色						
140		11.5	3.6						精 良	やや甘い	乳灰白色			
141		11.6	3.2									精 良	堅 緻	淡青灰色
142	碗 B	14.0	4.6	<ul style="list-style-type: none"> ○体部は外上方へ内彎ぎみに立ちあがる。 ○口縁部では丸くおさめるが、肥厚するもの(142)、外方向に向くもの(143)、内側に折れるもの(145)がある。 ○糸切り高台。 ○底部は回転糸切りによる平底である。 	○全体に未調整。	精 良	堅 緻	淡青灰色						
143		14.0	4.7						精 良	堅 緻	淡青灰色			
144		13.4	5.0									細砂を多く含むが 精 良	堅 緻	淡 灰 色
145		13.8	5.0											
147	鉢 D	22.6	<ul style="list-style-type: none"> ○体部は直線的に外方向に立ちあがる。 ○口縁部はやや内彎し、断面長方形を呈する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○体部および口縁部内・外面ともにロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	青 灰 色							
148		21.0						—	精 良	堅 緻	乳 灰 色			
146	壺 A b	6.2	12.0	<ul style="list-style-type: none"> ○体部は、内彎しながら外上方に立ちあがる。 ○肩部は丸くゆるやかである。 ○頸部は外反しながら、上方に立ちあがる。 ○口縁部で強く外反し、粘土帯を貼りつけ丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内・外面ともロクロナデ。 ○頸部外面はロクロナデ、内面は未調整。 ○体部は未調整。 ○切り離しは回転糸切りによる。 	細砂を多く含む	甘 い	淡黄灰色						

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
149	皿C	13.2	2.6	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部はほぼ平らである。 ◦立ちあがりは、ゆるやかに外上方へ立ちあがり、体部で稜を有し、それを境に急に立ちあがる。 ◦口縁部では、外方向に丸みを帯る。 ◦高台は削り出し高台。 	◦緑釉付着（ハケ塗りを行う）	精 良	堅 緻	断面色 靑 青 灰 色
150	椀D	12.0	4.0	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部より内彎ぎみに外上方に立ちあがる。 ◦口縁部でやや外反し、端部で外方向に丸くおさめる。 ◦高台は削り出し高台。 	◦口縁部、体部の内・外面ともヘラミガキを施す。	やや良	堅 緻	灰 白 色
151	杯A b	13.6	—	<ul style="list-style-type: none"> ◦主なプロポーションは(140, 141)に同じ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部および体部内・外面はロクロナデ調整。 ◦底部内面に一方向ナデを施す。 ◦切り離しは回転糸切りによる。 	細砂を多く含む	堅 緻	淡黄青灰色
152		13.4	3.7			細砂をわずかに含む	甘 い	淡黄灰色
153	椀B	13.4	4.6	<ul style="list-style-type: none"> ◦主なプロポーションは(142~145)に同じ。 ◦口縁端部は、断面長方形を呈するもの(153)、外方へ肥厚するもの(154)、そのまま丸みを呈するもの(155)がある。 ◦底部は回転糸切りによる平底である。 	◦体部は粗いロクロナデ調整。	やや良	やや甘い	淡青灰色
154		13.0	5.3			精 良	堅 緻	淡黄灰色
155		13.4	4.8			精 良	堅 緻	淡黄灰褐色
156		15.0	4.7			精 良	堅 緻	淡青灰色
157	杯A a	12.4	3.3	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部は、やや内彎ぎみに立ちあがる。 ◦口縁部で、そのまま上方に丸みを帯るもの(157)、やや内方に肥厚するもの(158~161)がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部および体部内・外面は、ロクロナデ調整。 ◦底部内面は、一方向ナデ調整。 ◦切り離しはヘラオコシ。 	精 良	堅 緻	暗青灰色
158		12.0	3.0			精 良	堅 緻	淡青灰色
159		11.6	3.5			精 良	堅 緻	淡青灰色
160		12.2	3.2			細砂をわずかに含む	堅 緻	淡青灰色
161		12.0	3.5			精 良	やや甘い	淡黄灰色
162	椀B	14.2	5.1	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部は、やや内彎ぎみに立ちあがる。 ◦口縁部で、外方向に肥厚するもの(162, 164)、そのまま丸くおさめるもの(163)がある。 ◦底部は回転糸切りによる平底である。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦口縁部および体部内・外面はロクロナデ調整。 ◦切り離しは糸切り。 	精 良	やや甘い	淡黄灰褐色
163		14.2	5.6			精 良	堅 緻	淡青灰色
164		15.0	4.15			精 良	堅 緻	淡青灰色

挿図番号	器種	法 量		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
165	杯 A	13.6	4.2	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は直線的に外上方にのびる。 口縁端部は、丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部および口縁部内 ・外面はロクロナデ。 ・外面は、体部と底部の境界にヘラ削りを施す(165)。 ・切り離しは糸切り(165)。 	精良	堅緻	淡黄灰色
166		12.4	3.6					
167	椀 D	16.6	6.45	<ul style="list-style-type: none"> 体部は内彎ぎみに立ちあがる。 口縁部で、内側に肥厚し、丸くおさめる。 高台は削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面はロクロナデの後、体部外面凸部にヘラミガキを施す。内面はロクロナデ調整。 	精良	堅緻	青灰色
168		15.6	6.65					
169	椀 B	13.5	4.8	<ul style="list-style-type: none"> 主なプロポーシオンは(167, 168)に同じ。 	<ul style="list-style-type: none"> 内面全体にロクロナデ調整。 ・底部は削り出し高台。 	精良	堅緻	暗青灰色
170	壺 A b	—	—	<ul style="list-style-type: none"> 底部より外上方に立ちあがる。 肩部の張りは弱く、最大径は比較的下部にある。 ・頸部より上側は欠損している。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面はロクロナデ調整。 ・底部に糸切り。 ・内面は未調整。 	細砂を多く含む	甘い	淡黄灰色
171	鉢 D	20.0	8.4	<ul style="list-style-type: none"> 底部よりやや内彎して立ちあがるもの(171, 172, 174)とまっすぐ立ちあがるもの(173)がある。 口縁部は内側へ屈曲する(171~173)。 ・端部は外方向に肥厚し、丸くおさめる(171~173)。 ・174は端部で肥厚し丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内・外面とも凹凸がみられる。両面ともロクロナデ調整。 ・切り離しは糸切り。 	やや良	堅緻	暗青灰色
172		18.8	—					
173		20.4	9.1			精良	堅緻	淡黄灰色
174		19.0	9.4			精良	堅緻	青灰色

(松元 達也)

付表 18 石原畑窯跡出土遺物観察表

3号窯出土遺物

挿図 番号	器種	法 量		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
1	杯 A	12.0	3.7	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部より、ほぼまっすぐ外上方へ立ちあがる。 ◦口縁部はやや外反気味に丸くまとめるもの(1, 4~6)と立ちあがりより変化なく、そのまま丸くまとまるもの(2, 3, 7)がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦全体にロクロナデ調整。 ◦底部内面中心部に一方方向ナデを施す。 ◦切り離しはヘラ切り。 	精良	堅 緻	淡青灰色
2		13.2	3.7			精良	堅 緻	淡青灰色
3		12.8	4.0			精良	堅 緻	暗青灰色
4		13.0	3.8			細砂を多く含む	堅 緻	淡青灰色
5		13.2	4.1			細砂を多く含む	堅 緻	淡青灰色
6		13.0	3.25			精良	堅 緻	淡青灰色
7		12.6	3.5			精良	堅 緻	淡青灰色
8	皿 A	13.5	2.1	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部はほぼ平らだが、中心部がやや高いもの(8, 10)、くぼんでいるもの(9)がある。 ◦立ちあがりほぼまっすぐ外上方へ立ちあがる。 ◦口縁部に明らかな稜線を有し、端部は丸くまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦内面底部から口縁部にかけて、ロクロナデ調整、中心部にナデを施す。 ◦外面体部から口縁部にロクロナデ調整、底部は未調整。 ◦切り離しはヘラ切り。 	細砂を多く含む	堅 緻	淡青灰色
9		13.8	2.7			細砂を多く含む	堅 緻	淡青灰色
10		14.4	2.3			精良	堅 緻	暗青灰色
11	皿 B	15.2	2.3	<ul style="list-style-type: none"> ◦主なプロポーションは(8~10)に同じ。 ◦底部は、ほぼ平らで、高台を有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦主な手法は(8~10)に同じ。 ◦高台は貼りつけ高台。 	細砂を多く含む	堅 緻	暗青灰色
12		18.4	2.9			精良	堅 緻	淡青灰色
13		19.4	3.0			細砂を多く含む	堅 緻	淡青灰色
14	蓋 A	11.8	2.55	<ul style="list-style-type: none"> ◦ほぼ平らな天井部から、外下方へやや内彎しながら、口縁部へ至る。 ◦口縁部で外方向へ折曲したのち、下方へ折りまげ丸くまとめる。 ◦つまみは扁平な宝珠つまみ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦内面天井部ロクロナデ後一方方向ナデを施す。口縁部はロクロナデ。 ◦外面全体にロクロナデ調整。 	精良	堅 緻	暗青灰色
15	杯 B	10.4	4.1	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部よりやや内彎気味に立ちあがり、体部中央部よりやや外反しながら口縁部に至る。 ◦口縁部はやや外反気味に丸味をもってまとめる。 ◦高台は、底部のやや内側に存する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦内面底部から口縁部にかけて、ロクロナデを施し、底部中心部に一方方向ナデを施す。 ◦外面ロクロナデ調整、底部は未調整である。 ◦切り離しはヘラ切り。 ◦高台は貼りつけ高台。 	細砂を多く含む	堅 緻	淡青灰色
16		15.2	4.65			精良	軟	淡黄灰色
17		16.2	6.0			精良	堅 緻	淡青灰色
18		17.2	5.8			精良	堅 緻	淡青灰色
19	杯 C	16.4	4.8	<ul style="list-style-type: none"> ◦主なプロポーションは(15~18)に同じだが、口縁部で明らかに外方へ曲折し、丸くまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦主な手法は(15~18)に同じ。 	細砂を多く含む	堅 緻	暗青灰色

挿図 番号	器種	法 量		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調		
		口径 (cm)	器高 (cm)							
21	杯 A	11.4	3.8	<ul style="list-style-type: none"> ほぼ平らな底部よりまっすぐ外上方へ立ちあがる。 口縁端部ではそのまま丸くまとまるもの(21~24, 26, 28)と外方向へうすくなり丸くまとめるもの(25, 27)とやや内側へ折れるもの(29)がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 内面；口縁部から底部にかけてロクロナデ調整。底部中心部にナデを施す。 外面；体部から口縁部までロクロナデ調整，底部未調整。 切り離しはヘラ切り。 	精 良	堅 緻	淡青灰色		
22		11.6	3.4					精 良	やや軟	淡黄灰色
23		12.5	3.3					精 良	堅 緻	暗青灰色
24		11.6	4.0					細砂を多く含む	堅 緻	淡青灰色
25		12.4	3.8					精 良	堅 緻	淡青灰色
26		12.4	4.35					精 良	堅 緻	淡青灰色
27		13.0	3.7					細砂を多く含む	堅 緻	淡青灰色
28		13.0	3.4					精 良	堅 緻	淡青灰色
29		13.6	3.8					精 良	堅 緻	淡青灰色
30	蓋 A	10.2	2.4	<ul style="list-style-type: none"> ほぼ水平な天井部よりやや内彎しながら口縁部に至るもの(30, 31, 33~35)と扁平なもの(32, 36)がある。 口縁部は外方へ曲折したのち下方へ折れるもの(32~36)と天井部からそのまま口縁部に至り，端部で下方へ折れるもの(30, 31)がある。 つまみは扁平な宝珠つまみ。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面；天井部はヘラ切り後ロクロナデ，口縁部はロクロナデ。 内面；ロクロナデ調整，天井部に一方方向ナデを施す。 	精 良	堅 緻	淡青灰色		
31		11.4	2.3					細砂を多く含む	堅 緻	淡青灰色
32		12.2	1.55					精 良	堅 緻	淡青灰色
33		11.8	2.6					精 良	軟	淡乳灰色
34		13.6	2.7					精 良	堅 緻	淡青灰色
35		14.8	2.8					精 良	堅 緻	青灰色
36		15.0	2.5					精 良	堅 緻	淡青灰色
37	杯 B	13.4	3.8	<ul style="list-style-type: none"> 主なプロポジションは(15~18)に同じ。 40は口縁部がやや外反している。 	<ul style="list-style-type: none"> 主な手法は(15~18)に同じ。 	精 良	堅 緻	暗青灰色		
38		13.4	3.8					精 良	堅 緻	青灰色
39		13.6	4.2					精 良	堅 緻	青灰色
40		13.8	3.6					精 良	堅 緻	青灰色
41		14.3	4.5					精 良	堅 緻	淡青灰色
42		16.4	5.9					精 良	堅 緻	淡青灰色
43		17.5	6.2					精 良	堅 緻	淡青灰色
44	蓋 A	19.2	3.1	<ul style="list-style-type: none"> 主なプロポジションは(14)に同じ。 48, 51はほぼ水平な天井部からやや内彎気味に外下方へのびたのち口縁部で下方へ折れ丸くまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 主な手法は(30~36)に同じ。 	精 良	堅 緻	淡青灰色		
45		17.0	4.1					細砂を多く含む	堅 緻	暗青灰色
46		15.4	2.8					精 良	堅 緻	淡青灰色
47		15.4	2.7					精 良	堅 緻	淡青灰色
48		15.5	2.6					細砂を多く含む	堅 緻	暗青灰色
49		14.6	2.3					精 良	堅 緻	淡青灰色
50		14.6	2.6					精 良	堅 緻	淡青灰色
51	13.6	2.1	精 良	堅 緻	淡青灰色					

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
52	皿 A	14.1	2.0	○主なプロポーシオンは(8~10)に同じ。 ○54は口縁部に稜を持たず、やや外反気味に丸くまとめる。	○主な手法は(8~10)に同じ。	精 良	堅 緻	淡青灰色
53		14.6	2.1			精 良	堅 緻	暗 灰 色
54		14.8	2.3			精 良	堅 緻	淡青灰色
55		15.6	1.4			細砂を多く含む	軟	淡灰白色
56		16.8	2.1			精 良	堅 緻	淡青灰色
57	皿 B	12.4	2.8	○主なプロポーシオンは(11~13)に同じ。	○主な手法は(11~13)に同じ。	精 良	堅 緻	淡 灰 色
58		16.9	2.6			精 良	堅 緻	暗青灰色
59		17.8	2.45			精 良	堅 緻	暗青灰色
60		19.8	3.1			精 良	堅 緻	淡青灰色
61		20.7	2.9			精 良	堅 緻	暗青灰色
62	蓋 B	18.6	2.5	○ほぼ水平な天井部より、外下方へ外反する。 ○口縁部で外方向へ曲折し、端部で下方へ折ってまとめる。 ○つまみは貼りつけた輪つまみで、やや外反する。	○外面；天井部ヘラ切り後ロクロナデ、つまみはロクロナデ。 ○内面；天井部の中心に一方方向ナデ、天井部から、口縁部にかけてロクロナデ調整。	細砂を含む	堅 緻	暗 灰 色
63		17.9	2.5			精 良	堅 緻	淡青灰色
64		18.4	3.6			精 良	堅 緻	暗 灰 色
65	杯 C	18.7	5.7	○主なプロポーシオンは(19)に同じ。	○主な手法は(19)に同じ。	精 良	堅 緻	淡黄灰色
66		16.0	5.4			細砂を多く含む	堅 緻	淡黄青灰色
20	椀 A	11.6	4.6	○平底の底部から内彎ぎみに立ちあがる口縁部へ続く。 ○20は体部外面に4条の沈線をめぐらす。	○口縁部内・外面はロクロナデ。	細砂を含む	堅 緻	淡青灰色
67		14.7	5.9			精 良	堅 緻	淡青灰色
68	蓋 D	13.6	—	○ほぼ水平な天井部より口縁部へ直角に近い角度で折れ曲がり口縁端部は逆U字状におさめる。	○外面；天井部ヘラ切り後ロクロナデ調整。 ○内面；天井部から口縁部にかけてロクロナデ調整。	精 良	堅 緻	淡青灰色
69		14.6	—			精 良	堅 緻	淡青灰色
70		11.2	—			細砂含	堅 緻	暗黄灰色
71	短頸壺	10.8	—	○体部は内彎する。 ○口縁部は上方に向き端部はやや尖り気味におさめる。	○残存部ロクロナデ調整。	精 良	堅 緻	淡青灰色
72	平瓶	—	—	○体部は下方になめらかに下り、体部下部より直に落ちる。	○体部外面ロクロナデ調整。 ○体部内面未調整。 ○把手は貼りつけておりヘラによる面取り。	細砂微量含	やや軟	淡青灰色
73	高杯	—	—	○脚部は外彎気味に下り接地部で外方向へ曲折し、接地端部で下方へ折ってまとめる。	○脚部内・外面、ロクロナデ調整、内面上部は未調整。	密	やや軟	淡青灰色
74		—	—			密	やや軟	淡青灰色

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
75	蓋 A	33.3	—	<ul style="list-style-type: none"> 天井部はやや下方に下り口縁部に至る。 口縁端部は下方に尖り気味におさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面天井部はヘラ切り後ロクロナデ調整。 内面および外面口縁部はロクロナデ調整。 	緻密	堅緻	淡青灰色
76		32.4	—					
77	皿 B	28.8	5.7	<ul style="list-style-type: none"> 底部は平坦。 体部は上方に外反し口縁部に至る。 口縁端部は尖り気味におさめる。 やや内側に高台を有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面；体部はロクロナデ調整。 底部はヘラ切り後ロクロナデ調整。 高台は貼りつけている。 内面；ロクロナデ調整。 	密	堅緻	淡黄灰色
78	盤	34.0	—	<ul style="list-style-type: none"> 体部は上外方へまっすぐ広がりに口縁部に至る。 口縁端部は丸みをおびた凹状におさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部内・外面ともにロクロナデ調整。 	精良	堅緻	淡青灰色

1・2号窯窯体内出土遺物

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調			
		口径 (cm)	器高 (cm)								
79	杯 A	12.2	3.9	<ul style="list-style-type: none"> 底部は平底で平坦である。 体部は内彎気味に上方に立ちあがる。 口縁部は上方を向き端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。 底部はヘラ切り後未調整。 内面；ロクロナデ調整。 	精良	堅緻	暗青灰色			
80		12.5	3.6						精良	堅緻	暗青灰色
81		12.4	3.5						精良	やや軟	暗青灰色
82		12.5	3.1						精良	堅緻	淡青灰色
83		12.8	3.3						細砂含	軟	淡黄灰色
84		12.9	3.45						細砂含	やや軟	暗青灰色
85		12.8	3.0						細砂含	やや軟	暗青灰色
86		13.0	3.4						精良	堅緻	青灰色
87		13.4	3.9						精良	軟	淡青灰色
88	蓋 C	14.6	2.2	<ul style="list-style-type: none"> ほぼ平坦な天井部より下外方へ内彎気味に下る。 口縁部付近で「S」字状を呈し端部は下外方へ尖り気味におさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面；天井部ヘラ切り後未調整。 口縁部；ロクロナデ調整。 内面；ロクロナデ調整。 	精良	堅緻	淡青灰色			
89		13.0	2.4						精良	堅緻	青灰色
90		12.3	2.3						精良	堅緻	淡灰褐色

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調			
		口径 (cm)	器高 (cm)								
91	杯 B	12.2	5.0	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平坦である。 ◦体部は上外方へまっすぐ立ちあがり口縁部に至る。 ◦口縁端部は上外方を向き尖り気味におさめる。 ◦高台を有し、接地面は外下方を向く。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。 ◦底部はヘラ切り後、ロクロナデ調整。 ◦高台は貼りつけている。 ◦内面；全体的にロクロナデ調整。底部中央部にナデ調整痕を有する。 	精良	やや軟	淡青灰色			
92		12.5	4.4						精良	堅 緻	暗青灰色
93		12.6	5.0						精良	堅 緻	青 灰 色
94		13.2	4.8						精良	やや軟	淡黄灰色
95	小型鉢	20.0	4.7	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底で平坦である。 ◦体部は外反気味に立ちあがり口縁部付近で内彎する。 ◦口縁部は上外方を向き「く」の字状をなす。 ◦口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	精良	堅 緻	暗青灰色			
96	蓋 C	16.4	1.7	◦88～90に同じ。	◦88～90に同じ。	精良	堅 緻	淡青灰色			
97		15.6	2.5						細砂含	やや軟	黄 灰 色
98		16.0	2.3						細砂含	堅 緻	淡青灰色
99		15.2	2.7						精良	やや軟	淡青灰色
100		15.2	2.7						精良	やや軟	淡青灰色
101		14.6	2.2						精良	堅 緻	淡青灰色
102	杯 B	14.8	5.4	◦91～94に同じ。	◦91～94に同じ。	細砂含	軟	淡 灰 色			
103		14.1	5.7						精良	堅 緻	淡青灰色
104		7.0	5.8						精良	軟	淡 褐 色
105	杯 A	13.2	3.3	◦79～87に同じ。	◦79～87に同じ。	精良	堅 緻	淡 灰 色			
106		13.4	3.3						精良	堅 緻	淡青灰色
107		13.6	3.0						精良	堅 緻	淡 灰 色
108		13.8	3.3						精良	堅 緻	淡黄灰色
109		14.1	3.6						精良	堅 緻	淡 灰 色
110	杯 B	13.2	5.1	◦91～94に同じ。	◦91～94に同じ。	精良	堅 緻	淡青灰色			
111	壺 A b	4.4	11.8	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底。 ◦体部は中央部まで上外方に立ちあがりそれより内彎し頸部に至る。 ◦肩部はなで肩を呈する。 ◦頸部は外反し口縁部に至る。 ◦口縁端部は上方に尖り気味におさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；口縁部および頸部はロクロナデ調整。体部および底部は水引き後未調整。 	細砂含	堅 緻	淡青灰色			
112		5.0	11.9						細砂含	堅 緻	淡青灰色
113		4.8	12.0						細砂含	堅 緻	淡青灰色
114		4.4	10.7						細砂含	堅 緻	淡青灰色
115		4.5	11.8						細砂含	堅 緻	淡青灰色
116		4.2	11.5						細砂含	堅 緻	淡青灰色

2号窯焚口部灰原内出土遺物

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調			
		口径 (cm)	器高 (cm)								
117	杯 A	12.5	3.8	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底で平坦である。 ◦体部は内彎気味に上外方に立ちあがる。 ◦口縁部でやや上向きとなり端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。底部はヘラ切り後未調整。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	細砂含	堅 緻	淡青灰色			
118		13.05	3.6						精 良	やや軟	乳 灰 色
119		12.8	3.8						細砂含	堅 緻	淡青灰色
120		11.7	3.6						精 良	堅 緻	暗青灰色
121		12.5	3.7						精 良	堅 緻	青 灰 色
122		12.2	2.9						精 良	堅 緻	青 灰 色
123		13.2	3.7						精 良	堅 緻	青 灰 色
124		12.8	3.7						精 良	堅 緻	青 灰 色
125		13.9	3.8						精 良	堅 緻	青 灰 色
126	碗 D	13.8	4.2	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部より口縁部にかけて内彎気味に外方へ立ちあがる。 ◦口縁端部は外方に折り曲げる。 ◦高台を有し接地面は外下方を向く。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。底部はヘラ切り後ロクロナデ調整。高台は貼りつけ。 ◦内面はロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	青 灰 色			
127	皿 C	12.8	1.5	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部より口縁部にかけて外方に立ちあがる。 ◦口縁部は外反し端部は丸くおさめる。 ◦やや内側に高台を有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。高台は貼りつけ。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色			
128		14.2	2.3						精 良	堅 緻	淡青灰色
129	碗 D	14.8	3.8	◦126に同じ。	◦126に同じ。	精 良	堅 緻	淡青灰色			
130	蓋 C	12.4	2.3	<ul style="list-style-type: none"> ◦ほぼ平坦な天井部よりやや内彎気味に下る。 ◦口縁部でゆるい「S」字状を呈する。 ◦口縁端部は下外方を向き尖り気味におさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；天井部はヘラ切り。口縁部はロクロナデ調整。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	青 灰 色			
131		13.0	2.2						精 良	堅 緻	暗青灰色
132		13.1	2.35						精 良	堅 緻	淡青灰色
133		13.1	2.1						精 良	堅 緻	青 灰 色
134		13.0	2.2						精 良	堅 緻	暗青灰色
135		12.4	2.6						精 良	堅 緻	淡青灰色
136	杯 B	11.8	4.4	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部はほぼ平坦である。 ◦体部は上外方に立ちあがり口縁部に至る。 ◦口縁端部は丸くおさめる。 ◦高台を有し接地面は下外方を向く。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。底部はヘラ切り後ロクロナデ調整。高台は貼りつけ。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	青 灰 色			
137		12.4	4.8						精 良	堅 緻	淡青灰色
138		12.5	4.9						精 良	堅 緻	暗青灰色
139		13.1	5.0						精 良	堅 緻	青 灰 色

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
140	小型鉢	11.4	5.3	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底である。 ◦体部は上外方へまっすぐ立ちあがり口縁部付近で内彎する。 ◦口縁部は上外方を向き「く」の字状を呈する。 ◦口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。 ◦底部は回転糸切り。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	細砂含	堅 緻	青 灰 色
141		10.2	4.6			細砂含	堅 緻	青 灰 色
142		9.2	4.75			精 良	堅 緻	青 灰 色
143	蓋 A	18.4	4.5	<ul style="list-style-type: none"> ◦天井部より口縁部へゆるく内彎しながら下る。 ◦口縁部は「S」字状を呈し端部は下外方へ尖り気味におさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；天井部はヘラ切り後ロクロナデ調整。 ◦口縁部はロクロナデ調整。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	細砂含	堅 緻	淡青灰色
144	蓋 C	15.4	2.3	◦130~135に同じ。	◦130~135に同じ。	精 良	堅 緻	暗青灰色
145		15.4	2.1			精 良	堅 緻	青 灰 色
146		20.0	2.9			精 良	やや軟	淡灰褐色
147	杯 B	14.0	5.5	◦136~139に同じ。	◦136~139に同じ。	精 良	やや軟	淡青灰色
148		14.4	6.0			精 良	堅 緻	青 灰 色
149		17.2	8.3			細砂含	堅 緻	淡青灰色
150	皿 C	20.8	4.1	◦127・128に同じ。	◦127・128に同じ。	細砂含	やや軟	淡青灰色
151	壺 C	7.3	22.6	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底を呈する。 ◦体部は釣り鐘形を呈し頸部に至る。 ◦肩部はなで肩をなす。 ◦頸部は上外方へ立ちあがる。 ◦口縁部は外方を向き端部は上下方向につまみ出している。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部および頸部・体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；底部および体部はロクロ引き後未調整。 ◦頸部および口縁部はロクロナデ調整。 	細砂含	やや軟	青灰白色
152	壺 A b	9.9	24.2	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底を呈する。 ◦体部は上外方に立ちあがり中央部より内彎し、ゆるやかな肩をなす。 ◦頸部は上方に立ちあがり口縁部付近で外反する。 ◦口縁端部は上方につまみ出すようにおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部および頸部・体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；口縁部および頸部はロクロナデ調整。 ◦体部および底部はロクロ引き後未調整。 	精 良	堅 緻	暗 灰 色
153		9.4	20.7			精 良	堅 緻	青 灰 色
154		—	—			細砂含	堅 緻	暗青灰色
155	蓋 D	7.4	—	<ul style="list-style-type: none"> ◦天井部は平坦である。 ◦口縁部は直下し端部は尖り気味におさめる。 ◦つまみは尖った宝珠状を呈する。 ◦天井部に円孔を穿つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；天井部はヘラ切り後ロクロナデ調整。つまみは貼りつけ。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	青 灰 色
156		7.0	—			細砂含	堅 緻	暗青灰色

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
157	水瓶	4.2	—	◦頸部は上方に立ちあがる。 ◦口縁部は外向し、端部は上方に尖り気味におさめる。	◦外面；ロクロナデ調整。 ◦内面；ロクロナデ調整。	精 良	堅 緻	淡青灰色
158	壺A b	6.8	14.9	◦152～154に同じ。	◦152～154に同じ。	精 良	堅 緻	淡青灰色
159	壺F	20.0	11.75	◦底部は平底で平坦である。 ◦体部は上外方に立ちあがり中央部より内彎し口縁部付近で外反する。 ◦口縁部は外反し端部は上方に尖り気味につまみあげている。	◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；ロクロナデ調整。	精 良	堅 緻	淡青灰色
160	鉢A b	17.6	10.8	◦底部は平底で平坦である(163)。 ◦体部は上外方に立ちあがり口縁部付近で内彎する。 ◦口縁部は外向し、断面三角形を呈する。	◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；口縁部および体部・底部はロクロナデ調整。	精 良	堅 緻	淡青灰色
161		23.1	—			細砂含	堅 緻	青 灰 色
162		22.1	—			細砂含	堅 緻	青 灰 色
163		20.2	15.5			細砂含	堅 緻	青 灰 色

S K03出土遺物

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
164	杯A	12.3	3.6	◦底部はほぼ平坦である。 ◦体部は内彎気味に外方へのびる。 ◦口縁部は外方を向き端部は尖り気味におさめる。	◦外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。底部はへら切り後ロクロナデ調整。 ◦内面；ロクロナデ調整。	細砂含	やや軟	淡青灰色
165		13.4	4.5			細砂含	堅 緻	淡青灰色
166		14.0	3.9			精 良	軟	灰 白 色
167		14.2	3.7			細砂含	やや軟	青 灰 色
168		14.2	3.7			精 良	軟	淡灰白色
169	杯B	14.2	5.0	◦底部はほぼ平坦である。 ◦体部は内彎気味に外方へのびる。 ◦口縁部は外方に向き端部は尖り気味におさめる。 ◦高台を有し、接地面は内側を向く。	◦外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。底部はへら切り後ロクロナデ調整。高台は貼りつけている。 ◦内面；ロクロナデ調整。	精 良	軟	淡灰白色
170	壺A b	4.5	9.9	◦底部は平底である。 ◦体部は中央部まで外方に立ちあがり、それより内彎している。 ◦肩はナデ肩である。 ◦頸部は外方へ立ちあがり口縁部に至る。 ◦口縁部は上下二方向につまみ出している。	◦外面；体部および頸部・口縁部はロクロナデ調整。底部は糸切り。 ◦内面；水引き後未調整。	精 良	堅 緻	暗青灰色
171		4.6	11.4			細砂含	堅 緻	青 灰 色
172		8.7	21.1			細砂含	堅 緻	暗青灰色

挿図 番号	器種	法 量		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
173	蓋D	6.0	2.3	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は平坦である。 口縁部は直下し端部は四角形を呈する。 つまみは尖った宝珠状を呈する。 天井部に2か所、円孔を穿つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面；天井部はヘラ切り後ロクロナデ調整。つまみは貼りつけている。 内面；ロクロナデ調整。 	精良	堅緻	淡青灰色
174	蓋C	12.6	1.65	<ul style="list-style-type: none"> 天井部はほぼ平坦。 口縁部は外方へ下り接地部でS字を呈する。 口縁端部は下外方へ尖り気味におさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面；天井部はヘラ切り後ロクロナデ調整。口縁部はロクロナデ調整。 内面；ロクロナデ調整。 	精良	堅緻	青灰色
175		12.75	2.25			細砂含	堅緻	青灰色
176		12.8	2.6			精良	硬	淡黄灰色
177		12.8	1.8			精良	堅緻	暗青灰色
178		12.5	1.45			精良	堅緻	青灰色
179		12.8	2.05			細砂多量含	堅緻	暗青灰色
180		12.4	1.65			細砂含	堅緻	青灰色
181	杯B	11.6	4.3	<ul style="list-style-type: none"> 底部は平坦。 体部は外方へ立ちあがり口縁部に至る。 口縁端部は外上方を向き尖り気味におさめる。 高台を有し、接地面は外下方を向く。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。底部はヘラ切り後末調整。高台は貼りつけ。 内面；体部および口縁部はロクロナデ調整。底部はロクロナデ調整の後一方向のナデ調整。 	細砂含	堅緻	青灰色
182		11.9	4.1			細砂多量含	堅緻	暗青灰色
183		12.0	4.2			細砂多量含	堅緻	明青灰色
184		11.7	4.2			精良	堅緻	暗青灰色
185		12.2	5.1			精良	軟	淡灰白色
186		12.0	4.6			精良	堅緻	明青灰色
187	円面硯	11.2	7.7	<ul style="list-style-type: none"> 円形の凸状陸部を有する。 陸部端に外堤をもうけ海部を形成する。 下外方に広がる圏台を有し端部をS字状におさめている。 圏内にはヘラによる長方形の透し3か所を有す。透しの間に3条の線刻を有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 円面；ロクロナデ調整。 外面；ロクロナデ調整のちナデ調整、圏台ロクロナデ調整およびヘラにより透しをもうける。 	精良	堅緻	暗青灰色
188	蓋C	19.5	2.5	<ul style="list-style-type: none"> 174~180に同じ。 	<ul style="list-style-type: none"> 174~180に同じ。 	細砂含	堅緻	暗青灰色
189		19.6	3.1			精良	堅緻	暗青灰色
190		19.0	1.9			細砂含	堅緻	暗青灰色
191		17.8	3.05			精良	堅緻	青灰色
192		17.2	2.3			細砂含	堅緻	暗青灰色
193		15.8	1.7			精良	堅緻	淡青灰色
194		14.5	1.45			細砂含	堅緻	明青灰色
195		15.0	2.3			細砂含	堅緻	暗青灰色

挿図 番号	器種	法 量		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
196	杯 B	13.8	5.5	◦181~186に同じ。	◦181~186に同じ。	細砂含	やや軟	淡乳灰色
197		14.0	5.2					
198		18.4	7.9					
199		18.6	7.4					
200		19.4	8.0					
201	壺 A	10.7	24.7	◦170~172に同じ。	◦170~172に同じ。	細砂含	堅 緻	青灰色
202	壺 C	6.8	21.1	◦底部は平底を呈する。 ◦体部は釣鐘形を呈する。 ◦肩部はナデ肩を呈する。 ◦頸部は器形に比して短く外方に広がり口縁部に至る。 ◦口縁端部は上下二方向につまみ上げている。	◦外面；体部および頸部・口縁部ともにロクロナデ調整。底部は糸切り。 ◦内面；口縁部および頸部はロクロナデ調整。体部および底部はロクロ引き後未調整。	細砂含	堅 緻	淡青灰色
203	鉢 F	22.2	15.0	◦底部は厚く重量感がありへら状のもので突穴痕を有する。 ◦体部は上方に立ちあがり口縁部付近でやや内彎する。 ◦口縁端部は丸味を帯びた凹状におさめる。	◦外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。底部は糸切り後、へら状のもので突穴する。 ◦内面；ロクロナデ調整。	細砂含	堅 緻	青灰色
204	盤	31.8	10.0	◦底部は平底で平坦である。 ◦体部は上外方にまっすぐ立ちあがる。 ◦口縁端部は丸みを帯びた凹状を呈する。	◦外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；ロクロナデ調整。	細砂含	堅 緻	淡青灰色
205		27.4	10.5			精 良	堅 緻	淡青灰色
206		25.2	11.0			精 良	堅 緻	淡青灰色
207	鉢 A b	24.4	—	◦底部は平底で平坦である。 ◦体部は上外方にまっすぐ立ちあがり口縁部付近で内彎する。 ◦口縁部は上外方を向き「く」の字状を形成する。 ◦口縁端部は逆三角形を呈する。	◦外面；体部および口縁部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；ロクロナデ調整。	精 良	堅 緻	暗青灰色
208		22.4	15.4			精 良	堅 緻	青灰色

S K01・S K04 出土遺物

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調				
		口径 (cm)	器高 (cm)									
209	壺 A b	4.4	11.1	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底で平坦である(209)。 ◦体部は上外方に立ちあがり中央部より内彎し頸部に至る。 ◦頸部は上外方に外反する(209)。 ◦口縁部は外反し端部は上方につまみ上げるようにおさめる(209)。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部，頸部，体部はロクロナデ調整(209)。 ◦底部は回転糸切り(209)。 ◦内面；ロクロナデ調整(209)。 ◦210については内・外面ともにロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	暗青灰色				
210		—	—						<ul style="list-style-type: none"> ◦内面；ロクロナデ調整(209)。 ◦210については内・外面ともにロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	青 灰 色
211	杯 A	12.8	3.5	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底で平坦である。 ◦体部は上外方に立ちあがり口縁部付近で稜を有する。 ◦口縁部は上向き端部を丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部はヘラ切り後未調整。 ◦内面；ロクロナデ調整。底部中央にナデ調整痕あり。 	精 良	堅 緻	暗青灰色				
212		12.8	3.2						<ul style="list-style-type: none"> ◦内面；ロクロナデ調整。底部中央にナデ調整痕あり。 	精 良	堅 緻	淡黄灰色
213		11.8	3.7						<ul style="list-style-type: none"> ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色
214	小型鉢	9.4	5.0	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底で平坦である。 ◦体部は上外方へ立ちあがり口縁部付近で内彎する。 ◦口縁部は上外方を向き「く」の字状を呈する。 ◦口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	暗青灰色				
215	蓋 C	15.0	2.1	<ul style="list-style-type: none"> ◦平坦な天井部より外方へ下りゆるやかな「S」字状をなし，口縁部に至る。 ◦口縁部は下外方を向き端部は尖り気味におさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；天井部はヘラ切り後ロクロナデ調整。体部および口縁部はロクロナデ調整。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	暗青灰色				
216		13.4	1.6						<ul style="list-style-type: none"> ◦内面；ロクロナデ調整。 	細砂含	堅 緻	暗青灰色
217		13.4	1.85						<ul style="list-style-type: none"> ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色
218		13.0	1.9						<ul style="list-style-type: none"> ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	淡黄灰色
219		13.6	1.6						<ul style="list-style-type: none"> ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色
220	杯 B	12.2	4.4	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平坦である。 ◦体部は上外方へまっすぐ立ちあがり口縁部に至る。 ◦口縁部は上外方を向き端部は尖り気味におさめる。 ◦高台を有し接地面は下外方を向く。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部はヘラ切り後ロクロナデ調整。高台は貼りつけ。 ◦内面；ロクロナデ調整。底部中央部ナデ調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色				
221		11.8	4.7						<ul style="list-style-type: none"> ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色
222		13.1	4.4						<ul style="list-style-type: none"> ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	暗青灰色
223	皿 C	18.2	3.3	<ul style="list-style-type: none"> ◦厚手の底部，体部を有する。 ◦体部は上外方に立ちあがる。 ◦口縁部は外反し端部は丸くおさめ外向する。 ◦高台を有するが底部，体部の厚さに比すると薄手である。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部はヘラ切り後ロクロナデ調整。高台は貼りつけ。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	細砂含	堅 緻	暗青灰色				

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
224	蓋 C	18.0	3.1	◦215～219に同じ。	◦215～219に同じ。	精 良	堅 緻	淡青灰色
225		17.6	2.4					
226		16.2	1.5					
227		14.8	1.7					
228	杯 B	15.2	5.4	◦220～222に同じ。	◦220～222に同じ。	精 良	軟	淡青灰色
229		13.5	5.4					
230		16.8	6.85					
231	杯 A	12.0	3.1	◦211～213に同じ。	◦211～213に同じ。	精 良	軟	淡 灰 色
232		11.8	3.5					
233		13.4	3.35					
234		13.6	3.4					
235		14.0	4.3					
236	小型鉢	9.4	4.9	◦214に同じ。	◦214に同じ。	精 良	堅 緻	暗青灰色
237	皿 D	13.4	2.6	◦底部は平底の高台を有する。 ◦体部は外方へ立ちあがる。 ◦口縁部は外反し口縁端部は外方へつまみ出すようにおさめる。	◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；ロクロナデ調整。	精 良	堅 緻	暗青灰色
238		14.7	2.2					
239	皿 E	13.6	2.4	◦底部は平底で平坦である。 ◦体部は外反しながら立ちあがる。 ◦口縁部は外反し端部は尖り気味におさめる。	◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；ロクロナデ調整。	精 良	堅 緻	淡青灰色
240	杯 B	12.5	4.8	◦220～222に同じ。	◦220～222に同じ。	精 良	堅 緻	淡青灰色
241		12.8	4.5					
242		13.0	5.0					
243	皿 C	16.8	3.8	◦223に同じ。	◦223に同じ。	精 良	堅 緻	暗青灰色
244	風字硯	—	—	◦逆U字状に外堤が廻る。 ◦二か所に脚をつけ傾斜角を作る。	◦外堤は貼りつけ後へラ削りによる調整。 ◦脚は貼りつけて、へラ削りにより面をつくる。 ◦陸部、海部は内・外面ともにナデ調整。 ◦陸部内面にスリキズ痕を有する。	精 良	堅 緻	淡青灰色

S D05 出土遺物

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調									
		口径 (cm)	器高 (cm)														
245	杯 A	13.4	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底で平坦である。 ◦体部は内彎気味に立ちあがる。 ◦口縁部で稜をなし端部は上向き丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部はヘラ切り。 ◦内面；ロクロナデ調整。底部中央部はナデ調整。 	精 良	軟	淡灰白色									
246		13.6	3.2						精 良	やや軟	淡灰白色						
247		15.0	3.4									精 良	軟	淡黄灰色			
248	小型鉢	9.0	5.4	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底で平坦である。 ◦体部は上外方へ立ちあがり口縁部付近で内彎する。 ◦口縁部は外反し端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	暗青灰色									
249		10.4	4.5						精 良	やや軟	淡青灰色						
250		9.6	5.2									精 良	堅 緻	暗青灰色			
251		9.6	4.5												精 良	堅 緻	暗青灰色
252	壺 A b	8.0	10.1	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底である。 ◦体部は上外方へ立ちあがり中央部より内彎し、ナデ肩を呈する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；ロクロナ引き後未調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色									
253	盤	24.8	10.5	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底で平坦である。 ◦体部は上外方へ立ちあがる。 ◦口縁部はやや内彎し、端部は内上方に尖り気味におさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色									
254	蓋 C	12.8	1.7	<ul style="list-style-type: none"> ◦平坦な天井部より外方へ下る。 ◦口縁部付近でゆるやかな「S」字状をなす。 ◦口縁端部は下外方を向き尖り気味におさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；天井部はヘラ切り。口縁部はロクロナデ調整。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色									
255	杯 B	12.0	5.0	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平坦である。 ◦体部は上外方へ立ちあがり口縁部に至る。 ◦口縁端部は上外方に尖り気味におさめる。 ◦高台を有し接地面は下外方を向く。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部はヘラ切り後ロクロナデ調整。 ◦内面；ロクロナデ調整。底部中央は一方方向のナデ痕を有する。 	精 良	堅 緻	暗青灰色									
256		11.6	4.4						精 良	堅 緻	暗青灰色						
257		11.9	4.3									精 良	堅 緻	暗青灰色			
258		12.4	4.7												精 良	やや軟	淡青灰色
259		15.4	6.0														
260	壺 A b	4.5	9.9	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底である(260)。 ◦体部は上外方に立ちあがり中央部より内彎し、ナデ肩を呈する。 ◦頸部は上外方へ立ちあがり口縁部付近で外反する。 ◦口縁端部は上方へつまみ出しておさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部および頸部・体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り(260)。 ◦内面；口縁部および頸部はロクロナデ調整。体部および底部(260)はロクロナ引き後未調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色									
261		9.8	—						精 良	堅 緻	淡青灰色						

挿図番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調			
		口径 (cm)	器高 (cm)								
262	蓋 C	20.0	2.2	<ul style="list-style-type: none"> ◦254に同じ。 ◦口縁端部は下方を向く(265)。 	◦254に同じ。	細砂含	堅 緻	淡青灰色			
263		20.6	3.4						精 良	軟	淡灰白色
264		15.8	2.9						細砂含	堅 緻	暗青灰色
265		14.8	2.1						精 良	堅 緻	淡青灰色
266	杯 B	18.6	6.8	◦255～259に同じ。	◦255～259に同じ。	細砂含	堅 緻	暗青灰色			
267	鉢 G	14.6	10.2	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底である。 ◦体部は上方に立ちあがり口縁部付近で凹線を有する。 ◦口縁端部は上方を向き丸くおさめている。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ◦内面；体部はロクロナデ調整。底部は雑なロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	暗青灰色			
268		14.6	11.4						精 良	堅 緻	淡青灰色
269	短頸壺	14.0	—	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部は内彎気味に上外方へ立ちあがり中央部より大きく内彎する。 ◦口縁部は上方を向き端部を丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；ロクロナデ調整。 ◦内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	暗青灰色			

Ao区上層灰原内出土遺物

挿図番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調			
		口径 (cm)	器高 (cm)								
270	杯 A	13.0	3.1	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底で平坦である。 ◦体部は上外方へ立ちあがる。 ◦口縁部は上外方を向き端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部はヘラ切り後雑なロクロナデ調整。 ◦内面；ロクロナデ調整。底部中央に一方向のナデ痕を有する。 	精 良	やや軟	淡黄灰色			
271		13.2	3.5						細砂含	やや軟	淡黄灰色
272		13.5	4.5						細砂含	やや軟	灰 白 色
273		13.8	4.1						精 良	軟	淡黄灰色
274		13.8	3.9						精 良	軟	淡黄灰色
275		13.6	3.9						精 良	軟	黄 灰 色
276		14.4	—						精 良	軟	黄 灰 色
277		14.0	4.0						細砂含	軟	黄 灰 色
278		14.0	3.8						精 良	軟	黄 灰 色
279		15.0	3.95						精 良	軟	黄 灰 色
280	円面硯	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ◦陸部はゆるやかな凸状を呈し円堤部に至る(357)。 ◦円堤部の内側に海部を形成している(357)。 ◦筒状の円台形の脚部を有する。 ◦接地面付近で「S」字状に外反し端部は尖り気味に下外方を向く。 ◦脚部の四方向に長方形の透しおよびヘラ描文様を有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；陸部、海部、円堤部はロクロナデ調整(357)。脚部はロクロナデ調整ののち、ナデ調整。 ◦内面；ロクロナデ調整後ナデ調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色			
281		8.4	5.7						精 良	堅 緻	淡青灰色

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
282	蓋 C	11.5	1.8	平坦な天井部より下 外方に下る。 口縁部付近でゆるや かな「S」字状を呈 する。 口縁端部は下方を向 き尖り気味におさめ る。	外面；天井部はヘラ 切り。口縁部はロ クロナデ調整。 内面；ロクロナデ調 整。 天井部中央は一方 方向ナデ調整を施す (283, 285, 287)。	精 良	堅 緻	青 灰 色
283		12.5	1.3			細砂含	堅 緻	暗青灰色
284		12.7	1.65			精 良	堅 緻	暗青灰色
285		12.7	2.3			細砂含	堅 緻	淡青灰色
286		12.8	—			精 良	堅 緻	淡青灰色
287		13.0	1.5			精 良	堅 緻	淡青灰色
288		13.7	3.9			精 良	堅 緻	淡青灰色
289		12.9	2.6			細砂含	堅 緻	暗青灰色
290		13.0	2.0			精 良	やや軟	淡青灰色
291		13.2	1.7			精 良	堅 緻	淡青灰色
292	杯 B	11.3	4.3	底部は平坦である。 体部は上外方へ立ち あがり口縁部に至る。 口縁端部は上外方を 向き丸くおさめる。 高台を有し接地面は 下外方を向く。	外面；口縁部および 体部はロクロナデ 調整。底部はヘラ 切り後ロクロナデ 調整。高台は貼り つけ。 内面；ロクロナデ調 整。底部中央部に 一方向のナデ調 整を有する(292～ 295)。	細砂含	堅 緻	淡青灰色
293		11.7	4.3			細砂含	堅 緻	青 灰 色
294		12.6	4.5			細砂含	堅 緻	暗青灰色
295		12.6	4.3			精 良	堅 緻	淡青灰色
296		13.1	4.1			精 良	堅 緻	淡青灰色
297		13.7	5.2			細砂含	やや軟	淡黄灰色
298	蓋 C	13.2	1.9	282～291に同じ。	282～291に同じ。	精 良	堅 緻	淡青灰色
299		13.8	1.9			精 良	堅 緻	暗青灰色
300		13.8	1.9			細砂含	堅 緻	暗青灰色
301		14.3	2.1			精 良	堅 緻	淡青灰色
302		14.7	2.1			精 良	堅 緻	淡青灰色
303		16.3	2.4			精 良	堅 緻	淡青灰色
304		17.8	3.5			精 良	堅 緻	淡青灰色
305		18.9	2.8			精 良	堅 緻	淡青灰色
306		19.2	2.1			精 良	堅 緻	淡青灰色
307		杯 B	16.6			7.0	292～297に同じ。 但し高台は下方を向 く。 接地面は凹状を呈す る(308～310)。	292～297に同じ。
308	17.6		6.55	精 良	堅 緻	淡青灰色		
309	17.6		6.65	細砂含	堅 緻	淡青灰色		
310	18.2		7.4	精 良	堅 緻	淡青灰色		

挿図 番号	器種	法 量		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
311	壺 A b	5.0	13.3	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底である。 ◦体部は上外方に立ちあがり中央部より内彎し、ゆるやかな肩部を呈する。 ◦頸部は上外方に立ちあがり口縁部付近で外反する。 ◦口縁端部は上方に尖り気味につまみ出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦外面；口縁部，頸部，体部はロクロナデ調整。 ◦底部は回転糸切り。 ◦内面；口縁部，頸部はロクロナデ調整。 ◦体部，底部はロクロ引き後未調整。 	精良	堅緻	淡青灰色
312		4.1	10.1			精良	堅緻	淡青灰色
313		5.0	12.7			精良	堅緻	淡青灰色
314		4.1	10.2			精良	堅緻	淡青灰色
315	壺 C	4.2	12.3	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底である。 ◦体部は釣鐘状を呈する。 ◦頸部は外反し口縁部に至る。 ◦口縁端部は上方へ尖り気味につまみ出す。 	◦311～314に同じ。	精良	堅緻	淡青灰色
316	壺 A b	4.8	12.9	<ul style="list-style-type: none"> ◦311～314に同じ。 ◦但し318～320の口縁端部は上下方向につまみ出す。 	◦311～314に同じ。	精良	軟	淡黄灰色
317		9.8	22.4			精良	堅緻	暗青灰色
318		9.0	21.2			細砂含	堅緻	暗青灰色
319		9.1	20.7			精良	堅緻	暗青灰色
320		9.2	20.4			精良	堅緻	淡青灰色
321	壺 B	10.8	30.7	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部は平底である。 ◦体部は上外方へまっすぐ立ちあがり，中央部より内彎し，ゆるやかな肩部を呈する。 ◦頸部は外反し，口縁部に至る。 ◦口縁端部は上下方向につまみ出す。 ◦肩部に二か所の耳を有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦基本的な手法は311～314に同じ。 ◦耳は貼りつけて，ヘラ等により微調整を施す。 	精良	堅緻	淡青灰色
322	壺 C	—	—	◦315に同じ。	◦315に同じ。	細砂含	堅緻	暗青灰色
323	壺 A b	9.2	20.4	◦311～314に同じ。	◦311～314に同じ。	細砂含	堅緻	淡青灰色
324	壺 C	7.7	23.7	◦315に同じ。	◦315に同じ。	精良	堅緻	淡青灰色
325	壺 A b	9.6	27.6	◦体部以下311～314に同じ。	◦体部以下311～314に同じ。	細砂含	堅緻	暗青灰色
326	鉢 A	19.2	—	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部は上外方に立ちあがり口縁部付近でなめらかな「く」の字状を呈する。 ◦口縁部は上外方を向き端部は丸くおさめる。 	◦内・外面ともにロクロナデ調整。	精良	堅緻	淡青灰色

挿図 番号	器種	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
		口径 (cm)	器高 (cm)					
327	盤	30.2	10.9	<ul style="list-style-type: none"> ○底部は平底で平坦である。 ○体部は上外方へまっすぐ立ちあがり口縁部に至る。 ○口縁端部は上内方へつまみ出している。 	<ul style="list-style-type: none"> ○外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り。 ○内面；ロクロナデ調整。 	精 良	堅 緻	淡青灰色
328		29.0	10.3					
329		25.1	10.5					
330	鉢 A	21.6	—	<ul style="list-style-type: none"> ○底部は平底で平坦である(331)。 ○体部は上外方へ立ちあがり口縁部付近より内彎する。 ○口縁部は上外方を向き端部はゆるやかな「凹」状を呈する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○外面；口縁部および体部はロクロナデ調整。底部は回転糸切り(331)。 	精 良	堅 緻	暗青灰色
331		22.4	14.9					

(小島 敏明)

圖

版



(1) 西長尾窯跡全景（北西から）



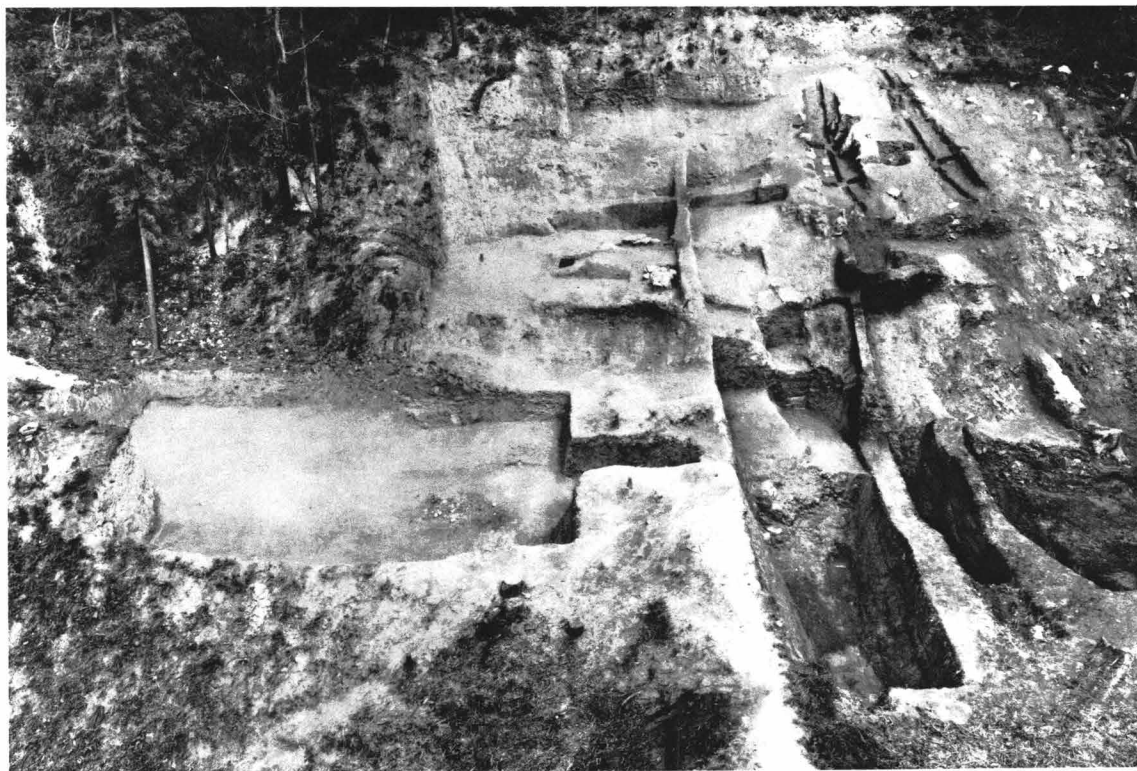
(2) 同 上（北から）



(1) 西長尾1・4号窯調査前全景（北西から）



(2) 西長尾3号窯調査前全景（南西から）



(1) 西長尾1・4号窯完掘状態(西から)



(2) 同 上 (西から)



(1) 西長尾1・4号窯窯体内掘削状態(西から)



(2) 西長尾1・4号窯完掘状態(西から)



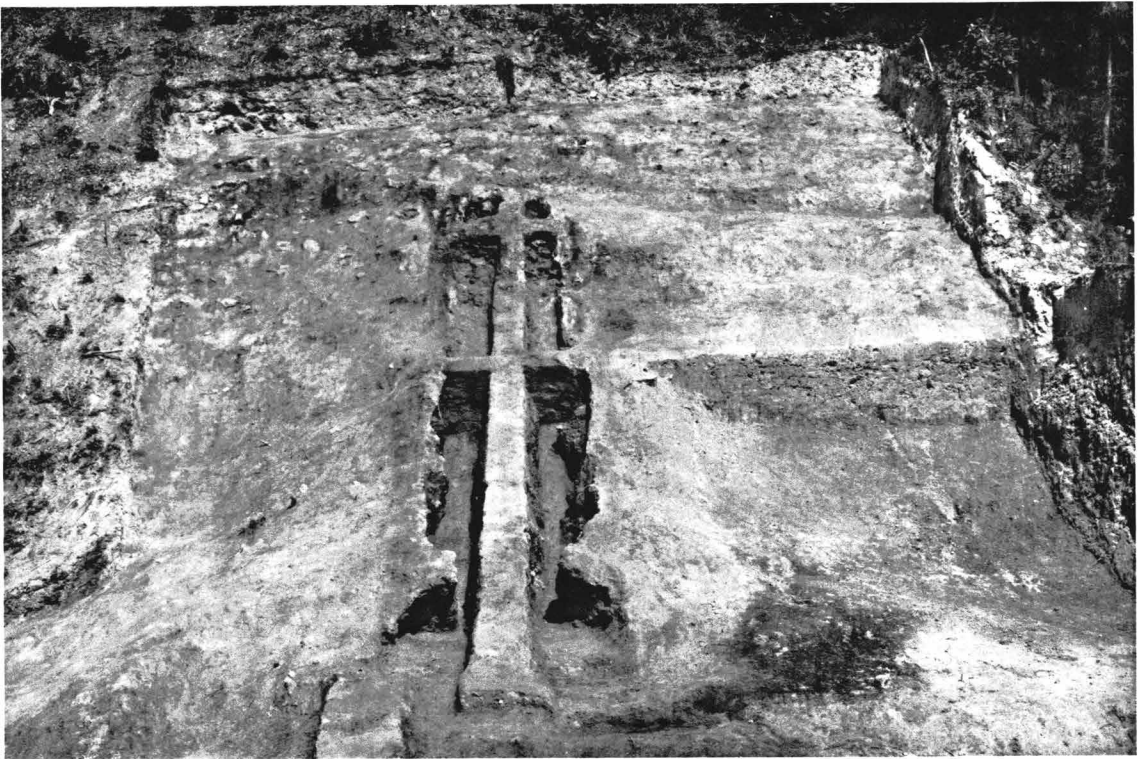
(1) 西長尾1・4号窯灰原南壁土層（北から）



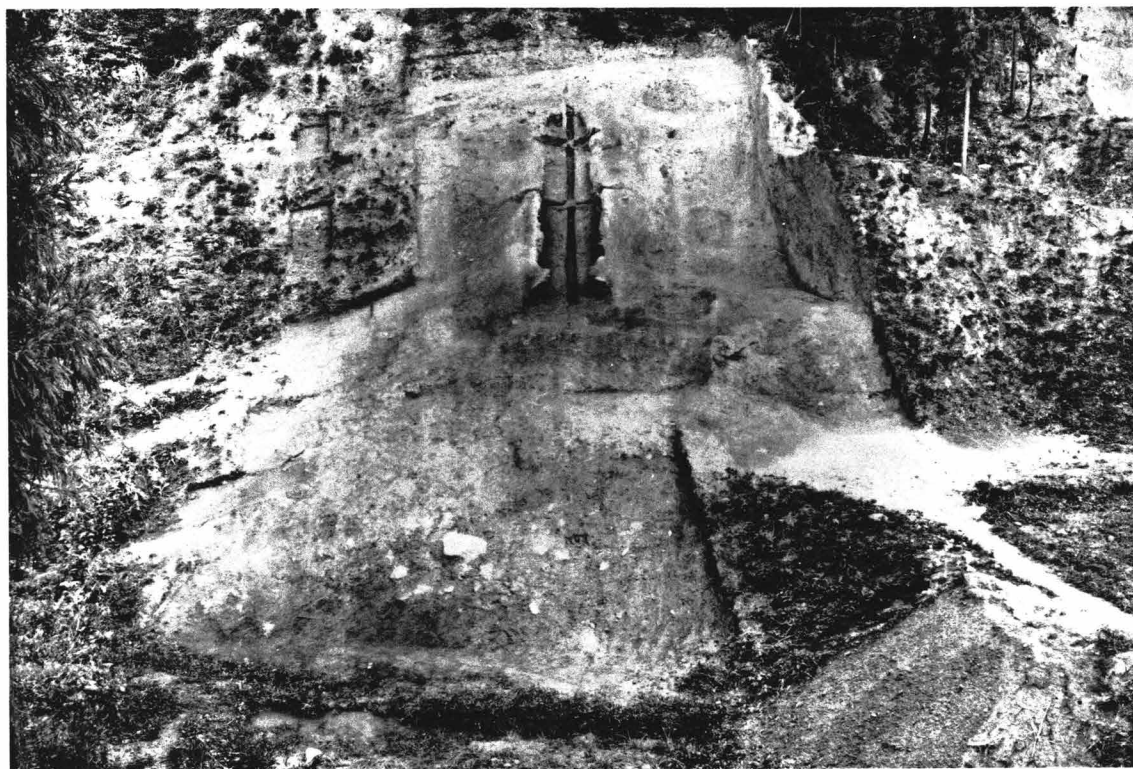
(2) 西長尾1・4号窯灰原北壁土層（南から）



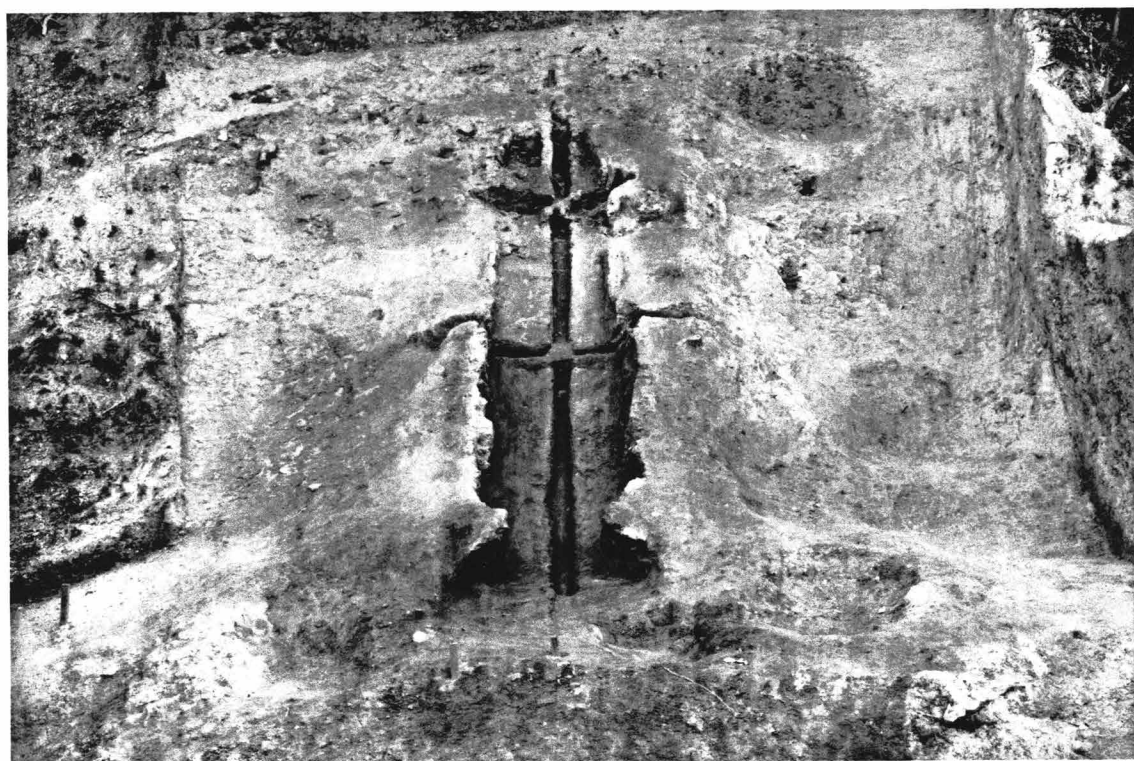
(1) 西長尾3号窯上面検出状態（西から）



(2) 西長尾3号窯掘削状態（西から）



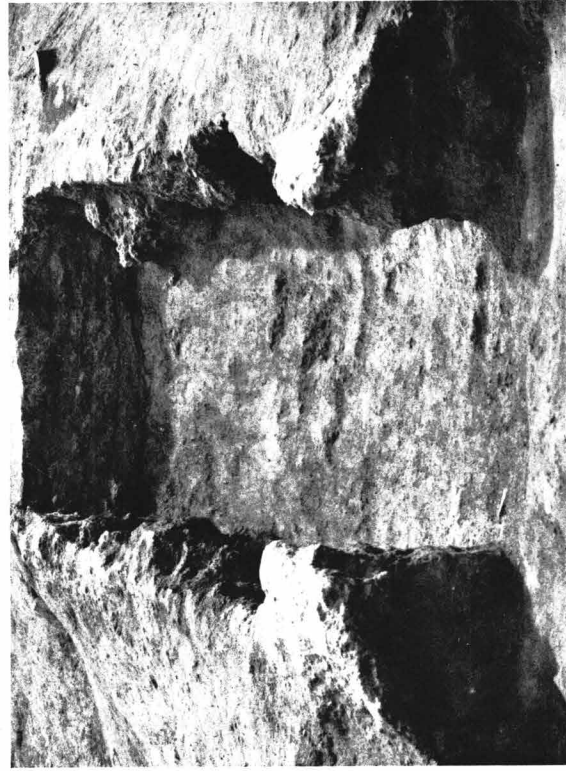
(1) 西長尾3号窯完掘状態（西から）



(2) 西長尾3号窯窯体完掘状態（西から）



(1) 西長尾3号窯体内土器堆積状態 (南から)



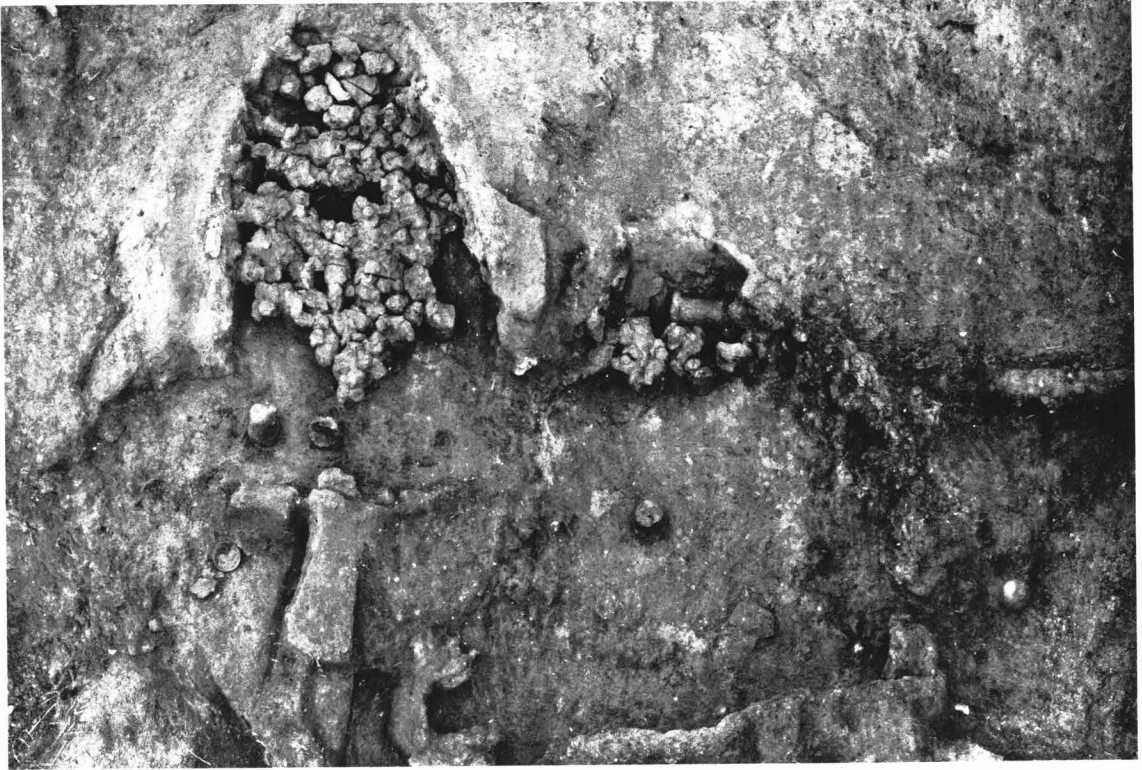
(2) 西長尾3号窯体内土器堆積状態 (西から)



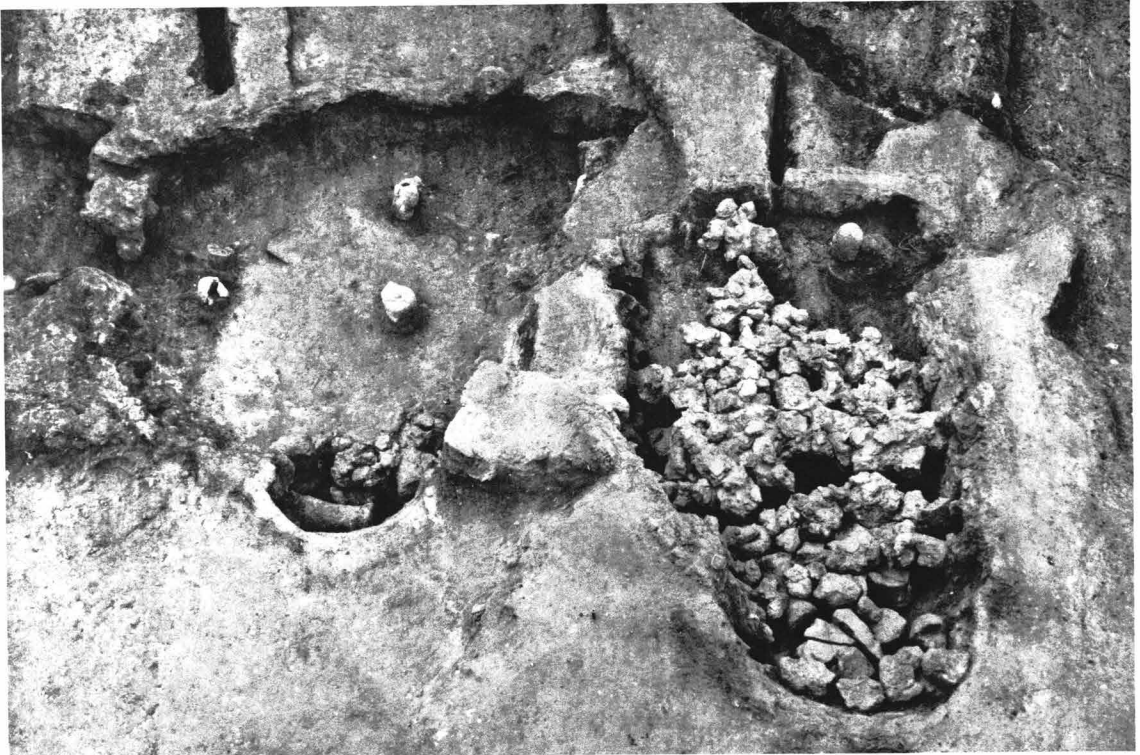
(3) 西長尾3号窯灰原南北畔土層 (西から)



(4) 西長尾3号窯灰原東西畔土層 (南から)



(1) 西長尾5・6号窯完掘状態（西から）



(2) 同 上 （東から）



(1) 西長尾5号窯上面検出状態 (西から)



(2) 西長尾5号窯窯体内掘削状態 (西から)



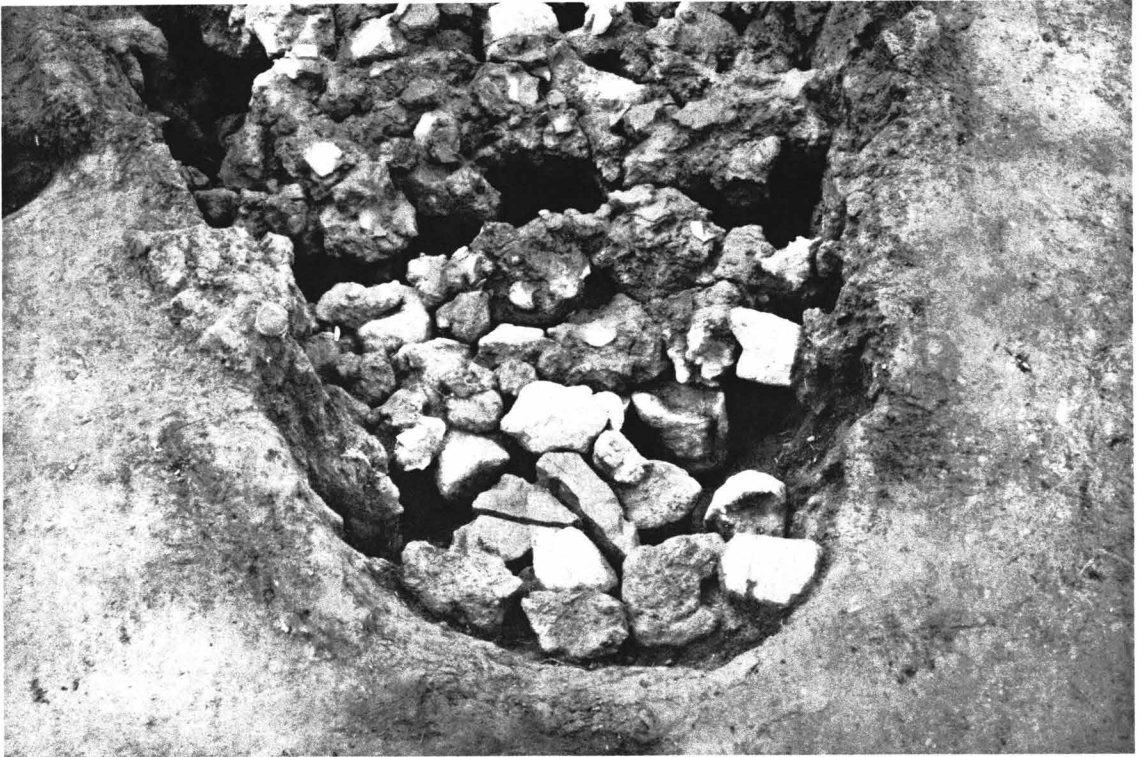
(1) 西長尾5号窯完掘状態（西から）



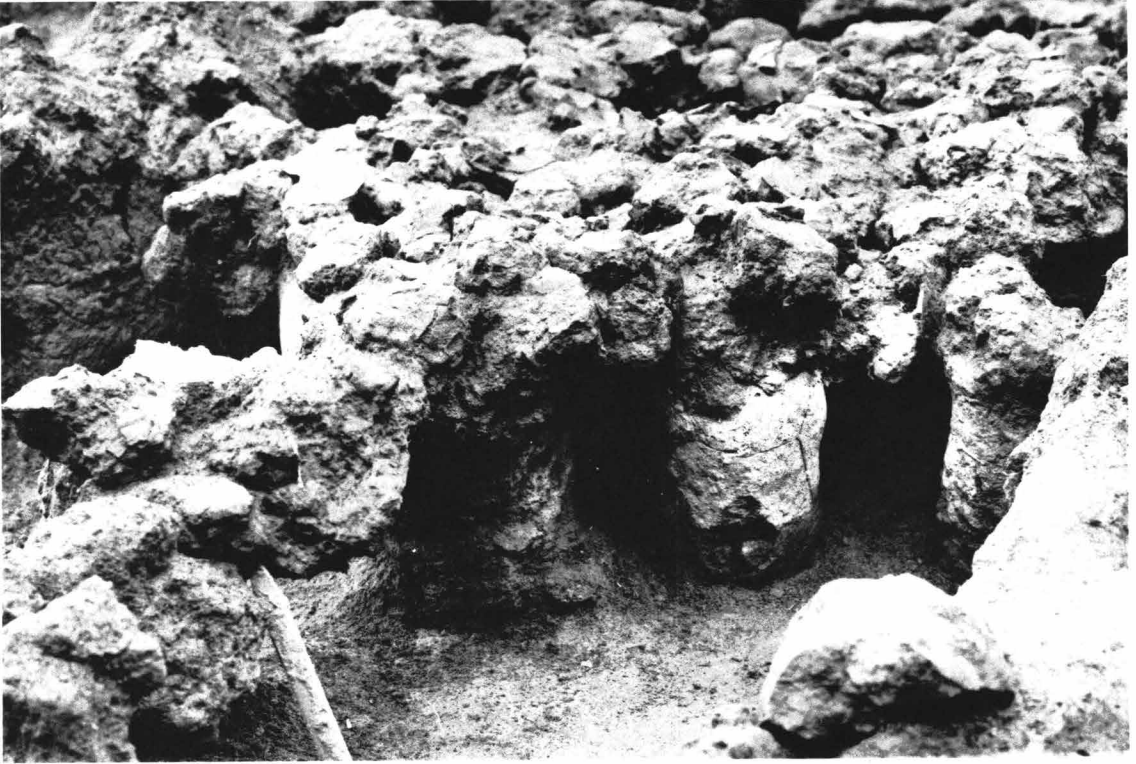
(2) 同上（西から）



(1) 西長尾5号窯細部(東から)



(2) 同 上 (東から)



(1) 西長尾5号窯支柱及び第2次床面（西から）



(2) 同 上 （西から）



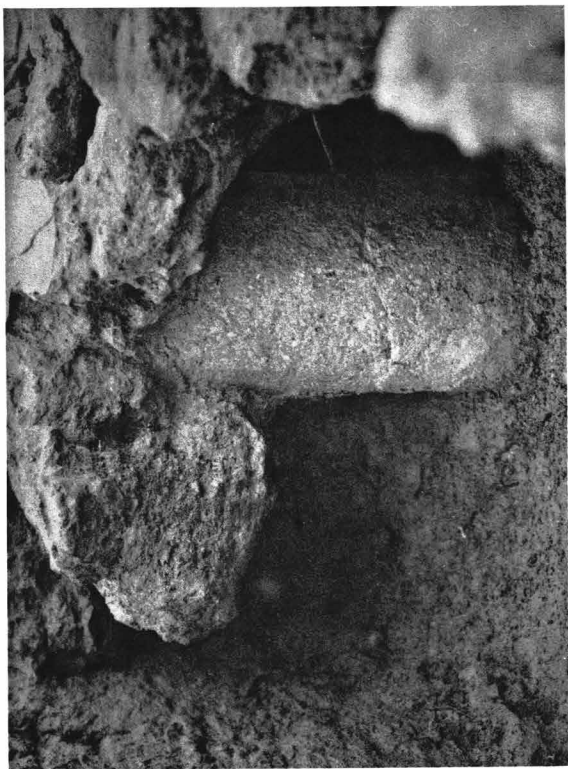
(1) 西長尾5号窯煙道部上面土器遺存状態 (東から)



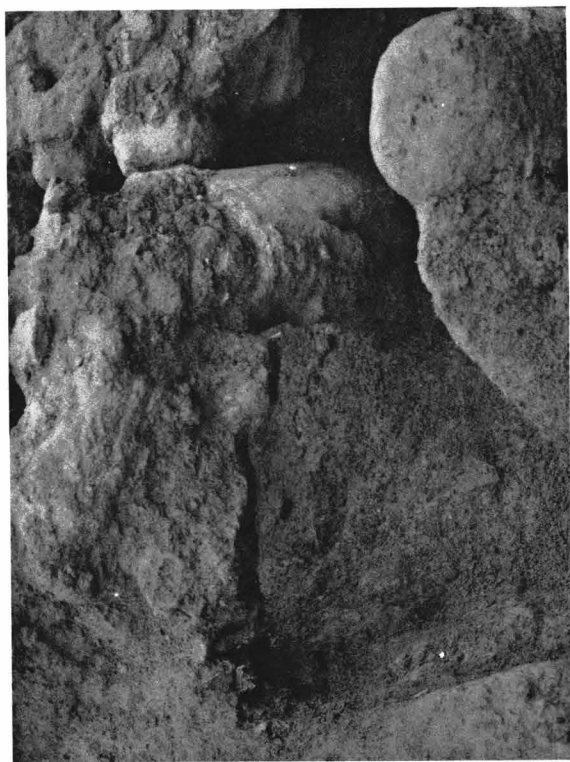
(2) 西長尾5号窯煙道部 (東から)



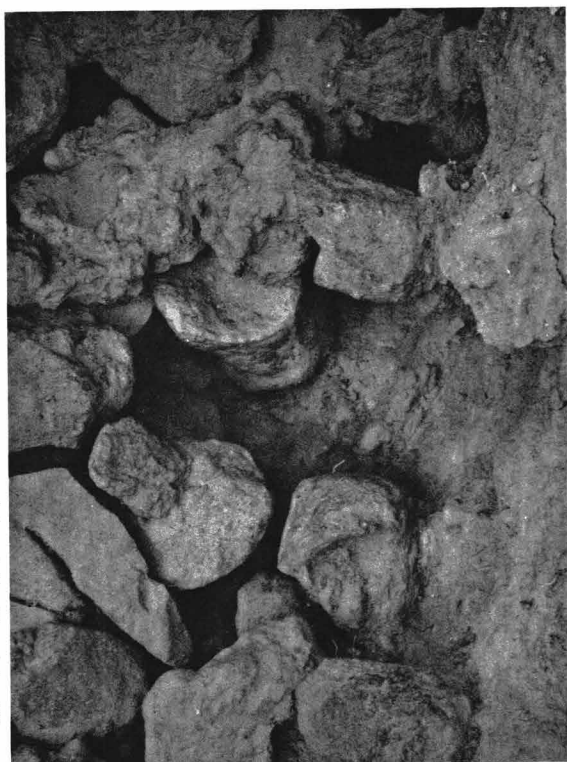
(1) 西長尾5号窯窯体細部 (西から)



(2) 同上 (西から)



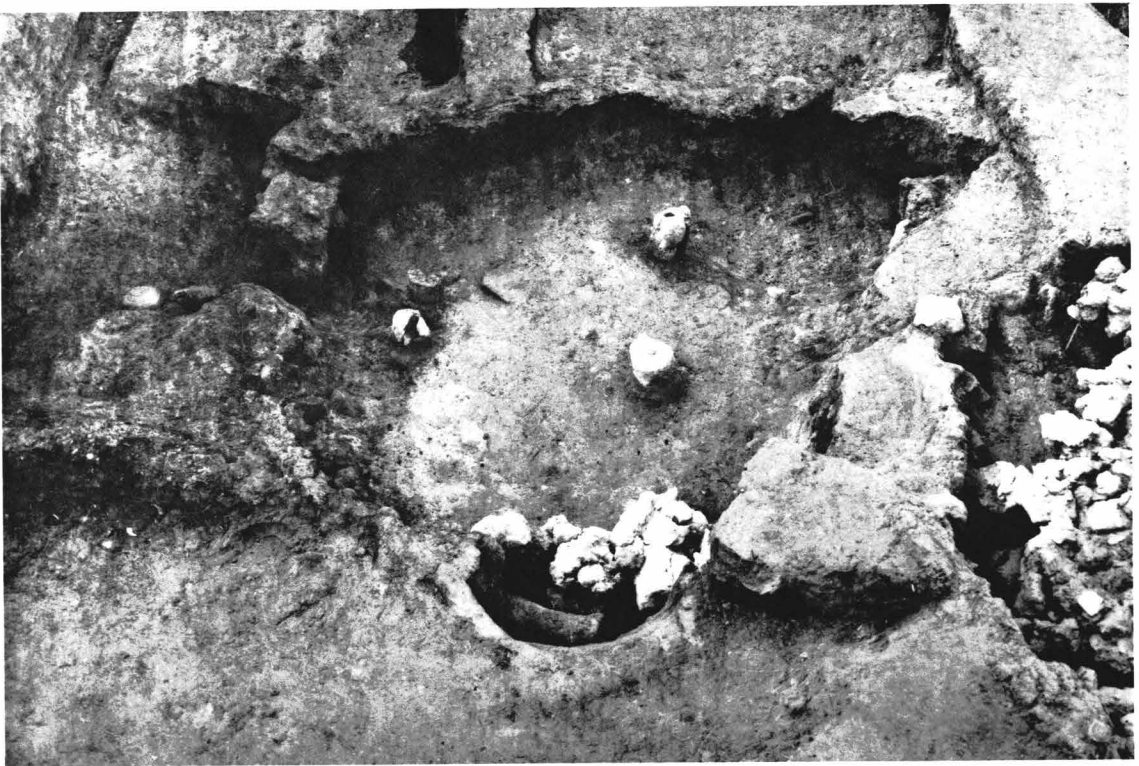
(3) 同右 (西から)



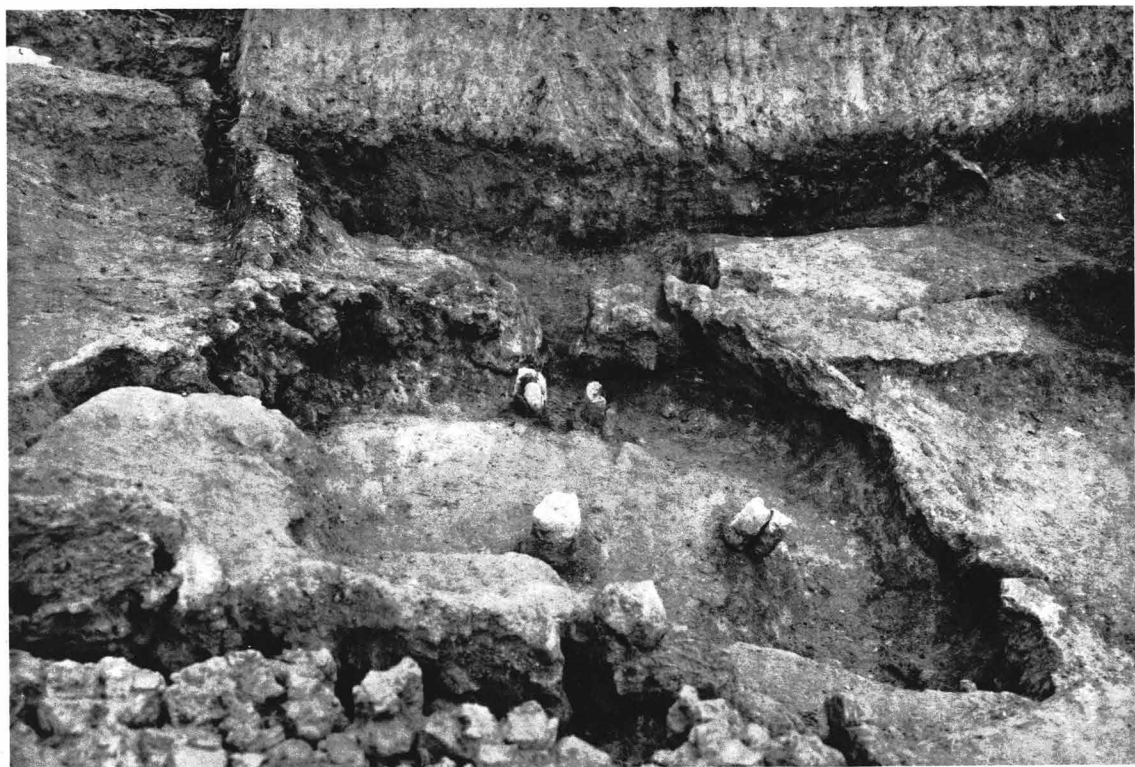
(4) 同上



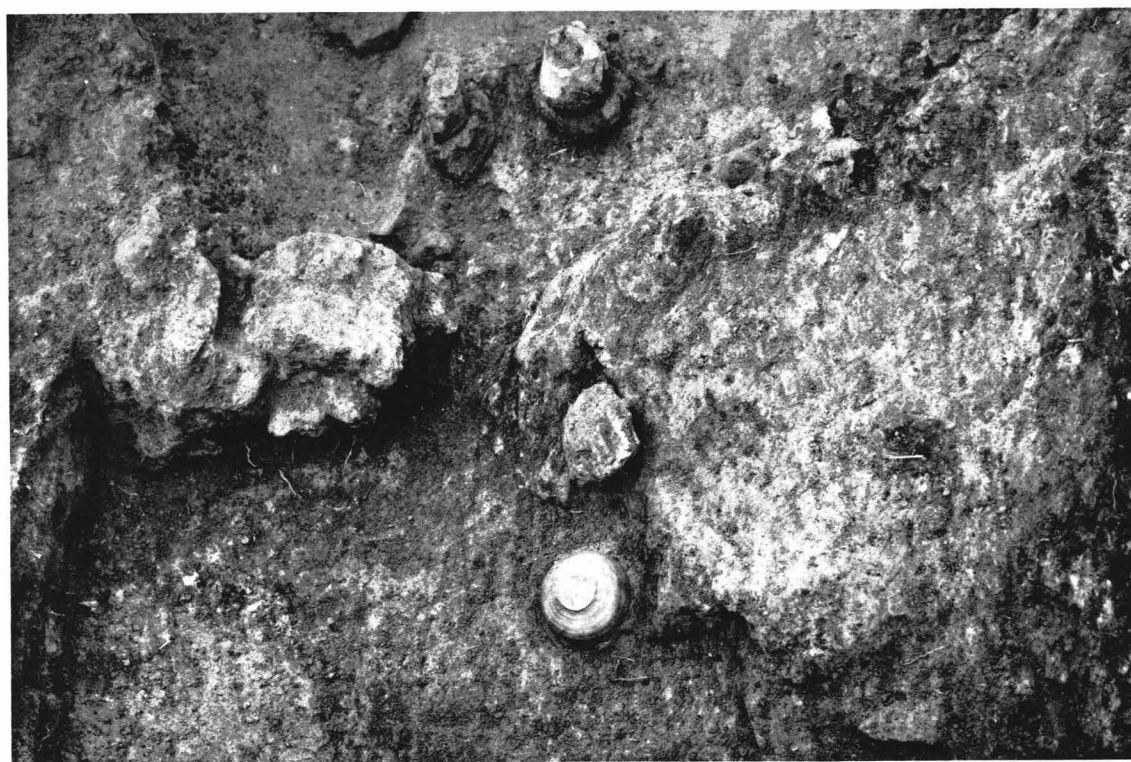
(1) 西長尾6号窯全景（西から）



(2) 同 上 （東から）



(1) 西長尾6号窯南焚口部遺存状態(北から)



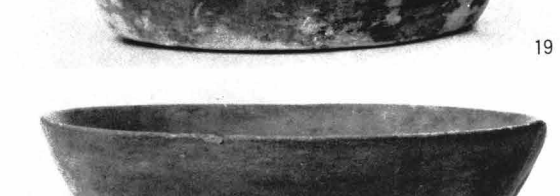
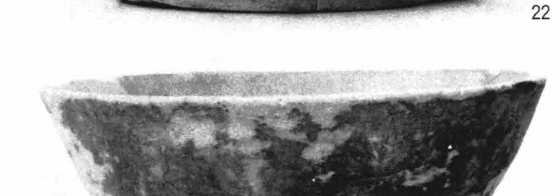
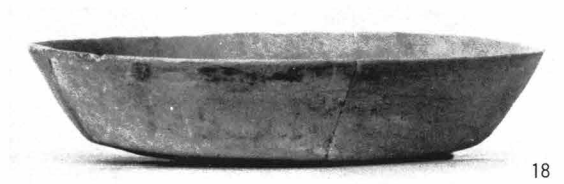
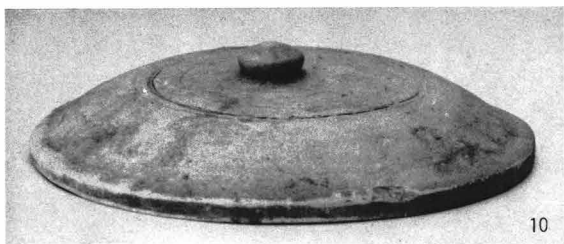
(2) 西長尾6号窯南焚口部土器遺存状態(南から)



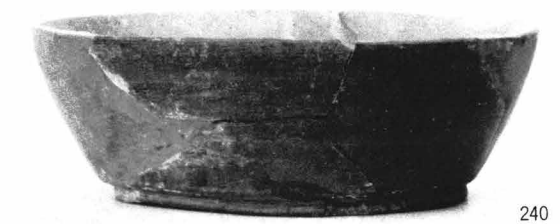
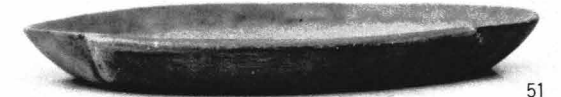
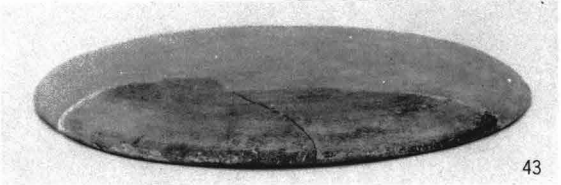
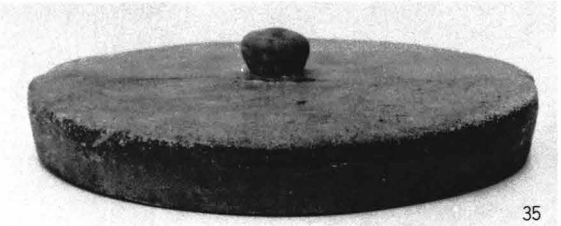
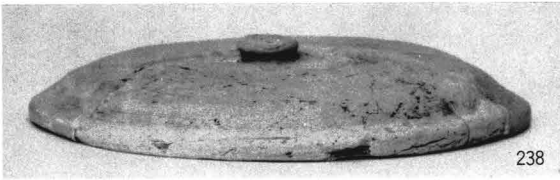
(1) 西長尾6号窯煙道部（東から）



(2) 西長尾6号窯支柱遺存状態（西から）



西長尾1号窯出土遺物



西長尾1号窯出土遺物



244



83



245



6



82



92



97

西長尾1号窯・SK06出土遺物



98



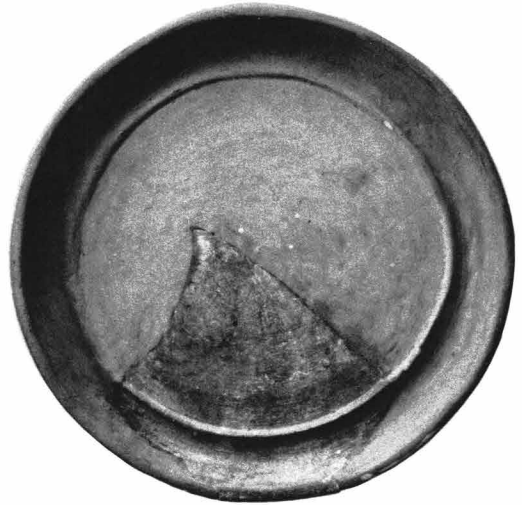
94



95

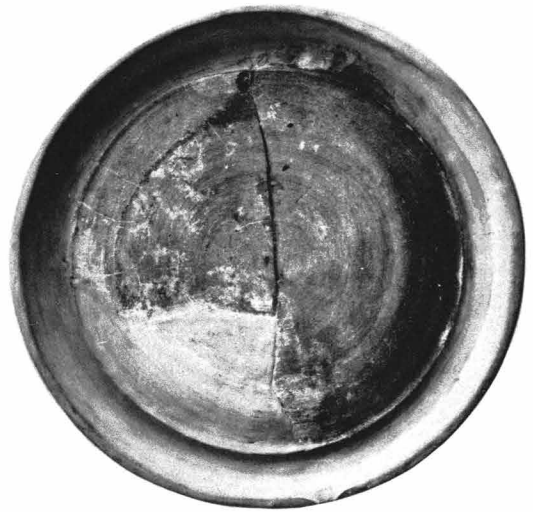


246



247

86



78



85

西長尾1号窯出土遺物



248



99



101



102



249



253



250



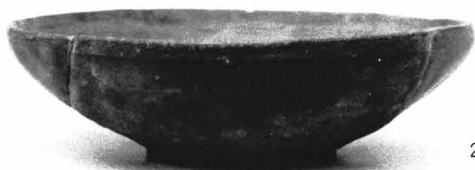
254



109



110



251



255

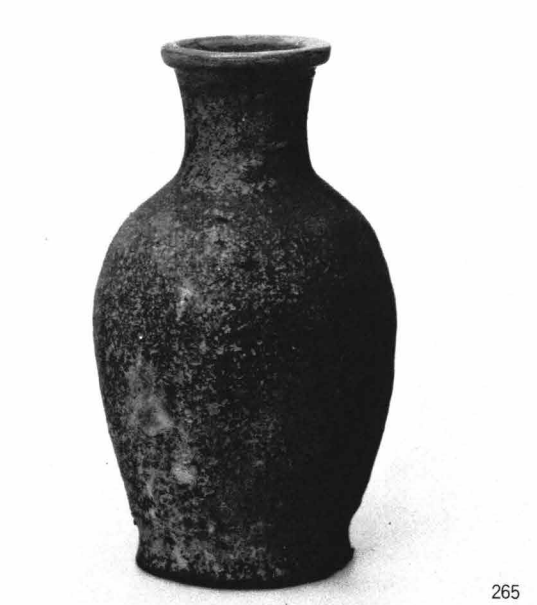


252



116

西長尾3号窯灰原土層出土遺物



西長尾3号窯灰原下層出土遺物



134



117



266



267



113



114

西長尾3号窯出土遺物



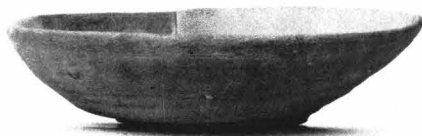
149



166



150



158



152



139



268



169



164



269



270



155



271

西長尾5号窯出土遺物



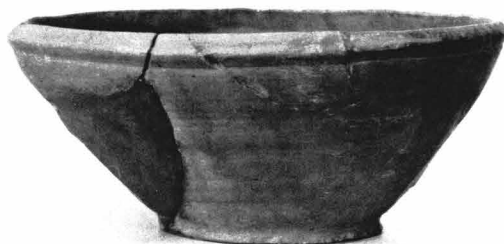
272



273



168



173



167



278

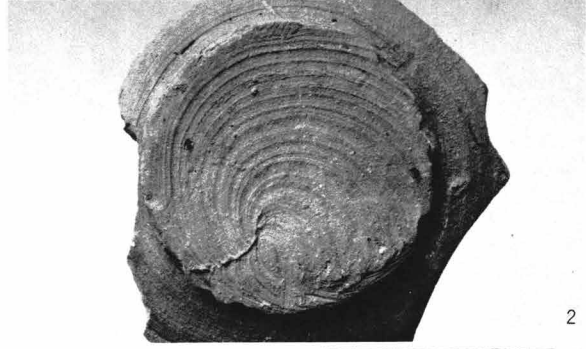


170



146

西長尾5号窯出土遺物



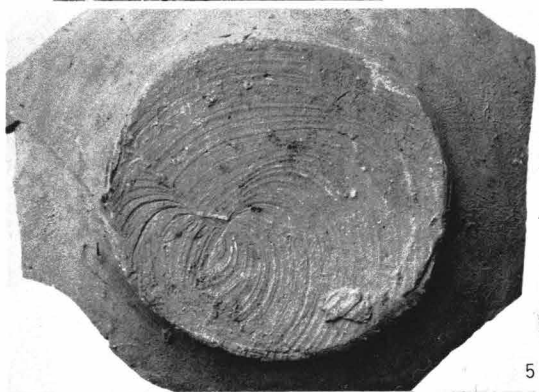
2



3



4



5



6



7



8

回転糸切り(1) 1~8 回転糸切りAタイプ



9



10



11



12



13



14

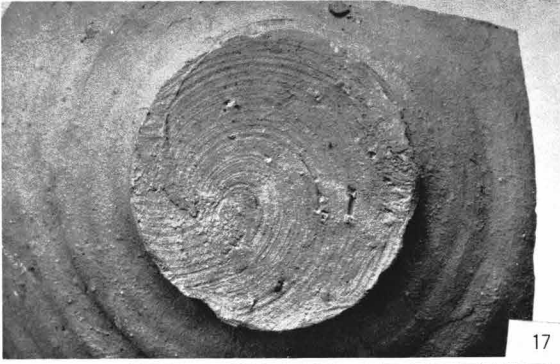


15

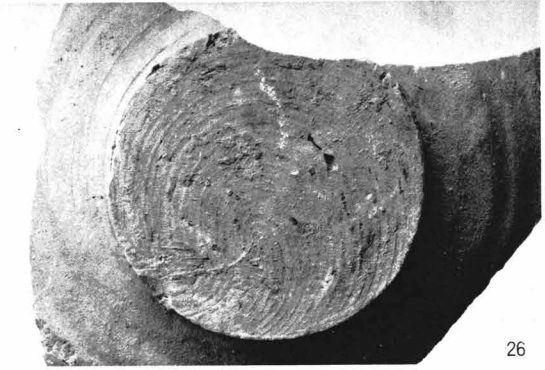


16

回転糸切り(2) 9. 10 回転糸切りAタイプ
11~16 回転糸切りBタイプ



回転糸切り(3) 17~24 回転糸切りBタイプ



回転系切り(4) 25. 26 回転系切りBタイプ
27~32 回転系切りCタイプ



33



34



35



36



37



38



39



40

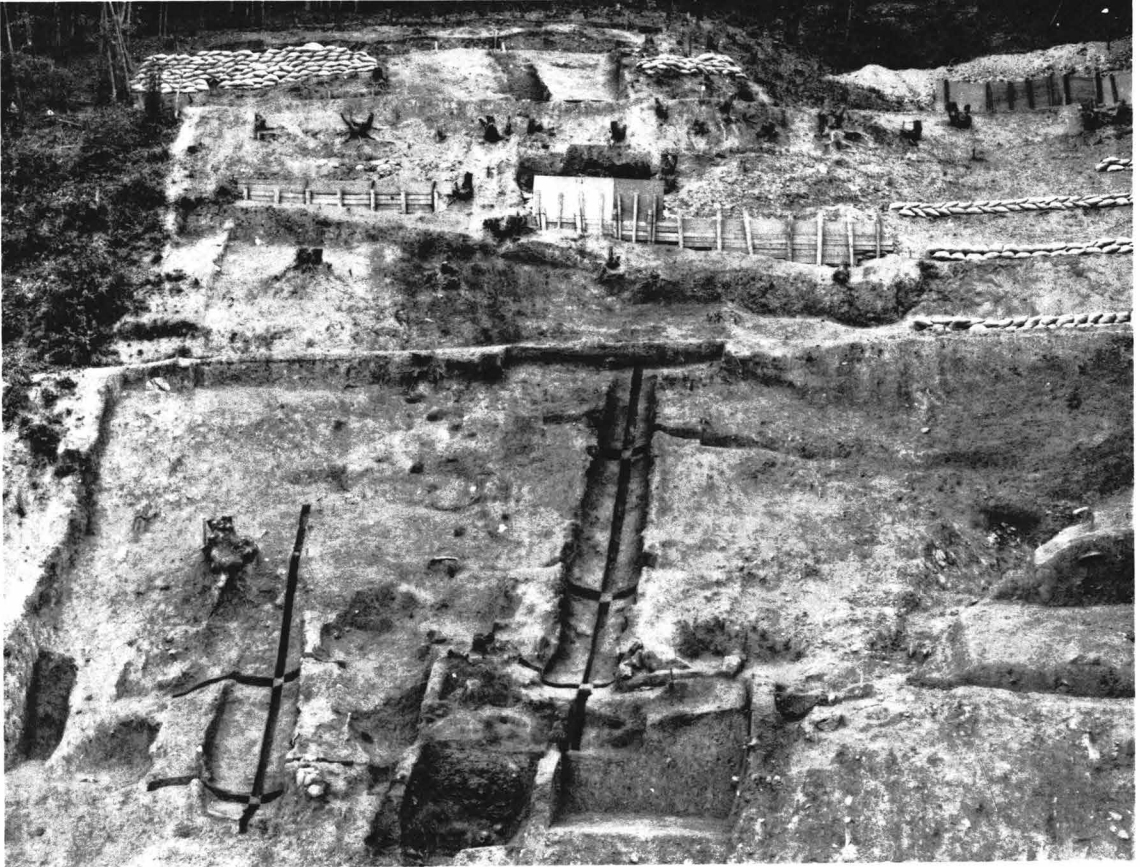
回転糸切り(5) 33~35 回転糸切りDタイプ
36~40 回転糸切りGタイプ



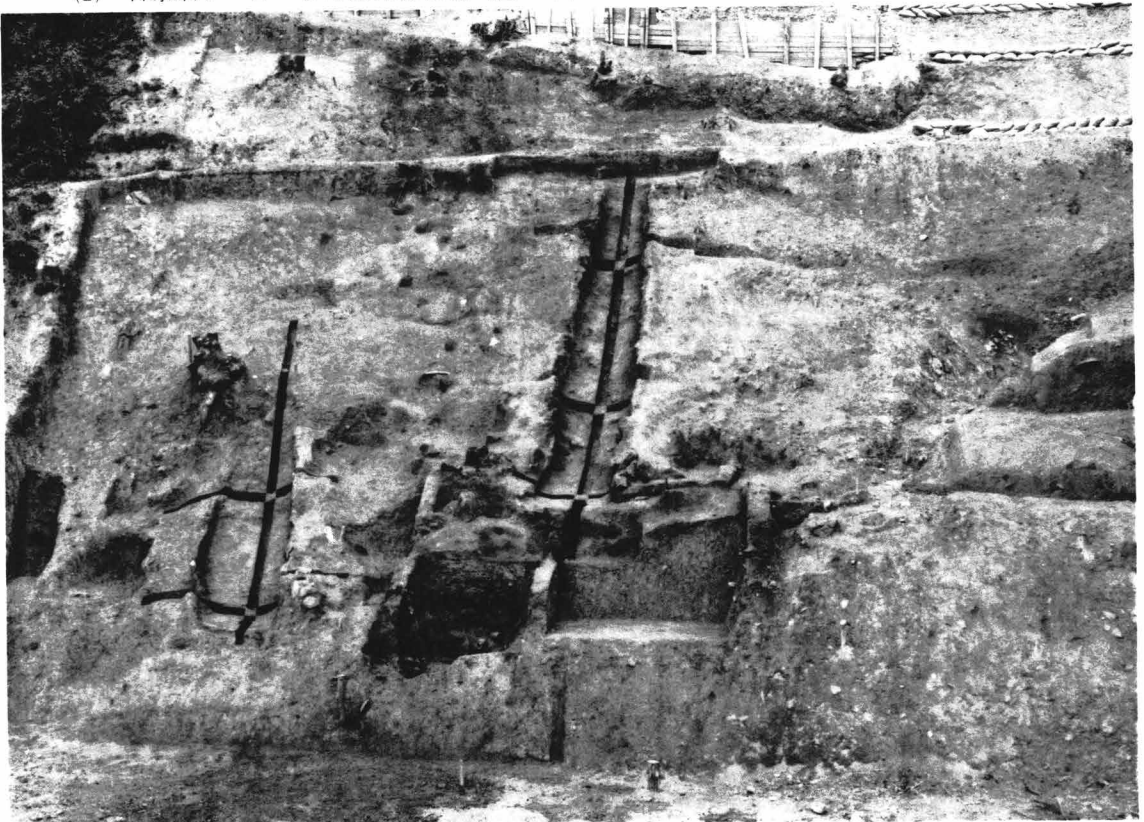
(1) 石原畑窯跡全景（北西から）



(2) 石原畑窯跡調査前全景（北西から）



(1) 石原畑1・2・3号窯完掘状態(西から)



(2) 石原畑1・2号窯完掘状態(西から)



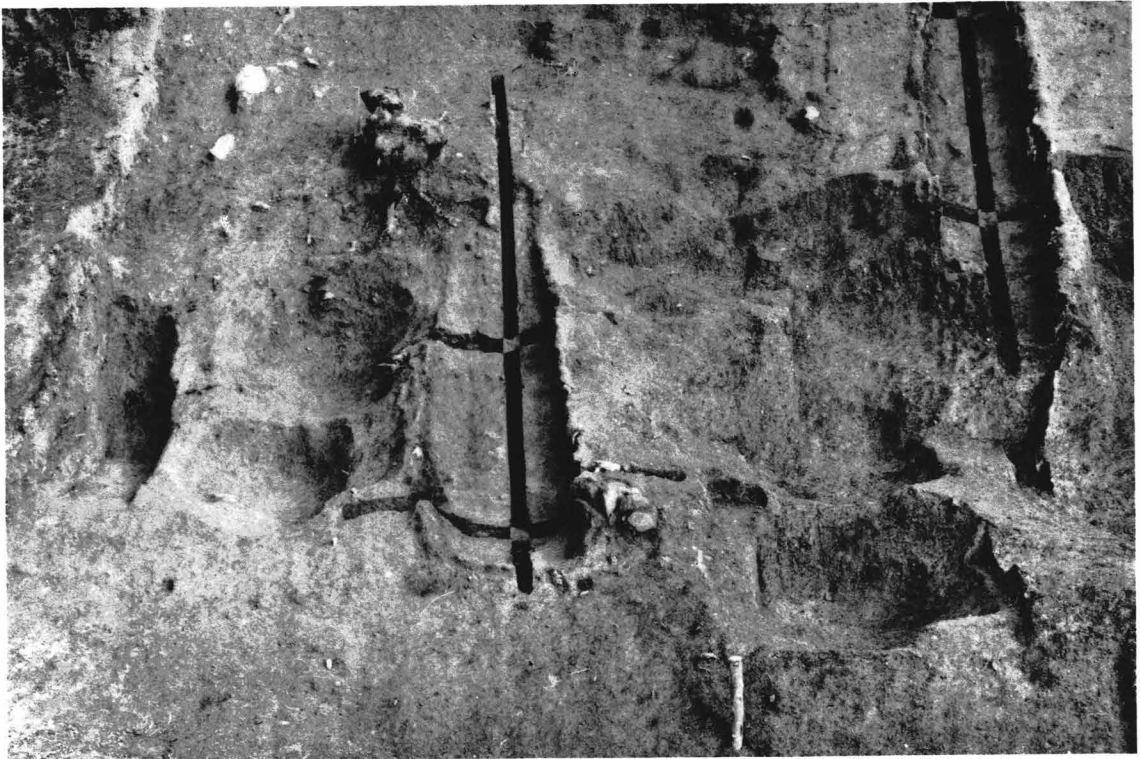
(1) 石原畑1・2号窯遺構検出状態（西から）



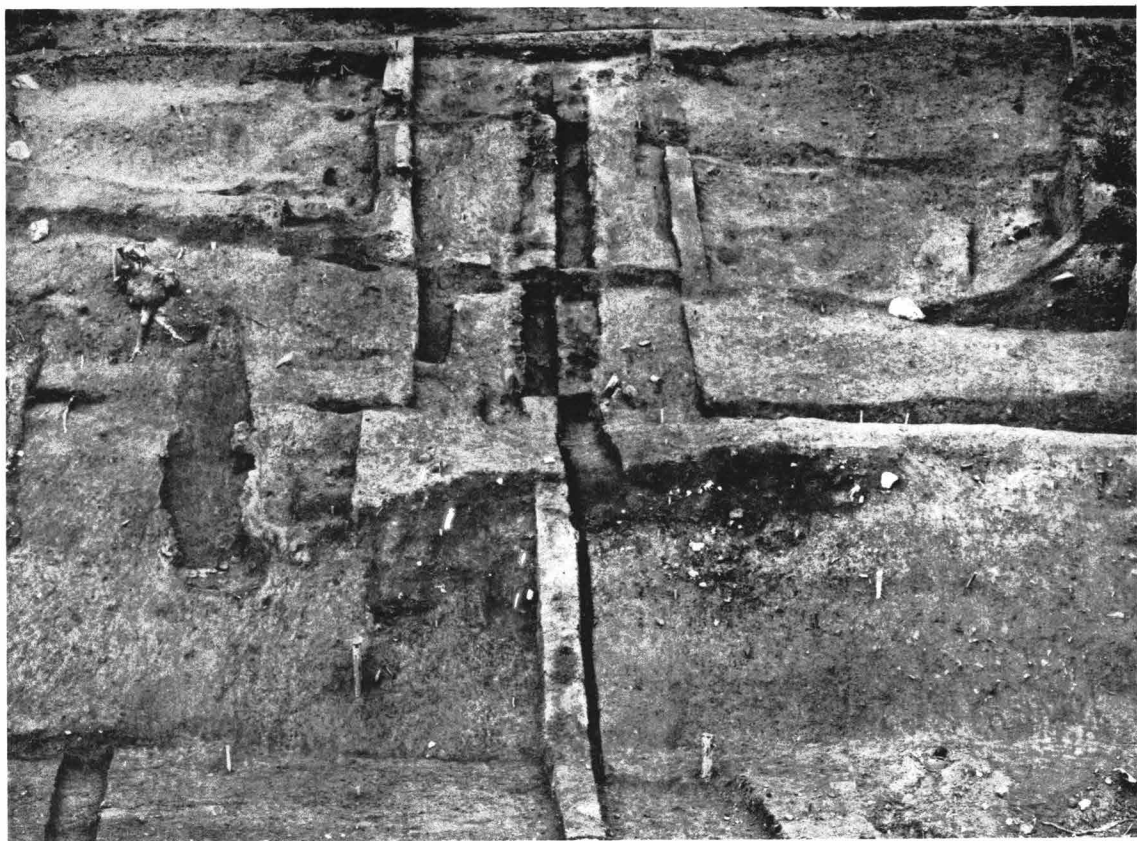
(2) 石原畑1・2号窯遺構検出状態（西から）



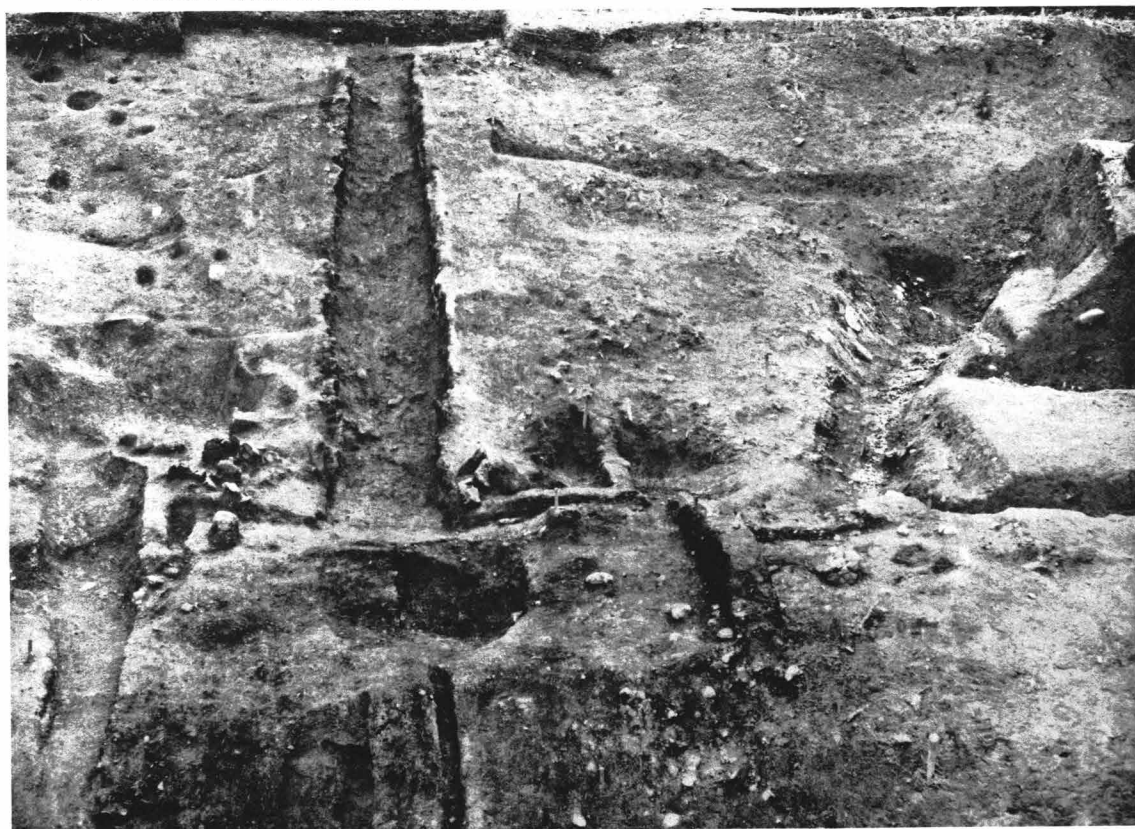
(1) 石原畑1号窯遺物出土状態（西から）



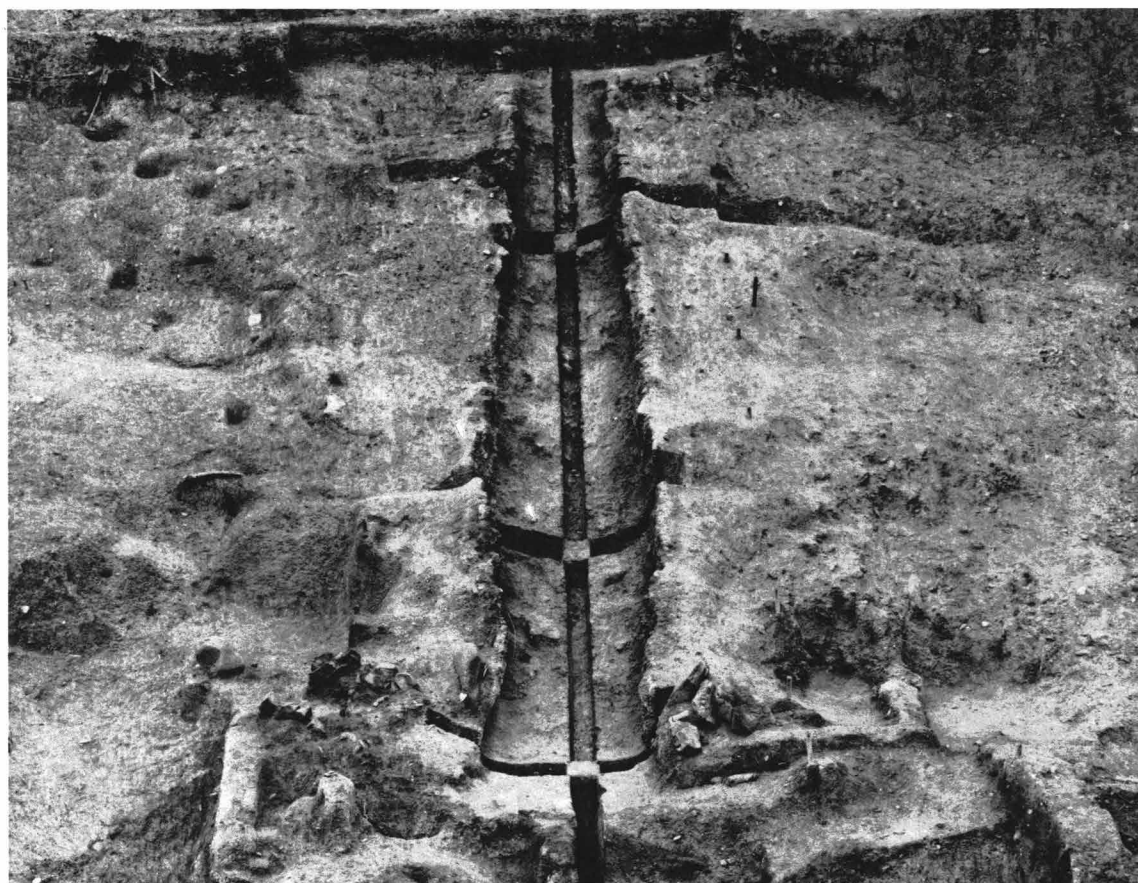
(2) 石原畑1号窯完掘状態（西から）



(1) 石原畑2号窯掘削状態(西から)



(2) 石原畑2号窯・SK04・SD05完掘状態(西から)



(1) 石原畑2号窯完掘状態（西から）



(2) 石原畑2号窯焚口部及びSK07（西から）



(1) SX02 (北から)



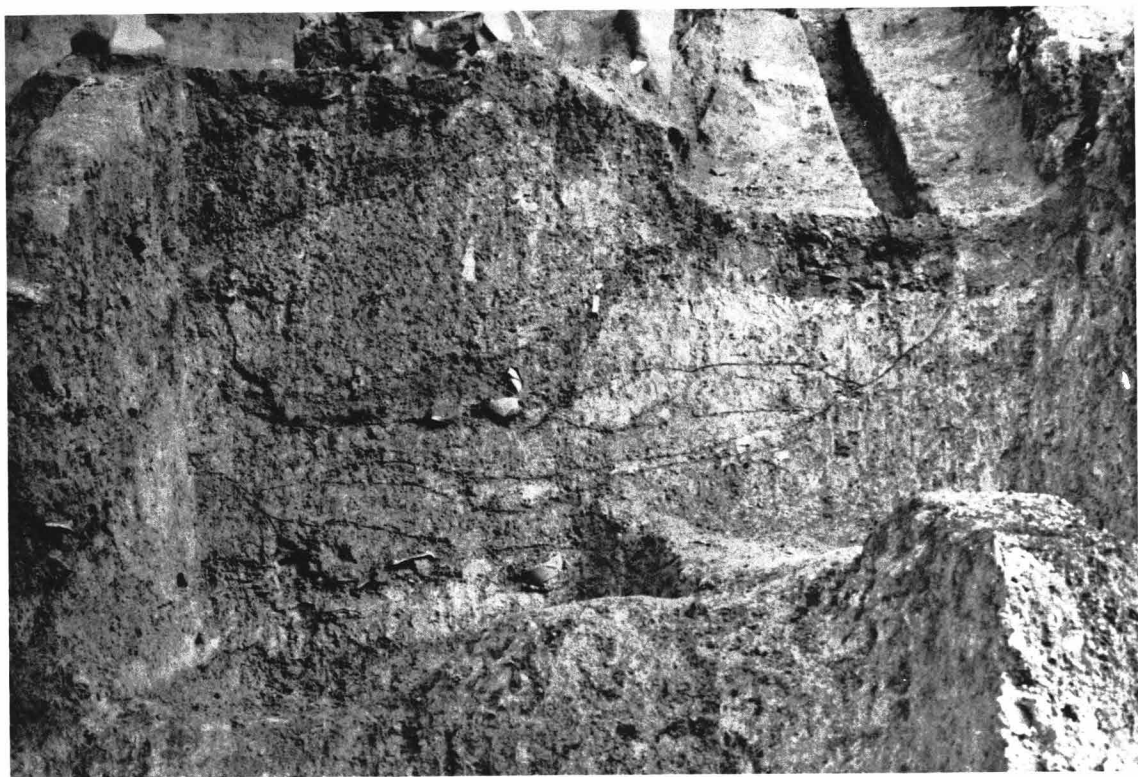
(2) 同上 (東から)



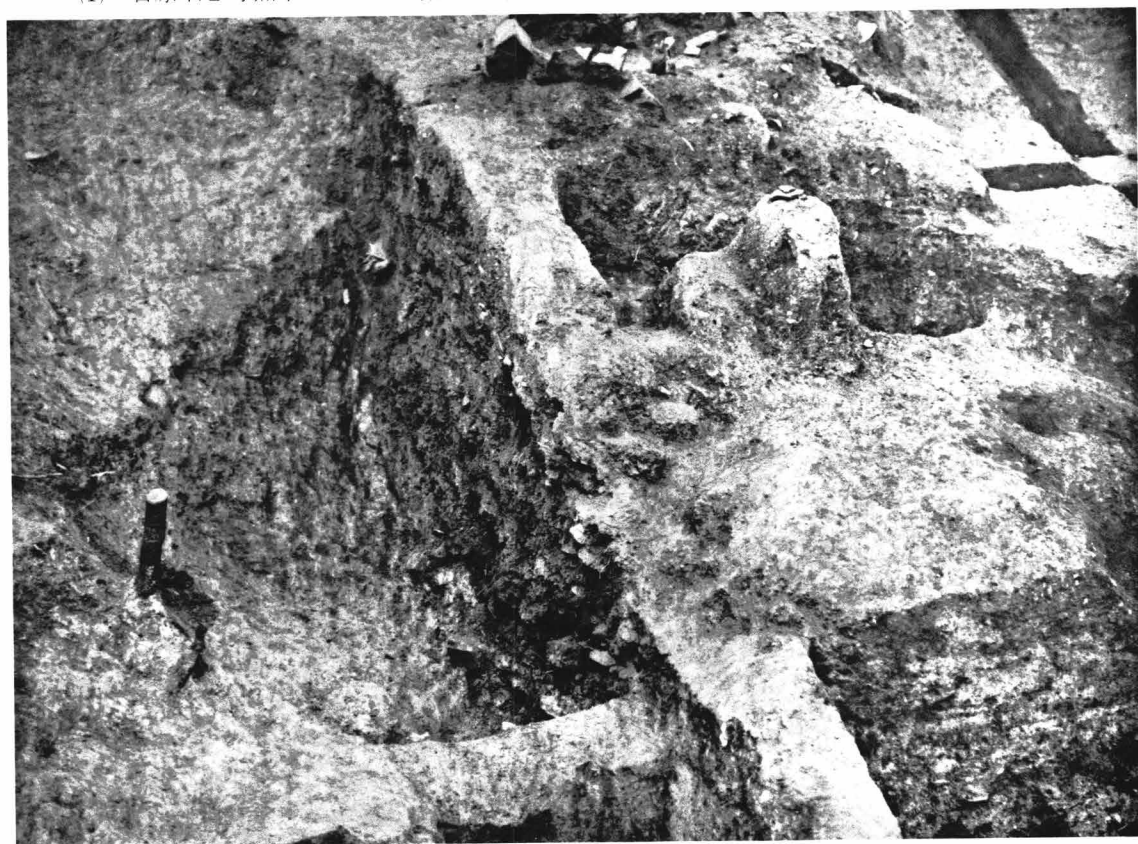
(1) 石原畑2号窯焚口下・SK03土層断面（西から）



(2) SK03土層断面（南から）



(1) 石原畑2号窯下・SK10土層断面（西から）



(2) SK09土層断面（北西から）



(1) 石原畑1・2号窯灰原(南から)



(2) 石原畑1・2号窯上層灰原遺物遺存状態(南から)



(1) 石原畑3号窯窯体内遺物出土状態(西から)



(2) 石原畑3号窯完掘状態(西から)



(1) 石原畑3号窯窯体内遺物出土状態細部(西から)



(2) 同上



(3) 石原畑3号窯窯体内遺物出土状態(南から)



(4) 同上



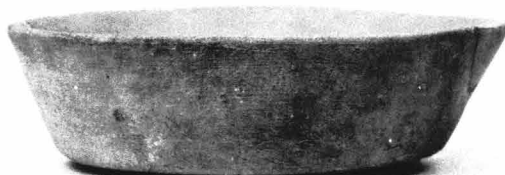
1



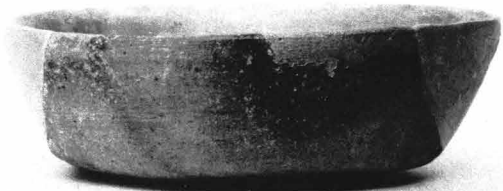
4



2



7



21



26



23



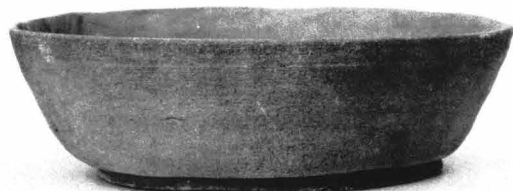
333



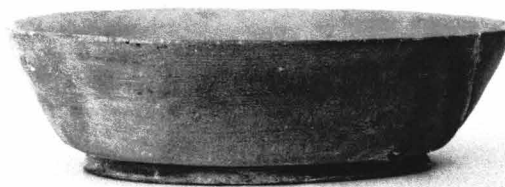
41



38

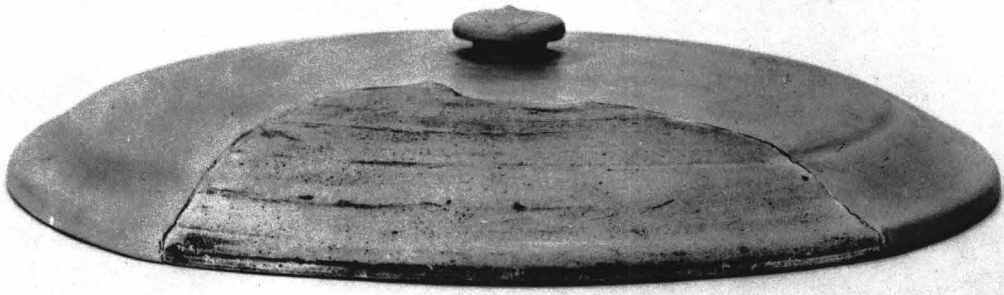


332



39

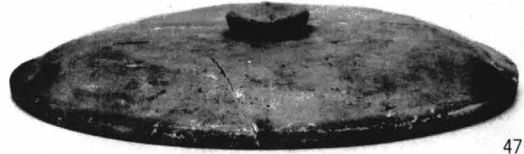
石原畑3号窯窯体及び灰原出土遺物



76



31



47



44



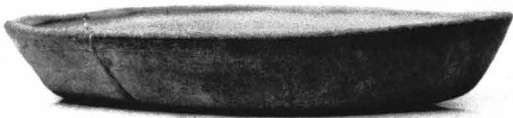
50



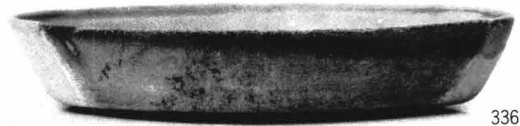
334



63



56



336



335



52



335



57

石原畑3号窯灰原出土遺物



133



337



338



121



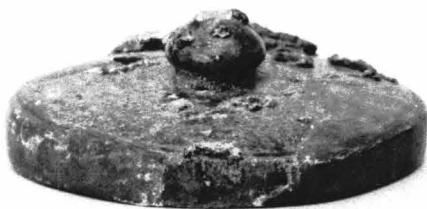
136



142



155



127



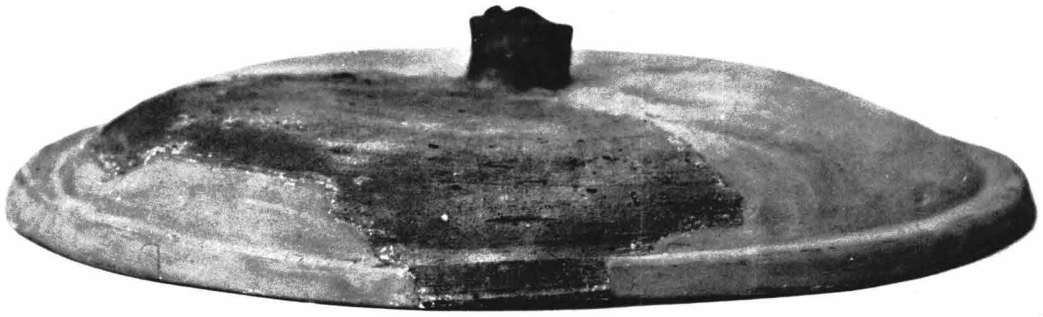
126



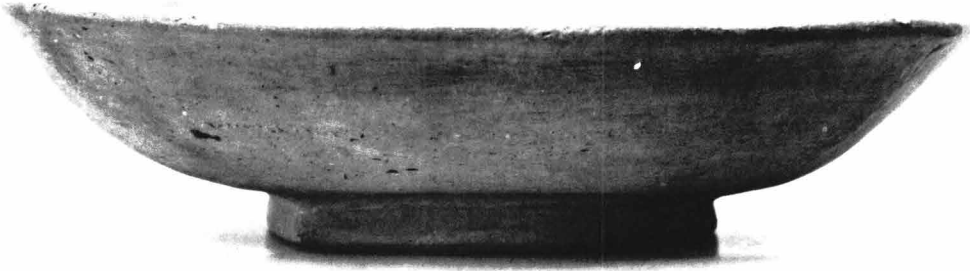
129



石原畑2号窯焚口南側灰原出土遺物(1)



143



150



197



174



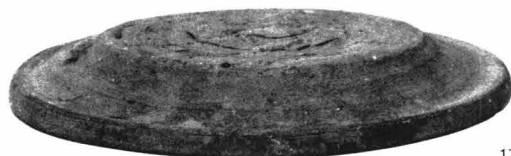
179



175



191



178



195



164



165



182



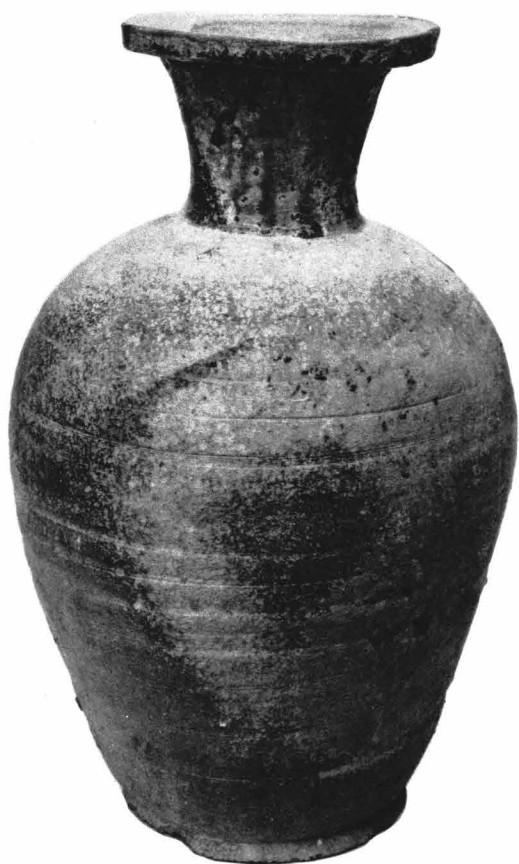
166



181



187



201



202



208



339



340



203



216



218



211



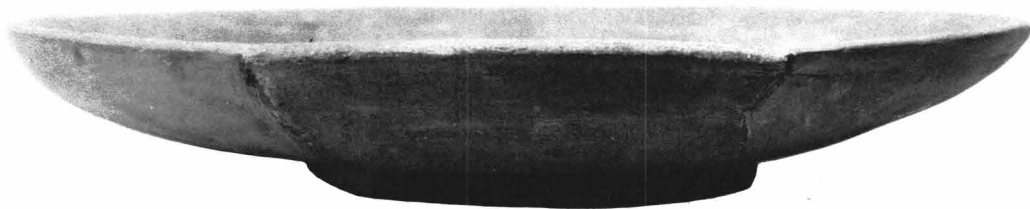
222



209



225



223



237



242



243



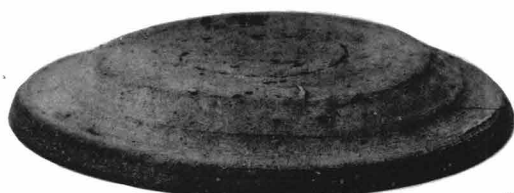
244



282



285



283



298



272



273



293



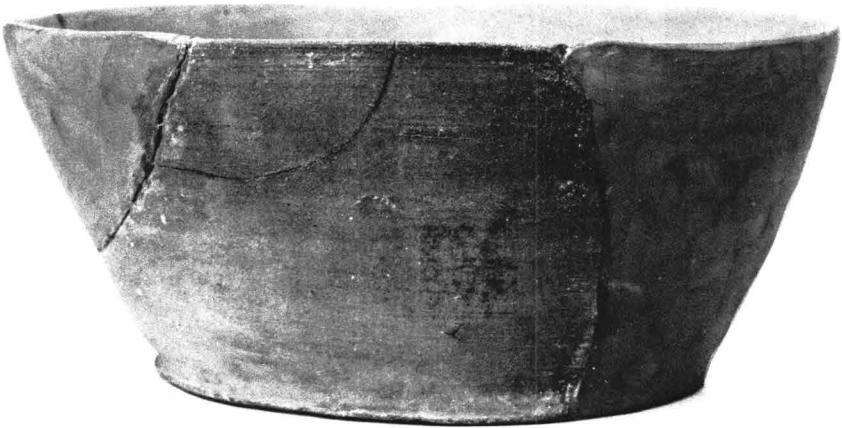
297



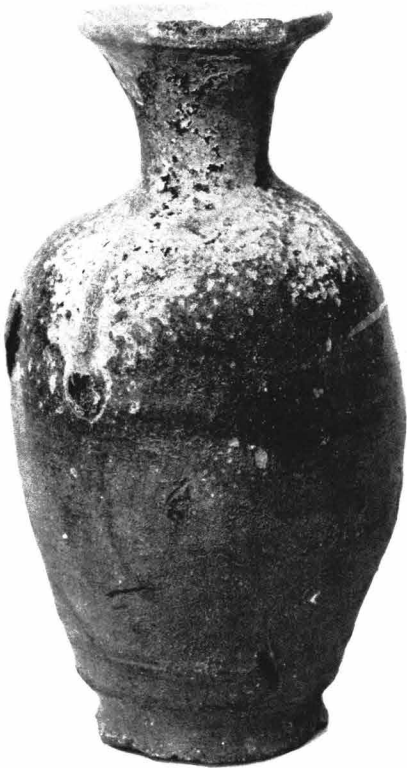
281



303



310



311



322



321



324



327

京都府遺跡調査報告書 第2冊

昭和59年3月31日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社
代表者 中西 亮

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)